

ガンダムブレイカーズ / ガンダムブレイカーズACE

Katudon0105

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・ガンダムブレイカーズ

百貨店タイムズユニバースの登場により寂れてしまった彩渡商店街

そんな商店街を盛り上げて再び活性化させるため、ユウキ、ミサがガンプラチームを組む

現れる様々なライバルとの戦いや次々と巻き起こる事件に巻き込まれながら2人は彩渡商店街復興を目指す！

※0・5話は次の話との間の物語です。

・ガンダムブレイカーズACE

世界大会をも巻き込んだ、サイバーコーポレーション社長 カワグチと彩渡商店街ガンプラチーム ユウキ、ミサ達の戦いから5年後、世界は少しずつ進化を重ねる中でガンプラバトルも変わっていく。

主人公 レイとその親友 タツキは、自分の強くなろうと思ったきっかけのファイターを目指して創介学園ガンプラ部の部長カズマと新たなメンバー ユウシと共に最強のチームを目指して戦い続ける！

ある組織に狙われた彩渡商店街は再び寂れてしまう

彩渡商店街は再び立ち上がることが出来るか…

目次

第1章 出逢い

ガンダムブレイカーズ 第1話	エンカウント	1
ガンダムブレイカーズ 第2話	チーム結成	7
ガンダムブレイカーズ 第3話	芽生える友情	13

第2章 タウンカップ編

ガンダムブレイカーズ 第4話	開幕タウンカップ	19
ガンダムブレイカーズ 第5話	新たな目標	25

第3章 現れる死神

ガンダムブレイカーズ 第6話	仲間	36
ガンダムブレイカーズ 第7話	小さな勇者	46
ガンダムブレイカーズ 第8話	覚醒への糸口	55
ガンダムブレイカーズ 第9話	死神	63
ガンダムブレイカーズ 第10話	パーフェクトな存在	73

第4章 開幕、リージョンカップ

ガンダムブレイカーズ 第11話	二次予選を目指して	79
ガンダムブレイカーズ 第12話	新たなる覚醒者	88
ガンダムブレイカーズ 第13話	兄弟の絆	98
ガンダムブレイカーズ 第14話	迫り来る衝撃	105

第5章 受け継がれるストライクの魂

ガンダムブレイカーズ 第15話	ストライクの系譜	112
ガンダムブレイカーズ 第16話	GNの逆襲	118
ガンダムブレイカーズ 第17話	宇宙海賊、参上	125

第6章 激闘、ジャパンカップ

ガンダムブレイカーズ 第18話	開幕、ジャパンカップ	131
-----------------	------------	-----

ガンダムブレイカーズ 第19話 ぶつかり合う2つのストライ

ク

ガンダムブレイカーズ 第20話 覚悟 | 150

ガンダムブレイカーズ 第21話 操られた大会 | 157

ガンダムブレイカーズ 第22話 決死の救出作戦 | 164

ガンダムブレイカーズ 第22.5話 蘇る死神 | 174

ガンダムブレイカーズ 第23話 戦火の中で | 181

ガンダムブレイカーズ 第24話 仲間との強さ | 192

ガンダムブレイカーズ 第24.5話 暗躍を始める影 | 202

ガンダムブレイカーズ 第25話 不穏 | 209

ガンダムブレイカーズ 第26話 終幕と影 | 214

ガンダムブレイカーズ 第27話 終幕ジャパンカップ | 218

ガンダムブレイカーズ 第27.5話 戦士達の休息 | 228

ガンダムブレイカーズ 第28話 ぶつかり合うプライド | 234

第7章 動き始めた影

ガンダムブレイカーズ 第28.5話 動き出す計画 | 240

ガンダムブレイカーズ 第29話 嫉妬と友情の狭間で | 248

ガンダムブレイカーズ 第30話 新たなる力を | 256

ガンダムブレイカーズ 第30.5話 疑惑と思惑 | 263

ガンダムブレイカーズ 第31話 近づく真実 | 271

ガンダムブレイカーズ 第32話 それぞれの思い | 278

第8章 舞台は世界大会へ

ガンダムブレイカーズ 第32.5話 舞台は世界へ | 286

ガンダムブレイカーズ 第33話 翼 | 293

ガンダムブレイカーズ 第34話 偽りの機動戦士 | 301

	ガンダムブレイカーズ	第35話	燃える男	305
	ガンダムブレイカーズ	第35・5話	イラつくアイツ	310
	ガンダムブレイカーズ	第36話	強者	314
	ガンダムブレイカーズ	第37話	因縁	321
	ガンダムブレイカーズ	第38話	決戦	330
	ガンダムブレイカーズ	第39話	明日をかけた戦い	339
346	ガンダムブレイカーズ	第40話	最終回 可能性の未来へ	
	ガンダムブレイカーズACE	第1章	新たなる世界	
	ガンダムブレイカーズACE	第1話	変わりゆく世界	360
	ガンダムブレイカーズACE	第2話	部長の焦燥	367
	ガンダムブレイカーズACE	第3話	創介学園ガンプラチーム	373
	ガンダムブレイカーズACE	第4話	再起の商店街	381
	ガンダムブレイカーズACE	第5話	迫り来るPG	388
	ガンダムブレイカーズACE	第6話	陸宗のACE	397
	ガンダムブレイカーズACE	第7話	カズマの過去／彩渡商店街、再び	406
414	ガンダムブレイカーズACE	第8話	我ら、ガンプラ盗賊団!?	
	ガンダムブレイカーズACE	第9話	4人目の狙撃手	420
427	ガンダムブレイカーズACE	第10話	「聖騎学園のACE」	
436	ガンダムブレイカーズACE	第11話	影／カズマの本気	

ガンダムブレイカーズACE	第12話	二人のプライド	443
ガンダムブレイカーズACE	第13話	嗤う影	454
ガンダムブレイカーズACE	学校対抗ガンプラ大会		
ガンダムブレイカーズACE	第14話	開幕	461
ガンダムブレイカーズACE	第15話	稲妻	469
ガンダムブレイカーズACE	第16話	幼なじみの2人	476
ガンダムブレイカーズACE	第17話	燃え上がる正義の赤	
484			
ガンダムブレイカーズACE	第18話	蹂躪する悪魔	489
ガンダムブレイカーズACE	第19話	狙い	502

第1章 出逢い

ガンダムブレイカーズ 第1話 エンカウント

「ここが彩渡商店街か…。」

片手にスマホ持ち、マップを確認しながら歩く少年はそう呟く

??? 「噂には聞いてたけど… やっぱ寂れてるんだなあ…。」

少年の言う通り、どうもこの商店街には活気がない

それもそのはず百貨店 タイムズユニバースの登場で人が客足が減り、やっていけなくなったお店は潰れておりこの商店街はシャッター街と化していた。

見る限り模型屋や精肉店それに居酒屋位しか開いているようにしか見えない。

??? 「地元、そして親から離れてこの街に来たけど… 俺、やって行けるのかなあ…。」

少年はそう呟きながら頭を搔くと、商店街の方へ向けて歩みを進めた

??? 「ん？あれ…？」

少年の目にとまったのはゲームセンターだった。

ユウキは小さい頃からゲームセンターが好きで暇さえあればゲームセンターへと立ち寄り、ゲームをするのが大好きだった。

早速入ってみよう… そう思い立った彼はゲームセンターへ

入って行く

.....

謎のロボット「いらっしやいませ」

??? 「!？」

いきなり喋りかけられて驚く彼の目の前には白とピンクの色をしたロボットが立っていた。

この時代では働くロボット… ワークロボットと言う存在が普通に存在し、ゲームセンターだけではなく今ではコンビニやスーパーな

どでもワークボットは働いている。

店側としても人件費も抑えられるなどメリットもありこの時代ではロボットが働くのは当たり前となっっているのだ。

インフォ「いらっしやいませ 私の名はインフォと言います
初めてのお客様ですか？」

インフォと名乗るロボットに少年は驚きつつも、

???「え?… ああうん 最近こちら辺に引越してきたんだ」
インフォ「ではお名前を宜しいですか？」

ユウキ「名前? ユウキだけど…」
インフォ「ユウキさんですね 登録しました」

何を登録したんだろうとユウキは思いながらもゲームセンターの奥へと足をすすめていた。

外観は割と古いこのゲームセンターだが、以外と最近のゲームも揃っており少しテンションがあがるユウキ。

そんな彼の目に入ったものは見たこともないゲームだった。

ユウキ「インフォちゃん、あれ何？」

ユウキは自分が見たことないゲームへと指をさす。

インフォ「あれはガンプラバトルシミュレーターです 大分前から流行っていますよ」

ガンプラバトルシミュレーター… よく分からないがゲームセンター好きとしては遊んでみたい欲に駆られる…

ユウキ「ちよつとだけ遊んでみるか…」

そう言うとは彼はシミュレーターの中に入っていった…

……………

「はあ… 今日も地元ゲーセン通いか…」

商店街へと続く道を歩きながら、1人の少女は上を見上げてそう呟く。

少女の名はミサ

彩渡商店街にある模型屋の娘だ

ミサは行きつけのゲームセンターへと足を踏み入れると、老婆がミサへと話しかける

イラト「なんだい、また来たのかい。相変わらず悲しい青春送ってんねえ」

ミサへとそう話しかけたのはイラト婆ちゃんの愛称で呼ばれている老婆。

このゲームセンターの店長である

ミサ「イラトおばあちゃん。一応お客なんだから歓迎してよー！」

イラト「そう言うならこのゲームセンターで金でも落とすな！毎日来て何もしないじゃないかい」

ミサ「うう…！」

イラト婆ちゃんの一言に反論できないミサ

確かにココ最近は来てもお金を使わずに帰るようなことばかりだった。

インフォ「ミサさん」

ミサ「インフォちゃん！こんにちは！」

名前を呼んだインフォに挨拶をするミサ

インフォちゃんも挨拶を返す

インフォ「こんにちははミサさん。そう言えば先ほど新しいお客様がシミュレーターをプレイし始めました。」

ミサ「インフォちゃん！それホント!？」

インフォ「はい、こちらです」

インフォちゃんはミサを連れてシミュレーターの近くへ行った。

.....

ユウキ「よし！」

ユウキはGNソードを使い目の前のガンタンクを真っ二つにする。

初めての操作だったが今まで色んなゲームをしてきたのがいい経験となっており、初心者にははなかなかの動きが出来ている。

次々と現れるザクやドムなどを蹴散らしながら奥のステージへと

向かうユウキ

そんな彼のコックピットに警報音が鳴る

ユウキ「!? ビックリした… えーと… 乱入?…」

コックピットの画面に現れたのは敵プレイヤー確認の文字

ユウキ「来る…!」

警戒するユウキの元へと1機のガンプラとそのファイターが現れた

タイガ「お前、この辺じゃ見ない奴だな! 俺はタイガってんだ!

この辺でガンプラやるならよ… まずはこの俺に挨拶してもらわねえとなあ!!」

なんて傲慢なんだ… 人がいないのはこいつのせいでもあるん

じやないか… なんて考えるユウキは目の前のガンプラへと視線と集中を移して、ジムをベースに改造された貸出用のガンプラを動かしてタイガの方へ向かう

そこへいきなり通信が入る

ミサ「もしもーし? 聞こえる? いきなりごめんねー」

突然の女の子の声に驚くユウキ

ミサ「今乱入してきたのはこの辺で初心者狩りしてるタチの悪いやつなの」

ミサ「でもそんな強くないから安心して!」

いきなり現れたかと思えば酷い言われようである

タイガ「おいミサ! 邪魔すんな!」

突然の暴言と通信の乱入に怒るタイガはミサへと怒鳴る

ミサ「いい加減初心者カモるのやめなよー 私が相手になるよ」

タイガ「俺は女には手を出さねえ! 俺より強い女にはな!」

ユウキ「なんてダサいんだ…」

ユウキは思わず心に思ってた事を口にしてしまった。

タイガ「アアン!? お前今何だった!」

ユウキ「え!? 俺今心の声漏れちゃった…?」

タイガ「お前だけは… 許さねえ!!! 絶対倒してやる!!!」

ユウキ「ああもう！」

タイガの機体は大剣を片手に携えて、ユウキのガンプラを破壊するためにスラスターによる加速を始め、ジムへと斬りかかった

ユウキ「危ね！」

タイガは機体程ある大剣でジムに斬りかかってくるも何とかGNソードで受け流す

これはまずいそう思ったユウキは後ろに距離を取り持っていたマシンガンで射撃を行う

タイガ「そんなモノ・・・俺のガーベラテトラには効かねえぜ!!!」

タイガ「俺様を怒らせた罰だ・・・これでも喰らいなア!!!」

タイガのガーベラテトラの盾から銃弾のようなものがユウキのガンプラへ向けて飛んでくる

ユウキ「しまった！」

突然の事に反応が遅れてしまったユウキの機体は、盾から放たれた攻撃をまともに喰らってしまい、軽くスタンの様な状態になったジムへとタイガのガーベラテトラの大剣の一撃が飛んでくる

タイガ「これで終わりだア!!!」

ユウキ「まだ・・・させるかあ!!」

ユウキは左腕に付いていたシールドで攻撃を防ぐ

だが・・・完全には守りきれずに左腕を失ってしまった

タイガ「チツ・・・！左腕か！だが、今度こそGAMEOVERにしてやるぜ！」

そう言う今度は大剣を振り下ろす

おそらくEXアクションだろう・・・盾を失ったこの状態での攻撃を喰らえば負ける事くらい初心者のユウキでさえわかっている。

タイガ「これでお前もGAMEOVER！ EXアクション！」

デッドエンドバスターアアアアア!!!

タイガの機体はEXアクション デッドエンドバスターをユウキへと放ち、今度こそ仕留める気だ

ユウキの脳裏には負けのビジョンが頭をよぎる

まだまだ、まだ終わりじゃない・・・ どうか勝つ手段がある・・・ 考え

ろ…

ユウキ「そうだ…！確か!!」

だが、ガーベラテトラはもうEXアクションを放ち大剣を振り下ろしてくる

刹那、ユウキはガーベラテトラが大剣を振り下ろす隙を付き、オプション装備として使えるビームサーベルでガーベラテトラのコックピットへと今出せる力を込めて、全力で突いた。

タイガ「な、何イ!？」

これにはタイガも想定外だったらしく、タイガのガーベラテトラは致命的な一撃を受けてその場でガーベラテトラは膝を付く

当然、ユウキはそのチャンス逃しはしない

ユウキ「貰ったぜ！」

ユウキのジムは最初から装備してあったEXアクション クロススラッシュでタイガの機体を切り刻む

タイガ「そんな…この俺が…！覚えてろおお!!」

タイガのコックピットにはGAMEOVERの画面が出た

まさかの初心者狩りを逆に狩る事に成功した

ユウキ「ふう… 色んな意味で疲れたぜ…」

ユウキはため息を付きながら、貸出用のガンプラを見つめる

ユウキ「ガンプラバトル… 楽しいな…」

こうしてユウキの初ガンプラバトルシミュレーターはタイガを破った初勝利で幕を閉じた

続く

ガンダムブレイカーズ 第2話 チーム結成

初のガンプラバトルで何とかタイガを破ったユウキはシュミレーターから出てくる。

久しぶりにあんなに集中した…眠いったらありやしない 家に帰って寝ようか… あ、一人暮らしだから飯も自分で作らないといけないのか…

色んな考えが頭をよぎりながらシュミレーターから出る。

そんな彼に1人の少女がいきなり話しかけてきた

??? 「ねえ!君さつきジムでタイガを倒した子だよね!」

ユウキ「え?…そうだけど君は… ああ!さつきの子?」

少し聞き覚えのある声を聴いて、先ほどの戦闘でいきなり通信に入ってきた少女の声を思い出す

ミサ「そうそう!私の名前はミサ!ここら辺じゃあまり見たい顔だけど君は?」

ユウキ「俺?俺はユウキ…最近ここら辺に越してきたんだ。」

とても手短かに自分の紹介を済ませるユウキ。何せとても眠いのだ、早く家に帰りたい気しかない

ミサ「いきなりで悪いんだけどさ!私と一緒にガンダムバトルシュミレーターで優勝目指さない!」

ユウキ「へ?…」

ユウキは驚いた。いきなり初対面の娘に言われる一言がこれである

そもそもユウキは今日初めてガンプラバトルに手を出した

ユウキ「悪いけど…他あたってよ、なんせ俺今日初めてやったばっかだしさ 優勝目指す以前の問題だから…」

ユウキ「え?あれで初めてなの?なら尚更一緒にやろうよ!君ならきつとタウンカップ優勝は余裕で行けるよ!」

ミサも必死なのだろうか、凄いお世辞を言ってくる…

さつき始めたばかりの人間がタウンカップ優勝なんて無理無

理…

ユウキ「でも…俺本当にはじめたばつかだからさ…きつと迷惑かけると思うし…」

頼むから引き下がってくれ…ユウキは心の中でそう呟く。

同時に今度こそ思った事を口にしないように祈りながら

ミサ「大丈夫！大丈夫！君なら行けるよきつとだから一緒にめざそうよー」

だめだ…引き下がる気は無さそうだ…

頑固過ぎる…

ユウキ「(ガン普拉バトルか…)」

先ほどの戦いを思い出すユウキ

確かにガン普拉バトルをしている間、何か心が熱くなった気がしていた。

今まで色んなゲームをしてきたユウキだが、心の奥から熱くなることなんて無かった

ユウキ「…もういつそやれるだけやってみようか。どうせ俺がやるって言うまで引かないだろうし…」

ユウキ「ミサちゃん…だっけ」

ミサ「ミサ(ちゃん)じゃなくてミサでいいよー」

ユウキ「分かったミサ、俺やるよ。どうせ引かないだろうし。」

「どこまでやれるか知らないけど俺やってみる。」

半分は全然引く気の無いミサへの諦めと、やれるだけやってみようという気持ちを経てユウキは遂に決心した

ユウキ「但し、やるからには本気でやる。絶対に手は抜かない…」

そうブツブツ1人で呟いてる所にミサが…

ミサ「そうだお父さんに紹介しなきゃ。着いてきて。」

ユウキはミサに言われるまま歩き始めた。

ミサの案内する場所へ向かう途中、ミサは優勝目指す理由を話し始めた。

ミサ「今はこうして寂れてるけど昔は色んな店があったんだ…百貨店のタイムズユニバースって知ってる？」

タイムズユニバース…今や全国のどこにでもある百貨店だ。当然ユウキが引越す前に住んでいた街にもあった。

と言うかタイムズユニバースがない地方など今の世の中なかなかないだろう

ミサ「タイムズユニバースが出来てから…お客さんはそっちの方に行っちゃって ほら、こんな感じでどんどん店が閉まっちゃって」

ミサの言葉の通り、商店街の店は何処もシャッターが閉まっているかつては活気のある商店街も時代の流れには抗え無いらしい

ミサ「だからね！この彩渡商店街を盛り上げたいんだ！その手段として彩渡商店街のガンプラチームを作ったわけ！」

自分と同じ年の人間とは思えないほどきちんとしている…

ユウキは心の中で関心しながら、ふと湧いた疑問を投げかける

ユウキ「で、そのチームってミサ以外に誰がいるの？」

ミサ「ブツツ…実は前までいたんだけどやめちゃったんだ…だから君を誘ったって訳…」

痛い所を突かれたと言わんばかりの反応にユウキは思わず苦笑した

……………

ミサ「さあ！ここが私のお父さんの店！」

それはユウキが商店街に来てから最初に目に入った店の模型屋だった。

ミサ「お父さん…紹介したい人が居るの…」

店に戻ったミサはまるで別の意味このような言い草で父親へと話しかける

ユウキ「言い方…」

??? 「新しいチームのメンバー見つかったのかい？」

ミサ「もう！お父さんー！」

ユウイチ「父のユウイチです。ミサの事宜しくね。」

ミサの話を遮りユウイチがニコニコしながら挨拶をする
どんな人かと思ったがとても優しそうな人だ。

ユウキ「よ、よろしくお願いします！」

ユウイチ「こちらこそ！」

ユウイチは笑顔で頷いた

ミサ「あ！そうだ！」

ユウイチに話を遮られブツブツ言っていたミサが口を開く。

ミサ「ユウキ君はなんの機体を使うの？」

そう言えばジムは借りたものだった。

故に自分用の機体がない。

やはり大会に出る以前の問題だったようだ。

ユウキ「どうしよう・・・ 全く考えてなかったよ・・・」

俺は悩む、というか試しにやってみただけでもそもそも自分は何も知らない。

ユウイチ「家は模型屋だし、店の物をゆつくり見て回るといいよ」とユウイチは提案してくれた

確かに折角だし色々見せてもらおう

こうして俺は何時間もかけて自分にあう機体を探すのだった。

.....

場所は変わってここは学校

「サワシロ・ユウキです。三年間宜しくお願いします。」

俺は今年から一応高校生だ。

ガン普拉バトルだけに集中するのではなく学習面も力を入れないとガン普拉バトルする以前の問題だ。

運がいい事にミサと同じクラスだったが友達を増やしていきたい。

まだこの事なんてよく分からないし。

「なあ！君この前あのタイガを倒した奴か！」

後ろから同じクラスの子が話しかけてくる

確かに俺だけど・・・

「俺もあの時のバトルは観させてもらったぜ！初心者にしてはやるじゃん！」

ユウキ「お、おう・・・ ありがとな・・・」

自分のコミュ力の低さに泣けてくる・・・

マモル「俺の名前はマモル！宜しくな！俺もガンプラバトルシミュレーターやってるんだぜ！」

この子がミサが言ってた子だろうか…

マモル「まあ俺もついこの前始めたばかりだけどな！

俺はこれ使ってるんだ！」

そう言っつてマモルは鞆からガンプラを出した

これは…

「これが俺のガンプラ！ヘビーアームズカスタムだ！

一応これでも俺もタイガの機体倒してるんだぜ！」

何と、初心者狩りのタイガを破った初心者は俺だけじゃないのか…

マモル「そうだ！放課後暇か？あの戦い見て以来やってみたかった

んだよお前と！」

ユウキ「お、おういいぜ 放課後な」

やっぱりガンプラバトルの腕よりコミュ力をあげた方が良さそう

だ

.....

くキャラ紹介く

マモル 重量感のある機体が好き タイガを破ったユウキと同じ

クラスの少年

機体 ガンダムヘビーアームズカスタム

頭 ガンダムヘビーアームズEW版

胴 ガンダムサンドロックEW版

腕 ガンダムヘビーアームズEW版

足 フルアーマーガンダム

バックパック ガンダムヘビーアームズEW版

(説明) 大型大艦刀を使い制圧するだけではなくガトリングや肩に付いているビルドパーツのレールキャノンで遠距離からも攻撃出来る。色はアーミーカラー。

.....

放課後にバトルの約束をしている俺は内心焦っていた。

ユウキ「なあミサ、マモルの機体見たか。」

ミサ「よく見えなかつたけど凄い重量感あったね」

ミサの言う通り背中にガトリングを背負っていたり、肩におそらく自分で付けたであろうレールキャノンがあった。

ユウキ「あー！どうしよ！あれに勝てるのか俺！」

ミサ「大丈夫だよきつとー」

何となくミサの言い方に他人事感を感じるがそんなことを考えている場合ではないのだ。

タイガの時は何とか勝てたが相手はそのタイガを倒している。不安にもなる。

更には来月にはタウンカップもあるここは出来るだけ勝って経験を付けておきたいのだ。

ユウキ「行ける… 行けるよな？… ストライクガンダム？…」

こうなったら自分と機体を信じるしかないのだ

耐えてくれよ… 俺のガンプラ…！

くキャラ紹介く

ユウキ 主人公。小さい頃からゲームセンターが好きで彩渡商店街のゲームセンターでガンプラバトルシミュレーターに出会う

使用機体は現在はストライクガンダムカスタムだが行く行くは色々改造したいと思っている。

機体 ストライクガンダムカスタム

頭 ストライクガンダム

胴 ストライクガンダム

腕 ビルドストライク

足 ストライクガンダム

バックパック ビルドストライク

(説明) 模型屋で悩んだ結果作った機体。ビルドストライクのパーツも採用しているので大型ビームキャノンも使用可能。

ガンダムブレイカーズ 第3話 芽生える友情

時計は15時30分を指し、放課後となった。

ユウキはマモルとした約束を果たすためにゲームセンターへと向かった。

インフォ「こんにちは ユウキさん」

インフォちゃんがユウキに挨拶し、ユウキもインフォちゃんへと挨拶を返す。

ユウキ「インフォちゃん こんにちは。」

インフォちゃんに挨拶したあとユウキはガンダムバトルシミュレーターへと足を進めた。

マモル「待ってたぜ！お前戦いたくてうずうずしてたんだ！

楽しみ過ぎて昼の弁当二つも食っちゃまったぜ！」

それはお前が腹減ってたただけだろ……こみ上げる言葉を口にはしない

さて覚悟はしてきた。

ユウキ「さあマモル、さっさと始めようぜ」

ユウキは既に覚悟を決めている

人生で2回目のガンプラバトル……まずは勝つことより慣れる

ことから……

……………

シミュレーターへと入り意識を機体に移す

(絶対に勝つ……)

ただそれだけを考え前を向く。

ユウキ「ストライクガンダムカスタム ユウキ出るよ」

マモル「ガンダムヘビーアームズカスタム マモル出るぜ!!!」

2人の掛け声と共に出撃する二つの機体

どうやら今回のステージは街？のようだ……

ユウキ「タイガと戦った時と違ってビル群に隠れることが出来る

な…… 相手は遠距離からも攻撃できる……隠れながら行こう」

マモル「隠れようなんてそうはいかないぜ！」

「見せてやるぜ…！へビーアームズカスタム!!」

マモルの掛け声と共にへビーアームズカスタムはガトリングやレールキャノン、6連ミサイルを何と、一気に放射した。

別に何も考えず打ったわけではない。

マモルは隠れることが出来るビルなどを一気に蹴散らすために

ユウキ「なるほどな…隠れさせてくれる訳ないか」

「ならこちらも行かせてもらおうぜ！」

ストライクガンダムはガンダムへビーアームズに向けて真っ直ぐ突き進み、ビームサーベルで斬りかかる。

マモル「そう来なくっちゃ！」

マモルは笑って大型大艦刀を持ち、ストライクガンダムのビームサーベルを受け流した。

ビームサーベルと大剣のぶつかり合う衝撃で突風が起こる。

大型対艦刀でストライクガンダムを弾いた後…

マモル「隙ありイ！」

ユウキ「何イ!?!」

マモルは右肩のレールキャノンでストライクガンダムを撃ち、ユウキはこれをまともに受けてしまう。

前回は軽いスタンのような状態になったが流石はガンダム、ダメーシが入っただけで済んだ。

ユウキ「悪いが簡単にやられるわけにはいかない」

ユウキはビームサーベルをへビーアームズの方へ投げ捨てる。

マモル「なんの!」

当然の如く、へビーアームズはそれを弾き返す。
が…

ユウキ「今だ！」

ストライクガンダムはオプション装備のアーマーシユナイダーでへビーアームズに襲いかかる

マモル「何イ!?!」

少しだけ反応に遅れて攻撃を許してしまい、機体にダメージが入る
マモルだったがすぐアーマーシユナイダーによる攻撃に対応した

ユウキ「(手数が多く分…) 大剣に対抗出来ると思ったが…こいつ
確実に対応しやがる…」

「しようがねえ…これ使うか…」

ユウキは頭のバルカンでヘビーアームズに対し制圧射撃を行いな
がら飛んで行く

マモル「(どこに行く気だ…)」

マモルは嫌な予感がしながら再度撃てるようになったガトリング
等を駆使しながらストライクガンダムへ射撃を続ける

ユウキ「まだだ… 逃げ続ける!」

マモル「落ちろ落ちろ落ちろ!!!」

しかし、ヘビーアームズからガトリングの弾は出ない…

マモル「クソ!クソ! (カチツカチツ) 弾切れ…!」

ヘビーアームズカスタムのガトリングなどが再び底を尽きたのを
確認し、ユウキは再びヘビーアームズカスタムへと近づくと…

ユウキ「行つけええええ!!」

ユウキは声を上げながらビルドストライクのバックパックの2門
の大型ビームキャノンへと手をかけ…

ヘビーアームズカスタムを撃ち抜いた

.....

衝撃で砂塵等が舞い、撃墜出来たか視認することが出来ず分からな

い

そんな不安な表情を浮かべるユウキのストライクガンダムカスタ
ムへと再びガトリングやビームキャノンが襲いかかる

マモル「まだ終わりじゃないぜ!」

マモルは声を上げる

諦めないユウキは再びアーマーシユナイダーを持ち一気に距離を

詰めヘビーアームズに斬りかかった

マモル「大型対艦刀だけが近距離武器じゃないぜ！」

しかしそのアーマーシユナイダーをヘビーアームズは腕部のアーマーナイフで応戦する

ユウキ「埒が明かない……！」

「(あれを使うか……)」

何かを決意したユウキのストライクガンダムはアーマーシユナイダーを投げ捨て、ヘビーアームズカスタムを掴む

ユウキ「隠し腕ならぬ 隠しメガ粒子だああああ!!!」

ユウキはビルダーズパーツとしてストライクガンダムの胴にメガ粒子砲を付けていた。しかもバレないように赤く塗り同化させ。

マモル「戦いつてのは…… 最後まで立ってた方が勝者なんだよ……！」

しかし、メガ粒子砲を至近距離で喰らったヘビーアームズカスタムは既にボロボロ……

この様子だと最後まで立てるのはどう考えてもストライクガンダムだ。

何か秘策が……？ 嫌な考えがユウキの頭をよぎる

そうだ……！ チームを結成してから色々調べた中にWガンダムの機体には「自爆」というオプション装備があると見たことがある……

……まさか！

最悪のシナリオが浮かんだユウキは、ストライクガンダムをヘビーアームズカスタムから引き剥がそうとする

しかし、マモルは絶対に離す気はなく なかなか離れない……

ユウキ「離せ！……この！」

焦ったユウキはストライクガンダムの頭からバルカンによる射撃を行い怯ませ離れるのを試みた

バルカンはヘビーアームズの頭へと打ち付けられるが、変わらず力は緩む様子はない……

マモル「これで立ってた方が… 勝者だぜ…！」
ユウキ「離せええええ!!」

最後の力を振り絞ってヘビーアームズから引き離すが…
ズドオオオオオオオオオオンンンン

と、凄まじい爆発音と共に辺り一体に衝撃が及ぶ

かつて街であったステージは爆風などによりビルはなぎ倒され、もはや更地と化していた

何とか至近距離で巻き込まれるのは防いだユウキのストライクガンダムだったが、機体には大ダメージが入っている

そうだ！ヘビーアームズは！そう思ったユウキはヘビーアームズカスタムが爆発した場所を見る

そこには自爆したはずのヘビーアームズカスタムがボロボロになりながら立っている

右腕は関節から先を失い、大型対艦刀も先端は折れてしまっている
ユウキ「どうして… 爆発したはずじゃ…」

マモル「何も考えずに爆発させた訳じゃない 即死回避のアビリティを付けてたから耐えた」

「さあ、今度こそ決着を付けようぜ…！」
ユウキ「望むところだ！」

覚悟を決めたマモルのヘビーアームズカスタムとユウキのストライクガンダムカスタムは最後の力を振り絞ってビームライフルで互いの機体を撃ち抜く

………
ユウキ マモルのコックピットには互いにGAME OVERの文字が出ていた

引き分け… まあ、負けるよりかは平等っちゃ平等だ

マモル「いいバトルだったぜ、ユウキ！またやろうな！」

ユウキ「ああ、次は勝つぜ！」

………
ユウキとマモルは別れ帰路についていた

今回のバトルで色々学べたと思う
死闘を繰り広げた事を現すかのように、ボロボロになったストライ
クを握りしめてユウキはアパートへ向かう

続く

第2章 タウンカップ編

ガンダムブレイカーズ 第4話 開幕タウンカップ

朝起きたユウキはふと、昨日のバトルを思い出した

どっちが勝ってもおかしくないバトル・・・引き分けて終わったのが悔しかった

ユウキ「もっと強くならねえと・・・」

もっとストライクガンダムカスタムを活かせるようにならなければ・・・そう改めて思った。

ティロン♪ ティロン♪

いきなりユウキのスマホが鳴る

ミサ「ユウキ君起きてるー?」

ユウキ「起きてるよ」

ミサ「そっか!ならタウンカップの練習でもしようと思ってね!」

ユウキ「わかった、じゃあゲーセンな」

寝起きのユウキはチャツチャと支度をした

.....

インフォ「おはようございますミサさん ユウキさん」

ユウキ「おはようインフォちゃん」

ミサ「おっはよー!」

今日もインフォちゃんに挨拶してから、ユウキとミサはガンダムバトルシミュレーターへと向かう

ユウキ「ん?誰かシミュレーターに入ってるんか?」

シミュレーターの画面にはこちら辺では見慣れない機体が戦場を駆けていた

ボディの色は黒くモノアイや一部パーツだけ赤い・・・

あれはグフカスタムだろうか?・・・

ヒートソードやロッドを使って確実に機体を沈めている

左腕には 改 の文字が白く描かれている。
はつきり言つて…… めちやくちや強そうだ

.....

グフカスタムを使うパイロットがシュミレーター内から出てきた
ユウキ「あれ…… あいつ確か……？」

ミサ「ユウキ君、あの子同じクラスのミライ君だよ！」

ミライと呼ばれた少年がこっちに向かってくる

ミライ「誰かと思えば同じクラスのミサとユウキじゃないか」

「君たちもシュミレーターで遊ぶのかい？」

ミライがこちらに話しかけてくる
するとミサが

「遊んでるんじゃないよ！タウンカップの練習するんだよ！」
と言った。

確かに俺達はただ遊んでるわけじゃない。商店街を盛り上げたい
その思いでタウンカップに臨むのだ。

ミライ「君達、タウンカップに出るのか」

ユウキ「あつたり前だ！ 商店街の名を轟かせるんだからな！」

ミライ「なら、君達は俺の敵だな」

は？つまりこいつも出るってのか…… 確かにこいつなら1人でも
充分強そうだけど……

いやいや、すげえ厄介だぞこれ……

ミサ「じゃあタウンカップではライバルだね！」

おいおい、ミサどういふことか分かってんのかよ……

もう既に不安だぜ…… おい……

ミライ「そう言う事だ。タウンカップ、楽しみにしてるぞ」

そう言うミライは去つてった。

これは今からめっちゃ練習しないと……

いけないのかこれ……

.....

ユウキとミサはそれぞれシュミレーターに入り出撃準備をした。

ユウキ「ストライクガンダムカスタム ユウキ出る！」
ミサ「ガンダムアザレア ミサ！行くよ！」

2機は射出し戦場へと着地した

こうしてミサのガンプラ見るのは初めてだけどミサらしい機体だなあ……

そんなことを思っていると、キャンプファーからの攻撃が始まった
始めたばかりとは思えない動きをするユウキのストライクガンダムカスタムはどんどんキャンプファーやドムを真つ二つにしていく
もちろんミサのアザレアも遅れをとるまいと遠距離射撃などを駆使し撃墜数を伸ばしていった

数日後に迫ったタウンカップに向け2人は練習を重ねた

.....

タウンカップ当日

受付員 「はい、受付完了です」

これでようやくタウンカップで戦える

というか予選ってどういうルールなんだ……

ミサ「予選はいくつかのミッションで稼いだACEポイントで順位が決まるの」

成程とりあえず倒しまくればいいのか

絶対に負ける訳にはいかないミライにも……

このストライクガンダムでおれは勝つ……

ミサ「ユウキ君！予選始まるよ！」

.....

予選と言ってもただCPUの機体を倒すだけではない
当然他のプレイヤーも乱入してくるのだ

モブA 「な、んだ……あのグフカスタムは……」

モブB 「俺達のジエガンじゃ太刀打ち出来ない……」

「なんだ、この程度レベルか つまらない……」

ヒートソードを振り、そう呟いたミライ

その直後、ミライのコックピットに敵の接近を知らせる警告音が鳴る

タイガ「ミライ……！お前を倒すのは俺だあ！」

その口ぶりからタイガはミライを知っているのだろう

タイガのガーベラテトラは、早速ミライのグフカスタムへと EX
アクションデッドエンドバスター を繰り出す。

「遅い」

ただ一言言い放ったミライはデッドエンドバスターを避け

タイガのガーベラテトラを踏み台にした

「何イ!?俺を踏み台にしただとお!？」

そう叫ぶタイガを尻目にグフカスタムはヒートソードで EX アク
シオン ホールストライク でタイガの機体を真つ二つにした。

タイガ「くそお!また負けかよお!!!」

タイガのコックピットには GAME OVER の文字

ミライのグフカスタムに微塵も触れることなくタイガは敗北した。

ユウキ…… 君は……！

……

ミサとユウキも他のプレイヤーのザクに囲まれている

ユウキ「3機…… やれないことはないな！」

黒色の2体のザクは同時にユウキのストライクガンダムを狙うも、
ビルドストライクのバックパックから放たれた2門の大型ビーム
キャノンを喰らい GAME OVER

残り1体はビームアックスを携え、ミサの方に向かった。

……

モブC「悪いな嬢ちゃん……！ おじさん達も勝ちたいんでなああ

!!」

ミサ「そんな攻撃……当たらないよ！」

ザクのビームアックスをサーベルで受け流したアザレアは、隙をついてザクの胴をライフルで撃ち抜いた

ピーッ!

ミサのアザレアによる攻撃がザクを貫き、撃破した瞬間に予選終了を知らせるホイッスルが鳴り響く

ミサ「やったあ! 1次予選突破だつて!」

かなりの喜び具合のミサを見て、ユウキも少し笑う

???「驚いた... まさかほんとに突破するとはね...」

ユウキの前に見たことない青年が声をかける

ミサ「カマセ君!」

カマセつて... あだ名なのか本名なのか...

ミサ「どう! 自分が捨てたチームの活躍を見るのは!」

ミサはどこか誇らしげだ まだ優勝じゃないぞ...

カマセ「俺はより良い環境で上を目指すだけだ」

ミサ「何よー!」

カマセの反論に不満げなミサは頬を膨らませる

フグかお前は

カマセ「大体... 商店街のドノーマルのアセンブルシステムで上が

目指せるかよ! 金と技術による凄まじい力... 見せてやるよ!

... という訳でカドマツさんよ、あれ使わせて貰うわ」

カドマツ「やだよ」

カマセの後ろには白衣を着た男性が立っていた

カドマツと呼ばれた男はカマセの提案をあっさり断る

カマセ「もう啖呵切っちゃったんだよ使わせてくれよ!」

カドマツ「俺はな努力とかで頑張るのが好きなの。そもそもあれ

はタウンカップなんかで使うもんじゃねーよ」

あれ とは何かわからないが、言いたいことは分かる

カドマツ「いいから使わせてくれよ! あれじゃないとでないからな

!」

それでも退かないカマセ

見た目からして我が儘な所がありそうだが、本当に我が儘だ

カドマツ「わーかったよ」

折れたのはカドマツだった

カマセ「いいか！金と技術のなせる力見せてやるからな！」
カマセはそう言い残して去っていく
なんか…可哀想なやつだな……
続く

ガンダムブレイカーズ 第5話 新たな目標

アナウンサー 「二次予選が始まります 出場予定の方は準備をして下さい」

ミサ 「ユウキ君！二次予選始まるって！」

ユウキ 「おう・・・」

ミサの呼びかけに対し簡単に返すユウキ

ユウキの頭の中ではあのミライの事で一杯だった

なんせユウキが何とか倒したタイガを普通に倒す程の実力だ。

ユウキ 「(アイツを倒さないと先へは進めないし・・・)」

ミサ 「ミライ君の事考えてるでしょ」

ミサはユウキの考えていた事をスバリ当てる

ユウキ 「そうだよ・・・ あいつは強い、マモルやタイガよりもきつ

と・・・」

ミサ 「大丈夫だよ、ユウキ君！戦う前から諦めちゃったら元も子もないよ、一緒に頑張ろ！」

ガッツポーズをしながらそう語るミサ。

ミサの一言でユウキの心は多少前向きになった

ユウキ 「そうだな・・・ よーし！ミライを倒して、そして優勝だあ

!!!」

ミサ 「おおうー！」

.....

ユウキ 「ストライクガンダムカスタム ユウキ、行くよ！」

ミサ 「ガンダムアザレア ミサ、行つくよー！」

ミライ 「グフカスタム改 ミライ、出る」

カマセ 「カマセ、行つくぜー!!!」

ミスター剣山 「スサノオ極 いざ参る!!」

二次予選に出場する4名の機体が射出する

決勝に出ることが出来るのは2チームのみ。

決勝をかけた戦いに、火蓋が切って落とされた

.....
スサノオ極を操るのはミスター剣山

どうやらこのタウンカップの常連らしい

使用する機体は黒と赤と金を基調としたスサノオだ

ミスター剣山「カマセ殿！まさかその機体は……！」

カマセとの戦闘状態に入ったミスター剣山はカマセの機体を見て
そう呟く

カマセ「見せてやるぜ……！これが金と技術がなせる技だ！」

巨大な機体が両目を光らせ、スサノオ極へと襲い掛かる……

.....

ユウキ「カマセとミスター剣山がエンカウントしたらしい

つまり……！」

ミライ「僕が、相手という事だ！」

突然現れたグフカスタム改による射撃にストライクガンダムは怯
んでしまう

ユウキ「おもしろえ……！ 行くぜ!!!」

.....

ミスター剣山「この私の……スサノオ極が……！」

カマセ「見たかよ！これが俺のPGの力だああああ!!!」

カマセのPG機体による一撃でスサノオ極は再起不能と化してい
た。

わずか数分の出来事…… PGの圧倒的な力の前にスサノオは容

易く落とされてしまった

カマセ「覚えてろミサ！……決勝で当たったら粉々にしてやるぜ！

……」

ミスター剣山、GAME OVER

.....

こちらではグフカスタム改の猛攻をストライクガンダムとガンダ
ムアザレアは凌いでいた

ユウキ「ミサ！援護頼む！」

ミサ「了解！」

ガンダムアザレアはライフルでグフカスタム改を狙うも……

ミライ「遅い」

ミサ「きゃああああああ!!!」

凄まじいスピードでアザレアの懐へ潜ったグフカスタムはヒートソードでアザレアを斬り付ける

ユウキ「ミサ！ このお……!!」

ビームサーベルを地面はと突き刺し、アーマーシユナイダーへと持ち替えるストライクガンダムは、アザレアを吹き飛ばしたグフカスタムへと向かっていく

ミライ「何との……！」

当然 簡単に攻撃を許すはずなどなく、グフカスタムはヒートソードでアーマーシユナイダーの一撃受け止める

ユウキ「何度でも……!!!」

ぶつかり合うヒートソードとアーマーシユナイダー

やはりアーマーシユナイダーの方が手数が多く、グフカスタム改を次第に圧倒していく

ミライ「くっ……！」

このままでは不味い…… そう考えたミライはアーマーシユナイダーを弾き返して、一旦後ろへと下がった

だがユウキはそれを見逃さない

ユウキ「喰らええええ!!!」

バックパックのビルドブースターの2門の大型ビームキャノンを出したストライクガンダムは、退避を試みるグフカスタムへ向けてビームキャノンを放つ

ミライ「なッ……!!」

咄嗟に回避を試みるグフカスタムだったが、左腕にビームキャノンを受けてしまい 左腕を失ってしまった。

ミライ「成程…… やるね……！」

ユウキ「へへ……！」

ミライからの賞賛に得意気になるユウキ。

ミライ「だけど……」

両足で踏み込んだグフカスタム。

ミライ「まだだ…」

素早いスピードで迫ってくるグフカスタムへとユウキは反応が遅れてしまった

ミライ「貰ったア…！」

グフカスタムから放たれたヒートソードはストライクガンダムへと振られる

ユウキ「やばい…！」

ユウキは咄嗟に目をつぶってしまう…

ユウキ「…？」

いつまで経っても攻撃された感覚のないユウキは目を開けて、様子を確認した
すると…

ミサ「おりやあああああ!!!」

間髪、アザレアはユウキとミライの間に入って、シールドで一撃を
防いでいた

ミライ「このおおお!!!」

ヒートソードへと更に力を込めるユウキ

ミサ「ぐぬぬ…！」

アザレアのシールドは限界を表すように、ミシミシと音を立て始める

ユウキ「こっからは任せろ!!!」

突き刺していたビームサーベルを引き抜いたユウキのストライクガンダムはビームサーベルを斬りあげ、グフカスタムの残されていた
右腕を切り落とした。

ミライ「…ッ！」

ユウキ「お前は強えよ… ミライ…！」

ビームサーベルを持ち替え、右手に握り直したストライクガンダム

は、両腕を失ったグフカスタムの胴体へとビームサーベルを突き刺す
ユウキ「だけど・・・勝つのは俺達 彩渡商店街だああああ!!」
全力を込めた一撃は、確実にグフカスタムを貫いていく

ミライ「・・・負けたよ 君達の勝ちだ・・・!」
ビームサーベルの一撃はグフカスタムの上半身をそのまま吹き飛ばすと、グフカスタムのモノアイからは光が消えた

これにより彩渡商店街チームは決勝に出場
同時にハイムロボティクスも決勝へと駒を進めた。

.....

ミサ「はい!コーラ!」

ユウキ「ありがと、ミサ」

ユウキはミサからコーラを受け取った

ミサ「さつきはいい感じだったね!まさに相棒・・・ってかんじ!」

と、興奮気味に言うミサ

同感だ。なんて恥ずかしくて言えないユウキはただ頷く。

「探したよ」

コーラを飲んでいるユウキに声をかけたのは先ほど戦ったミライだ

ユウキ「何だ?」

ミライ「これ、君に渡しておこうと思って。使ってくれたら嬉しいよ」

ミライから受け取ったのはガンプラのパーツだ。

抜けるユウキ「これ・・・」

ミライ「ソードストライクの腕パーツだ。君のストライクガンダムなら使えるだろうと思ってね。決勝・・・絶対に勝ってくれよ」

ユウキ「ああ、絶対に勝つのは俺だ」

ミサ「俺、じゃなくて俺“達”でしょ!」

ユウキ「・・・そうだな、勝つのは俺達だ!」

そんな2人のやり取りをミライは笑って見守る
ミライの笑った顔は初めて見る・・・

ユウキはアザレアの元に近寄る

ラツキーな事に戦闘にそこまで影響はない

「他人の心配より自分の心配をしな！」

ソードストライクはカマセのPGの機体掴まれた

くそ！なんて力だ！

掴まれているパーツがミシミシと音を立てる

「ユウキ君を離せ！」

ミサのアザレアのビームサーベルがソードストライクを掴んでい
るパーツにダメージを与える

うお!?

離された影響で叩きつけられるユウキの機体

ミサに助けられてばかりじゃねえか俺……

「これでも喰らえ！」

PGのGMソードがユウキとミサに襲いかかる

ユウキは間髪避けたが……

「きやああああああ!!」

ミサのアザレアがモロに喰らってしまった

「潰れるよ!!」

アザレアに対しPG機体の腕攻撃が襲う

終わらせたくない！ミサは俺が守る!!!

そう思ったユウキのソードストライクガンダムは赤く光っていた

.....

ミサは自分はGAMEOVERになったと思っていた

だがいつまで経ってもコックピットにGAMEOVERの表記が
ない

「ん……？」

そんなアザレアの前に赤く光っているソードストライクガンダム
がカマセのPG機体からの攻撃を守っていた

「嘘だろ……？ PGの攻撃を防ぎきるなんて！」

ユウキは体から溢れ出るこの力の正体が分からなかった

だけど今ならいけるそんな気がしてたまらない

「おかしいだろ！アセンブルシステムでも弄ってんだろ!!!」

「こんなの初めてだから私にも分からないよ！」

「ちくしよおおおおお!!!」

発狂するカマセに対して光の速さで間合いを詰めるソードストライクガンダム

その手にはビルダーズパーツで肩に付けた対艦刀が握ってあった
喰らえ!!今までの借りだああああ!!!

対艦刀でP G機体の腕を破壊していくユウキ

行くぞ！ミサ！

「うん!!!」

ソードストライクガンダムとガンダムアザレアは高く飛びビーム
サーベルでクロス状に切りかかった

「これで終わりだああああ!!!」

機能を停止するP G機体

ストライクフリーダムの目からは光が消えた

「そんな…この俺が…負けるなんてええええええ!!!!!!」

.....

優勝は彩渡商店街ガンプラチームです

「やったあ!!!優勝だよ！ユウキ君!!!」

うん！俺達優勝できたんだ！

お互いによろこびあう2人

だがそれを邪魔するかのようにかマセが現れた

「おい！なんだあれ！アセンブルシステム弄っただろ！チートだろ
!?!」

だから知らないって…俺も何なのかよく分からないし

「はあああ!?!そんな言い訳通るかよ！ふざけんな！」

カマセの発狂は止まらない

「なんだ何だうるさいぞ」

「おい！あれ何なんだよ！チートだろ!!」

現れたカドマツに対し説明を求めるカマセ

「あーっ、アレな。あれは 覚醒 って言うんだ」

「システム側としてもよくわかってない」

「発動出来たから使える。それだけだ」

「はあああ!?!なんだそれやっぱりチートじゃねえか!」

相変わらず発狂し続けるカマセ

何だか可哀想に見えてきた...

「あのなあ... P G使っただけで圧倒的に有利な試合にしといて負けて文句言うなアホ。そんなんだからアホみたいに負けるんだよアホ」

「3回もアホって言われてやんの...」

ミサがそう呟く

「ちくしょおおお!!俺はこんなところで負ける男じゃないのにいいいい!!!」

カマセは怒りながらどこかへ消えてった

「今年はいいいファイターに恵まれなかったなあ...」

カドマツはそう呟いた

確かにアイツがファイターとか少し可哀想だ

「でも、P Gを使えるようにしたシステムは凄いです」

ミサが褒めた

「突貫工事だったからあまり生かしきれなくて無いけどな

まあ上の大会だともっとすげえのが出るだろうよ」

そっか、勝ったから上の大会があるのか

益々負けてられない強くならなきゃな...

「覚醒まで使えるようになったか... 面白い...」

ミサとユウキの楽しそうに会話するのを眺める黒いフードを被った男がそう呟く

.....

それじゃあ彩渡商店街ガンプラチムのタウンカップ優勝祝って、カンパーイ!

ミサの父ユウイチが乾杯の音頭を取る

「ミヤコさんお店貸してくれてありがとう！」

「いいのよお、うちは1日位店閉めても」

ミヤコと呼ばれた人が俺のコップにジュースを注いでくれた

正直とても綺麗で見入ってしまう

何故この店が潰れないか分かったかもしれない

「家の店もミヤコの店がなきやとつくに潰れてらあ」

そう言うのはミチオさん 筋肉が凄くてとてもゴツイ・・・

「ミサ、2人にチームメイトを紹介しなさい」

ユウイチはミサに自分の紹介を勧める

「あ、この人がユウキ君 バトルも意外と強くてうちの期待のルーキーなんだあー」

「失礼するぜ」

「カドマツさん！」

「失礼するぜ」

「カドマツさん！」

今日タウンカップで出会ったハイムロボティクスの技術部の人だ

「あらごめんなさい、今日うち貸切なの」

「いや、俺はその嬢ちゃん達の知り合いなんだ」

「そう言うことならどうぞ」

カドマツは俺の隣に座った

「実はな2人のチームに入れて貰いに来たんだ」

予想外のことを言い出した

俺達のチームに入る？ハイムロボティクスは・・・

「タウンカップで負けたから今期は暇なんだよ」

「あっそうか失職しちゃったんだごめん・・・」

「いや別に会社はクビになってねえよ！」

そりゃそうだろ・・・

「このチーム、メカニックがないだろ？だからこの俺が代わりになってるよ」

想定外の提案だ

だがいるのといないのでは大分変わってきてしまう

「まあ個人的にはそのエースに興味があるんだがな」

「そんな事言われても私とカドマツさんじゃ年の差があるし… ブツ
ブツ」

ミサがまたあほみたいなこと言い始めた

はあ眠くなってきたよ…

「え？このチーム嬢ちゃんがエースなの!？」

「え？」

ユウキは疲れて眠りについた
続く

第3章 現れる死神

ガンダムブレイカーズ 第6話 仲間

タウンカップ優勝から4日後俺はゲームセンターにいた
おはようイラト婆ちゃん

「あんた今日も来たのかい。飽きないね〜」

俺は連日ゲーセンに入り浸りガン普拉バトルシユミレーターの練習をしていた

タウンカップの先の大会もあるしなにより…

覚醒を完全に身につけたかったのだ

あれから一回も覚醒出来てない…

どうにかして身につけたらきつと戦いに有利になるはず…

「どうしたんだい、そんなに考え込んで」

突然の声掛けに俺は驚いた。

声の主はミライだ

「覚醒…の事だろ？」

ああ…あれ以来何回やっても発動しないんだよ…

あの時はミサを助けようと無我夢中だったし…

条件が分からないんだよ…！

あれ以来発動条件の分からないユウキは色々試していた

わざとダメージを受け瀕死の状態になってみるなど色々試したが
どれも空回りだ

「だから毎日のようにここに来て練習、という訳かか…」

ああ…

練習している中で何度も心が折れかけた

だがユウキは諦めずただ練習を重ねる以外出来なかった

「あー丁度いい所にー！」

ゲーセンの入り口から少年がユウキとミライに声かけた

あれは…マモルだ

「よう！今からシュミレーターでもすんのか？」

マモルはミライとユウキに問う

ん？ああ、リージョンカップに向けて練習をな

「なら！俺も混ぜてくれよ！俺も戦いたくてウズウズしてんだ！」

マモルは目を輝かせながら俺達を見てくる

お前は子犬か

そっぴいかけたが心で呟いた

俺はいいが…ミライお前は？

「構わない それにマモル、君とは1度手合わせを試みたかった」

確かに俺はミライとマモルが戦ってるのは見た事ない

と言うか俺は自分以外の人間が戦うのはあまり見ないタイプだ

「よっしやー！じゃあ決まりな！」

テンションが上がったマモルは喜々とシュミレーターに入って

いった

さて、俺も準備するか

俺もマモルの後を追いシュミレーターの中に入っていった

.....

シュミレーターに自分のソードストライクガンダムが映る

どうにかして覚醒をものにするんだ！…

3機が出撃準備を完了したというお知らせが画面に現れる

よし！ソードストライクガンダム ユウキでるぜ！

ブリッツガンダムカスタム ミライ出る

ガンダムヘビーアームズカスタム マモル行くぜ!!!

3機のガンプラが射出された

今回のステージは初めてマモルと戦った場所と同じビル群がある

街のようだ

俺は辺りを確認取り敢えずストライクガンダムより高いビルの裏

へと身を隠す

そう言えばミライが出撃する際にブリッツガンダムっ

て言ってたな…

グフカスタム改ではない事に少し不安を覚えつつ俺はレーダーで
周辺を確認する

特に反応が無いが…

何かがおかしい…ヘビーアームズとブリッツガンダムとの交戦
の音すら聞こえない…

まさか!?

刹那、ソードストライクガンダムは何者かの攻撃により機体にダ
メージが入った

間違いない…！何かが近くにいる！

ユウキは辺りを見回すが何もいない

だがさつきは確実に何かに攻撃された

「見つけたぜ！」

マモルは声を上げこちらに一齐射撃をしてくる

ユウキは間髪それを避けるが再び何かが近づいて来る感覚がした

そこか！

何かしらの感覚を覚えたユウキは何もないハズの方へビームラ
イフルで射撃を行う

キーン！ 本来何も無い場所に射撃が当たる音がした

何かしら効果が切れたのだろう

ユウキのソードストライクガンダムの前に黒色をしたガンダムが
姿を現す

「これが僕の新しい機体 ブリッツガンダムカスタムだ！」

く機体説明く

頭 ブリッツガンダム

胴 ブリッツガンダム

腕 ブリッツガンダム

脚 ガンダムエピオン

バックパック デステイニーガンダム

姿を消せるのか!?!そんなのチートだろ!?!

この一言を言い終わった時ふと頭にカマセが過ぎった

確かに自分が見たことない事されたらチート共言いたくなるな…
「チートなんかじゃない…ブリッツガンダムはEXアクションだ
！」

ミライはそう言い切るとアロンダイトを持ちソードストライクガンダムに距離を詰める

「おい！俺を無視するなよ!!」

蚊帳の外になっていたマモルのヘビーアームズカスタムは大型対艦刀を持ち2機に迫った

これはやばい… 右にはヘビーアームズ、左にはブリッツガンダム…！

危険を察したユウキはソードストライクガンダムはスラスタアの許す限り上昇させ退避させた

「逃がさないぜ!!」

マモルのヘビーアームズは退避しようとするソードストライクガンダムに対しガトリングで牽制射撃をする

危ねえ！

ユウキは回避を取ろうとするもビルドストライクのバックパックに攻撃を許してしまう

体勢を崩したソードストライクは近くの繁華街へと突っ込んだ

ソードストライクを撃ち落としたマモルは追い討ちをかけようとヘビーアームズを動かすも目の前にブリッツガンダムが立ちはだかる

「お手並み拝見といかせてもらおう…！」

そう言うブリッツガンダムはヘビーアームズに射撃を行う

「そう来なくっちゃ！」

マモルは盾で射撃を防いだ後バックパックのガトリングと肩のレールキャノンでブリッツガンダムを狙い一斉射撃をした

「よっしゃあー！」

マモルは衝撃によって起こった粉塵で姿が見えないブリッツガンダムに対しガッツポーズをする

だがこれで終わるミライではない

衝撃によって起こった粉塵の中からブリッツガンダムがビームサーベルを片手にヘビーアームズに切りかかる

少し反応が遅れたマモルは大型対艦刀で対抗しようとするもミライの方が速い

「なにい!?!」

マモルのヘビーアームズは左腕がパーツアウトしてしまう

「これで盾を失ったな!」

「盾が無くなっちゃって!!!」

ヘビーアームズは右肩のレールキャノンと右腕だけでビームライフルを放ちでブリッツガンダムに対し牽制射撃を行うが

「遅い」

もはやミライの決め台詞となりつつある一言を放ち

ヘビーアームズの射撃を華麗に避けてみせた

「EXアクション…!」

そう呟くとブリッツガンダムは謎のオーラを纏う

「なんだそれ!?!」

マモルはミライの期待の変化に驚きつつも右腕でビームライフルを放ち牽制仕様とするが… おかしい

ビームライフルが放たれた様子はないのだ

不思議に思ったマモルは右腕を見る

ない…

ヘビーアームズカスタムから右腕が消えていた

「ど、どういう事だよ!?!」

マモルは焦った

先ほどまで存在していた右腕が唐突に亡くなっていたのだ

「探し物はこれかい」

ミライはそう言うのとマモルに対しヘビーアームズの右腕を投げつける

「いつの間に…!」

マモルはそう呟いた。無理もない気がつけば右腕が無かったのだ
「君が知りたいであろう答えはこれだ」

ブリッツガンダムが再び謎のオーラに包まれたと同時に

物凄い速さでヘビーアームズに距離を詰めビームサーベルでヘビーアームズを真つ二つに切りつけた

「デステイニーガンダム…！ 光の翼か…！」

ミライのブリッツガンダムにはデステイニーガンダムのバックパックが付いている

これによりブリッツガンダムで光の翼が使用可能になったのだ

ヘビーアームズのコックピットにはGAME OVERの文字

「ああああ!!!!悔しい!!!!」

マモルは声を上げそう叫んだ

.....

「さて、残るはソードストライクガンダムだけだ…」

そうミライは呟くと先ほどソードストライクが突っ込んだ繁華街へとむかった

俺を迎えにいく必要は無いぜ！

「何!？」

ユウキのソードストライクはブリッツガンダムの頭の遙か上から大型対艦刀を持ち、切りかかった

だがブリッツガンダムはそれを普通に避ける

チツ！ 避けられたか！

ユウキは舌打ちをしながら大型対艦刀を持ち直し再びミライに切りかかる

「面白いッ！」

ブリッツガンダムはアロンダイトを持ちソードストライクにむかった

カァン！ キーン！

アロンダイトと大型対艦刀のぶつかり合う音がステージの街に響き合う

1歩も引く気のない両者だがここでユウキが呟く

足元に気をつけな！

そう呟くとソードストライクを一旦退かせた

その瞬間ブリッツガンダム足元の足元が爆発する

「!?ッ」

ユウキはアロンダイトと大型対艦刀のぶつかり会いをしている間にビルダーズパーツのクラッカーをブリッツガンダム足元に投げているのだ

バランスを崩したブリッツガンダムに対し

ユウキのソードストライクはビルドストライクのバックパツクから大型ビームキャノンミライに向けて放った

行っけええええええ!!!

「くっっっ!!」

大型ビームキャノンをもろに喰らい吹き飛ばされたブリッツガンダムは近くのビル群のビルに叩きつけられた
もらったア!

ソードストライクは大型対艦刀を握りしめブリッツガンダムに向け加速する

「まだだ!... まだ終わりじゃない!...」

ユウキのブリッツガンダムは再びオーラのようなものに包まれる
ブリッツガンダムは再び光の翼を起動させた。

速い!...

叩きつけられたビルから脱出したブリッツガンダムはソードストライクの攻撃を避ける

一旦退くか!...

ユウキはソードストライクを一旦退かせてから再びチャンスを狙う事にした

「離れようなんて... そうはいかせるか!」

ブリッツガンダムの腕からグレイプニールが飛ぶ
うおっ!なんだこれ!!

ブリッツガンダムの腕から放たれたグレイプニールにより一旦離れようとしたソードストライクを捕まえ引き寄せた

っ!... チャンスはまだあるはず!...

.....

「あ！マモル君じゃん！」

ミライに負けシユミレーターから出てきたマモルに声をかけた少女

ミサだ

「なにしてんの？」

ミサはマモルに訪ねた

「今ミライとユウキとシユミレーター使って練習してたんだよ 覚醒を身につけるために」

「んん…！ 言ってくれたら練習相手になるのに…！」

不機嫌そうなミサを見てマモルは少し笑った

そんな2人の隣を黒いパーカーを着た男が通り過ぎシユミレーターの中へと入っていく

フードを被っていて顔が良く見えなかったが

男からは不気味なオーラがあった

……………

デスサイズヘル改 出るぞ……

男のガンプラは交戦中のブリッツガンダムとソードストライクガンダムを目掛け加速する

そんなことなど知らないユウキ達

ソードストライクはグレイプニールを何とか切り

自由の身となった

このままじゃ罅が明かない……

そう思ったユウキは再びビームサーベルを握りブリッツガンダムへ近づく

「楽しそうだな… 俺も混ぜてくれよ…！」

予想外の方向からビームシザーズの一撃が飛んでくる

何!?

ユウキは避けきれずその衝撃で右腕がパーツアウトした

「誰だお前は!？」

突然現れた乱入者にミライは尋ねる

「名乗る程でもねえよ… 面白そうなバトルしてるからよお… 混

せてもらおうと思つてなあ！」

男はそう語るとデスサイズヘルを加速させ一瞬にしてブリッツガンダムの前まで距離を詰めビームシザーズの一撃をブリッツガンダムにぶつけた

「な!？」

あまりの速さに対応が遅れたミライはビームシザーズの一撃に対応出来ず、またもや吹き飛ばされた。

「おいおい、タウンカップで活躍した奴らが集まつてるから来たのにまるで面白く無いぜ……」

ふざけんなああああ!!!

「何……!？」

デスサイズヘルの後ろから猛攻をかけるユウキのソードストライクガンダム

その機体はあのタウンカップの決勝で見せたように赤く光つていた

「覚醒か……おもしろえ……！そう来なくつちやなあ！」

ソードストライクの一撃を受け止めたデスサイズヘルは

そのまま受け流し、ストライククロードの一撃をソードストライクに食らわせた

しかし覚醒したユウキはその攻撃をいとも簡単に避け逆にビームサーベルでの一撃をデスサイズヘルにお見舞いする

覚醒したソードストライクガンダムの一撃を受けデスサイズヘルは仰け反るがその隙を見逃さないユウキは新しく覚えたEXアクション ピアシングスラッシュをデスサイズヘルに喰らわせる

「なるほど……これならリージョンカップも楽しめそうだ……！」

そう言った後、男のデスサイズヘルは姿を消す

恐らく撤退したのだろう

そうだ！ミライは！

ユウキは吹き飛ばされたブリッツガンダムを探す

するとビルの上に動かなくなったブリッツガンダムを見つけた

ユウキとの戦闘で蓄積していたダメージは男のデスサイズヘルの

一撃で完全に上半身と下半身が分離していた

ミライ… 撤退しよう…

「ああ……」

そう語った後2人の機体はステージから姿を消した

……

ミライとユウキがシユミレーターが出てくる

「お疲れ様ー 2人とも」

そこにはミサとマモルがたっており

ミサから劳いの言葉がかけられた

何となく掴めた気がする… 覚醒について…

ユウキはそう呟くと自分の成長と覚醒を身につけるための糸口を

感じた

続く

続く

ガンダムブレイカーズ 第7話 小さな勇者

カドマツさんからの連絡で今日は久々にミサの家の模型屋に来ていた

「ねー！ねー！見てよこの機体！」

ミサが興奮しながら見せてきたアザレアは自分が知っているものと少し変わっていた

ガンダムアザレアの足にはミサイルポッドが付いていたり…

それだけでなく性能的にも弄ったらしい

「エンジンアがいるだけでカスタムできる事が増えるんだね！」

「何となく…カマセ君が環境に拘る理由がわかった気がするよ」
それもそうだろう

カマセがあの時言ったように商店街のアセンブルシステムと企業のアセンブルシステムでは差がある

こちらではPGなどの機体を使えるほどのアセンブルシステムなど用意出来ない

環境が違えば用意できるガンプラの性能もちろん高くなる

だが、別に自分はどんなアセンブルシステムだろうが構わない

別にPGが使いたい訳でもないし…

「それじゃあ早速テストに付き合ってもらおうぞ」

テスト…？カドマツの口から聞いてなかった言葉が出る

「取り敢えずこいつを見てくれ」

カドマツはトランクを開け中のものをだした

「うわあー！なにこれ！？騎士ガンダム？」

ミサが興奮気味に話す

ユウキの目の前にガンプラのような物がある

「今開発中のトイボットだ。主に子供達の遊び相手用のな」

「今はまだ研究段階だがいずれは売り出すつもりだ」

へー遂にトイボットが市販される時代か…

ユウキは微かに時代の進歩を感じた

「という訳で、お前らにはこのトイボットのテストをしてもらいたい」
テスト?…俺達が一緒にこいつと遊ぶってのか?

「バカいえ、ガンプラバトルだよ」

「上手く行けばこの彩渡商店街の3人目のファイターとして戦えるよ
うになる」

なるほど…確かにファイターは多い方がいい

それにロボットがチームの1員のこのチームが勝ち進め

ば話題にもなるって訳か

「物分りがいいじゃないか そういう事だ」

カドマツとユウキが話している中トイボットをキラキラした目で
眺めるミサ

「一緒に頑張ろうね!ロボ太」

ミサのネーミングセンスに思わず苦笑いするユウキ

「えー何その顔!別にいいじゃん!ねーロボ太」

そう言えば、見た所スピーカーは無いけどロボ太は

喋るの?!

ユウキはふと疑問に思ったことをカドマツに尋ねる

「喋れないようにしてある」

キツパリと答えるカドマツ

するとミサが

「えー!会話出来ないの!」

「例えばだ、このトイボットが道路に出て轢かれそうになった時に持
ち主が庇って持ち主が庇ったら困るんだよ」

「だから感情輸入しないようにスピーカーはわざと付けてないの」

言われてみたら納得するが…

しようがない事なんだろう…

.....

俺とミサはロボ太を連れゲームセンターに来た

「こんにちはミサさん ユウキさん」

受付のインフォちゃんだ

「ロボ太さんですね 登録しました」

今でも思うが何を登録してるんだ…

……………

ミサとユウキはそれぞれシュミレーターに入っていく
ソードストライクガンダム ユウキ出るよ！

ガンダムアザレア ミサ行くよ！

騎士ガンダム ロボ太出る

「?!?」

ユウキとミサは謎の声の主に疑問を覚えながら3機は射出された
今回のステージは屋敷の庭のようだ

なあ…？ ロボ太お前喋れるのか…？

ユウキは出撃の際に抱いた疑問をロボ太にぶつける

「んん？… ああどうやらシュミレーターの中では喋れるらしい」

「それに連携が大切なガンプラバトルで喋れないと不便であろう」

ソウデスヨネー しかし…なんていい声してるんだ…

「さあ主殿、それにミサ行こう！」

ロボ太はそう喋った

主殿なんて言われて悪い気はしない

しかしミサはそれに文句があるようだ

「ちよつと！なんでユウキ君は主殿で私だけ呼び捨てなの！」

ミサは声を荒らげる

「私はカドマツのインプットしたデータに従っているだけだ」

ロボ太そう言いきる

「カドマツ~~~~!!」

しかしそんな悠長な事を言ってる場合ではない

CPUはこちらを歓迎しないといわんばかりに攻撃を仕掛けてくる

お手並み拝見だな…

ユウキのその一言と共にロボ太は動き始める

ハッキリ言って強い

小さいからかそこら辺のファイターよりも俊敏な動きができる

すげえ…

ユウキはロボ太の動きに感激した

しかしユウキやミサもロボ太に遅れを取らないように敵CPUの機体をどンドン倒していく

今回はアストレイ系統の機体などが多いようだ

ユウキ、ミサ、ロボ太のコックピットに警報音が鳴る

乱入だ

3機の前に現れたのはジェスタ3機だが1機だけ少し弄ってあるようだ

.....

ジェスタ ユウジ仕様

頭 ジェスタ

胴 ジェスタ

腕 ペイルライダー

脚 ジェスタ・キャノン

バックパック フルアーマーガンダム

シールド シールドGPO1

ビームサーベルと狙撃用ライフルを主に使うが

オプシヨン装備が充実している

ビルダースパーツで両肩に大型ビームキャノンが付いている

.....

「行くぞー！皆ー！」

ジェスタ3機のリーダーであろう少年が声を上げる

「ユージ！気を抜くなよ！」

「前のデスサイズヘルの時のようにはさせない！」

恐らくチームメイトであろう残りの2人もリーダーのユージと呼ばれた少年に声をかける

「ユウキ君！こっちも負けてられないね！」

「主殿ー！行こう！」

こちらもチームメイトの2人が声をかけてくる

「ん？お前… ユウキって今呼ばれたか？」

「聞いた事あるぞ！まさかお前あのユウキか!？」

ユージはユウキの名前に反応する

恐らくタウンカップで名前が広がったのだろう

無理もない数少ない覚醒を使えるファイターなのだから

「丁度いい… あのデスサイズヘルに負けてイライラしてたんだ！お前達をここで倒して俺達ジエスタ同好会の名を広げてやるぜ！」

そう言うところ機のジエスタは散開しユウキ達の機体を囲み出す

上等だ…！行こうぜ皆！

「うん！」

「了解した！」

彩渡商店街ガンプラチームも負けじと声を上げ

ジエスタに敵対心を向けた

「お前の相手は俺だア！」

ユージのジエスタがソードストライクに向けて大型ビームキャノンを放ちながら向かってくる

だがユウキはそれを避け突っ込んでくるジエスタに対してビームサーベルで切りかかった

「うおっ！危ねえなあ！」

ユージは間髪それをシールドで受け止め

お返しといわんばかりに頭部からバルカンを打ち尽くす

これにはユウキも想定外だったが大したダメージにはならずビームサーベルを投げ捨て得意のアーマーシユナイダーの攻撃に切り替えた。

「そうはさせねえよ！これでも喰らいなあ！」

ユージのジエスタは腕を前に出すとビームキャノンを出した

この程度か！

ユウキはビームキャノンをシールドで防ぎビームライフルで応戦する

「ここから本番だぜ！」

ソードストライクから放たれる攻撃をランドセルに装備されたアームでジエスタは2枚のシールドを展開し防ぎきった

何だあれ!?

恐らくフルアーマーガンダムのオプション装備だろう

しかしユージのジエスタの驚くべき攻撃はこれだけではない

驚いて硬直したソードストライクを目掛けジエスタは背中のレストランに設置したミサイルポッドと大型のビーム兵器でソードストライクに対し打ち放す

うわあああああ!!!

ジエスタの攻撃をモロに喰らったソードストライクは吹き飛ばされ屋敷の窓へと叩きつけられた

「ユウキ君!」

「主殿!」

チームメイトからの声が聞こえるがそれどころではない
こいつ… なかなか強い…!

一方、ミサもジエスタと交戦していた

こちらのジエスタはユージ程弄ってある訳でもなく普通のジエスタだ

「こっちだよ!」

アザレアはジエスタの後ろからビームサーベルの一撃を御見舞する

「くっ!」

これはジエスタには中々効いたようで動きが鈍り出した

「そこお!」

ミサは鈍り出したジエスタの隙をつき

背中ジャイアントバズを打ち尽くし

これを喰らった少年のコックピットにはGAMEOVERの文字が現れた

「やったあ!」

歡喜するミサのアザレア

しかしそれをユージは狙撃用ライフルで狙い撃つ

ユージのジェスタが引き金を引くその瞬間

何かが狙撃用ライフルを吹き飛ばした

狙撃を邪魔したのはソードストライク

左肩に装備されたビームブーメランで間髪アザレアへの射撃を阻止した

まだ終わりじゃないぜ！

ユウキはそう呟くとバックパックを変形させジェスタを狙う

今度はこっちのターンだ！

ソードストライクのバックパックから大型ビームキャノンは放たれる

今まで幾度となく敵をピンチにしてきたこの技

しかしジェスタは再びシールドを展開し防ぎきってしまった。

チツ！なら近距離で行くしかねえ！

ソードストライクは途中で大型ビームキャノンによる射撃をやめ肩の大型対艦刀を持ち、ユージのジェスタに向け加速した

こちらはジェスタとロボ太の交戦中だ

「なんだこいつ！攻撃が当たらねえ！」

ジェスタの少年は幾度となくロボ太に対し射撃を試みるも体が小さいロボ太は簡単にそれを避けて見せた

「食らうがいいー！」

ロボ太は背中の槍を持ち、ジェスタに対し距離を詰め

その槍をジェスタのコックピット部分に刺しこんだ

これにはジェスタも耐えきれずこれによりユージ以外のジェスタはGAMEOVERとなった

屋敷の庭ではユージのジェスタのビームサーベルとソードストライクの大型対艦刀のぶつかり合う音が響き合う

ユウキはユージのジェスタの隙を探しながら大型対艦刀を降るも

中々隙を見せない

そこへミサのアザレアによる援護射撃がジエスタを襲った

「何!?!他の2人はやられたのかよ!?!」

ユージはアザレアからの射撃と味方が全滅したことに驚き一瞬動きが鈍る

ユウキはその隙を見逃さない

今だ! EXアクション! !

ソードストライクはEXアクション クロススラッシュユをジエスタに叩き込む

「させるかア!」

ユージは再び2つのシールドを展開しようとする... が

「主殿!」

ユージのジエスタのバックパックにロボ太が投げたであろう騎士ガンダムの槍が刺さる

この一撃によりバックパックは損傷

シールドを展開することがままならなくなった

ミサア!

「分かってる!」

ジエスタに対しクロススラッシュユを叩きこんだ後、

その後ろからミサのアザレアによるクロススラッシュユが再びジエスタに叩き込まれた

「そんな!... そんなああああ!!!」

ユージのジエスタはクロススラッシュユを2度叩き込まれ限界を迎えたのか爆発した

ユージのコックピットにはGAME OVERの文字が

彩渡商店街ガンプラチームはチームの力でジエスタ同好会を破つたのだ

.....

「何?ガンプラバトルの時に喋った?」

カドマツはユウキとミサの報告に驚いた

「まさかガンプラバトル中には喋るようになるなんてな...」

どうすんの？

「弄って会話出来ないようにする」

「そんなの可哀想だよお！」

ミサは泣きそうな声でカドマツに伝える

するとロボ太の目の部分に文字が浮かび上がる

「何何…？自分は主殿やミサに危害を加えるのは望まない

危害を加えるようなシステムは排除すべき…」

「馬鹿野郎！こんなこと言われてやれる奴がいるか！」

今度はカドマツが泣きそうな声でロボ太に伝えた

自分が感情輸入してんじゃないか…

ユウキはそう呟くとロボ太を見た

よろしくなロボ太 小さな勇者…

続く

ガンダムブレイカーズ 第8話 覚醒への糸口

今日はユウキがひとりで暮らすアパートに珍しく来客があった。

「おーい！元気にやってるかー！」

玄関から聞こえてくる声の主はユウキの兄ユウトだ

ユウキは実は三人兄弟の真ん中

兄のユウト、真ん中のユウキ、一番下のユウシがいる

兄のユウトとは歳が三つ離れており

ユウトも家を出て一人暮らしをしながら大学に通っていた。

「聞いたぜユウキ、お前ガンプラバトル始めたんだってな」

「しかもリージョンカップ出場なんだろう？すげえじゃねえか！」

ユウキがリージョンカップに出場することはユウキの地元では広まっていた

恐らく兄は母親から聞いたのだろう

何とかリージョンカップまで行けたよ

まだまだ始めたばかりだし・・・そこまで強くないけど・・・

ユウキはそう謙遜するが初心者にしてはこれでも上手くやれている方だ

それにユウキには覚醒ができるという素質がある

そう言えば兄貴は何しに来たんだ？

ユウキは兄に尋ねた

来るなど聞いていなかったし疑問に思っていた。

「リージョンカップに出場するお前とこれがやりたくてな」

ユウトはそう言うのと背負ってきたリュックの中からガンプラを取り出す

ユウトがガンダムを昔から好きだったのはユウキも知っていた

しかしガンプラバトルまでやっていたのは初耳だ

ユウキはユウトが取り出した機体をまじまじと見つめる

インパルスガンダム・・・？けどただのインパルスではない

.....
インパルスカスタム ユウト仕様

頭 インパルスガンダム

胴 ガンダムサンドロックEW版

腕 ビルドストライクガンダム

脚 ガンダムダブルエックスガンダム

バックパック ガンダムダブルエックス

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド G P O I

背中にはレーザー対艦刀が背負っており

ツインソードの武器としての運用ができるようになってる

青が好きなユウトらしく胴と腕は青を基調としている

.....

早速ユウキとユウトはゲームセンターのシミュレーターの方へと向かった

「お前とこうして2人でゲーセンに来るのは久々だな」

ユウトの言う通り、昔はユウキと2人でよくゲーセンで遊んでいたしかしユウトの進学の関係上2人で遊ぶ時間は年々減っていた

ユウトが家を出た後も小学生のユウシと2人で来ることはあったがユウト程ではなかった

それだけユウキとユウトは仲が良かったのだ

「さて、久々に行くぞユウキ！手加減はしないからな！」

望むところだぜ！兄貴！

ユウキは再び兄と遊べるだけでも嬉しかった

絶対に楽しもう・・・ユウキはそう誓いながら目の前の画面へと視線を移す

インパルスガンダム ユウト行くぞええええ!!!

ランチャーストライク ユウキ！ 出るよ！

出撃の掛け声と共に2機は射出する

今回のステージは見慣れたステージビル群が立ち並ぶ街だ

気づいただろうがユウキの機体は幾つか変わっている所があった
まずソードストライクだったストライクガンダムは腕を付け替え
ランチャーストライクへと変わっていた。

これによりバックパックもビルドストライクからランチャースト
ライクに替えた

これにより大型ビームキャノンは使えなくなったが、ランチャー
ストライクのバックパックに付属している大型のビームキャノンが使
用可能になった。

.....

ランチャーストライクガンダム ユウキ仕様

頭 ストライクガンダム

胴 ストライクガンダム

腕 ランチャーストライク

脚 ストライクガンダム

バックパック ランチャーストライク

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド 対ビームシールド(ストライク)

ビルダーズパーツとして180mmキャノンとメガ粒子砲は付属
している

今まで近距離攻撃がメインだったユウキのストライクは遠距離攻
撃に重点を置いたようだ

.....

パーツの調子もいい、実戦で使うのは今日が初めてだ

けど... 絶対に勝つ!

ユウキはそう呟くとユウトのインパルスを探しに機体を動かした。

「安心しろ！俺は逃げも隠れもしないぜ！」

ユウトはランチャーストライクの背後からビームサーベルを片手
に切りかかった

...ッ!

ユウキは少し驚くもシールドでその攻撃を防ぐ

「なんだよ！奇襲失敗か!?!」

ユウトはそう語ると背中の上レーザー対艦刀へと手を伸ばしレーザー対艦刀を二刀流にしてランチャーストライクに再び奇襲をかける

ランチャーストライクはシールドでそれを防ぐも相手が二刀流では守りきれない事を確信し頭部からバルカンを放ちながら後ろへと下がった。

「うお!?なるほどな... おもしれえ...!」

インパルスは想定外のバルカンに少し怯むも再びレーザー対艦刀に手を伸ばし二刀流の構えを見せる

そっちが二刀流で来るならこっちも...!

ランチャーストライクはビームサーベルを捨て、得意のアーマージュナイダーへの戦法に替えた

ランチャーストライクとインパルスは互いに加速し距離を詰めアーマージュナイダーと二刀流のレーザー対艦刀をぶつけ合う

このやりとりは5分以上続き互いに疲れが見え始めた

「そこだあ!EXアクション!」

ユウトは長期のぶつけ合いで少し動きの鈍ったランチャーストライクの間を見逃さない

インパルスガンダムはEXアクション ブラストタツクルをランチャーストライクに御見舞した

何!? タツクル!?

想定外の一撃を喰らったランチャーストライクは吹き飛ばされビュルに叩きつけられた。

「こっからだぜ!俺のインパルスの本気は!」

ユウトはそう声を上げるとダブルエックスのバックパックを変形させ始める

まさか...! ユウキの頭に最悪のビジョンが浮かぶ

「バーストアクション...! ツインサテライトキャノン!!!」

変形したダブルエックスのバックパックの銃口から2つのビームが放たれる

EXアクションを使ってくる相手は今までも遭遇した事はあつた

がバーストアクションを使ってくるなんて聞いたことが無い

うわあああああ!!

ビルに叩きつけられ身動きできないランチャーストライクはユウトのインパルスから解き放たれたツインサテライトキャノンを喰らってしまった。

ユウキのコックピットはランチャーストライクの残りの体力ゲージが数少ない事を表すように赤く点滅しだした

同じ攻撃を喰らえばGAMEOVERは避けられない…

とは言ってもここからどうにか出来るとはユウキには思えない

ユウキの心の中で戦闘中に初めての諦めが生まれ始めかけていた

考えろ…！どうやったら兄貴を倒せる…！

しかしそんなことなど知らないユウトは再びレーザー対艦刀を握りしめユウキのランチャーストライクを目掛け加速する

ユウキに向かいまっすぐ向かってくるインパルスに対しユウキは今のインパルスは隙だらけな事に気づいた

頼む…！当たってくれええ!!

ランチャーストライクは立ち上がり向かってくるインパルスに対して高圧縮状態のプラズマエネルギーを320mm超高インパルス砲で射出する

「なんだとお!？」

加速していたこともありシールドを展開していなかったインパルスはこれを直接喰らってしまい先ほどのランチャーストライクのように吹き飛ばされた

…!!今なら使える気がする…！覚醒を！

土壇場からの逆転にアドレナリンが出たのかユウキは自分が今なら覚醒が使える気がしてたまらなかった

うおおおおお!!!

ユウキのランチャーストライクは赤く光り出す

覚醒だ

吹き飛ばされたインパルスを追い、急加速するランチャーストライク

インパルスに追いついたランチャーストライクはビームサーベルで下にインパルスを叩きつけた

「なんだあの早さ……アレが覚醒か……！」

一瞬の出来事に驚くユウト

プラズマエネルギーを喰らったインパルスは吹き飛ばされたが、覚醒したユウキのランチャーストライクによって吹き飛ばされている最中に追いつかれ地面に叩きつけられた。

EXアクション……！

ユウキの機体はビームサーベルをインパルス目掛け叩きつける

これこそユウキが特訓の末に使用制限を解除した大剣用EXアクション デッドエンドバスター

ソードストライクで大型対艦刀を使っていた末に何とか使用可能まで持ち込み回数を重ね制限を解除したのだ

とても重い一撃がインパルスを目掛け衝撃を起こす

デッドエンドバスターを喰らったユウトのインパルスは弾け飛びユウトのコックピットにはGAMEOVERの文字が現れた

ツインサテライトキャノンを喰らいピンチに陥った所からの逆転、この経験はユウキを更に成長させただろう

「負けちまったか…… でも、久々にお前と遊べて楽しかったぜ！またやろうな！」

兄貴…… ああ、約束だぞ！

こうしてユウキとユウトの兄弟対決はユウキの勝利で幕を下ろした

……

「うわあああああ!!」

デスサイズヘルの一撃により少年のギラ・ドーガは爆発する

「おいおい…… つまんねえな…… もっと楽しませろよ……！」

男はGAMEOVERになった少年のギラ・ドーガを踏みつけそう語る

「レイジ…… やばいって！もう諦めよう！」

赤色のギラ・ドーガに乗る少年はレイジと呼ばれた黒色のギラ・

ドーガ乗りの少年に話しかける

「諦められるかよ……！こいつは俺達が倒すんだ！」

そう語ったレイジと呼ばれた少年のギラ・ドーガはデッドエンドGを片手にデスサイズヘルに向かう

「ほう……中々骨があんじゃねえか……たのしませてくれよ！」

デスサイズヘルはビームシザースでデッドエンドGを受け流す

レイジのギラ・ドーガは普通と違うカスタムだ

.....

ギラ・ドーガ レイジ仕様

頭 ギラ・ドーガ

胴 ドライセン

腕 ヤクト・ドーガ

脚 リックディアス

バックパック ガンダムヘビーアームズ

武器 デッドエンドG

シールド ABCマント

カラー黒で統一しておりモノアイが赤い

.....

「EXアクション！」

レイジはデスサイズヘルに向けEXアクション トルネードアックスを放つ

「こんなんじゃ俺がやられると思ってるなんて……まだまだ甘いなあ！」

男のデスサイズヘルはトルネードアックスを簡単に避け、レイジのギラ・ドーガに対し腕のダブルガトリングガン放つ

「うわああああ!!!」

それをまともに喰らったレイジのギラ・ドーガはかなりのダメージを喰らい体力を持っていかれる

もうおしまいだ……！レイジはそう思った

「なんだよ……骨のある奴かと思ったが大した事ねえじゃねえか……つまんねえ……じゃあな……」

男はそう語るとデスサイズヘル事姿を消した

「逃げやがった…！ クソ…！」

レイジはそう呟くと仲間の赤いギラ・ドーガと共に撤退した

……………

「リージョンカップは楽しませて貰うぜ… 特に覚醒使いのストライク… 特にお前にはな…」

男はそう語ると自分の部屋にある新聞に対し刃物を刺した

記事には「寂れた商店街 ガンプラチームで復興」という文字と共にミサとユウキの写真が写っていた

続く

ガンダムブレイカーズ 第9話 死神

〜高校の昼休み時間〜

クラスのモブA「なあ？聞いたか？最近ゲーセンのガンプラシユミレーターに現れる奴の話」

クラスのモブB「あー！知ってる知ってる、いきなり現れてさ…目をつけられた奴はガンプラめちやくちやに壊されるらしいぜ…！」

クラスのモブC「俺…恐ろしくて…暫く出来てねえよ…折角ジェガン弄ったのにさ…」

「なあ？聞いたか今のあいつらの会話？」

マモルは席に座っているユウキ ミサ ミライに話しかける

「あのデスサイズヘルの事だろ 僕とユウキは実際に遭遇したから恐ろしさは十分に理解している」

ミライはそう言うはずり落ちた眼鏡をクイツと上げる

「そんなに強いのか？ユウキ君？」

まだ遭遇していないミサはユウキに尋ねる

ああ… あいつは恐ろしい強さだ…

ユウキもあのデスサイズヘルには恐怖を感じた

なんせ、あれだけ苦戦したミライのブリッツガンダムをいとも容易くGAMEOVER寸前に持っていったのだ

当然今まで戦った相手とはレベルが違う

「あいつは撤退する前にリージョンカップは楽しめそうだと言っていた… つまりミサとユウキはどの道戦うだろう」

ユウキは冷静にそう語る

言ってることは間違いではない

あの強さだ嫌でも奴とはエンカウントするだろう

それに奴は俺に対し興味を示していた

俺を狙わない理由はない

「でも、くよくよ考えてる暇はないよ！リージョンカップは来週なん

だし……その……デスサイズヘル使いの人に勝つには練習を重ねるしかないよ！」

ミサは不安げな顔をしたユウキに対しそう言った

ミサの言う通りだ

ここで何を言っても変わりはない

ミサ！放課後……カドマツさんのところへ行こう！色々調整してもらいに！

「分かった！カドマツさんには私が連絡しておくね！」

ミサはそう答えた

とりあえずこの一週間は調整と練習するしかない……

「なら俺はシュミレーターに練習に行こうかな！俺だって負けてばかりじゃつまんねえ！ミライも来るか？」

マモルはミライに対し尋ねる

「僕も次の大会に向け練習したい所だが生憎今日は塾でね……誘ってくれるのは有難いがまたの機会にしてくれ」

ミライはそう答えるとマモルは少し悲しげな顔をした

「塾ならしょうがねえよ……なら！また今度誘うからそんな時な！」

マモルは悲しげな顔から笑顔に戻りミライの返答に答えた

「ガン普拉バトルもいいが……君達勉強の方は大丈夫なのかい……再来週はテストだぞ……」

「ええ!? そうだっけ!? もうそんな時期なのか!？」

マモルは驚き、大声を上げる

そう言えばテストがあつたか……ここんどこガン普拉バトルの事しか頭になかつた……

ミサは大丈夫なのか？

「ええ!? わ、私……？ た、多分……大丈夫だと思う……」

そう言うミサは明後日の方向を向きながら音のならない口笛を吹き始めた

本当に大丈夫かよ……

……

マモルは一人でゲーセンへと足を運んだ

「こんにちは マモルさん」

受付のインフォちゃんがマモルへと挨拶をする

「こんにちはーインフォちゃんー」

マモルも元気な声で挨拶を返した

インフォちゃんへの挨拶を済ましたマモルはシュミレーターへと向かい、何も躊躇いも無くシュミレーターへと入っていく

マモルは鞆から自分のガンプラ ヘビーアームズ改を取り出す

マモルのヘビーアームズはミライ ユウキと戦った時とは少しパーツが変わっており若干の変化があった

.....

ガンダムヘビーアームズ改 マモル仕様

頭 ヘビーアームズ

胴 サンドロツク

腕 デュエルガンダムアサルトシユラウド

脚 フルアーマーガンダム

バックパック ヘビーアームズ

武器 大型対艦刀 ガトリングガン

前回の時と比べ、ヘビーアームズの腕だったものがデュエルガンダムアサルトシユラウドへと変わり、ビームライフルではなくガトリングガンに変わっている。

これによりアーミーナイフは使えなくなったがデュエルガンダムの肩から更にガトリング攻撃ができるようになった。

相変わらずカラーはアーミーカラーだ。

自然の多いところではいいカモフラージュになるだろう

.....

マモルのヘビーアームズ改は順調に、次々と現れる敵CPUをなぎ倒していく。

ザクの軍団に囲まれた際はバックパックのガトリングを駆使し確実に撃墜するなど、武装の扱いは進歩したと言える。

ヘビーアームズ改はどんどん進みそこでおそらく他のプレイヤーであろう反応を4機分捉えた

「お前だけはあー！」

黒いギラ・ドーガカスタムがデッドエンドGを片手にデスサイズヘルに対し近づく

「ふん…！」

デスサイズヘルを操る男はそれを華麗に避けながら

弄ぶようにビームシザーズで応戦する

「レイジ！俺たちに任せろ！」

レイジのギラ・ドーガの攻撃を避けるデスサイズヘルの背後に赤と青のギラ・ドーガカスタムがそれぞれデッドエンドGを持ち待ち構えていた

「どうやら3機とも色が違うだけでカスタム内容と装備は同じらしい」

「喰らええ!!！」

赤いギラ・ドーガはデスサイズヘルの背後から奇襲をかけるが攻撃を読んでいたかのようにビームシザーズでデッドエンドGの一撃を受け流す

「安直なんだよ…！」

そのままデスサイズヘルは赤いギラ・ドーガに蹴りを放ち、その後ろに待機していた青のギラ・ドーガ事吹き飛ばす

「てめえ！2人に何しやがる！」

レイジのギラ・ドーガは加速し仲間蹴りを放ったデスサイズヘルに向かい加速する

「EXアクション…！」

加速したレイジのギラ・ドーガはEXアクション ブラストタックルをデスサイズヘルに対し放つ

これには男のデスサイズヘルも驚き対応が遅れ、ブラストタックルをまともに喰らい軽く吹き飛ばすがすぐ体制を立て直し、今度はギラ・ドーガに対し加速し距離を一気に詰める

急加速したデスサイズヘルは腕のストライククローをレイジのギリ・ドーガに突き刺す

ストライククローは確実にコックピットを突き刺しレイジの機体に大ダメージを与えた。

「… ツー・クソ…！！」

デスサイズヘルはコックピットに突き刺したストライククローを抜き、先ほどと同じように蹴りを放つ

蹴りを喰らったレイジのギリ・ドーガは後方へと吹き飛ばされそのままGAMEOVERとなった

「クソ！負けたのかよ… アイツに…！」

レイジは自分のコックピットにGAMEOVERの文字が出たのを確認すると悔しがり、自分の脚を強く叩いた

「残ったのは… お前らか…！」

「あのレイジがやられるなんて…！」

「俺たちじゃ… 適わねえ…！」

そう言うのと残りの2機はステージから姿を消した

「なんて強さだ… アレが…！」

マモルは遠くから4機の戦いを見ていた

「ん…？ 丁度いい所に…！」

男は遠くから戦いを見つめていたマモルのヘビーアームズ改を見つけるとビームシザーズを片手に持ちヘビーアームズ改に向け急速を始めた

「まさか…！ こっちに向かって…！」

こちらに加速するのを確認したマモルは右手に装備したガトリングガンを握りしめ臨戦態勢に入る

相手の強さは今確認した…

今出来ることは奴の隙を見つけユウキ達に報告すること…

マモルはそんなことを考えながらヘビーアームズ改を動かす。

先に攻撃を仕掛けたのはマモルだ

ヘビーアームズ改はバックパックのガトリングを抱え加速して向かってくるデスサイズヘルに向けてうち放つ

うち放たれた銃弾は真っ直ぐ弾道を描きデスサイズヘルに向け飛んでいく

後は当たれば・・・！

そんなマモルの希望を壊すかのようにデスサイズヘルは上昇する
スラストターの許す限り上昇したデスサイズヘルはビームシザースを両手に持ちヘビーアームズ改へ向け振り下ろす

まずい・・・！そう思ったマモルは抱えていたガトリングから手を離し大型対艦刀へと持ち替えた。

何とか間に合ったマモルはビームシザースによる重い一撃を何とか防ぐが、あまりにも重い衝撃だった反動で大型対艦刀はヘビーアームズ改の腕から弾かれる

それを見逃さない男はビームシザースで再び切りかかる

しかしヘビーアームズ改はそれを手で受け止める。

呆気にとられた男からマモルはビームシザースを奪い取り明後日の方向へとぶん投げた

「コイツ・・・何をやる気だ・・・」

男にとって疑問でしかない動きをするヘビーアームズ改

次にマモルが取った行動はヘビーアームズ改でデスサイズヘルを離さないようにつかむ事だった。

「何しやがる・・・！離れろ！この野郎・・・！」

男のデスサイズヘルは暴れるがヘビーアームズ改は離す気などさらさら無い。

デスサイズヘルを掴む力を強めた瞬間、マモルのヘビーアームズ改の様子がおかしくなる。

「まさか・・・ お前・・・！」

「そのまさかだ！お前も道連れだああ!!!」

男はヘビーアームズ改が何をしようとしているかようやく理解した

マモルのしようした事・・・それは初めてユウキと戦った時同じ・・・
サンドロツクを装備した事で使えるようになった 自爆
だ

ドツカアアアアアアアン

ステージに物凄い爆音が響く

衝撃により爆風が起き粉塵のようなものが舞う

死神と呼ばれた男のコックピットは赤く点滅する

あれだけの一撃を喰らったが即死を紛れたのだ

しかし、もはや破損寸前

マモルはあのデスサイズヘルを追い詰めた

一方のマモルの機体も即死回避でGAMEOVERを回避したと
は言え破損寸前だ

煙が舞い、互いの姿が見えない

それでもマモルはガトリングガンを握りしめ辺りに乱射する

マモルは最後にこの一撃が当たり撃墜することに賭けたのだ

しかしその賭けは外れた

舞い上がる煙の中からデスサイズヘルが急加速しヘビーアームズ
改に迫る

「この俺をここまで追い詰めた事は褒めてやろう・・・」

「だが・・・俺を倒すには少し甘かったな・・・！」

デスサイズヘルは大型対艦刀を片手に携え、ヘビーアームズ改を狙
い迫る

「EXアクション・・・」

男は低い声でEXアクションを放つことを宣言する

デスサイズヘルは大型対艦刀を持ちEXアクション ホイールス

トライクをヘビーアームズ改目掛け叩きつける

デスサイズヘルは回転しながらヘビーアームズ改に向けて大剣の
重い一撃を喰らわせた

マモルのコックピットにはGAMEOVERの文字

マモルはあと1歩の所で黒パーカーの男に敗れた

「まけちゃったか…」

マモルはそう呟くと自分のヘビーアームズ改を見つめる

「ありがとうヘビーアームズ改…」

マモルは少し笑いながらデスサイズヘルと善戦したヘビーアームズ改のガンプラに労いの声をかけた

.....

黒パーカーを着た男は自分の机にデスサイズヘルを置き刃物が刺さった新聞を見た

「もう少しで俺も… “アレ” が使える」

黒パーカーの男はそう呟くとベッドで横になりそのまま眠りについた

.....

ユウキはミサの家の模型屋から出て帰路についた

その際見覚えのある女性とすれ違う

「ん…？もしかして… ユウキ…？ ユウキじゃない！」

ユウキは振り返り声の主を確認すると

ゲッ！

と、驚きの声を上げた

目の前には四つ歳上の親戚 レナの姿があった

どうしてレナ姉がここに…

ユウキはそう小声で呟く

レナはユウキ達の母親の兄妹の子供だ

兄のユウトとは同じ歳

ユウキは幼い頃からレナ姉と呼んでいた

男勝りな性格をしており、ユウキとユウトが喧嘩した際にはお互いにゲンコツを喰らわせて黙らせるなどしてユウキは若干レナに対して怯えていた。

「どうしてここにってちょっと用事があったね」

「それよりどうしてユウキもここに？」

ユウキは自分が進学の為に家を出て近くのアパートで一人暮らし

をしている事を話した。

「ふーん、アンタも大変ね」

「そう言えば見たわよ アンタ、ガン普拉バトルやってるんでしょ」

何故だか一人暮らししている事は知らないのにガン普拉バトルをしている事は知っているレナ姉

「ネットニュースで見たのよ ほらこれ」

レナ姉はそう言うのとユウキにネットニュースの記事を見せた。

記事の見出しには

「寂れた商店街 ガンプラチームで再起を図る」

見出しと共にユウキとミサが写っていた

えーとなになに…

百貨店タイムズユニバースの登場により客足を取られシャッター街と化していく地元 彩渡商店街でガンプラチームが結成された。

これには商店街の宣伝も兼ねておりガンプラチームを使った復興はこれが初

ここ数年は一次予選止まりだった彩渡商店街ガンプラチーム。今年から新たにチームメイトが増え快進撃を重ね、何と今回タウンカップを優勝した。

こうしてリージョンカップ参加への切符を掴んだ彩渡商店街はどこまで進んでいくのか今から楽しみでならない

筆者 タグチ マサノブ

この記事の下には最近蔓延するウイルスなどのニュースの見出しがあった。

「これ、アンタでしょ。まさかあのユウキが記事になるほど成長するとはねー」

レナ姉はそう語るとユウキを見つめる

え… 何怖い…

こつちを見てくるレナ姉に恐怖を感じるユウキ

そうだ… ユウキはふと疑問に思ったことをレナ姉に尋ねる

レナ姉もここらへんに住んでるの？

「え？アタシ？…ここから少し離れたところに住んでるわ」

「それ聞いてどうするわけ？」

べ、別に・・・

「ふーん まあいいわ」

そう言うのとレナ姉は何かを紙に書きユウキに渡した

「これ、私の電話番号 なにか困ったことがあったら電話しなさい」

ありがとうレナ姉 そう言えばレナ姉はガン普拉バトルやってないの？

「私？ やってるけど・・・ 言っとくけどまあまあ強いわよ」

「まあ今度時間があったら見せてあげるわ私の機体、それじゃあね」

そう言うのとレナ姉は去っていった

ぐうう・・・ ユウキの腹が鳴る

晩御飯どうしよう・・・ そう思ったユウキはレナ姉に晩御飯ご馳走になろう、そう思い早速電話をかけた

この後めちやくちや怒られたがご飯はご馳走してくれたレナ姉だった

続く

ガンダムブレイカーズ 第10話 パーフェクト
な存在

あのデスサイズヘルを追い詰めたあ!?

マモルの一言にユウキは声を上げた

「ユウキ… 声がでかいぞ…」

「ユウキ君うるさい…」

いきなり大声を上げたユウキに対しミライとミサは窘める

どうやって!? どうやってアイツを!?

普段は割と冷静なユウキ。今日は声も上げマモルの話に対しても興味津々だ

それもそうだろう。あれ程自分が苦戦した末に追い詰めるまでも行かなかつた機体を追い詰めたのだ、聞きたい事なんていくつもあ
るだろう。

「取り敢えず機体を掴んで自爆したんだよ」

マモルの口からとんでもない言葉が出てくる

そもそもミライとユウキとミサのガンプラにはオプション装備として自爆が使えるパーツなどついてない。

ウイングガンダム系統のパーツを採用すれば可能だろうが、生憎3人とも即死回避のスキルは持っていない。

即死回避のスキルもないのに自爆すればただ爆発しGAME OVER ERになるだけ、まさに無駄死にだ。

自爆か… 確かに強いけど… 俺のストライクガンダムじゃ無駄死するだけだ…

ユウキは決して自爆戦法を非難したい訳では無い。

かと言って今からウイングガンダムを用意しても更に即死回避のスキルを手に入れなければならない。

来週に迫ったリージョンカップまで用意できる保証など何処にも無いのだ。

と、なるとだ…単純に武装を強化するしかない…
ユウキはそう呟くと鞆からガンプラの箱を取り出す

「ユウキ君、それなに？」

ミサはユウキに尋ねた

昨日の夜思ったんだ…ランチャーストライクとソードストライク…2つを重ね合わせたら最強になるんじゃないかって…

ユウキは神妙な顔つきでミサに語る

ユウキが取り出した箱にはパーフェクトストライクガンダムが写っていた。

「成程、パーフェクトストライクか…」

ミライはガンプラの箱を見てそう呟く

打倒デスサイズヘルを指す為に用意した機体、これこそがパーフェクトストライク

ユウキはこの機体でリージョンカップに臨む

………

出来た！これが俺の新しい機体…！

ユウキは組み上げたパーフェクトストライクを手に持ち天井に向けて掲げる

これだよ！これ！俺はこういうのを求めてたんだ！

目をキラキラさせながらそう語るユウキを見てミライとミサはクスリと笑う

「うおおおお!!!かっこいい!!!」

マモルもパーフェクトストライクを見つめユウキと同じように目を輝かせる

………

パーフェクトストライクガンダム

頭 ストライクガンダム

胴 ストライクガンダム

腕 パーフェクトストライク

脚 ストライクガンダム

バックパック パーフエクトストライク

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド 対ビームシールド（ストライク）

ユウキが打倒デスサイズヘルを掲げ組んだ機体

今までは遠距離型と近距離型の二択だったが

パーフェクトストライクにすることにより

遠距離も近距離も行ける万能な戦いができるようになった。

ビルダースパーツとして相変わらずメガ粒子砲が付いている

.....

後は覚醒ができれば言うことは無いんだけどなあ...

だけど発動条件が曖昧だし...

ユウキはベッドに寝そべりながら片手にパーフェクトストライクを持ち、そう呟いた

ふと、兄のユウトとの戦いを思い出す

あの時は兄貴がバーストアクション使ってきて

焦ったなあ...

そう言えばあの時にも覚醒したっけ...

確か... 完全にピンチで...

もう少しで負けるかも... って時だったなあ

そこから逆転して... 覚醒して...

その前がデスサイズヘルとの戦い...

あれは...

目の前でミライが容易く吹き飛ばされて

このままじゃ俺もやられる...

そんな感じだったけなあ...

その前にカマセのPG...

ミサが確かGNソードを喰らって

叩きつられて追い討ちをかけられそうな所で

ミサを守ろうとしたら... 気付いたら覚醒してて

そっからのクロススラッシュ放ったなあ...

ユウキは寝そべりながら、
今まで覚醒した状況を思い出す
今の自分に足りないものは何だろう
覚醒……？ EXアクション？
それともバーストアクション？
分からない……
だけど急いで探す必要も無い
その答えはいずれ見つかるはず……
それよりも……眠い……
zzz……

ユウキは考え事未寝落ちした

……

く何処かのゲーセンく

モブA「なんだあのガンダム……！」

そう語るのは左腕を失った白色のガンタンク乗りだ

「やっぱり強いやーこのガンダム……！」

モブB「これ以上好き勝手させるかあ！」

モブBが乗るのは頭のない緑色のグフ

頭のないグフはコックピットに目の前の状況が映らない為、レ-

ダー反応だけでガンダムに対し

ヒートソードを片手に突っ込む

モブB「今度こそ喰らいなあ！」

モブBの腕には確かに何かに当たる感覚がした

モブB「やったか!？」

戦いに置いてその言葉はフラグでしかないが……

モブBの言う通りやったのだろうか

否、モブBの感じた感覚は少年のガンダムが

ヒートソードを素手で受け止めただけだ

この少年のガンダムには、

盾どころかビームサーベルすらない

素手、恐らく拳法で戦っている

「おじさん！惜しかったね！」

少年はそう語るとヒートソードを受け止めた
逆の手でガンタンクの場所へグフを
突き飛ばした。

「バーストアクション!!!」

少年のガンダムが必殺技の構えに入る
これは…

「これが俺の最終奥義!!!」

「石破天驚拳!!!」

少年のガンダムの手から巨大な気孔弾が放たれる
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

物凄い衝撃を纏った気孔弾は吹き飛ばされた2機を
確実に捉え命中

これを喰らった2機のパーツは弾け飛ぶ

「貰ったー！」

少年のガンダムはバラバラになった
ガンタンク、グフに追い討ちをかけ
GAME OVERへと持っていった

「これが僕のガンプラ…！」

「ビルドゴッドバーニング…！」

ビルドゴッドバーニング、

そう呼ばれたガンダムは背中から炎の円のような
ものを出しその場に佇んでいた…

.....

ビルドゴッドバーニング レン仕様

頭 ビルドバーニング

胴 ビルドバーニング

腕 ゴッドガンダム

脚 ゴッドバガンダム

バックパック ビルドバーニング

ライフルやビームサーベルなどを一切使用せず

自分の拳のみで戦う
カラーに関しては組み上げた際のカラーリングで
青い所を全て赤に変えています。

第4章 開幕、リージョンカップ

ガンダムブレイカーズ 第11話 二次予選を目指して

雲一つない青空の下

ユウキとミサはカドマツが運転する車によってこのスタジアムに到着した。

ありがとう、カドマツさん

「なあに、いいってことよ」

「それより、速く参加登録やってこい」

カドマツの言う通りだ

まだ時間的には余裕があるが、早めにやっておいて損は無いはず
ミサ、行こう！

ユウキはミサを引っ張り受付へと向かった

ユウキ選手、ミサ選手… あのすみません、ロボ太選手はどちら
でしょうか…？

受付の女性はそう語る

そうだった… ロボ太忘れてた…

ちよつとすみません！今連れてきます！

ユウキはそう受付員に言うと、カドマツの所へロボ太を受け取りに、走って向かった。

おーい！カドマツさんー！

「何だユウキ、どうした？」

ハア… ハア…

ユウキは全力で走ってきたので息が上がり
言いたいことが言えない。

ろ、ロボ…

「ロボ…？ああーそうだったー」

カドマツは焦ってトランクからロボ太を取り出す

「ほらよ すまねえ、忘れてたわ」

カドマツは軽く謝るとユウキにロボ太を渡す

ロボ太を受け取ったユウキは

再び受付に向かつて走り出した

その際、ユウキは黒パーカーを着た男とすれ違う

ユウキと黒パーカーは一瞬

互いの顔を見ると再び前を向き歩き始めた。

今の奴…なんだろう…

会うのがこれが初めてではない気がする…

「アイツ… 久々だな…」

「覚醒使いのストライクガンダム…」

男はそう呟くと、選手控え室を目指し歩みを進めた

すみません！連れてきました！

「ユウキ君、遅いよー！」

ミサから少し怒られたが、

ユウキはロボ太を連れてきた。

… はい！これで参加受付は完了です！

ご健闘をお祈りします！

受付員はそう言うのと別の人の参加受付へと

仕事を移した。

「いよいよだね…！」

ああ… ここを勝てばジャパンカップだ…

商店街のためにも…

ここで負けるわけにはいかない

「うん…！ まずは予選頑張ろ！」

ミサとユウキは決意を固める

2人1機はただ勝ちに来たのではない

商店街を盛り上げる…

その為にはこのリージョンカップは次に繋がる大きな大会…

もちろん2人とも闘志に燃えていた

そんな2人に

「おーい!!ユウキ!ミサ!!」

こちらに元気そうに手を振る少年
マモルだ。

「今日も君は相変わらず元気だね…」

そう隣で語るのはミライ

「あはははは」

そんな2人見て笑ったのはミサの父ユウイチだ

「お父さん!?何でここに?」

「娘がタウンカップより大きな試合に出るんだ、直接見ない訳にはい
かないだろう?」

「そしたら丁度、この2人が来たんだ。応援は多いほうがいいだろう
?」

ユウイチはそう言うとニコニコ笑っている

今から戦うという事において、信頼できる仲間達の応援はとても力
になる

ユウキはユウイチの行動にとても感謝していた。

「あ、いたいた!ユウキー!」

ヒエツ!

ユウキは突然の聞き慣れた声に対し震える

「…?」

いきなり震えだしたユウキを見て、ミサは?と首をかしげた

「ユウキー!来たぜ!」

ユウイチ達の後ろから現れたのは、

兄のユウトと親戚のレナ姉だ。

「丁度今日休みだったし来てあげたわ!」

レナ姉はそう言うと2人に近づきニコリと笑う

「へえ…」

レナ姉はミサを見て少し含み笑いをする

「あのユウキが女の子とペアで戦うなんてね…」

もう!レナ姉! ミサ!行こう!

「ええ!?ユウキ君!」ちよつと押さないで!

とにかくこの場から離れたいユウキはミサを押し、選手控え室へと歩き出した。

とは言え、兄のユウトとレナ姉が来てくれたのはユウキにとって非常に嬉しかった。

.....

ユウキとミサは一次予選に向け、それぞれ最後の調整を行う。

今回は6ブロックに分かれ上位1位のみが二次予選へと進める

1位のみが二次予選への参加への切符があるということもあり、今回はいつも以上に気が抜けない

「よう、捗ってるか？」

カドマツはジューズを2人に差し入れながら話しかける

「ありがとう！流石はカドマツさん！」

「やめろやめろ、褒めても何も出ねーよ」

カドマツさん、ロボ太は？

ユウキはロボ太の事をカドマツに尋ねた

「安心しろ、ロボ太なら万全だ」

ユウキはカドマツからの報告を聞くと安堵の表情だ

一次予選を始めます。選手は用意をして下さい。

アナウンスが控え室に流れる

遂にリージョンカップが開幕した

.....

一次予選が遂に始まる

ユウキ ミサ ロボ太はシュミレーターの中に入る

いよいよだ...！

「まずはここを越えようね...！」

「主殿... 張り切って参ろう！」

3機は発射口に現れる

パーフェクトストライク ユウキ、出るよ！

ガンダムアザレア ミサ、行つくよー！

騎士ガンダム ロボ太、出撃する！

恒例となった出撃前の口上

3機は射出されステージへと着地する

今回のステージは月面基地のような場所だ

早速3機を目掛け敵CPUのジンクスが攻撃を開始する

2人とも下がって！ここは一気に蹴散らす！

「うん！」

「了解した！」

ユウキを意図を読んだ2機はパーフェクトストライクの後ろ側へと回った

俺たちはこんな所で止まってるわけにはいかねえ!!!

ユウキはそう言うと、バックパックから320m超高インパルス砲を掴み高圧縮されたプラズマエネルギーを、ジンクスの群れに対してうち放った。

この攻撃をまともに喰らったジンクス達は爆発し、

この数秒で彩渡商店街ガンプラチームは早速10機近く落とすことに成功した。

「ミサ、私達も行くぞ！」

「うん！」

ユウキの後に続くよう、ミサとロボ太も再び現れるジンクス達に突っ込み撃破数を増やす。

「おーっとー！ここでAブロック 彩渡商店街ガンプラチームが撃破数トップとなりました！」

Aブロック 残りのチームはこの撃破数を超えられるのかあ！」

そう熱く実況するのはMCのハルだ

彼女はいくつものガンプラバトルの大会を実況する実況者 兼大会のレポーターでもある。

.....

ここはBブロック

砂漠地帯ではデスサイズヘルが他のチームと交戦していた。

モブA「なんだ・・・このデスサイズヘル・・・！」

デスサイズヘルにより左腕をもがれるジエガン
モブB「良くも仲間を!!!」

デスサイズヘルの背後から試作品1号機のカスタム機がデスサイズヘル目掛け攻撃を仕掛ける

「甘いぜ... 甘い!」

デスサイズヘルは腕に付けたダブルガトリングで試作品1号機カスタムを蜂の巣にしようと撃ち尽くすが

「さ、させるかあ!」

試作品1号機カスタムはシールドで攻撃をある程度は防ぐことに成功した。

.....

試作品1号機カスタム

頭 ガンダム試作品1号機

胴 ガンダム試作品1号機

腕 ガンダムヘビーアームズ

脚 ストライクノワール

バックパック ガンダムヘビーアームズ

武器 ビームサーベル(百式) ユーキディキウムビームライフル

.....

「今度はこっちの番だぜ...!」

試作品1号機カスタムはデスサイズヘルに向けてビームガトリングを撃ち尽くす

「お前、本気で俺がそんなんでやられると思ってるのか...!」

デスサイズヘルはビームシザースを握り直し、

試作品1号機カスタムに向け加速

当然、ビームガトリングの攻撃は止めないが

もはやデスサイズヘルは多少のダメージなど気にしない

「な、何なんだよ...! うわあああああ!!」

ビームガトリングの一撃に怯む事なく近づかれ、

モブBの機体は真つ二つにされる

「ふん...」

男のデスサイズヘルはモブBの機体を踏みつけた
デスサイズヘルの回りには羅生門に出てくるの死体のよう、
彼に敗れた機体がそこら辺中に倒れていた
Bブロックでは男が他のプレイヤーを全滅させ、
なんと撃破数1で勝利が確定する

.....
Cブロック

ここではユウキが過去に遭遇したジエスタ同好会が首位を走る
あれから仲間のジエスタもある程度の強化をしたようで
抜群のチームワークを誇り撃破数を重ねる

.....
Dブロック

このブロックのステージは雪山の様だ

「これでも喰らえ!!!」

1人の少年は自分を囲む他のプレイヤーのザクに対しV2バス
ターのバックパックからメガ・ビームキャノンを放つ

モブC「なんだあの機体... 歩く武器庫かよ!」

そう言うモブCのザクは少年のガンダムに対しザクマシンガン
で対抗する

急加速した少年はガンダムは間合いを詰め、

なんと、両手持ったビームサーベルを回転させて突進させてきた。

モブC「ちくしよおおおお!!!」

ビームサーベルの一撃をまともに喰らったモブCは断末魔あげな
がら爆発する

少年は他にチームメイトがない。

完全に1人で四機のザクを沈めたのだ

「強いぞー！僕のウイングガンダム!」

Dブロックでも他のチームが全滅し少年の勝利が確定した

.....

ウイングガンダムゼロカスタム ユウスケ仕様

頭 ウイングガンダムプロトゼロ

胴 ウイングガンダム
腕 V2アサルト
脚 ガンダムサンドロック
バックパック V2バスター
武器 ビームサーベル ビームライフル+バズーカ
.....

Eブロック

ここでは何故かタウンカップで見かけたあのミスター剣山が戦っている

ミスター剣山は確かにタウンカップで敗れたが、他の街のタウンカップを制し、無理矢理出場権を勝ち取ったのだ。

「遅い!!」

ミスター剣山のガンプラ、スサノオはタウンカップの時と変わっており、黒に所々赤が入っている

練習で付いたのか、はたまた自分で付けたのかスサノオにはかなりの傷が付いている。

「優勝はこのミスター剣山R（リターン）が頂く!」

そう言うと、ミスター剣山Rは物凄い速さでCPU薙ぎ倒していく

.....

スサノオ・R ミスター剣山R仕様

頭 スサノオ

胴 武者ガンダム

腕 武者ガンダム

脚 アストレイレッドフレーム改

バックパック ビルドバーニング

.....

Fブロック

「ウルチ！負けるなよ!」

そう語るのはお団子結びをし白衣を着た少女

「任せといて下さいよー」

ウルチと呼ばれた女性は眠そうに、緑色のメタリックカラーの高機

動性型ザクを操り、確実にCPUのジムやローゼンズールを落とすとしていく。

その動きはとても俊敏で、気怠そうな外見とは裏腹だ。

.....

「これにより各ブロックの上位1位が決まりました！」

MCハルは熱く実況する

Aブロック 彩渡商店街ガンプラチーム

Bブロック リユウジ選手

Cブロック ジェスタ同好会

Dブロック ユウスケ選手

Eブロック ミスター剣山R

Fブロック 佐成メカニクス

以上の六チームだ

「やったね！ユウキ君！一次予選突破だよ！」

「ロボ太も嬉しいよね!!」

ミサは喜ぶ

だがここからだ、俺たちのチームはBブロックのデスサイズヘルの男・・・リユウジと当たるだろう・・・

負ける訳には行かねえ・・・

ユウキはそう呟くと、拳を強く握った。

続く

ガンダムブレイカーズ 第12話 新たなる覚醒者

遂に開幕したリージョンカップは一次予選が終わり、上位六チームによる二次予選が始まろうとしていた。

それぞれチームは控え室で最終チェックを行う

しかしユウキは少し悩んだ表情でパーフェクトストライクを見つめる

「ユウキ君？大丈夫？」

何も言わずただ、パーフェクトストライクを見つめるユウキを心配したミサはユウキに声をかけた。

ミサ、話がある

ユウキは神妙な顔つきでそう語る

「話って？」

ミサは反応を示す

ユウキがこうなるのを見るのはいつ以来だろう…

恐らくタウンカップ以来だ。

二次予選、デスサイズヘルとは俺だけで戦いたい

「え？それって…」

別に休んでたって訳じゃない

アイツとは俺だけでケリを付けたいんだ

だからミサとロボ太には他の奴らと戦ってほしい

ユウキはミサに対しそう語る

俺はミサ達を信じてる。

それにミサだって俺に負けない位成長してる

だからこそ、俺はそれを信じて一人で戦わせてほしい

滅多にそんな事を言わないユウキの言動に驚かされるミサ

“俺はミサ達を信じてる”

ミサの頭にはユウキの言葉が残る

「分かった… だけど絶対に負けないでね！」

ああ…！そつちも任せたよ！

ユウキとミサはそう言うのと拳をぶつけ合った
二次予選に参加される六チームは準備をお願いします。
控え室にアナウンスが流れる

「行こう！」

ああ！

.....

「あ！カドマツじゃないか！どうしてお前がここに？」

ミサとユウキが去った控え室に残っているカドマツに対し、佐成メカニクスのエンジニアが話し掛けた。

「誰かと思いきやモチヅキじゃねえか。そう言うお前こそ何してんだよ」

カドマツはモチヅキと呼んだ少女のような白衣を着た女性に言葉を返す

「私は佐成メカニクスのエンジニアだからな！

そう言うお前こそ何でいるんだよ！ハイムロボティクスはタウンカップに敗退しただろ！」

「仮契約みたいなもんだ、アイツらのエンジニアしてんだよ」

カドマツは冷静に返答する

「ほうほう・・・ならばお前は敵だという事だな！」

モチヅキはそう言うのと、カドマツに背を向け控え室から出た。

「お前らに私達の機体を敗れるかな？」

モチヅキはそう言い残り去っていく

カドマツはPCを取り出すと、

ユウキとミサのコックピットに繋いだ

「ユウキ！ミサ！佐成メカニクスの機体に気を付けろ

できるだけやつとのエンカウントは避けておけ」

カドマツはそう言うのとユウキとミサの返答も聞かず通信を遮断した。

「後は誰かが佐成メカニクスを倒してくれることに期待するしかねえか・・・」

カドマツはそう呟き、タバコに火をつけた

.....

パーフェクトストライク ユウキ、出るよ！

ガンダムアザレア ミサ、行くよ！

騎士ガンダム ロボ太、いざ参る！

3機は二次予選のステージに向け射出される

ミサ！ロボ太！後は頼んだぞ！

「任せて！」

「承知した！」

ユウキの言葉に返答する2機はユウキと別の方向へと向かった

どっからでも来い...！俺が相手だ...！

ユウキはどこからの襲撃に対抗できるように辺りが確認しやすい場所へと向かう

レーダーに反応はない

いや、何かが俺をめがけ向かってくる

来たか...！

パーフェクトストライクのコックピットからは急加速しながらこちらに向かってくるデスサイズヘルが確認できた。

「この瞬間を待ってたぜ...！ユウキイイイイイイイイイイイイ！！！！」

デスサイズヘルはビームシザースを強く握り、

ユウキのパーフェクトストライクに向け急加速する

「喰らえやあああああ！！！！」

ビームシザースの一撃をパーフェクトストライクストライク目掛け飛ばす

ユウキはその一撃を大型対艦刀で受け止めた

余りの衝撃に大型対艦刀が手から落ちそうになるが何とか持ちこたえた。

今日こそ... お前を倒す...！

パーフェクトストライクは再び大型対艦刀を強く握る
デスサイズヘルはスラストターでパーフェクトストライクから距離をとる

ビームライフルでの攻撃にシフトチェンジしたのだろうか
しかし、ユウキはデスサイズヘルが離れるのを許さない
逃がすかよ！

パーフェクトストライクの左肩からアンカーのような白衣が飛ぶ
それはデスサイズヘルに巻き付きこの場から一旦離れようとする
デスサイズヘルを逃さない

「なんだこれは…！」

黒パーカーの男は身動きが取れない事に怒りを感じながらどうにか離れようと暴れる

こつちに…こい…!!!

パーフェクトストライクはデスサイズヘルを巻き付けたアンカーを引っ張りデスサイズヘルを引き寄せた

パーフェクトストライクは引き寄せられた反動で宙を舞ったデスサイズヘルに対して急加速をした後、

ガシツとデスサイズヘルを掴み、胴のメガ粒子砲を近距離で撃ち放った

近距離でメガ粒子砲を喰らったデスサイズヘルは吹き飛ばされ地面に叩きつけられた

「チイッ！…こいつ…！」

遠距離からの攻撃を諦めたデスサイズヘルは、
再びビームシザースを握りしめ

ユウキに対し向かっていく

それなら…！

パーフェクトストライクはバックパックから再び大型対艦刀を抜き、同じようにデスサイズヘルに向かっていった

カーン！ キーン！

ビームシザースと大型対艦刀のぶつかり合う音はステージに響き渡る

パーフェクトストライクは大型対艦刀でビームシザーズの攻撃を弾いたのち、過去にデスサイズヘルがミライのブリッツガンダムに對しやったように蹴りを喰らわせた

蹴りをまともに喰らったデスサイズヘルは軽く吹き飛ばれるが空中で体勢を直す

「ここまでやるとは想定外だな」

男はユウキに對しそう言うと、

デスサイズヘルを立たせた

「だが、こっからが俺の本気だ」

そう語った男のデスサイズヘルを紫色の光が包み出す

まさか…!?お前…!!

「さあ、始めようか…!!!」

男のデスサイズヘルは完全に紫色の光に包まれた

男のデスサイズヘルを見てユウキは確信した

デスサイズヘルは覚醒したのだ

何よりも驚いたのは覚醒者だったことではない

男が覚醒の発動を制御出来ている事だ

「さあ…行くぜ!!!」

.....

一方こちらではジェスタ同好会と彩渡商店街ガンプラチームが交戦していた

チームメイトA「ここだあ!」

ジェスタ同好会のチームメイトAのジェスタはアザレアに對し射撃を行った

「くう…!」

シールドで防いだが何発かは被弾を許してしまった

チームメイトB「俺もいるんだぜ!」

2機目のジェスタがミサのアザレア目掛けビームサーベルによる奇襲をかける

「これ以上は好きにさせない!」

ミサはそう言うのとビームライフルを投げ捨てビームサーベルを握り、

奇襲を掛けて来たジェスタのビームサーベルを弾き返した。

「こんな所で止まれない……！」

ミサはそう呟きチームメイトBのジェスタに向け急加速しコックピット目掛けてビームサーベルを突き刺した

チームメイトB「うわあああああ!!!」

チームメイトBの断末魔と同時にジェスタは爆発しGAMEOVERとなつた

チームメイトA「仲間の分まで!!」

そう言うのとAのジェスタは同じようにビームライフルを投げ捨て、アザレアに切りかかる

これ以上無駄にダメージを受けたくないミサは

一旦後ろへと下がり、アザレアのバックパックに装備してあるツインキャノンにAのジェスタ目掛けて撃ち尽くす

ツインキャノンによる一撃を喰らったAのジェスタは怯み膝を付いた

「今なら……！EXアクション！」

ミサのアザレアはEXアクション クロススラッシュの一撃をジェスタに叩き込む

「ダメだ……！ ユージ…… あ、後は…… 託したよ」

ジェスタ同好会チームの内、2機はアザレアによって撃破された

「はああああ!!!」

残る1人となつたジェスタ同好会のリーダー、ユージは愛機のジェスタカスタムでロボ太の騎士ガンダムと交戦していた

「ちよこまかと動きやがって!!!」

ユージは騎士ガンダムに向け射撃を行う。

しかし何度撃つても機体の小ささによりどれも回避される

「チツ…… 弾切れかよ！」

ユージのジェスタカスタムは手に持っていたビームライフルを投

げ捨て、ビームサーベルを握る

今度はビームサーベルによる近距離攻撃とオプション装備による攻撃にシフトチェンジしたようだ

「はああああ!!!」

騎士ガンダムへと距離を詰め、ビームサーベルで切りかかるジェスタカスタム

ビームサーベルの一撃は盾によって防がれたもののユージにはもう一つの狙いがあつた

「今だ！喰らいやがれ!!」

ビームサーベルで切りかかり防がれたと同時に、

フルアーマーガンダムのバックパックからビームキャノンの一撃を騎士ガンダムに御見舞した

「くっ…!!」

まともに喰らった騎士ガンダムは吹き飛ばされ壁へと叩きつけられる

「今だああ!!!」

ユージは声を上げ、騎士ガンダム目掛けジェスタカスタムを急加速させビームサーベルで切りかかる

もうダメだ… ロボ太は思った

「まだ… 終わりじゃないよ…ロボ太…!!」

身動きの取れないロボ太を庇うようにジェスタカスタムの攻撃を受け止めたのはミサのアザレアだ

「テメエ…!!」

トドメの一撃として刺そうとした攻撃を防がれイラつくユージアザレアはビームサーベルの一撃を流し、

逆にジェスタカスタムにビームサーベルの一撃を喰らわせ怯ませた

「ロボ太！」

「了解した！」

騎士ガンダムは小さな体からなる機動性を活かし、あつという間にジェスタカスタムへと距離を詰める

「喰らえー！トルネードスパーク!!!」

騎士ガンダムの槍から電流が流れそれがジエスタカスタムに伝わりパルスダメージによりジエスタカスタムは動きが取れない

「ミサー！終わらせろー！」

「うん!!EXアクションー！」

ミサーのアザレアは身動きの取れないジエスタカスタムに向け、

EXアクション ピアシングスラッシュを喰らわせた

「ここで… 終わりか…!!!」

ユージのジエスタカスタムは爆発しユージのコックピットにはGAMMOVERの文字が現れる

「ミサー！やったなー！」

「うん！やったね！ロボ太！」

これによりジエスタ同好会は二次予選敗退となった

.....

「チーム全員が撃破されたジエスタ同好会は残念ながらここで脱落となります！」

MCのハルはそう語ると

「今の戦いをどう思われますか？ミスターガンブラ」

ミスターガンブラという男に話を降る

ミスターガンブラ…

かつてはガンブラバトルで数々の大会で優勝を果たすなどと言った輝かしい経歴を持つファイターだ

八年前突如ファイターとして戦いを辞めて以来は、

ガンブラバトルの大会で解説をしたりしている

「見ていてとてもドキドキする試合だった！」

ただ、私がファイターをやめてからも相変わらずガンブラバトルは変わらないね！」

ミスターガンブラはそう答える

「それは機体やファイターの質が変わらないという事ですか？」

MCハルはミスターガンプラに対しそう返答する

「いやいや、今も昔も楽しそうにガンプラバトルをやっているという事だ！それより今晚食事でもどうかかな」

「おっと、ここで別のステージで動きがあったようです！」

MCハルはミスターガンプラの最後の部分を流し話題を変えた

.....

「なんて速さだ...！」

ユウスケ選手は交戦中のミスター剣山Rの機体、

スサノオRの動きを見てそう呟いた

「だけど僕も負けてられない！」

ユウスケはそう言うとスサノオRへ向けV2バスターのバックパックからの一撃を放つ

「そんなもの私には当たらぬ！」

スサノオRは放たれた一撃を華麗に避け、

更にユウスケのV2ウイングガンダムに距離を詰める

「はああああ!!喰らえ！」

スサノオRはガーベラストレートの二刀流でV2ウイングを切り裂くと、

EXアクション クロススラッシュの一撃を浴びせる

「そんな...！僕のV2ウイングが...！」

スサノオにより大ダメージを喰らったユウスケ選手のV2ウイングは体力ゲージが0となり爆発した

そんな中ある機体がスサノオRを狙い、

ビームキャノンの一撃を浴びせる

「なんだと!? あ、あれは...！」

空中に浮かぶ山のような機体

「どうだ！これが佐成メカニクスが用意した最強機、アップサラスIIだ!!!」

モチツキはそう言うとうルチに通信を切られる

「姉さん、気が散るんでちょっと静かに」

これぞ佐成メカニクスの隠し玉

アプサラスII

一撃一撃が必殺級の威力となっており、

迂闊に近づけば簡単に沈められるだろう

「なんというデカさだ…！しかし勝つのは私だ！」

そんな事など知らないミスター剣山はアプサラスIIに対し突っ込む…

数分後、ステージにはバラバラになったスサノオRの姿があった

「手も足も出ないだと…この私が…」

ミスター剣山RのコックピットにはGAMEOVERの文字

これにより二次予選最後の1枠は

リュウジ選手のデスサイズヘル

ユウキのパーフェクトストライクに絞られた

続く

ガンダムブレイカーズ 第13話 兄弟の絆

ダメだ……！速すぎて反撃出来ない……！

ユウキのパーフエクトストライクは、

覚醒し、紫色の光を纏うデスサイズヘルによるビームシザースの一撃をシールドで防いでいた。

「無駄だ！無駄だ！無駄だああ!!」

デスサイズヘルは変わらずビームシザースによる容赦ない一撃を喰らわせる

.....

リージョンカップ二次予選

既に別の場所では戦いが終わっており、

残るはパーフエクトストライクとデスサイズヘルといった感じだ

そんな中、ミスターガンプラは覚醒したデスサイズヘルの戦闘を見つめる

「覚醒するファイターを見るのは久々だな……」

「このバトル、恐らく勝つのはデスサイズヘルの彼だろう……」

守りに入る事しか出来ていないパーフエクトストライクを見つめミスターガンプラはそう呟いた

「何やってんのよ！ユウキ！そんな奴なんてぶっ飛ばしてしまいなさいよー！」

レナはデスサイズヘルに圧倒されるユウキを見て、

そう言い放った

「おい、落ち着けて！俺の弟が簡単にやられるやつだと思うか？きつとアイツならこの状況すら吹っ飛ばすぜ……」

暴れるレナを窘め、兄のユウトはそう言った

「ユウキ……絶対に勝ってくれよ！」

「ユウキー！諦めんなー！」

ミライとマモルもユウキにエールを送る

.....

容赦ない一撃を浴びせ続けるデスサイズヘル、

その攻撃をシールドで防ぎ耐え続けるが、どうやらそうも行かない
ようだ

ピシッ...

対ビームシールドから亀裂が入ったような音がする

まさか...？

ユウキがそう言うのとシールドは音を立て、壊れた

「貫ったああああ!!」

シールドを失い、守が薄くなったパーフェクトストライクに対し、
男のデスサイズヘルはビームシザーズの一撃を喰らわせる

うわああああ!!

守る手段を失ったパーフェクトストライクはビームシザーズによる
重い一撃を受け、今回のステージである街の住宅街に向け頭から
突っ込む。

吹き飛ばされたユウキは頭の中で考える

どうする...？ 今この状況でどうやったらこの盤面をひっくり
返せる...？ 考える... 今までだつてそうやって来た...

ユウキは辺りを見回す

デスサイズヘル.....!

ん...？

男のデスサイズヘルの近くに、その機体よりも大きいビルを見つけ
る

これに賭けるしかない... でも失敗すれば... いや、やるしかな
い!

何かを決意したユウキのパーフェクトストライクはバックパツク
から超高インパルス砲に手を伸ばし、

デスサイズヘルを狙った

喰らええええ!!!

ユウキは声を上げ、高圧縮されたプラズマエネルギーをデスサイズ

ヘル目掛け、

いや、その一撃をわざとデスサイズヘルの左側を目掛け撃ち尽くす
「どこ狙ってやがる!!」

男はパーフェクトストライクから放たれた一撃を避けた
いいや、狙い通りだぜ!

ユウキは左肩からアンカーを飛ばした
デスサイズヘル、いやビルの上に向かって

「おいおい、どこが狙い通りなんだよ...!」
笑わせるんじゃない...!

そう語る男に対し、ユウキはビルの上部に刺さったアンカーを出せる力を振り絞り引つ張った
すると、

ミシミシ音を上げ亀裂が入り、ビルは崩れ落ちようとする

ユウキはビルを崩しデスサイズヘルの上に落とそうと試みたのだ。

「成程な...!だが避ければなんの問題もねえ!」

いいや!それはさせない!

ユウキは逃げようとするデスサイズヘル目掛け、再びアンカーを投げ
げる

シールドで耐えてたのは反撃のチャンスを狙ってただけじゃない
!時間稼いだ!

ユウキがそう言いきると男のデスサイズヘルを包んでいた紫色の
光は消え始める

覚醒はずっと使えるでもなく無敵な訳じゃない...

使用時間という穴がある...!

これでお前の機体はしばらく覚醒できない!

崩れ始めるビルの下では、

パーフェクトストライクの腕から放たれたアンカーにより身動き
を取れなくなったデスサイズヘルがもがいている

「ぶざけるな!離しやがれ!クソ!クソ!クソオオオ!!」

ビルはついに崩壊し、男のデスサイズヘルの上へと瓦礫の山が振り
始める

動けない今なら!

ユウキは再び超高インパルス砲を持ち、
瓦礫の下になったデスサイズヘル目掛けプラズマエネルギーを撃ち尽くす

それだけではなく、腰につけたメガ粒子砲からミノフスキー粒子を圧縮したメガ粒子を放った

パーフェクトストライクから放たれた一撃によりビルの瓦礫から爆発音が起こる

「この俺が… 負けるだと… ? 有り得ねえ… 有り得ねえよおおおお!!!」

男のコックピットにはGAME OVERの文字が現れる

勝った… ! 勝ったああ!!!

ユウキは今までにない喜びを感じた

「ユウキ君ー!」

「主殿!」

向こうからミサとロボ太が自分を目掛け走ってきた

「やったね!」

ああ、だけど

「これで終わりではない、寧ろここからだ」

ロボ太はそう答えた

次は決勝… ミサ、ロボ太… 絶対に勝つぞ!

.....

「ユウキ「ユウキー!!! 良くやったわ!!」

ユウキを見つけ声を掛けたユウトの声をかき消すようにレナはユウキに声をかけ抱きついた

ちよ… ! レナ姉! 苦しい!!

ユウキは必死にもがくがレナは離そうとしない

「ユウキ、それにミサもお疲れ様」

「いいバトルだったぜ! 2人とも!」

ミライとマモルも2人に労いの言葉をかける

「ミサ、お疲れ様」

ユウイチもミサに劳いの声を掛けた

「ユウキ、まだ終わりじゃないだろ」

ユウトはそう言った

ああ…！こっからも気が抜けない… ミサ、頑張ろう…

「うん！」

そんな光景を影から眺めるのは黒パーカーの男だ

「つまんねえ… 無茶苦茶にしてやるぜテメエの機体…！」

黒パーカーの男はそう言うとうウキの方へと向かい

ユウキの前に立ちこそう言った

「さつきはいいバトルだったぜ、なあ機体見せてくれないか？」

え？俺の機体？良いけど戦ってる時に十分みただろ…

ユウキは戦闘の時とあまりに性格が違う男を若干疑いの目で見

「どんなビルダーズパーツを付けてるのか気になってな

俺も今度と新しい機体を作るとする時の参考にしようと思ってね」

そう言う事ならまあ…

ユウキは渋々男にパーフェクトストライクを渡す

「成程ないいい機体じゃないか」

男はパーフェクトストライクを見回す

「本当に強くていい機体だ… この俺をイライラさせるほどには
な…」

男はそう呟くとユウキのパーフェクトストライクを地面に叩きつ

け踏みつけた

テメエ…！何しやがる！

ユウキは自分の機体を壊し始めた男に対し声を荒らげ掴みかかる

「ユウキ君！」

ミサは必死に止めるがユウキは掴みかかり続ける

「警備員さん！こいつを捕まえてくれ!!」

ミライの一言により男は警備員に掴まれ連行される

「これでお前は戦えねえ！ざまあみろ！ははははは!!!!」

「いいから黙って歩け！」

男は警備員に外へ連れていかれる
俺のパーフェクトストライク……！

パーフェクトストライクが……！！

ユウキはそう言うとその場に立ち尽くす

ミライもマモルもそんなユウキをただ見守るしか出来なかった

……

リージョンカップ決勝は2時間先延ばしになった

先程起こった事件の影響だろう

ユウキは何もない虚空を見つめる

折角愛機と共に掴み取った勝利の喜びは愛機を破壊されユウキから消え去っていた

「ユウキ、これ」

ユウトからパーフェクトストライクの残骸が渡される

頭の角はへし折れ、脚も粉々になっていた

「ユウキ、元気出せよ！」

「今回の事は……確かに残念だ……だけどな、ここでお前が折れちゃったら誰が商店街の為に戦うんだよ。」

「ミサちゃんに全て任せるつもりか？」

兄貴……

ユウトは必死に自分ができる最大の元気付けをする

「お前は、商店街を守りたいんだろ？ならお前がやるしかねえ。」

でも俺の機体はもう、こんな風に戦えない……！

ユウキはボロボロになったパーフェクトストライクを見つめる

「だったらもう一度作ればいい、お前の新しい相棒をな」

ユウトはそう語る

「だけど今はそう行かないだろ、という訳だこれを使い」

ユウトはユウキに自分のインパルスガンダムカスタムを渡した

「諦めんな、絶対勝てよ！」

ユウトはユウキの背中を叩き、元気付ける

俺は……諦めたくない、ここじゃ止まらない……

ユウキはユウトのインパルスガンダムを片手にそう呟く

なあ？ 兄貴、ちよつとだけ弄つてもいいか？

「構わねえよ、好きなようにやれ」

ありがとう……！

……

遅れてごめん、ミサ

「本当に大丈夫なの？ ユウキ君……」

ああ……！ ここでつまづいてられない……

それに俺は逃げない、ここで逃げたらアイツの思う壺だ

「ユウキ君……！」

「という訳で、うちのルーキーが立ち直ったところで作戦会議だ」

カドマツは仕切り始めた。

「奴ら、佐成メカニクスはMA機体を投入するつもりらしい」

「MA機体……！？ 倒せるの？」

ミサはカドマツの口から出たワードに驚く

「MA機は決して無敵の最強機体なんかじゃない、たしかに大きさはかなりある。それに一撃も重い。だが、それにガン振りしている事で動きはあまり速くない……つまり落ち着いて冷静に対処すればあまり厄介ではないという事だ」

カドマツはMA機についてそう説明した

「いいか、このバトルで命取りになるのは焦って無駄に突っ込む事だ、奴らの攻撃はかなり強い……恐らく迂闊に近づけば簡単に全身のパーツが外れる……絶対に油断するな、いいな！」

カドマツはそう2人に話すと会議を終えた

どんなのが来ようと俺は諦めない……

絶対に勝つ、このパーフェクトインパルスで……！

ユウキの覚悟と共にリージョンカップの決勝が始まろうとしていた

ガンダムブレイカーズ 第14話 迫り来る衝撃

リージョンカップ決勝がついに始まるうとしていた。

とある事情で開始の時間が2時間程遅れるハプニング起こり続行が危ぶまれたが、無事に継続して開催される事となる

よし、調子はいい感じだ… ミサ、ロボ太行けるか？

ユウキはコックピットからミサとロボ太に調子を聞く

「万全だ！」

「こつちも大丈夫だよ！ それより… ユウキ君本当に大丈夫なの？…」

ロボ太とミサは調子は良いと返答し、ミサは逆に質問した。

ああ… パーフエクトストライクの事はショックだけど… ここで止まってられないよ！

だから俺は振り返らずに前に進むよ

ユウキはそう答えるとコックピットにある自分のガンプラを見つめる

パーフェクトインパルス…

兄のユウトのガンプラに辛うじてまだ使えるパーフェクトストライクの腕とバックパックをつけたものだ

……………

パーフェクトインパルス

頭 インパルスガンダム

胴 ガンダムサンドロック

腕 パーフエクトストライク

脚 ガンダムダブルエックス

バックパック パーフエクトストライク

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド GPO1

兄のユウトの機体、インパルスカスタムと破壊されたが何とか辛うじて使えるパーフェクトストライクの腕とバックパックを取り付け

た。

兄のインパルス、弟のパーフェクトストライクといった兄弟の絆が見える、そんな機体だろう

.....

パーフェクトインパルス ユウキ、出るよ！

ガンダムアザレア ミサ、行くよ！

騎士ガンダム ロボ太、いざ参る！

3機は最終決戦の地へ向け射出された

.....

3機は無事に最終決戦の地へと着地した

ここは……雪原地帯だろうか……

そんな3機を目掛けレーザー攻撃が襲い掛かる

「危ない！」

自分達を狙う機体に気づいたミサは2機に対し

危険を教える

ドッオオオオオン!!!

かつて3機がいた場所に向けレーザー攻撃が……

危なかった、サンキューミサ！

ユウキはミサに対し感謝する

「来る……！」

警戒を続ける3機の前に、

例えるなら……山のようなMA機体が現れる

アプサラスII……これが今回佐成メカニクスの用意した機体の

ようだ

「さあ！始まりました！リージョンカップ決勝！ミスター、解説お願いします！」

MCハルは解説のミスターガンプラに話を降る

「よろしくう！」

ミスターガンプラはテンション高めに返す

「なんと佐成メカニクス、MA機体を投入してきました。

この圧倒的なパワーに彩渡商店街ガンプラチームはどのように対

処するのでしょうか！」

MCハルは実況らしく、この戦いを実況する

「MA機は、一つ一つの攻撃が非常に強力だが、その分機動力に制限が出やすい」

「通常機体で対抗するならそこを活かすのが定石だね」

「成程！」

MCハルはミスターガンプラによる説明に相槌を打つ

「見せてもらうよ……ユウキ君……君の可能性を……！」

ミスターガンプラは、アプサラスIIに対して構えるユウキのパーフレクトインパルスに視線を向ける

……………

一方、戦場

「いいか！お前ら！俺が言った通りアプサラスに気をつけろよ！」

カドマツは通信を繋ぎ3機に警告する

そうすると何者かが通信に割り込んで来た。

「どーだ！カドマツ！うちの機体は凄いだろう！」

背の低いお団子頭の女性が通信に割り込んできた

カドマツと呼ぶという事は恐らく知り合いなのだろう

「分かってねえなあ……！デカけりやいってもんじゃないんだよ！」

カドマツはそう返す

たしかに……ユウキは心の中でそう思った

「こっちの攻撃は全部が必殺級の威力なんだぞ！」

しかし、モチヅキも引きはしない

カドマツに否定されてもアプサラスの素晴らしさを語り続ける
するとカドマツは、

「当たらなければどうという事は無い…… っていう名言があるんだよ……」

「それは当たったらどうにかなっちゃうって事だ！」

「全部避けてやらあ！」

カドマツは豪語する

「アンタ見てるだけでしょうが！」

怒ったミサにより通信は切られる

「姐さん気が散るんでちよつと静かに！」

モチヅキもウルチにより強制的に通信を切られた

.....

3機は散開し、アプサラスと距離を取る

アプサラスの攻撃を迂闊に喰らえばやばい事になる事は一目瞭然
だ

ミサ！射撃をしながら移動してそつちに引き付けてくれ！

ユウキはミサに対し指示を出す

「分かったやってみる！」

ミサはそう返すと、アザレアから射撃をしながら動きを始めた

ロボ太！お前も陽動を頼む！

「承知した！」

騎士ガンダムは小柄な体からなる機動力で囨になってもらった

ユウキの狙い通り、攪乱されるアプサラス

「それなら……！」

ウルチはアプサラスをレーザーの発射口を光らせながら機体を回
転させ始めた。

やばい……！まさか……！

アプサラスの発射口からレーザーを出しながらアプサラスは回転
する

「きゃああああ!!」

「くっ……!!」

しまった……!!

3機は回転するアプサラスのレーザー攻撃を喰らいそれぞれ雪原
地帯の壁のような所に叩きつけられた

クソ……！なんて威力だ……！

あまりの衝撃にまだ手が動かない

「逃がさない…！」

ウルチはアプサラスを空中に浮かせ、再び回転しながらユウキのパーフェクトインパルスに迫る

あんなの喰らえば即GAMEOVERになりかねない…！

ユウキは何かかパーフェクトインパルスを動かし退避行動を取り、最悪の事態を防いだ

「チツ… 避けられたか…！」

ウルチは冷静に次の手段を考える

今度はこつちの番だ！

ユウキのパーフェクトインパルスはバックパックの超高インパルス砲を抱えアプサラスへ向け放つ。

「効いてない…！」

ウルチはパーフェクトインパルスへ向けレーザーを放とうとするが今度は背後から

「隙あり！」

「こつちだ！」

ミサのアザレアによるビームサーベルの一撃と騎士ガンダムによる剣の一撃を赦してしまう

「期待のダメージが…！」

想定外の一撃に怯みを見せたアプサラスIIの隙をユウキは見逃さない

頼む…！インパルス…力を貸してくれえええ!!!

するとユウキの声に応えるように、

インパルスの体が赤く光出した

「あの機体…！あの輝きは…！ユウキ君…君もやはり…！」

赤く光出したインパルスは一瞬の間にアプサラスIIへと突っ込み、バックパックから大型対艦刀を抜きアプサラスIIへと突き刺すと巻き込まれないようにその場からすぐに離れる

はああああ!!!

「姐さん…ゴメン…」

インパルスにより、大型対艦刀を突き刺されたウルチのアプサラス
IIは大きな爆発音を上げる

ウルチのコックピットの画面に「GAME OVER」と表示された
「やったー！やったねー！」

「主殿！」

トドメの一撃を指したユウキのインパルスの周りにはミサとロボ
太

俺達…！やったんだ！

「リージョンカップ優勝は彩渡商店街ガンプラチームです！皆様大き
な拍手をお願いします！」

MCハルの一言で彩渡商店街ガンプラチームに惜しめない拍手が
送られる

「ユウキー！かつこよかつたわよー！」

「流星は俺の弟だぜ！」

ユウトとレナも大きな拍手を送る

「ユウキ！ミサ！やったな…！」

「ミサちゃん！ユウキー！それにロボ太ー！最高だったぜ！」

ミライとマモルも大きな拍手を送った

ストライクガンダム… 見てるか…

決勝はお前で戦えなかったけど、

今までありがとうな…

ユウキはシユミレーターから出た後、

バラバラになったストライクガンダムを見つめそう呟いた

??? 「彼等が次のジャパンカップの相手かー！」

燃えてくるな！ビルドゴッドバーニング！」

赤髪の少年は自分の手に握ったガンプラ

ビルドゴッドバーニングにそう声をかけその場を後にした

色々な強敵と戦い、愛機を失ったりもした波乱のリージョンカップ

は彩渡商店街ガンプラチームの優勝でついに幕を下ろす

「それでは皆様！次はジャパンカップで会いましょう！」

MCハルはそう言い会場に手を振った

.....

「もしもし、ミスターガンブラです。次のジャパンカップ・・・お願いしたい事が・・・」

続く

第5章 受け継がれるストライクの魂
ガンダムブレイカーズ 第15話 ストライクの系譜

学校の時計は15時半を指し、放課となる

波乱のリージョンカップからは4日ほど経っていた…

ユウキ達4人はミサの実家の模型屋に来ていた

「ユウキ君まだ悩んでるの?」

ミサは頭を抱え悩み続けるユウキに話しかける

「フリーダムガンダムなんてどうだい?」

続いてミライ、ミライはユウキにフリーダムガンダムの箱を見せる

フリーダムガンダムか… うう… 悩む…

「俺はこれをオススメするかなー!」

マモルはユウキにAGE3 フォートレスの箱を見せた

うう… !だめだ決まらねえ… !

ユウキは再び頭を抱える

リージョンカップ決勝の前に自分のガンプラを破壊されたユウキ、決勝は兄のユウトのインパルスガンダムとパーフェクトストライクを合わせたパーフェクトインパルスで決勝へ挑んだ

しかし、元はユウトの機体である

なのでこうしてミサの模型屋で新たな機体を選んでいるのだ。

もう1度ストライクガンダムか?それともミライの言っていたフリーダムガンダム?マモルが言っていたAGE3か?

ダメだ決まらねえ… !

「ならこれなんてどう?」

ミサは商品棚から箱を取り、ユウキに見せた

ん?… これ… これいいかも!

ミサがユウキに渡したものはビルドストライクガンダムだ

ユウキは過去にビルドストライクのパーツを使った事がある

その上、タウンカップ準決勝までは追撃の一手としてビルドストライクのバツクパツクの大型ビームキャノンを採用していた事もある。これに……しようかな……

ユウキは悩んだ結果ビルドストライクガンダムのプラモデルを購入した

出来た……！これが俺のビルドストライクバーニング……！

ユウキは店のフリースペースを使わせてもらいビルドストライクを組み上げた

………

ビルドストライクバーニング ユウキ仕様

頭 ビルドストライクガンダム

胴 ビルドバーニング

腕 ビルドストライクガンダム

脚 ビルドバーニング

バツクパツク ビルドストライクガンダム

武器 ビームサーベル(エールストライク) ビームライフル(スト

ライク)

シールド チョバムシールド

ビルドファイターズシリーズに登場する機体、ビルドストライクとビルドバーニングを合わせた機体

腕と脚にビルドバーニングを採用している事で、例えばビームサーベルがなくとも次元龍霸王拳法を使用することが出来る他、バツクパツクから大型ビームキャノンを使用する事ができる

カラーはビルドバーニングの方に寄せ、ビルドストライクの青の部分を赤くしてある

………

ユウキは早速ビルドストライクバーニングを試そうとシユミレーターへと向かう

ん……？

シユミレーターの前の画面に人だかりが出来ている

「おい見ろよ、あのデスサイズヘルが圧されてるぞ！」

「あのビルドストライク・・・一体何もんだ・・・」

ユウキが見た光景、そこにはあの男のデスサイズヘルが圧倒される光景が広がる

.....

「このゲーセンの死神と呼ばれた男がいるって聞いてわざわざ来たのに君、大した事ないね」

少年はそう言うとビルドバーニングで男のデスサイズヘルに向け加速する

「舐めやがって・・・！テメエは俺が狩ってやる・・・！」

男のデスサイズヘルは紫色の光を纏い始める

リージョンカップの二次予選でも見せた覚醒だ

「そこだあああ!!！」

男のデスサイズヘルは自分に向かって加速するビルドバーニングに対し、ビームシザーズの一撃を喰らわせる

「ハアハア・・・！俺をイラつかせた罰だ・・・！」

かなりの集中力を使う覚醒

そのため連続使用はあまり好ましくないが、

男はビルドバーニングに対して既に覚醒を2回使用しているようだ

「甘いね・・・」

少年のビルドバーニングはどうやらビームシザーズの一撃を素手で止めたようだ

「本当に甘いよ・・・」

刹那、ビルドバーニングによる一撃がデスサイズヘルのコックピットへ向け飛ぶ

「EXアクション！」

少年はそのままデスサイズヘルを掴みEXアクションを放つ

「爆熱！ゴッドフィンガー!!」

デスサイズヘルを掴んだまま加速し、

ゴッドガンダムの必殺技、爆熱ゴッドフィンガーを喰らわせる

「うわああああ!!!」

そのまま吹き飛び、叩きつけられたデスサイズヘルはあまりの衝撃で身動きが取れないでいた

「これが俺の本気……！バーストアクション……！」

少年のビルドバーニングは必殺技の構えへ入ると光輝き出す

「食らえ！石破天驚拳!!!」

ビルドバーニングから放たれたバーストアクション、

石破天驚拳を食らったデスサイズヘルは、

爆発し粉々になった

「クソー！クソー！クソー！」

男はコックピットに頭を何度も打ち付けた

男の頭からは血が流れる

粉々になったデスサイズヘルに近づくビルドバーニング、

「君はガンプラバトルだけじゃなく心も弱いね

可哀想な人間だ……」

少年はそう言うのと離脱した

………

シユミレーターの前に立ち尽くすユウキ

それもそのはず、あれだけ苦戦した男のデスサイズヘルをいとも簡単に撃破したのだ

シユミレーターから赤髪の少年が出てくる

「……君……」

赤髪の少年はユウキを見つけると近づいてくる

「君、確かジャパンカップに出るんだろ？」

君の戦いは見せてもらったよ、ジャパンカップお互いに頑張ろう
！」

赤髪の少年はユウキに握手を求め

ユウキも手を差し出しお互い握手をした

君？名前は？

ユウキは赤髪の少年に名を尋ねる

「僕かい？僕はレン、よろしくー！」

赤髪の少年はレンと名乗った

レン……分かった覚えとくよ

「うんー」

レンはニッコリと笑うとその場から立ち去った

.....

ユウキは自分のアパートで今日見たバトルを思い出す

レンのビルドバーニング……恐らくジャパンカップでは脅威になるな……

ユウキはそう呟くと時計を見た

時計の針は5時48分を指す

晩御飯……どうしようか……

晩御飯というワードに反応したのかお腹が鳴り始めた

ユウキはクスリと笑う

ピピピ

ユウキのスマホが鳴る

相手はレナ姉だ

えーと何何、晩御飯食べさせてあげるからおいで……

マジかよ！流石レナ姉だぜ！

いつもは怯えた目でレナ姉見るのだが、

この時は御飯をご馳走してくれる親戚の優しいお姉さんとして見ていた。

つくづく都合のいい考え、

自分でもそう思ったユウキは外に出る支度を始めた

.....

早速レナの住むアパートに着いたユウキはレナによって部屋に招き入れられる

そこにはユウキの兄のユウトがいた

「という訳でユウキも来た所でカンパニー！」

ユウトとレナはお酒が入ったコップ、ユウキはコーラの入ったコップを掲げ、ユウトは乾杯の音頭を取った

「お祝いしてあげれてなかったし、ユウトも丁度休みだったし祝勝会

してあげようと思ってね」

レナはユウキにそう言った

ありがとう！レナ姉！

ユウキはレナに対し礼を言う

「素直にお礼を言える子は好きよー！」

レナはユウキに抱きつく

どうやらもう酔っているらしい

こうなるとかなりめんどうくさってくる事をユウキは何となく察していた……

……

「今だー！」

ミライのブリッツガンダムはミラーージュコロイドで姿を消し、他のプレイヤーの機体に向けビームサーベルでの強襲を敢行する

「うわああああ!!!」

見事にコックピットを貫かれた他のプレイヤーのペイルライダーは断末魔を上げながら爆発する

「ユウキに追いつくんだ……！僕は必ず再び彼に追いついてみせる……！」

ミライは中指でずり落ちたメガネを上げ、そう呟く

効果が切れ、ブリッツガンダムは姿を現す

残る敵機は2機……ミライはビームサーベルを握り締め、2機の敵機に向け走っていった

……

続く

ガンダムブレイカーズ 第16話 GNの逆襲

ピピピ！ ピピピ！

アパートの一室に予めかけておいた目覚ましの音が鳴り響く
んんん！ もうちよつと...

ユウキは目を瞑りながら、絶え間なく鳴りつける目覚まし時計を手の感覚だけで探し、遂に音を止めた

これでまた寝られる...

ユウキはそう思うと深い眠りにつこうとする

ん... いや待てよ...

ふとユウキは全身で嫌な予感を感じる...

ユウキは再び目を瞑りながら手だけでスマホを探す

これだ...

スマホを探し出し、時間を確認すると

スマホの画面には8時00分と写っている

ち、ち、遅刻だああああ!!!

目覚ましはユウキが気付かないだけで何度も鳴っていたようだ

ユウキは急いで洗面所へ向かい、洗顔 歯磨きを急いで済ませる

御飯... はもういいや！ 行ってきまーす!!

ユウキはかなり焦った様子で家を出た

やばいやばい...！

ユウキはそう思いながら学校へ向かった

.....

ハアハア... すゝみまゝせん!!おゝくれまゝした

!!!!

ユウキはドアを思いっきり開け、授業中の自分の教室に入り頭を下
げ、そう謝った

「ユウキ君...」

「ユウキ... 君って奴は...」

「zzzz...」

ミサとミライはかなり焦った様子で入ってきたミライを哀れな目で見つめる

マモルは… 何という事だ、一時限から寝ている…

「今何時だと思ってる！速く席に座りなさい！」

ユウキは国語の先生に促されるまま、

ミサの隣りの席に座った

「ユウキ君…？大丈夫…？ヒソヒソ」

え？… まあ大丈夫… じゃない…

心配するミサに対し、ユウキはそう返答した

……………

あー腹減った… 朝飯抜くんじゃなかった…

ユウキは空腹に耐えながらそう呟く

「はい、ユウキ君」

ミサからおにぎりが渡された

え？いいの？ ありがとう…

ユウキは貰ったおにぎりをすぐ完食した

美味しい(´、`?) ありがとう！ミサ！本当に！

ユウキはミサに対し、神を見るような目だ

「全く何やってるんだ君は… マモル、君もそろそろ起きたまえ」

ミライはマモルを起こしながらそう言った

悪い！悪い！昨日ちよつと色々あつてな…

ユウキは昨日見た光景を思い出す

自分が何とか倒したデスサイズヘルをレンのビルドゴッドバーニ

ングはいつも簡単に打ち破った

ジャパンカップ…

リージョンカップの様に目に見えて強い相手が現れたな…

そうだ…！この事は皆にも言っておくか

ユウキは3人、いやマモルはまだ寝てるので2人に昨日見た事につ

いて話した。

「ビルドゴッドバーニングか…

話に聞く限りは凄く強いだろう

ね…」

ミライは開口そう呟いた

ユウキも同じ気持ちだ

その上レンがジャパンカップに出ることはとっくに知ってる

「私達も負けないように頑張らなくちゃ！」

ああ……！俺も覚醒をどうにか自分の物にして見せる！

「僕も近いうちにある大会へ向け頑張るよ…… ユウキ、そして君に

再び追いついてみせる……！」

ミライはそう呟くと、

ずり落ちたメガネを中指でクイツと上げた

「zzzz……」

マモルは相変わらず寝ている……

……

クラスメイトA「なあ？知ってるか？最近あのデスサイズヘルまた
負けたらしいぜ……！」

クラスメイトB「マジかよ…… この前ビルドバーニングに負けてた
のは見たけどまたか？」

クラスメイトC「あのデスサイズヘルを倒すってことはとんでもな
い機体なのかな……」

クラスメイトA「それがGNアーチャーがベースの機体らしい
ぜ…… あのデスサイズヘルに対して何かしら恨みがあるっぽかつ
たし…… まあアイツには他のファイターが怯えてたし落ちぶれてる
のを見て、可哀想とも思わないけどな……」

クラスメイトB「ユウキなんてパーフェクトストライク破壊され
たって聞いたし…… ザマーミロって感じだよな！」

クラスメイトC「ほんとにな！アハハハハ」

楽しそうに話す3人の近くの影で姿を潜めるユウキ

ユウキは3人の会話に聞き耳を立て聞いてきた

デスサイズヘルを倒したGNアーチャーか……

ちよつと気になるな……

ユウキはそう呟き、トイレへと向かった

……

ユウキは放課後、1人でゲーセンへと向かう

「こんにちはユウキさん」

こんにちはインフォちゃん！シユミレーターは使える？

ユウキはインフォちゃんに挨拶するとシユミレーターの使用状況を尋ねた

「ただ今 4つ全てにお客様が入っています プレイならあと30分は無理かと」

30分か・・・ まあ今日はプレイしに来たわけじゃないから大丈夫か・・・ ありがとうインフォちゃん

ユウキはインフォちゃんに礼をするとシユミレーターへと向かった

プレイしている機体の内1機には見覚えがある

デスサイズヘルだ・・・

.....

「昨日は少し油断したが今日はそうは行かねえ・・・！」

男はそう呟くとデスサイズヘルを3機のGNアーチャーへ向け加速する

「お前だけは俺たちが許さない・・・！」

その内1機がビームライフルを投げ捨て、

ビームサーベルに持ち変えてデスサイズヘル目掛け飛んでいく

男のデスサイズヘルはビームシザースを取り出し、

ビームサーベルの一撃を受ける

「今だ！やれ！」

リーダーの掛け声に2機は反応し動き出す

「任せろ！」

「食らえ！」

2機はデスサイズヘルを囲み、

デスサイズヘルに目掛けて加速した

「舐めるなあ・・・！」

男はビームシザースをビームサーベルから離し、

2機に向け振り回す

「チッ！」

「何!？」

「怯むな！2人とも！」

GNアーチャーは再びデスサイズヘル目掛け、

ビームサーベルを振るう

「甘い……！」

男は再びデスサイズヘルでビームシザーズでその一撃を弾く

「うおお!!！」

「まだ俺らもいるぜ!!！」

2機はビームサーベルを捨て今度はビームライフルを握り、デスサイズヘルに向け射撃を行った

「小賢しい真似を……！」

男は背後からの射撃を間髪避け、そう呟く

「イライラさせるな…… あのビルドバーニングの様になあ！」

デスサイズヘルは両手に付いたダブルガトリングで3機を目掛け打ち放つ

「うおー！」

「うわあー！」

「大丈夫か！2人とも！」

3機のGNアーチャーは何とかシールドで防ぐ
「プランCだ…… 行くぞー！」

リーダー機はそう言うと、残りの2機が答える

「了解！」

「あれだなー！」

3機は縦1列に並び、デスサイズヘルへ向け加速した
こう3機が並ぶとリーダー機だけ違うことが分かる

リーダー機のGNアーチャーは重装備だ

……

GNアーチャーガーディアン

頭 GNアーチャー

胴 ケルデイルガンダム

腕 GNアーチャー

脚 ジムガーディアン

バックパック ジムガーディアン

武器 ビームサーベル ビームライフル（ストライク）

機体カラーは赤を基調にしているこの機体

サブアームにより、2枚のシールドが腕の自由を確保したまま多方面の防御を担い、自機を狙う射撃を本体の動きとは独立して防御する
.....

縦1列に並びデスサイズヘルに迫る3機のGNアーチャー、

リーダー機のGNアーチャーガーディアンが先頭に立つ

「何をするかは知らないがまとめて消してやる...！」

男のデスサイズヘルは3機へ向け、射撃を行う

「させるか！」

リーダー機はバックパックからサブアームを出し、

2枚のシールドを展開する

ユウキはジェスタ同好会と交戦した際に同じようなシステムを見た

あれは、フルアーマーガンダムだが

2枚のシールドは先頭のGNアーチャーガーディアンを守り、そのままGNアーチャーはビームサーベルを携え、

デスサイズヘルに突っ込む

「何いいい!?!」

デスサイズヘルはGNアーチャーガーディアンのビームサーベルの一撃を受けてしまう

「今度は！」

「俺達だ！」

ビームサーベルの一撃を喰らわせたGNアーチャーガーディアンの背後から2機のGNアーチャーが飛び出し、

デスサイズヘル目掛け2機は飛ぶ

反応に遅れたデスサイズヘルは2機の攻撃を許してしまい、少し吹

き飛ばされた

「俺達はお前に散々… 苦しめられた…！」

「そしてこれが！」

「GNの逆襲だああああ!!」

3機のGNアーチャーは吹き飛ばされたデスサイズヘルへ向け
ビームライフルからの照射を行った

「クソがあああああ!!!」

3機文の照射を許したデスサイズヘルは粉々になり爆発

そして、男のコックピットにはGAMEOVERの文字

決してデスサイズヘルが特段弱かったのではない

3機のGNアーチャーによるチームプレイがデスサイズヘルを上
回ったのだ。

.....

すげえ…

ユウキは3機のプレイに感動に近いものを覚える

なんてチームワークだ…

心の中でそう思うと、ゲーセンを後にした

俺達もあんな風にチームワークを良くしないと…

ユウキは帰路に付きながらそう呟くのだった

続く

ガンダムブレイカーズ 第17話 宇宙海賊、参上

「とあるゲーセンのシュミレーター」

全身トリアルグレーに塗られたジェスタとジェガンの複合機、ジェガンカスタムは辺りを警戒していた

モブA「なんなんだよあの機体…！」

モブAはそう呟くと、再び辺りを警戒し始めた

「どうやらこの機体、なにかに追われているようだ

「見つけたぜえ…！」

ジェガンカスタムを捉えたのは、これは…クロスボーンだろうか…

モブA「き、来たあ！」

ジェガンカスタムはクロスボーンに向け戦闘態勢だ

「このゲーセンは俺達ギャラクシーパイレーツの縄張りだぜ…

俺達に挨拶も無しにこのシュミレーターでガン普拉バトルをするなんて当然お前は俺達がここを縄張りにしてる事を知って来てるんだろ…？」

そう呟くのは、このゲーセンを縄張りとして活動しているギャラクシーパイレーツのリーダー、ジャック

果たしてジャックは本名なのだろうか

いや、今そんな事などどうでもいい

モブA「し、知らなかったんだよ… 分かったよ… 素直に帰るよ…」

モブAは諦めて帰ることにした

しかしジャックはそれを許さない

「帰らせねえよ… 折角だ、俺の相手でもしてもらおうかな…！」

男のクロスボーンは大型対艦刀を握る

……………

宇宙海賊 クロスボーンX

頭 クロスボーン・ガンダムX1

胴 ガンダムA G E 2 ダークハウンド
腕 ガンダムA G E 2 ダークハウンド
脚 クロスボーン・ガンダムX1改
バックパック クロスボーン・ガンダムX1
シールド A B C マント
武器 大型対艦刀 ピーコックスマツシャー
ユウキ達とは別のゲーセンを縄張りとするギヤラクシーパイレー
ツのリーダー、ジャックの操るガンプラ
黒を基調にしたカラーで所々に赤と金が入っている
.....

モブA 「うわああああ!!!」

モブAのジエガンカスタムは大型対艦刀の一撃をまともに喰らい叩きつけられる

「おいおい、まだ始まったばかりかだぜ……」

そう言うと、ジャックのクロスボーンは大型対艦刀をジエガンカスタムに向ける

まともに向かえばやられる、そう確信したモブAはジエガンカスタムを退避させ、再度攻撃のチャンスを狙う事にした。

しかし、ジャックはそれを許さない

「逃げるなんてそうはさせるかよ……!」

クロスボーンの腕からアンカーが飛ぶ

腕から放たれたアンカーはジエガンカスタムに命中すると、クロスボーンはアンカーを引っ張り、ジエガンカスタムを引き寄せる

引き寄せられたジエガンカスタムに向け、今度はスクリューウィップを握り、ジエガンカスタムに対してムチを使用した容赦ない連撃を御見舞した

「ダメだ…… やられる……!」

モブAのジエガンカスタムはもう残りの体力ゲージが少ない事を見す様に、モブAのコックピットは赤く点滅し始める

「なんだよ…… つまんねえなお前……!」

何の抵抗もし無くなったジエガンカスタムに対してジャックはそ

う眩く

「これで終わらしてやるよ…EXアクション…」

ジャックのクロスボーンは動かなくなったジェガンカスタムへ向け、EXアクション デッドエンドインパクトを命中させ、それをもろに喰らったジェガンカスタムは音を上げ爆発した

「キャプテンく こっちも終わったよく」

向こう側からギャラクシーパイレーツのメンバー、キリユウのストライクノワールが近づく

どうやらキリユウも縄張りということを知らずにガンプラバトルをする他のプレイヤーを倒したようだ

……………

ストライクノワールカスタム キリユウ仕様

頭 ストライクノワール

胴 ビルドストライク

腕 ストライクフリーダム

脚 ビルドストライク

バックパック ストライクノワール

武器 シュベールラケルタビームサーベル

同じギャラクシーパイレーツのメンバーであるジャックのクロスボーンと同じ色合いの黒を基調としており、所々赤と金が見られる

……………

「ここら辺もだいたい俺達ギャラクシーパイレーツが縄張りとして名を広げて来たな…」

ジャックはシュミレーター近くの休憩所でくつろぎながらそう眩く

「キャプテンが強いからここら辺の奴らも怯えてるよ」

キリユウも休憩所でくつろいでいる

「そこでだ、俺達ギャラクシーパイレーツもそろそろ縄張りを広げようと思ってる」

ジャックはそう語る

「今度はどこを縄張りにするんだい？」

キリユウはジャックの話に興味を持ち始めた

「隣の商店街、彩渡商店街のゲーセンにはリージョンカップ優勝したチームが入り浸ってるという話だ、もしそいつらを倒せば俺達ギヤラクシーパイレーツの名前も広がる…、そうしてメンバーを増やそうって訳だ」

ジャックはそう語るとキリユウが返答する

「でも、仮にもリージョンカップを優勝する実力がある連中なんだろう？いくらキャプテンとは言え流石に勝てるのかな…」

キリユウは若干諦め気味だ

「馬鹿野郎、やる前に諦める奴がどこにいんだよ…」

俺達は必ずそいつらを倒してギヤラクシーパイレーツの名を広めて見せるぜ…

という訳だ、来週彩渡商店街のゲーセンに行くぞ！」

ジャックは早速乗り気だ

彩渡商店街ガンプラチームに勝って、ギヤラクシーパイレーツの名を広げメンバーを増やす…

果たしてギヤラクシーパイレーツは彩渡商店街ガンプラチームを倒せるのだろうか

……………

「なんだよ…このガンダムは…！」

ジャックのクロスボーンは半壊寸前だ

それだけでなくキリユウのストライクノワールはもう両腕を失っており攻撃もままならない

「ギヤラクシーパイレーツなんて言うチームがここを縄張りにしてるらしいから戦いに来たんだけど…、評判程でもないね…」

レンはそう言うとストライクノワールに対しEXアクションの構えを見せる

「今楽にしてあげるよ…、EXアクション！爆熱！ゴッドフィンガー！！」

ビルドゴッドバーニングは液体金属のエネルギーで掴んだストライクノワールの頭部を高熱で融解した

「キャプテン… 後は任せたよ…」

ストライクノワールは爆発し、キリユウの画面にはGAMEOVERの文字が。

「チクショウ…！行くしかねえ…！」

ジャックのクロスボーンはビルドゴッドバーニングに向け距離を詰め、大型対艦刀の一撃を食らわせる

しかし、その攻撃をレンは素手で止めた

「バケモノかよ！… 食らえ！」

クロスボーンは胸部内蔵の眩惑装備強烈な光を発し、ビルドゴッドバーニングの目をくらました

「くっ…！面白くなってきたね…！」

レンの機体は軽いショック状態のようになり身動きが出来ない

「今だ！くらいやがれ…！EXアクション…！」

クロスボーンは怯み動けないビルドゴッドバーニングに向けEXアクション、デッドエンドインパクトを御見舞する

「面白い！だけどちよつと遅かったね…！」

レンの機体はどうかショック状態から回復し、

クロスボーンへ向け、回し蹴りを喰らわせた

「何イイイイ!?」

回し蹴りをまともに喰らい吹き飛ばすクロスボーンに向け、再びビルドゴッドバーニングは必殺技の構えだ

「バーストアクション…！」

「石破天驚拳!!!」

ビルドゴッドバーニングの腕から巨大な気孔弾が放たれる

「俺達… ギャラクシーパイレーツは… 不滅だああああ!!!」

ジャックはそう叫ぶとクロスボーンは爆発した

ジャックのコックピットにはGAMEOVERの文字。

「なかなか面白い戦いだっただよ。ありがとう」

レンは2人にそう呟くとビルドゴッドバーニングは姿を消した

しかし、ギャラクシーパイレーツは諦めない

何時か必ずレンに復讐することを心に刻み込んだ

.....

「もう少しでジャパンカップか……」

「見せて貰うよ君の実力……ユウキ……！」

レンはそう呟くと帰路についた

ジャパンカップまで後1週間

続く

第6章 激闘、ジャパンカップ
ガンダムブレイカーズ 第18話 開幕、ジャパン
カップ

く昼休みく

「ねえ見てーユウキ君ー!」

ミサはユウキに対し、自分のガンプラを見せる

ユウキは昼ごはんを食べ、若干眠かったがミサの見せてきたガンプラに視線を移した

ミサの機体、アザレアカスタムはバックパックに、

OOに登場するガンダムヴァーチェの物であろうバックパックを付けている

それだけでなく、性能的にも進化していた

「明後日、遂にジャパンカップでしょ?それに向けて強化したんだー!」

ミサはなにやら楽しげだ

しかし、ミサの言う通り明後日にはジャパンカップが控えている

それに・・・ジャパンカップではデスサイズヘルを圧倒したレンのビルドゴッドバーニングが待っているだろう・・・

最後に追い込み練習しないとな・・・

ミサ、帰りにゲーセンへ行こう!

最後の練習だ!!

「うん!分かった!」

ミサとユウキは放課後にゲーセンへ行くことが決まった。

.....

はあ!!!

ユウキの機体、ビルドストライクバーニングは大量に現れるジムに
対してビームサーベルで切りつけた

「私も負けてられない!」

ミサのアザレアパワーも負けじと、ジムに対して加速する。

ガンダムヴァーチェのバックパックからGN粒子を放ちながら、ジムへと距離を詰めたアザレアはビームサーベルで複数機を斬り付け、ミサの後ろで複数の爆発が起こる

「やったあ！同時に複数倒せるようになったよ！」

ミサはテンションを上げる

負けていられなくなったユウキはミサに対して対抗心を燃やし、ビルドストライクのバックパックから放たれた大型ビームキャノンの一撃でジムを6機をまとめて撃破した

「ぐぬぬ…！」

ミサは悔しそうだ

こんな感じで2人は撃破数をどんどん重ね、ジャパンカップへと備えた

.....

ここが…ジャパンカップの会場…！

ユウキは人が溢れかえる大型ドームの前でそう呟く

人混みがあり好きではないユウキは早速人の多さに気圧される。

「ユウキ君…大丈夫…？」

ああ…大丈夫…ちよつと人が多いなって思っただけだよ…

心配するミサの一言にユウキは答えた

「お前ら早く受付に行つてこい。後こいつをな。」

カドマツは2人に受付をしに行くことを催促すると同時にロボ太を渡した

「ロボ太の事なら大丈夫だぜ、しっかりと整備しておいた。それに新しい装備もな」

カドマツの一言で2人はロボ太に視線を移す

ロボ太の装備はこれまでと違い、騎士ガンダムかフルアーマー騎士ガンダムへと変わっていた

ジャパンカップへ向け、確実に進化していく2人と1機

果たしてどんな相手と出会えるのだろうか…

2人はそんな思いでジャパンカップへと望んでいく

.....
Aブロック予選

ミサ！ロボ太！今だ！！

「了解！」

「承知した！」

ユウキの掛け声で他のプレイヤーの機体へと向かっていく2機、

モブA「ちくしょう……！！」

ユウキのビルドストライクバーニングの一撃を受け怯むモブAの機体は更にミサのアザレアパワーとフルアーマー騎士ガンダムの2機の攻撃を受け爆発する

モブB「なんだあいつら……！」

モブC「俺達より遥かに強え……！」

モブBとCは彩渡商店街ガンプラチームのチームワークに驚きの声を上げる

モブB「こうなったら！あのビルドストライクを狙うぞ！」

モブC「わ、分かった！」

モブBとCは自機のケンプファーカーカスタムで、

ユウキのビルドストライク目掛けて両腕に装備された腕部グレネードランチャーを放つ

流星はジャパンカツプだ……！一筋縄では行かねえか……！

ユウキは放たれたグレネードを自分にあたる前にビームライフルで撃ち落とす

撃ち落とされたグレネードは爆発し、爆煙を上げる

モブB「やったか！」

モブC「いや！来るぞ！」

そこだああああ!!!

ユウキのビルドストライクバーニングは爆煙の中から片手にビームサーベルを握って飛び出し、油断したモブBのケンプファアーを真っ二つにした。

モブC「この……！」

1人残されたモブCのケンプファアーはビルドストライクバーニン

グ目掛け、両手に持つショットガンを乱発する

うお…!? あつぶねー!

まさかの一撃に一瞬怯むも、ユウキは間髪それを腕のシールドで防いだ

モブC「チツ！避けられたかよ！だが、まだまだ弾ならあるぜえ!!!」

モブCはそう言うのと再びビルドストライクバーニングを狙い、ショットガンを乱発する

しつこい野郎だ！食らえ！

ユウキはケンプファー目掛けてビームライフルから数発撃つが、

モブC「甘い！甘い！」

ケンプファーはそれを避け今度は

モブC「これでも、くらえ！」

ケンプファーの腕からは榴弾、足からは脚部に装備された使い捨ての携帯型ロケットランチャーをユウキ目掛け撃ち尽くした

くっ！… 避けるしかない…！

ユウキのビルドストライクバーニングはスラスターが許す限り、バツクパツクでの回避行動を行う

モブC「まだまだあるぜえ!!!」

しかし、モブCのケンプファーは攻撃をやめる気配はない

スラスターゲージももう無い…！クソ！

ユウキはある程度のダメージを覚悟しながらスラスターの移動をやめ、ビームサーベルに持ち替えると、

自分を狙うロケットランチャー目掛けて突っ込む

うおおお!!! これと！ これと！ これだ！

的確にシュトルムファウストのロケットランチャーをビームサーベルで斬り、回避する

モブC「そろそろきついんじゃないかあ!… あれ?あれ?」

モブCはここに来て弾切れになり、これ以上の射撃は不可能ということを知る

モブC「しょうがねえな…！突っ込むか！」

モブCは射撃による攻撃を諦め、両手にビームサーベルを持ち、ビ

ルドストライク目掛けて加速する

ようやく射撃の玉が底をついたか……！今なら！

ユウキは今度はビームライフルへと持ち替えて、

ケンプファーを狙いながらの射撃を行う

モブC「うお！危ねえ……！こうなりやアレ使うか……」

モブCはそう呟くと、ユウキへと使うのをやめてどこかへ去る

逃げる気かよ……！そうはさせねえ……！

ユウキは逃げたケンプファーの去っていった方へと向かった。

モブC「かかったな！喰らいなあ！」

男のケンプファーはどうやら逃げたように思わせ、ビルドストライクを誘導していたようだ

ケンプファーはバツクパツクのジャイアントバズに手をかけ、ビルドストライク目掛けて撃ち尽くす

これはまずい……そう思ったユウキは回避行動を取るが、脚部にジャイアントバズの一撃を食らってしまった

何!?ダメだ動けない……！

脚を損傷し、立つこともままならないビルドストライクは膝をついてその場にしゃがむ。

モブC「これで……終わりだア！」

ケンプファーはもう一度両手にビームサーベルを握り、ビルドストライクを狙いに行く

その瞬間……

「簡単には倒させないよー！」

ケンプファーは背後から何者かによる射撃を喰らい怯んだ

「大丈夫か!?主殿ー！」

「大丈夫ー!?ユウキ君?」

ミサ……！ロボ太……！ナイスタイミング！

ユウキは仲間の登場に安堵する

モブC「この野郎……！食らえ！」

ケンプファーは今度はミサのアザレアパワードへ向け、ジャイアントバズの攻撃を行おうとするが、

「そうは、させぬ!!!」

小柄な機体を活かし、かなりの早さで距離を詰めたフルアーマー騎士ガンダムはケンプファーに対して剣を振るった

「EXアクション！ 炎の剣！」

フルアーマー騎士ガンダムの持つ剣からは炎が放たれ、ケンプファーはそれをまともに喰らい怯む

「今なら!!!」

ミサのアザレアパワーはケンプファーに物凄いスピードで距離を詰めてビームサーベルの一撃を食らわせる

モブC「クソがア！」

2機分のダメージを喰らいモブCのコックピットは赤く点滅し始める

ケンプファーはビルドストライクからそれ程離れてはいない……つまり、今なら……

何かを思いついたユウキはバックパックを変形させ、怯み動けないケンプファーへ向けて、大型ビームキャノンの一撃を食らわせた

モブC「ちくしようがああああ!!!」

モブCのケンプファーは爆発し、コックピットにはGAME OVERの文字が現れる

やったぜ……！ サンキュー！ ミサ！ ロボ太！

ユウキは自分の窮地を救ってくれた2機へと感謝の意を表した

……………

Bブロック

「流石はジャパンカップだ、普通のプレイヤーよりは強いけど……まだまだだね」

レンのビルドゴッドバーニングはモブDのジ・Oに対して蹴りを食らわせる

「私のジ・Oがあー！」

モブDは蹴られた反動で地面へと叩きつけられ、上半身と下半身がバラバラになりパーツアウトしてしまう

「はあああああ!!!」

ビルドゴッドバーニングは追い討ちをかけるように、ジ・Oの上半身のブーツ踏みつけて、モブDはGAMEOVERとなる。

モブE「良くも仲間おお!!」

赤色のキュベレイがレンの背後からビームサーベルで襲いかかるしかし、ビルドゴッドバーニングはその一撃を手で止め、そのまま力を込めて赤色のキュベレイの両腕をもいだ。

モブE「私のキュベレイの腕がア!!」

今度は、そう叫ぶモブEの赤色のキュベレイの頭を掴んで、

「EXアクション…！爆熱！ゴッドフィンガー!!」

EXアクション 爆熱ゴッドフィンガーを喰らい、キュベレイの頭はゴッドガンダム拳を覆う液体金属のエネルギーで融解される

モブF「ひ、ひい…！」

それを見ていた仲間の黒いZガンダムは怯える

モブEはレンの一撃により撃破されてしまい残されたモブFの黒いZガンダムはレンへとハイパーメガランチャーを放つが、

「遅い…！」

放たれた一撃を避け、モブFのZガンダムへ向けて距離を詰める
と、コックピット目掛けて右腕の一撃を食らわせた

力を込めた右腕はZガンダムを貫き、Zガンダムは爆発する

モブF「う、うわあああ!!!」

モブFのコックピットにもGAMEOVERの文字が現れる

「ユウキ、必ず君なら僕を楽しませてくれるはず…！ だから、負けるなよ！」

レンはそう呟くと次なる相手を探しその場を離れた

……………

「さあ！残り時間は残りわずかとなりましたが、各ブロックでは変わらず熱い戦いが続いております！」

MCハルは熱く実況する

「遂に今宵！日本で一番強いガンプラチーム決まるのです！さあ！ミスターガンプラ！この戦いをどう思いますか？」

ハルは解説のミスターガン普拉へと話を振った

「各ファイターは昔と変わらずに熱いバトルをしてるね！決勝が今から楽しみだ！さあ！ガン普拉ファイターズよ!!!心の底からガン普拉を楽しみたまえ!!」

ミスターガン普拉による一言で会場は沸く

流石は世界初のガン普拉ファイターのプロだ

しかし、そのミスターガン普拉を快く思わない青年が画面越しにミスターガン普拉を睨む...

「チャンプ、貴方は何を...」

金髪の青年がジャパンカップの映像を見つめる

「何かありました？ウイル坊っちゃま」

ウイル... そう呼ばれた金髪の青年にメイド服を着た女性は問う
「別に... ちよつと見覚えのある人間が見えたように覚えただけさ...」

「それより、この店舗の売上が悪い様だけど何かあったのかドロシー？」

ウイルはドロシーという名のメイドに問う

「彩渡商店街前の店舗ですね、どうやら彩渡商店街では珍しい方法で宣伝をしているとか...」

「珍しい方法...？」

ウイルは再びドロシーに質問をする

「どうやら商店街名のガン普拉バトルチームを作り名前を宣伝しながら勝ち進んでいるようです」

「ガン普拉バトル...！」

ウイルはガン普拉バトルというワードに反応する

「... ドロシー、至急日本行きチケットを取ってくれ...」
「了解しました」

ドロシーは足早に部屋から去っていく

「チャンプ...！ 貴方は一体なにを...」

.....

「お疲れ様ー！ユウキ君！」

ミサはユウキにコーラを渡す

ありがとう・・・ミサ

ユウキはミサにお礼を言いコーラを飲み始めた

ミサ、次のルール聞いたか？

「？まだ知らないけどチーム戦じゃないの？」

ミサはオレンジジュースを飲みながらそう答える

次はどうやら、チームから1人が代表で闘うソロマッチらしい・・・

ユウキはミサに次のベスト8決定戦のルールを伝えた

ベスト8決定戦、今大会から採用されたルールで各チームから1人が代表として戦い、勝った方がベスト8となり準決勝へと進めるルール。

1人だけの選手に考慮し、今大会から採用されたようだ

「で？肝心の相手は？」

ミサはユウキに次の対戦チームを尋ねる

それが・・・レンだ・・・

ユウキの口から聞き慣れない名前が出てくる

「レン・・・？ユウキ君の友達？」

レンにあつた事のないミサはユウキに誰か尋ねた

あ、そうか・・・ミサはレンと会ったことないのか・・・

そう呟いたユウキはミサにレンの事について話し始めた

.....

「えーっ！次の相手そんなに強いのか？」

ユウキからレンの恐ろしさを聞いたミサは、

驚きの声を上げる

そこでだ・・・ 次の試合、俺が出る！

ユウキはミサに対してそう宣言した

「話聞く限りめっちゃくちゃ強そうだけど・・・ユウキ君大丈夫？・・・」

ミサは不安気な声でユウキに尋ねた

俺も不安だ・・・ だけどここで負けるわけには行かない！

俺は必ず勝つ！　そしてジャパンカップを優勝しよう！

ユウキはいきなり立ち上がり、対レンへ向けて、決意した顔だ
「分かった．．．！ユウキ君！任せたよ!!」

ミサはユウキに対し、全てを託すようだ

ああ！絶対勝つ．．．！待ってる！レン！

ユウキはレンを倒すと決意し拳を握る

続く

ガンダムブレイカーズ 第19話 ぶつかり合う2
つのストライク

シユミレーター内では、レンとユウキが待機していた

「さあベスト8決定戦！これに勝てば準決勝へと進むことができます
！まず最初の試合は彩渡商店街ガンプラチーム代表、ユウキ選手と今
回1人での参戦、レン選手となります！」

MCハルは大きな声で2人の紹介を始める

「ユウキ君：：！君の戦い：：見せてもらおうぞ！」

ミスターガンプラはユウキを見てそう呟いた

「ユウキー！頑張れー！」

「応援してるわよー！」

応援席には兄のユウトと親戚のレナ姉が座っている

…？まさか？

「兄貴ー！頑張れー！」

「ユウキ！頑張るなさい！」

「諦めるなよ！ユウキー！」

兄のユウトの隣には弟のユウシと母と父が座って応援している

どうやらジャパンカップという事もあり地元からわざわざ応援し

に来たようだ。

父さん：：！母さん：：！ユウシ：：！

俺：：！頑張るぜ！

ユウキはシユミレーター内でそう呟いた

「ユウキ君ー！任せたよー！」

「ユウキー！慎重にいけよ！」

「ユウキー！ユウキー！」

ミサ、ミライ、マモルもユウキを応援する

「ユウキ、君と戦うのを心から待ち望んでたよ。今日はお互い、いいバ

トルにしよう！」

ああ……！レン！俺は負けないぜ！

ユウキとレンはそれぞれ自分のガンプラを置き、スキャンする
出撃カタパルトにはそれぞれの機体が現れ、いつでも出撃できる状
態だ

ふう…… 行こうぜ、ビルドストライクバーニング！

ユウキは深呼吸をして、出撃体勢に入った

ビルドストライクバーニング ユウキ、行くよ！

ビルドゴッドバーニング レン、出る！

2機のガンプラは射出され、飛び出す

今回のステージは砂漠地帯

身を隠すものなどはそんなに無く、隠れながら戦うことは難しいだ
ろう

着地して早々、レンのビルドゴッドバーニングはユウキ目掛けて一
気に距離を詰める

速い……！けど俺も！

ビルドストライクはビルドゴッドバーニングへ向け、ビームライフ
ルによる射撃を放つ

「当たらないよ……！」

レンはそう呟くとユウキのコックピット目掛けて右腕を突き出す
させるか……！

ビルドストライクは腰からビームサーベルを抜き、

右腕でビームサーベルを握り、コックピットを目掛けて突き出して
来る右腕を斬ろうと試みた

「何!？」

レンは突き出した右腕に対して切りかかるビームサーベルを左手
で止めた

……！流石レン……！

ユウキは頭からバルカンを撃ちながら、後ろに下がる

「くっ…！バルカン攻撃！だけどそんなんじや俺は倒せない…！」

バルカン攻撃を右腕で守り、レンはそう呟く

後ろに下がったビルドストライクバーニングは再びビームライフルに持ち替えて、ビルドゴッドバーニングへ向けて射撃を行った

「成程な…！そっちがその気ならこっちは！」

レンはビームライフルでの射撃を行うビルドストライクへ向け、再び加速する

来るか…！ならもう一度…！

ビルドストライクはビームライフルは捨て、腰から再びビームサーベルを抜く

今度は二刀流だ

「はあああああ!!!」

ビルドゴッドバーニングから放たれる素手による素早い一撃にユウキのビルドストライクは両手に持ったビームサーベルで対応する

「ビームサーベルでいつまで対応出来るかな…！」

レンはそう言うと言の動きを速める

容赦ないゴッドガンダム腕による攻撃

ビルドストライクはビームサーベルで弾き返すのが精一杯だが、何度弾き返してもビルドゴッドバーニングはやめる気配はない

くっ…！速い…！

ユウキのビルドストライクもビームサーベルの対応を速めるが、

「隙見つけたぜ!!」

動きが鈍り出した所をビルドゴッドバーニングに見破られ胴にゴッドガンダム腕による一撃を許してしまった

うわああああ!!!

胴に一撃を喰らったビルドストライクは吹き飛ばされてしまい軽いショック状態に陥る

「今なら…！バーストアクション…！」

レンのビルドゴッドバーニングはバーストアクションの構えに

入った

アレを喰らえばまずい……

そんな事は過去にユウトと戦った際に知っている上、レンのバーストアクションの恐ろしさもこの目で見たので理解はしている

しかし、体が動かない

レンの一撃は凄まじいことを表していた

「ユウキー！負けるなー！」

「立ち上がりなさい！」

応援席からユウトとレナ姉の音がする

「兄貴ー！」

「ユウキー！まだ終わりじゃないわ！」

「立ち上がれー！」

更には家族の声

「ユウキ君ー！」

「まだいけるだろ！ユウキ！」

「ユウキー！ユウキー！」

更に自分に託してくれたミサや仲間の声

そうだ……！俺はこんな所で立ち止まれない……！

立ち上がれ！ビルドストライクバーニング！

掛け声と共に動きを取り戻すユウキのビルドストライクバーニン

グ

「今更遅いよ……！食らえ！石破天驚拳!!」

レンのビルドゴッドバーニングからバーストアクションが放たれる

俺は……！諦めない……！応援してくれる皆の為に！俺に託してくれた仲間の為に！

俺の気持ちに伝えてくれ！ビルドストライク!!

するとユウキの声と共に、

ビルドストライクバーニングは赤く光り始めた

「ユウキ君……やはり君は……！」

ミスターガンプラは覚醒するユウキの機体を見てそう呟いた
まだまだここからだ…！

覚醒したビルドストライクバーニングはバツクパツクを變形させて、ユウキを目掛け飛んでくる気孔弾へ向け、大型ビームキャノンの一撃をぶつけた

ドオオオオオオオオオオオンンンンン！！！！

砂漠地帯はぶつかり合う2つの衝撃により爆煙が起こり辺りを包み始めた

同時にレンとユウキの機体は衝撃で後ろへと飛ばされていく

煙が晴れる

そこには互いにボロボロになったビルドストライクが立っていた

はあああああ！！！！

「うおおおおおおお！！！！」

煙が晴れると同時に加速し

ぶつかり合う2機のビルドストライク

それぞれの、機体は多少違えど負けられないと言う意志に違いなどない

「ユウキ…！君のビルドストライクから感じる力は凄まじい…！
だけど…僕も負けてられない！！！」

レンのビルドゴッドバーニングはビルドストライクバーニングへと距離を詰め、

ユウキ目掛け、左腕で殴りつける

素直に…やられるかああああ…！！！！

ユウキはそう叫ぶと、ビルドストライクバーニングはレンのビルドゴッドバーニングへ向け左腕をぶつける

はあああああ！！！！

「うおおおおおおお！！！！」

ぶつかり合う2機の左腕は両方とも弾け飛ぶ

左腕位…！

「くれてやる…！」

ユウキとレンはそう言うと、今度は互いに右腕をぶつけ合った
ぶつかり合った際に起こった衝撃は風を起こし、辺りに今度は砂煙
が舞う

互いに勝利を譲る気の無い2機のぶつかり合いを会場は固唾を飲
んで見守る

ユウトやレナ姉、ミサやミライにマモル達もただ見守る事しか出来
ない

「最強は…！！！！」

俺の…！！！！

「ガンプラだあああああ！！！！」

右腕をぶつけながらそう叫ぶ2人、その後

レンの機体は赤く光り出す

覚醒だ…

絶対に負けたくない、その思いがレンも覚醒させた

「ユウキ…！！！！」

レン…！！！！

互いに名前を呼び合う2人

どうやらこれで決める気のようなだ

「うおおおおお！！！！」

レンのビルドゴッドバーニングは再び右腕に出せる力を全てかけ
る

はあああああ！！！！

それはユウキのビルドストライクバーニングも同じだ。

絶対に負けられない…！

力を貸せ！！ビルドストライクバーニング！！！！

ユウキはそう叫ぶと更に右腕に力を入れる

すると、ユウキのビルドストライクバーニングは七色に光出した
レンという強敵との戦いを経て、覚醒のシステムは更なる進化を遂

げた

進化した覚醒の力を得た、ユウキのビルドストライクバーニングは次第にレンの機体を圧倒する

「負ける訳には…!!!行かない!!!」

レンもまだ負ける気はない

ビルドゴツドバーニングは更に右腕へと力を込める

ピシツ…

耐えられなくなったゴツドガンダムの腕は音を上げ、亀裂が入り始めた

「何…!?!」

突然の事にレンは思わず声を上げる

現状右腕にはかなりの力が籠っており、両方ともいつ壊れてもおかしくないこの状況

更に言えば、レンの機体は拳法で闘うために、腕へのダメージは蓄積していた

声を上げるレンに対して、ユウキはそれを見逃さなかった

ユウキは更にビルドストライクの腕に力を込め始める

いっけえええええええ!!!

ユウキはそう叫びながら更に右腕に力を込める

更なる力を込めたビルドストライクバーニングにより、

ビルドゴツドバーニングの腕は限界を迎え、粉々になった

「そんなあ…!!!」

遂に両腕を失うビルドゴツドバーニング

勝ちを確信したユウキは、

貰ったあああああ!!!

そう叫び、ビルドストライクは腰からビームサーベルを取り出すとレンの機体を目掛け、切りつけた

両腕を失い、防ぐ手段を失ったレンはその一撃を喰らう他ない

「楽しかったよ…ユウキ…!」

ああ…!こつちこそ…レン…!!

ユウキはそう答えると、ビームサーベルに力を込めて、ビルドゴツ

ドバーニングを真つ二つに切りつけた

ダメージを負い、爆発するビルドゴッドバーニング。

ユウキは長時間に及ぶ戦闘の末、勝利した

「負けた…けど、なんて清々しいんだろう…」

レンはGAMEOVERと表示された画面を見つめ、そう呟いた

.....

「ユウキ… 次も頑張れよー」

ああ… 絶対優勝してみせるぜ…！

レンとユウキはそう言うと、互いに強い握手をする

意志と意志のぶつかり合いをした2人の間に友情が芽生えた

「ユウキ君ー!!!」

向こうにはこちらに手を振っているミサ達が見える

今行くよー!

ユウキは手を振っているミサ達の方へそう叫ぶ

「じゃあね、ユウキー」

そうユウキに言い、レンは会場を後にしようとする

またいつか… また一緒にガンプラバトルしようなー!

ユウキは去っていくレンの背中を見てそう叫んだ

「ああ…！必ずだぜ!!」

レンは振り返って拳を握り、ユウキの方へ突き出す

ユウキも同じ様に、レンの方へ拳を突き出した

「最強は…！」

「俺のガンプラだ!!」

レンとユウキは二人でそう大声を上げ、笑った

.....

去っていくレンの後ろ姿を見つめ、

ユウキは再び

最強は俺のガンプラ、か…

そう呟いた。

次は決勝… 俺は絶対に負けない…！

ユウキは更にそう呟くと、ミサ達の方へと向かった

続く

ガンダムブレイカーズ 第20話 覚悟

ユウキとレンの別れの間、会場では第二試合が始まっていた。双子の兄弟で出場したカケルとケンタのチームと、レンと同じく1人での参加者、ゲンによる第二試合

「どこだ？どこだー？逃げてでも無駄だぜえ!!」

ゲンは逃げたカケルの機体を探す

「まあ隠れるなんて無駄だがなあ!!この俺様のアルティメットジョングからはなあ!」

ゲンの機体 アルティメットジョングは辺りを探す

.....

アルティメットジョング ゲン仕様

頭 ジオング

胴 ジオング

腕 クシャトリヤ

脚 パーフエクトジョング

バックパック ローゼンズール

腕にはビルダーズパーツでダブルガトリングが付いており、更にオプション装備はファンネルやサイコ・ジャマー、腰にはメガ粒子砲が付いているなど装備は充実している。

カラーは全身にローゼンズールの色を使っており、所々金色が見られる

.....

「はあああああ!!!」

カケルは背後の岩場から飛び出し、アルティメットジョングの背後を目掛け、ガーベラストレートの一撃を御見舞する

が...

「ようやく出てきたかあー！これでも食らええー!」

アルティメットジョングはカケルの機体、アストレイレッドフレームカスタムに向け、サイコジャマーを放つ

.....
アストレイレッドフレームカスタム カケル仕様
頭 アストレイレッドフレーム
胴 アストレイブルーフレームセカンドリバイ
腕 アストレイブルーフレームセカンドリバイ
脚 アストレイレッドフレーム改
バックパック アストレイレッドフレーム改
双子の兄弟の兄、カケルが使用する機体
アストレイレッドフレームをベースとしており、
ブルーフレームセカンドリバイのパーツなどを使っている
カラーは赤と白を使っている
.....

「何?」

アルティメットジオングから放たれたサイコジャマーを喰らい、カケルの機体は動きが制限される

「いいねえ...!これで終わりとしようじゃないかあ...!」

ゲンはアルティメットジオングを動かし、動きが制限され思ったように身動きの取れないカケル目掛けて、スラスターで加速する

アルティメットジオングは腰の剣を抜くとアストレイレッドフレームカスタムを何度も切りつける

「く...!!」

今だに動きが制限されるカケルの機体は防ぐ事もままならない

このままじゃやられる...!カケルの脳裏にはGAMEOVERの文字が過ぎった

「さて、これで終わりにしようかあ...!」

アルティメットジオングは一旦後ろへと下がろうとする

恐らく、メガ粒子砲を放つ為だろう...

「...!今なら動ける!それに...今ならジオングは隙だらけだ!!」

サイコジャマーから解放されたカケルのアストレイレッドフレームカスタムは腰からガーベラストレート タイガーピアスを抜き、

後ろへと下がろうとするアルティメットジオングへむけて一気に距離を詰めた

「なんだとおおおお?!?!?」

サイコジャマーが切れた時のことを考えていなかったゲンは焦るしかし、カケルは止まらない

アストレイレッドフレームカスタムから放たれるガーベラストレートとタイガーピアスによる連撃を食らったアルティメットジオングは腕がパーツアウトとした

「ぐぬぬ…！各なる上は…!!」

両腕を破壊されたアルティメットジオングは体勢を立て直し、アストレイレッドフレームカスタム目掛けて、頭からメガ粒子砲を放つ

「遅い…！」

カケルは間髪それを避け、アルティメットジオングへ前進すると、バックパックを変形させてソードフォームへと変えた

「行っけええええ!!」

ソードフォームとなったタクティカルアームズの連続攻撃を喰らったアルティメットジオングは耐えきれず爆発

「やったああああ!!!」

カケルはアルティメットジオングが爆発したのを確認すると大喜び

手からはガーベラストレートとタイガーピアスが落ちる

「まだ…！終わりじゃねえ!!!」

爆発したはずのアルティメットジオングからはゲンの声がする

すると、爆煙の中から頭だけになったジオングが姿を現し、カケルの機体に狙いを定めて頭からメガ粒子砲を放った

「しづとい奴…!!!」

カケルはアストレイレッドフレームの頭からバルカン攻撃を行うが、頭だけとなり身軽になったジオングはそれを楽々と避ける

「ギャハハハ!!!当たらねえよそんな攻撃イー！」

ゲンはそう笑いながら、再びメガ粒子砲を放つ

「危ない！」

カケルは再びそれを避けるが、

このままでは埒が明かない…。そう思ったカケルは再びタクティカルアームズを変形させた

「身軽になったこの俺に！ソードフォームの一撃なんて当たるもんか!!!ギャハハハ!!!」

「いいや、ソードフォームじゃない…。！」

カケルはそう呟くと、タクティカルアームズIIをアローフォームへと変えた

「これなら…。！お前を…。!!」

アストレイレッドフレームカスタムはアローフォームへと変形させたタクティカルアームズを弓矢の撃ち方のように構え、頭だけとなったアルティメットジオングへ数発撃ち放った

「な、なんだとおおおお!!!」

まさかの変形に驚き、動きの鈍くなったゲンのジオング頭をタクティカルアームズから放たれた一撃が貫く

「この俺の…。アルティメットジオングがあああああ!!!」

ゲンのアルティメットジオングは今度こそ爆発し、コックピットにはGAMEOVERの文字が現れた

「よっしゃあああ!!!ケンターー！見てたかー！」

カケルはシミュレーター内のコックピットから、

弟のケンタへと喜びを表した

.....

その後も数試合、熱い戦いが繰り広げられた

「さあ！遂にジャパンカップ ベスト8が決まりました！」

「こちらが今回ベスト8へと決まった8チームです！」

MCハルは元気よく、ジャパンカップベスト8を公開した

彩渡商店街ガンプラチーム

速水兄弟ガンプラチーム

カワサキモーターズガンプラチーム

沖繩宇宙飛行士訓練学校ガンプラチーム

鹿児島口ケツトガンプラチーム

山口電工ガンプラチーム
新手鉄鋼ガンプラチーム
早崎電鉄ガンプラチーム

「以上の8チームがベスト8となります!!」

「ベスト8となったチームは、次の準決勝で総撃墜数の多い上位4チームが決勝へと上がることが出来ます!!」

「という訳で1時間後に準決勝を行います!それまでに出場選手の皆様は準備をお願いします!」

MCハルの一言と共にベスト8の選手は一時間後の準決勝へ向け、準備を始めた

.....

ユウキとミサは一時間後の準決勝の為に、控え室で最終調整中だ
ユウキのビルドストライクバーニングはレンのビルドゴッドバーニングとの戦いで腕や胴などが傷つき、過去にストライクガンダムを使っていた時のビルドストライクガンダムの腕パーツ等を使い、普通のビルドストライクガンダムへと戻していた
「それにしてもきつきの戦い凄かったね!ユウキ君!」

ミサはアザレアを弄りながらそうユウキに話す

確かに... さつきは体の底から力が溢れ出てくる感覚がした...

アレが進化した覚醒...

「凄いよ... ユウキ君は... 一部のプレイヤーにしか使えない覚醒
使えちゃうし... なんか、どんどん先に行かれちゃう感じがする
なあ...」

ミサはそう呟く

ミサはいつの間にかどんどん進化を遂げていくユウキに対して、自分との差を感じていた

そんな事ないよミサ、ミサだつて強くなってる

それこそ予選の時だつてミサが居なかったら確実に俺はあのケン
プファーにやられてた...

それだけじゃない... ミサ達の応援が無かったら俺はレンとの戦いで覚醒出来ずに諦めてたよ

ミサがいるから俺はここまでやってこれたんだ
ユウキはミサに対してそう語る

自分で言って何だか恥ずかしくなってきた…

「ユウキ君…！ そうだよね… 私も強くなる！ 何時か必ずユウキ君を超えてみせる!!」

ミサは元気を取り戻した

いつもはミサに励まされてばかりのユウキ

今度はミサを励ますことが出来た

戦いを経てこの2人のコンビは更に成長していたのだ

「なあーお前がユウキって奴か?」

そんな2人の背後に青みのかかった髪青年が話しかけてきた
え?… ああそうだけど…

君は…?

ユウキは青年に対して聞き返した

「俺の名はツキミって言うんだ! さっきは見たぜ! ビルドバーニングとビルドストライクの戦い! 俺思わず興奮したぜ!」

そう語るツキミ

更に机の上にあるロボ太を見つけると

「うおおお! これが噂のガンプラバトルも出来るトイボットか!!
前にニユースで見た以来お前達と会って見たかったんだよ!」

更にツキミは熱くかたまった

なんだこいつは… 2人はそう思った

「あ…ここにいたのツキミ!」

ツキミの背後からミサとユウキと同じ位の少女が現れる

「ごめんね? 同い歳のファイターがあんまりにも珍しいからって控え室から飛び出して行ったの…」

私の名前はミソラ… よろしくね!」

少女はミソラと名乗り、丁寧に挨拶した

「わ、私はミサ! そしてこの隣の子がユウキ君!」

こ、こんちわ…

いきなりミサに名前を紹介されたユウキは細々と挨拶した

「準決勝では相手だが、手を抜く気は無いぜ！」

ツキミはそう語る

この2人は準決勝の相手、沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチームのメンバーの様だ

なるほど、次の相手か……俺も同じ手を抜く気はない！

俺のビルドストライクガンダムの強さ見せてやるぜ！

ユウキは右腕でビルドストライクガンダムを掴み、ツキミ目掛けて差し出した

「おもしれえ……！準決勝楽しみにしとくぜ！じゃ！最終調整してくる！じゃあな！」

ツキミは満足そうに言うのと、控え室に戻っていく

「ちよ！ツキミー！ ツキミが突然押しかけてごめんね！じゃあね！」

ミソラもツキミを追いかけて控え室へと戻って行った

「ユウキ君とツキミ君何だが相性よさそうだね！」

ミサはそう楽しそうにいうと再びアザレアの調整に戻った

初の8組による乱戦……ユウキにはどうなるか分からないが、とりあえず楽しもう……そう決意し、ユウキもビルドストライクガンダムの調整に戻った

続く

ガンダムブレイカーズ 第21話 操られた大会

ベスト8決定戦から一時間後

出場選手は最終調整を終えて準決勝を今か今かと待ち構えていた。

「ユウキ君… 絶対勝って決勝に行こうね…！」

「ああ…！行こう、ミサ！」

2人も控え室での最終調整を終え、会場へと向かおうとする

「カドマツさん、行ってくるよ！」

ユウキはカドマツにそう伝えると控え室を後にした

「あいつらなら絶対やるはずだ…！」

カドマツはそう呟くと控え室を後にする2人の背中を見つめた

「さあーて、俺も大会の様子を見るとするか…！」

カドマツはそう言うのとPCを立ちあげた

……………

「うう… まだ準決勝だけど何だが緊張するね…！」

「ああ… けどどこかを越えれば決勝だ… その為にもこの戦いは絶対に負けられない！」

「そうだね…！ユウキ君！頑張ろ！」

「当たり前だ！」

ユウキとミサはそうお互いを元気づけ、シミュレーターへと入っていく

「ロボ太？調子はどう？」

「良好だ！ミサ、それに主殿！」

「よし！行くぞ！二人共!!！」

「おおーう！」

ユウキのかけ声にミサとロボ太は答える

これから起こる事も知らずに…

「さあーベスト8に選ばれた8組による準決勝が始まります！総撃墜数の多い上位4組が決勝へと進めるこのバトル!!勿論、途中でGAM OVERになった時点で敗退となります!!!解説のミスターガンブ

ラ！スタートのかけ声をお願いします！」

MCハルは解説のミスターガンプラに振った

「さあ……ここまで勝ち進んだファイターの諸君！決勝へと進む為！力の限りを尽くしたまえ!!ガンプラファイター！レディーゴー!!」

ミスターガンプラの一言により始まったジャパンカップ準決勝、この時誰もが熱い戦いが始まる…… そう思ったはずだ。

しかし、その予想を裏切る事態が起こる

「??停電…… でしょうか……」

突然会場の電気が全て落ち、会場は暗闇に包まれる

会場は当然パニック

観ていた観客はザワザワし始めた

「観客の皆さんー！落ち着いて下さい！今スタッフが確認中です！危ないのでその場からは動かないで下さいー！」

MCハルはザワザワし始めた観客に対してそう促した

「どういう事だ…… 一体何なんだ……」

控え室でパソコンから準決勝の様子を見ていたカドマツは事態のおかしさに気づき始める

「まさか……！……これはまずい…… 確かあいつらの知り合いがいたはず…… ちよつと協力を仰ぐか……！」

カドマツはそう呟くとパソコンを手に、控え室を飛び出した

暗闇となった会場は依然として電気は付かない

どう考えても何かおかしい…… ただの停電ではないと観客は薄々感づき始めた

「一体何が起こってるの……」

MCハルもただただ立ち尽くす他ない

すると突然、会場のディスプレイに明かり灯る

「コレハ、ワレワレカラノ チョウセンジョウ」

電子音の様な声が会場の大きなディスプレイから文字と共に流れ始めた

「挑戦状……？何だあれは……？」

ミライはディスプレイに現れた文字を見てそう呟いた

「ハアハア… 見つけた…！おまえら、確かアイツらの知り合いだよな？」

カドマツは走ってきたのだろうか、ハアハア言いながらミライとマモルに話しかける

「ええ… そうですが…」

「知り合いじゃなくて親友だ！」

「マモル… 今はそんな事なんてどうでもいいよ… それより、何かあったんですか？…」

ミライはマモルを窘め、カドマツにそう尋ねた

「何かあったなんてレベルじゃない！ちよつと来てくれ！」

カドマツはユウキとマモルを呼び、付いてくるように指示した

「お前らはちよつとここにいろ！すぐにまたここに来る！」

カドマツは2人を待機させて、またどこかへ走っていった

「やはり何かがおかしい…」

マモルは走った事でずり落ちたメガネを中指でクイツと上げた

「ああ…！何かユウキ達がやばい事に巻き込まれた感じがするぜ！」

「君にしてはなかなか鋭いね… 僕も同感だ」

2人はそう言い、カドマツが戻ってくるのを待った

「挑戦状…？一体何事ですかあ??」

ハルはディスプレイの文字を見てそう言った

「ハアハア… 大変だ！ちよつと貸してくれ！」

カドマツはステージへと登り、MCハルからマイクを奪う

「今！準決勝を行うはずだった8組のプレイヤーは人質の様な状態に取られている！俺も驚きだが… どうやらシユミレーターか、それか… 何かしらのシステムが今流行りのコンピューターウイルスによつてやられた！」

カドマツはマイクで今起きている状況を伝える

「ここで俺は今からこのコンピューターウイルスを取り除く… だがそれにはファイターの力が必要だ！今使えるシユミレーターは幾つある？」

「スタッフさん！……未使用のシユミレーターが今4つあるそうです！」

「四つか……！今これを聞いているファイターの中で2人程力を貸して欲しい！」

カドマツは会場にいるファイターに対し、そう語る

「力を貸してくれる奴は2人程このステージの裏側に来てくれ！但し腕に自身がある奴だけだ！これ以上シユミレーターを失う訳には行かない！俺からは以上だ！」

カドマツはそう言い切るとマイクをハルに返してミライとマモルの待つステージの裏側へと向かった。

「どういう事ですか？ユウキ達が人質状態って……」

ミライはカドマツに問い詰める

「恐らく……シユミレーターか大会のシステムか何かがコンピューターウイルスに感染した影響でシユミレーターのシステムがロックされて、8組はシユミレーターから出る事が出来ない……！だからお前らには今からそれを取り除いてもらう！」

「だけど……俺たちウイルスの取り除き方なんて聞いたことねえ……」

本当にやれるのか……」

マモルは不安げな表情だ

「安心しろ、ウイルスの除去はお前らが一番得意な方法で行う」

「得意な方法……？まさか……！」

「そのまさかだ……！今から準備する！シユミレーターの前で待つとけ！」

カドマツはニヤリと笑いながらふたりをシユミレーターの前へ行くよう命じた

「後は2人……誰が来るかだな……！」

「俺達がやるよ！」

「ユウキ達を助ける為だわ！」

カドマツの背後から2人の男女が話しかける

「あんた達は……」

「ユウキの兄、ユウトだ」

「ユウキの親戚、レナよ」

ユウトとレナは自分達がウィルスの除去に手を貸すと現れた

「わかった…！今から始める！二人共シュミレーターへ行ってくれ
！」

「分かったぜ！」

「了解したわ！」

2人はミライ達のように唯一使える四つのシュミレーターへ向かった。

「いい仲間を持ったもんだな…！アイツらは…！」

カドマツはそう笑いながら呟き、パソコンを立ち上げ準備を始めた
「準備が出来た！全員シュミレーターに入ってくれ！」

カドマツのかけ声により、4人はシュミレーターに入っていく

「ユウキ、ミサちゃん…待ってる…！」

「無事でいなさいよ…ユウキ…！」

ユウトとレナはシュミレーターに入り、そう呟くと自分のガンプラ
をセットする

「必ず助けに行くよ…！」

「このバトル制してみせる!!」

ミライとマモルも自分のガンプラをセットした

セットされた4機は現れ、コックピットの画面は目の前の射出口を
写す

「エクシアセブンスードG ミライ、出る…！」

「AGE3フルアーマーフォートレス マモル、行くぜ！」

「XXインパルス ユウト、出るぜ！」

「ローゼンジャステイス レナ、出るわ！」

4機は射出され、戦場へと飛び出した

ここは宇宙空間だろうか…

周りには浮遊する隕石などが見える

その向こうには…大量の黒いガフランやジンクスが待っている…
…

「なんて数だ…！見えるだけでも100機以上はいるぞ…！」

あまりの数にミライは驚きの声をあげた

「そいつらはウイルスをガンプラに見立てた奴だ。お前達にはそいつら全てを駆逐してもらおう」

「つまりアレを全て殲滅すればいいんだろ！」

マモルのAGE3は3機の前へと飛び出した

「ユウキ達を助ける為だ！早速行かせてもらおうぜ！EXアクション!!!」

マモルのAGE3はEXアクション フォートレスフォアブラスターを放ち、4機へと近づいてくるジンクスやガフランを次々と一掃する

「へへーん！これが俺の新しい機体の力だぜ！」

マモルは何処か誇らしげだ

「俺たちも遅れを取るわけには行かないな！」

「そうね！」

ユウトとレナの機体もガフランとジンクスの群れへ向け、加速した
「レナ！ちよつとどいてろ！バーストアクション！」

今度はユウトがバーストアクションの構えに入る

しかし、背後からはガフランがユウトのXXインパルス目掛けて襲いかかる

「危ないわね!!!」

レナのローゼンジャスティスはガフランをビームサーベルで切り裂き、事なきを得た

「サンキューー！レナ！」

「全く！背後は任せなさい！」

レナの援護を受け、XXインパルスはバーストアクションの用意ができた

「これでも食らえ、ウイルス共！ツインサテライトキャノン!!!」

ガンダムダブルエックスのバックパックが変形し、リフレクターに収束させて充填した莫大なエネルギーを目の前のジンクス達へ向け、放った

「よっしやあー！」

目の前で大爆発を起こすジンクスの群れを見てユウトも誇らしげだ

一方こちらは6機のガフランに囲まれているミライのエクシア

「6機で来るなんて、僕を歓迎してくれるのかい」

するとミライのエクシアは両手に握ったバスターライフルを周りのガフランへ向け、回転しながら撃ち放つ

バスターライフルの一撃喰らった6機のガフランはその場で爆発した

「ふう… まだまだ暴れさせて貰うよ…！」

4機の活躍により、数を減らして行く敵機

「このまま行けば…！ お前ら！ その調子だ！」

カドマツは4機へ向けそう言った

「はあ！」

エクシアから放たれたバスターライフルの一撃を喰らい爆発するジンクス

「！…！ 何かが来る…！」

ミライのコックピットは敵が近づく事を表す警告音が鳴る

エクシアは振り返り、近づいてくる敵機を確認した

「そんな… あれは…！」

エクシアへ向け、近づいてくる敵機の正体…

それはビルドストライクガンダムだった

続く

ガンダムブレイカーズ 第22話 決死の救出作戦

一方こちらは8組のシユミレーター内

「ダメだ……！開かない……このッ！このッ！」

「ユウキ君……」

辛うじてシユミレーター内での通信だけは出来るも外部に連絡する事は適わず、シユミレーターの扉もロックされている

「絶対どうにかしたら出られるはずだ……！開け！開けよ！」

ユウキのシユミレーター内には何とかして出ようと、

肩をドアにぶつける音が響いた

……

「そこだ!!!」

ビルドストライクへバスターライフルを撃つエクシア

しかし、ビルドストライクはそれをシールドで吸収する

「チョバムシールドか……！どうやら完全に機体をコピーしたようだな……」

ミライはバスターライフルでの攻撃を止め、GNソードへと持ち替えて接近戦に切り替えた

「はあああああ!!!」

宇宙空間にビームサーベルとGNソードのぶつかり合う音が鳴り響く

「コピーを倒せない様じゃ…… ユウキはいつまで経っても超えられない……!! トランザム……」

「君には完全にコピー出来ないものがある……！」

ビルドストライクガンダム目掛けて、遠くからレーザー攻撃が飛んできた

マモルのAGE3だ……

「助かるよ……マモル！」

「へへん！」

想定外の方法からの一撃に怯むビルドストライクガンダム

「君が完全にコピー出来てないもの…それは…仲間の存在だ…!! トランザム…!!」

ミライはそう呟くと、エクシアは光だして目にも止まらぬスピードでビルドストライクの背後へと回った

「これで終わりだああああ!!!」

エクシアは背後からGNソードで胴目掛けて切り裂いた

ドオオオオンン!!!

エクシアの背後でビルドストライクガンダムは爆発を起こす

「それにしても厄介な事をしてくれるね… 例えコピーと言えど厄

介だ… 待てよ…!!」

エクシアは背後を振り返るとアザレアパウードがビームサーベルを構え、切りかかる

「しまった!!!」

ミライは咄嗟の行動で左腕で防ぐが、関節から先が切り落とされる「まさか…! そういう事か…! 全員聞いてくれ! 恐らくウイルスは幽閉された8組のシユミレーターにセットされたガンプラを利用してこちらに向かつてるようだ!」

「たった今… 交戦しました…! ビルドストライクは倒しましたがアザレアの一撃で左腕が…!」

「クソ! なんてことしやがる…! 恐らくだが… 何かしらの機体がウイルスの根源となってるはずだ! それを見つけて落とささえすればウイルスは抑えられる! 頼む…! どうか根源体を倒してくれ!」

「そう言う事なら私も参加させてもらおう…!」

突如として現れたガンダムが、ガフラン数機を撃墜した

「…!? 誰だ…?」

カドマツは驚き、声の主を確認する

「この声… まさか、親父…!!」

ユウトはその声の主に聴き覚えがある。

そうユウトとユウキの父親、ユウジロウだ

「ああ!! スタッフの人がまだ使えるシユミレーターを2つ程見つけて

くれてね！ガン普拉バトル…… 久々だが息子を助ける為だ……！私もやらせてもらおうよ……！」

「だから！我々が来たんだ！」

今度はマモルの機体の近くを見慣れないガンダムが通り過ぎ、ジンクスを墮していく

「アンタは確か……！」

カドマツは2人目に現れた男性の声に聴き覚えがあった

「ミサの父、ユウイチです……！ カドマツさん、我々に出来ることは……！」

ミサの父、ユウイチは自分の機体 ブルーデイスティニー3号機をベースに改造した機体で現れ、カドマツに問尋ねた

「今からウィルスの根源体となった機体を倒す！2人も同じように根源体らしき機体を落としてくれ！」

カドマツは2人に対してそう命じた

「行きましょう……！ユウイチさん！」

「ええ……！ユウジロウさん！」

2機はそう言うたガフランとジンクスの群れへと突っ込んでいった

………

ガンダムMK-IIII ユウジロウ仕様

頭 ガンダムMK-IIII (バルカンポッド)

胴 ガンダムMK-IIII

腕 シェンロンガンダム

脚 ガンダム試作3号機

バックパック V2バスターガンダム

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド ガンダムMK-IIII

ユウキ達の兄、ユウジロウがかつて使っていた機体

ジャパンカップが終わったらユウキ達と遊ぼうとユウキの実家から持参したが、突如起こった大会運営のウィルスの乗っ取りに対して使用し、息子を助けるために使う

「久々だが…腕は鈍ってないな！」

ユウジロウのガンダムMK―IIIから放たれたビームライフルの一撃はガフラン2機を貫通し、2機は爆発する

「親父…ガンプラバトルやってたのかよ…」

「何だ、別に良いだろ！さあ！レナちゃん！ユウト！ユウキを助ける為に行くぞ！」

ユウジロウは何処かノリノリだ

「ええ…！行きましよう！ほら！ユウト！行くわよ!!」

「つたく… さて、我が家の大黒柱が救援に来たことだ、行くか！」

3機は再びガフランとジnkクスへ向け、飛んでいく

「そら！食らえ！」

AGE3から放たれたシグマキスキャノンの一撃により、ジnkクスはどんどん爆発していく

「…！ 敵の登場って訳か…！」

マモルのコックピットに他のプレイヤーが近づく警告音が鳴る

「あれは…？プロヴィデンスガンダムか…？」

マモルがそう呟くと同時にプロヴィデンスガンダムはAGE3目掛けて射撃を行う

「っ！危ねえ!!」

「ハハハハ!!マサカ、ガンプラバトルデウイルスノジョキョヲオコナウトハ!!」

「この電子音みたいな声…！まさかてめえが根源体とやらか！」

「ワタシガコンゲンタイダトイウナラ、ドウスル」

「決まってるんだろ…！お前を倒してミサちゃんとユウキを救うぜ！」

「オモシロイ… ヤツテミロ!!」

プロヴィデンスガンダムはAGE3へとビームサーベル片手に、スラストで加速する

「良くもみんなが楽しみにしてた大会を…!!!」

マモルはシグマシスキャノンでプロヴィデンスガンダム目掛け、狙

い撃った

「アハハハハ!!!キカヌー!キカヌー!」

あろう事か、プロヴィデンスガンダムはシグマシスキャノンの一撃をかき消す

「ココハ、ワタシガウミダシタクウカン…。ワタシガノゾメバ、ホレコノトオリ…。」

プロヴィデンスガンダムの前にガフランとジンクスが現れる

「なんだよ!それ!チートじゃねえか!!!」

「フハハハハ!!!ナントデモイウガイイ!」

ガフランとジンクスはAGE3へと進軍する

「ちくしょう!EXアクション!」

AGE3はEXアクション フォートレスフォアブラスターで近づいてくる複数のガフランとジンクスを葬るが…

「マダマダアルゾ!」

プロヴィデンスガンダムにより、再びガフランとジンクスは生み出されてしまう…

「このままじゃ埒が開かねえ…。!」

マモルはジンクスとガフランを撃ち落とすが、

それにも限度がある…

「しまった…。!弾切れか…。!しようがねえ…。!突っ込むぜ!」

マモルは脚パーツのガンダムヴァーチェにより、GNビームサーベルを使えるようになってる

AGE3はビームサーベルを掴み、ガフランとジンクスを破壊しながらプロヴィデンスガンダムへと加速する

「はあああああ!!!」

マモルはプロヴィデンスガンダムに切りかかる、が

「アマイ、アマイ…。!」

間髪それをビームサーベルで防がれた

「ちくしょう…。!」

「こちらはミライのエクシア、

「彼女の機体と戦うのは初めてだが…中々彼女らしい機体だ…」

アカツキをベースとしたアザレア、その惚れ惚れするビルディングに見とれている場合ではない

アザレアはエクシアへ向け、マシンガンの一撃を放つ

「トランザム…！」

エクシアは再び光だし、物凄い速さでその射撃を避けた

「今度はこっちの番だ…！」

エクシアはそのままアザレアへと突っ込み、GNソードでアザレアをすれ違い様に切りつけて、真つ二つにした

「これで2機目…！ それより、マモルは！」

ミライは先ほどから見えていないAGE3の様子を確認すべく、マモルを探した

「うわあああああ!!!」

プロヴィデンスガンダムの一撃に加え、再び増殖するガフランの一撃を食らったAGE3は右腕をもがれ、得意のブラスター攻撃がままならぬ状況だ。

「このままじゃやられる…！」

マモルにはGAMEOVERの文字が過ぎる

「いや、まだまだ！俺はユウキ達を救うんだ…こんな所で止まれないぜ!!!」

AGE3は唯一残った右腕でビームサーベルを掴み、ガフランを切り捨てて行く

しかし、爆発寸前のガフランはAGE3を掴んだ

「邪魔すんじゃねえ!!!」

マモルは自分を掴むガフランを離そうと暴れるも、ガフランは離す気配が無い…

そのままガフランはAGE3の周辺で爆発

AGE3も爆発に巻き込まれ、辺りに爆煙が舞う

「フハハハハ!!!オロカナオトコダー！」

爆発に巻き込まれたマモルを見て、プロヴィデンスガンダムを操る機械音の男は嗤う

「まだだ…！」

「ナニ…!?」

「まだ終わりじゃねえ…!!!」

爆煙の中からプロヴィデンスガンダムめがけ、GNビームサーベルが飛ぶ。

想定外の一撃に驚いたプロヴィデンスガンダムは、投てきされたビームサーベルの攻撃を避けることが出来ずに喰らってしまい命中。動きが取れなくなる

「グググ…！ウゴケヌ…！」

「貫ったああああ!!!」

立ち込める煙の中から、右脚を失ったAGE3が右腕にビームサーベルを掴み、プロヴィデンスガンダム目掛けて襲いかかる

爆発により右脚を失ったAGE3、どうやらバックパックは無事だったらしく宇宙空間という事もあり、スラスターでの加速で飛び出してきた

「散々コケにしてくれたな！このウイルス野郎!!」

マモルの怒りは頂点だ

スラスターでプロヴィデンスガンダムめがけて加速するAGE3、しかしプロヴィデンスは投てきされたビームサーベルの影響で動けない

「はあああああ!!!」

マモルの力のこもった一撃はプロヴィデンスガンダムを貫き、そのまま爆発する

「マモル…!!!」

ようやくマモルの機体を確認したミライのエクシアは爆発に巻き込まれたAGE3の方へと加速した

「バーストアクション！ツインサテライトキャノン！」

「EXアクション！ミラージュショット！」

「EXアクション！クロススラッシュユ!!」

XXインパルス、ガンダムMK-III、ローゼンジャスティスから放たれたそれぞれの攻撃は40機ものジンクスとガフランを葬り

去っていく

「はあああああ!!!」

ユウイチの機体もすれ違い様にビームサーベルの一撃を食らわせ
てユウイチの後ろの方では次々と爆発が起こった

「よし…これで除去完了だ!!!皆、お疲れ様」

カドマツはウイルスが完全に除去出来た事を全員に知らせる

あれだけいたウイルスは跡形も残さず全滅した

しかし、それはマモルの活躍があったからだ

「マモル!マモル!」

ミライは爆発が起こった場所を探すが、

マモルのAGE3が見当たらない

「マモル!どこへいるんだ…!僕をからかうのは止めてくれ…!
!」

ミライはそう叫ぶが応答が無い

すると少し向こうに浮遊する機体が見えた

「マモル…?マモル!」

宇宙空間に両足を失い、左腕を失ったAGE3が漂流していた

爆発の影響でバックパックも損傷し、動くことすらままならずただ
ただ漂流する他ない

「マモル!大丈夫か!」

「ミライ…!俺…アイツ倒せたか…?」

「ああ…!君は良くやったよ…!君が諦めなかったからウイルス
を除去出来たんだ…!」

「そうか…!俺、活躍出来たんだな…!」

「戻ろう…!ユウキ達に会いに行こう!さあ…僕の右腕に掴まっ
て…」

エクシアは唯一残されたAGE3の右腕を掴み、戻って行った

「お疲れ様、お前のお陰だ」

カドマツはシュミレーターから出てきたマモルとマモルのボロボ
ロになったAGE3を見つめ、そう言った

「俺は不滅だ…!必ずこのAGE3を蘇らせて見せるぜ…!」

マモルはそう言うのとカドマツに向け笑った

「ああ…！次会ったら復活したAGE3を見せてくれ…」

カドマツはマモルにそう答え、同じように笑う

「ユウキー！」

ミライの一言でカドマツとマモルは入り口を見た

「ユウキ…！それにミサ！無事だったか！」

カドマツは2人に対し、そう言う

「そんなことより！ごめんな…マモル…俺達を助ける為にお前の機体が…」

「ありがとう…！マモル君…！それに皆…！」

「ミサ…ユウキ…良いんだよ、俺は必ずAGE3を蘇らせて見せるんだ…その時は…またバトルしような！」

「ああ…！」

「うん！」

マモルの呼びかけにミサとユウキは笑顔で答えた

「後！絶対優勝しろよ!!そして優勝したお前達を倒すのは俺と…ミライのコンビだ!!」

突然名前を上げられたミライは困惑するが、

少し笑い

「ああ…！僕とマモルのコンビが君達を倒す…君達を越えるチームになる為に…！」

ミライはメガネを中指でクイツと上げそう言った

「おもしろえ…！負けてられないな！ミサ！ロボ太！」

「うん！」

「「「アハハハ!!」」」

「と、言うわけで！この大会の続きは明日、11時から行います！それでは皆さんご機嫌よう!!」

ジャパンカップ準決勝は一応安全面に考慮して、夜な夜な整備スタッフによる点検と再発防止へ向けての調査を行う為に明日に延期

となった

ユウキは宿のベッドに横たわり、ビルドストライクガンダムを眺める

「必ず勝たなきゃ…！マモルと誓ったんだ…！」

「入るぞ…！」

宿の扉を開け、父のユウジロウが入ってきた

事前に大会が2日あることを知っていた家族とユウト達も同じ宿に泊まる事になっていたようだ

「いい友達を持ったな…ユウキ。明日の試合絶対勝てよ！」

「ああ！分かってるぜ！後…兄貴とレナ姉から聞いたよ、父さんも俺達助ける為に戦ってくれたんでしょ？」

「ああ！久々にやったが腕は鈍ってないな！そうだ！今度の長期休暇の時に帰ってきたら一緒にやるか！」

「分かった！約束な！」

ユウキは父とガンプラバトルの約束をする

絶対に負けられない…このビルドストライクガンダムで俺は勝利を掴む…！

ユウキはそう心に決め、明日の準決勝へと決意した

続く

ガンダムブレイカーズ 第22. 5話 蘇る死神

ジャパンカップではウィルスによる大会乗っ取り騒ぎが起きている中、彩渡商店街のゲームセンターでは黒パーカーの男が1人でプレイをしていた

「ケツ… ジャパンカップがあるからか誰もプレイしてねえじゃねえか… あーあつまんね…」

男はデスサイズヘルで次々と現れるザクを沈めていく

リージョンカップでは激戦の末にユウキのパーフェクトストライクに敗れ、その後に彼の機体を壊してから大会関連は全て出禁となっており会場に入る事すら許されない。

かと言ってテレビで見るなんて事もしたくはない。

それもそのはず、ジャパンカップには自分を倒したユウキやレンが出演しており見るだけイライラするだろう。

「…ざまーみろ、俺を怒らせた罰だぜ…」

ふと頭にユウキが思い浮かびイライラした男はそう呟く

あれ以来、男はゲームセンターに入り浸りただ、現れる敵を倒すだけだった

すると、男のコックピットに他のプレイヤーからの乱入を表す警告音が鳴る

「来たか…！」

暇を持て余した男にとつてどんな相手だろうが格好の獲物だ。

男のデスサイズヘルはビームシザーズを握り、乱入してきた2機に對して構えた。

「プレイヤーは2機、か… もっと大人数で来て貰っても歓迎なんだがな…」

男はリーダーで、近づいてくる敵機を数えるとそう呟いた

「ギャンが2機…！余裕だなあ！」

男は、現れたギャン2機にいきなり襲い掛かる

「…」

「…」

2機のパイロットは黙ったまま襲撃を物凄い速さで避けた。

「!?…なんて速さだ…!」

あまりの速さに軽い恐怖を感じる男。

「…」

「…」

ギャンを操るファイター達は攻撃を避けた後、カウンターと言わんばかりに手に持っていたGNランス、専用ビームサーベルをデスサイズヘルめがけ、突き刺した

「嘘だろ…!?」

あまりの速さに防御出来ない男は胴に2機分のダメージを受け、膝から崩れ落ちる

「…死神と言えど、この程度か。」

「…まあいいあのお方からスカウトするように言われている。やるぞ。」

2人はそう呟きギャンを動かすと男のデスサイズヘルの前に立たせた

「お前を連れてくるように言われている。」

「ガンプラを破壊されたくなければ言う事を聞け。」

「くっ…!」

「どうする。早く答えろ。」

「壊されたくはないのだろう。」

2人はそう言うと、デスサイズヘルの頭に専用ビームサーベルとGNランスを突きつけた。

「…分かった…ついて行けばいいんだろ…」

黒パーカーの男は折れ、2人の言う事に従うようにした

「決まったな。すぐにそちらへ向かう。」

「逃げ出しても無駄だ。」

「はいはい…俺は逃げねえって…」

2人のギャンは姿を消し、男も後を追うようにステージから姿を消した

「厄介な事に巻き込まれたな… チツ… 本当にツイてねえぜ…」
男はシュミレーターからデスサイズヘルを取り出し、鞆に仕舞うと
シュミレーターから出た。

……………

暗黒騎士ギャンL

頭 ギャン

胴 ギャン

腕 ヤクトドーガ

脚 ローゼンズール

バックパック ギャン

武器 GNランス

謎の2人組が使う機体。こちらの方のカラーは全身メタリックの
ローゼンズールの色です

暗黒騎士ギャンR

頭 ギャン

胴 ギャン

腕 ヤクトドーガ

脚 ローゼンズール

バックパックギャン

武器 専用ビームサーベル

こちらも→のギャンと同じ機体。こちらの方の色はメタリックの
黒です。

2機ともモノアイは赤。ローゼンズールの白い所の部分は赤と
なっています。

全体的に騎士をイメージして組んであります。

……………

「さあ来い。」

「早くしろ。」

そう誘導する2人の前には、黒いセダンが1台止まっている

見るからに怪しい… 男はそう思うが逃げる訳には行かない。

それに逃げたら殺されそうな雰囲気だ。

「早くしろと言っている。」

「いい加減にしろ。」

「はいはい…… 乗りやあいんだろ……」

男は促されるままセダンへと乗った

誘導する2人の顔はバトル中はよく見えなかったがどうやら片方は女性……？だろうか。

それに帽子からはみ出た銀髪が見える

しかし、男の方も銀髪だ。

「なんだこいつら…… (小声)」

「聴こえてるぞ。」

「いいから早く乗れ。」

自分では聴こえない様に言っただつもりだが、バツチリ聞かれていた。

ロボットみたいだなこいつら…… 男はそう思いながら車へと乗る。

男を載せたセダンは、男の知らない方へと向かって行った。

「名前。お前の名前を言え。」

運転する片方の女性がそう言う

「俺に名前を聞くなら、先にそっちが名乗るつてもんだろ？」

黒パーカーの男は悪態を付きながら、運転手へそう言った。

「ふざけるのも大概にしろ。」

運転手の女性は静かながら怒りが垣間見える

「落ち着け。なら俺から名乗るとしよう。俺の名は03。」

「03……？ふざけてんのか？それともスパイ気取りかなんかか？」

「本当だ。俺はそれ以外の名などない。」

「信じられねえな…… お前は？運転手さんよ？」

「03…… やはり私はこいつを殺したい。」

「落ち着け。あのお方に怒られるぞ。」

「はあ……。何故こんな奴に……。私は04、出来るだけ私に関わるな。」

「さあ、名を名乗れ。」

「そうだなあ……。じゃあ俺は07って事で頼むわ」

「貴様…！ 03、事故死扱いにして今すぐ殺そう。」

「落ち着け。早まるな。おい、きちんと名乗れ。」

「ははは！嘘だよそう怒んなって… 俺はリュウジ。まあ宜しく頼むわ03と04“ちゃん”よ…。」

「…!!!」

04はハンドルを握る手に、かなりの力を入れた。

怒りを堪えるその様子を見てリュウジはニタニタと笑っていた。

「ここだ。さあ降りろ。」

「ほーん、何だか見るからに怪しい所だな… 俺が警察だったら真っ先に搜索するぜ」

そう言うリュウジ達は10階建てのビルへと到着する。

「いいから早く歩けと言っている。」

「はいはい、カリカリすんなよ04“ちゃん”！」

「次言ってみろ。その度にその腕を折って2度とガンプラバトルが出来なくしてやる。」

「アハハハハ!!!」

リュウジは楽しそうに嗤うと建物へと入っていった

「待っていたよ… 君がリージョンカップで死神と言われたファイターだろう…？」

建物の部屋の奥にはスーツを着た紳士のような男が座っていた。

見るからにはいい人そうだが、こういう人間こそ裏の顔は残酷非道… そんなものだろう。

「俺様の活躍を知ってる訳か… 俺をここに連れてきて何の用だ？」

言つとくが、ファイターとしての腕はそこのお2人さんの方が強いぜ。なあ？04“ちゃん”」

「…!!!」

04はどうかしてあの男に対する殺意を抑えている。

おそろくあともう少して我慢の限界という所だろう。

「アハハハ!!どうやら04の事を気に入っているようだな。まあ彼女は中々心を開いてはくれぬだろうがね。」

「それで？俺は腹減ってるんだ。さっさと要件を終わらせて帰らせてくれよ……」

「ならば食事でもしながら要件を言おう、おい！」

男は手を叩くと置くからスーツを着た男を呼ぶ

「今すぐ食事の用意をしてくれ。2人分だ。」

「かしこまりました……」

「アンタ一体何者だ？俺に目をつけるなんて悪趣味な金持ちか？」

「まあまあ座りたまえ、早速君を連れてきた要件を言おう。君にはうちでファイターをして欲しい。」

「生憎だが、俺は公式大会関連全て出禁だ。当たるなら他を当たれ。」

リュウジはそう言うのと立ち上がる

「まあまあ……私はこう見えてもとある企業のトップでね……出禁程度なら私の力でどうにでもなるのだよ。」

「ほう……やっぱり会社のお偉いさんか。で、何でファイターがいるんだ？あそこに2人いるじゃねえか」

「私は君の実力を買いたいんだ。偶然見た君のガンプラバトルで私は、君は必ず成長する……そして我が社のいい広告塔になってくれるそう思っ君を連れてきた。」

「俺は今まで邪魔な奴は意地でも倒してきた。ガンプラバトルだってそうだ、邪魔する奴は全員消す……俺は俺が楽しめたら良いんだよ。」

「それだ……！その思いこそが人を強くする……！もし、君が私の所でファイターをやってくれるなら最高の設備と最高のガンプラを用意しよう！我がサイバーコーポレーションが誇る最高の設備でね」

サイバーコーポレーション……最近何かと利益を上げているロボットやアンドロイド等を扱う会社だ

最近宇宙事業にまで手を出し、宇宙空間でのロボットによる無人作業や、あの宇宙エレベーターにも関わったとの話だ

「そんな大会社様が俺にファイターをやってくれなんて話なら断りきれねえな……それに丁度俺は倒したい相手がいる……力貸してやるぜ……！」

「素晴らしい……では今日から君にあの2人を付けよう 03 0

4 頼むぞ」

「了解しました。」

「り、了解し、しました。」

04 は相当を嫌な顔をした

「覚えてろ…！ 忌々しいストライク共が…！」

リュウジはそう呟き、自分のデスサイズヘルを見た

ガンダムブレイカーズ 第23話 戦火の中で

突如起こったコンピュータウイルスによる事件によりジャパンカップ準決勝を明日へと延期され、大会運営スタッフは原因究明と再発防止の為に調査へ入った。

一方ユウキ達は予め取っておいた宿へと向かい、明日の準決勝へ向けて英気を養っていた。

ユウキは宿に泊まる客用の共有スペースで調べ物をしている。

「なーに見てんだ？まさか如何わしいサイトかあ？」

「うわああああ!!！」

ユウキは突然後ろから話しかけてきたカドマツに対して悲鳴をあげる。

「はーん、まさか凶星か？」

「ち、違う!!」

ニヤリと笑うカドマツに対してユウキは必死に否定しながら首を横に降る

「そんなに否定する所がなんか… 怪しいぜ？」

「違う！違う！本当に違うって！」

ユウキは変わらずに否定し続ける

「ユウキ君ー？大声上げてどうしたの？」

「おう、ミサ。なんかユウキが如g…」

「ちがーう！ほんとに違う！ミサ！なんでもないから！」

「??… 本当に…？なーんか怪しいなあ…？」

ミサはユウキに対して疑わしい目線を送る

「本当になんでもないから！あ、そうだ！カドマツさん！お風呂！こ

こ露天風呂あるらしいよ！行こう！背中流すから!!」

「ちよ！ユウキ！背中押すなって！」

「露天風呂ヘレッツゴー！」

「ちよ！ユウキ！ユウキ！」

「?????
」ユウキはカドマツの背中を押し風呂へと向かった。

ミサはその場で首を傾げた。

「あら？どうしたの？ミサちゃん？」

首を傾げるミサに話しかけたのはユウキの親戚、レナだ。お風呂上がりだからだろうか、腰まである長い髪を結っている。

「ユウキ君が何故か大声を上げてたんでどうかしたのかなーって..」

ミサはレナに対してそう答える。

「フフツ.. ユウキは昔から恥ずかしがると大声出して誤魔化すのよ..」

レナは口に手をあて、笑いながらそう答えた。

「そうだ！ミサちゃん。ユウキが小さい頃の話、してあげよっか？」

「ええ？いいんですか！気になります！」

「良いわよ、そこに座って。あれは確かユウキが5歳の頃だったかしら.....」

レナはユウキの幼い頃の話 시작했다。

普段、自分の事をあまり話したがらないユウキ。

それもあり、ミサはユウキの事をあまり知らない。

知っているのは精精、1人で抱え込む事と諦めが悪い所だろうか。

ミサは1人のチームのメンバーとしてユウキの事を知りたかった。

ミサはレナの話に耳を傾けた。

「もう！なんてこと言うんだよ!!」

「まーまーそんな怒んなって。ほら、牛乳奢ってやつから。」

カドマツはユウキに牛乳を渡すと、ユウキはそれを受け取り一気に飲み干す。

「そうだ！ほら、この前の。」

カドマツは思い出したかのようにユウキにあるものを渡した。

「！これ！ビルドバーニングの胴体！」

「修理しといてやったから明日はこれ使え、ほら。」

ユウキはベスト8決定戦の際に、レンのビルドゴッドバーニングの一撃を喰らってしまい胴を損傷していた。

「ありがとう.. (ボソツ)」

「いいってことよ。その代わり明日は絶対勝てよ！」

「… ああ！」

ユウキはそう決意の籠った声でそう答えた。

.....

「さあ！ 昨晩は寝られましたかー？」

うおおおおおおお!!!

「いい返事ですねー！ さあただ今から延期となったジャパンカップ準決勝を、行きます!!!」

うおおおおおおお!!!

会場は大熱狂だ。

ユウキは若干気圧される。

「ミサ、ロボ太 絶対勝とうな！」

「うん！」

ユウキはミサとロボ太にそう声をかける。

「ここを超えれば決勝だ…！ 優勝して、轟かせようぜ！ 日本中に彩渡商店街の名前を!!」

「おおう!!」

「ファイターの皆さんは準備をお願いしまーす！」

大会運営スタッフがファイター達へそう叫ぶ。

「必ず勝つ…！ このビルドストライクガンダムで！」

ユウキの手にはビルドストライクガンダムが握られていた。

昨晚の間に胴をビルドバーニングに変え、色も赤へと変えていた。

.....

ビルドストライクガンダム ユウキ仕様

頭 ビルドストライク

胴 ビルドバーニング

腕 ビルドストライク

脚 ビルドストライク

バックパック ビルドストライク

武器 ビームサーベル ビームライフル

シールド チョバムシールド

.....

「行こう…！」

ミサ、ユウキ、ロボ太はそれぞれシュミレーターへと入っていく。

「ビルドストライクガンダム、スキャン！」

ユウキはシュミレーター内の装置にビルドストライクガンダムを置き、スキャンした。

目の前の画面にはビルドストライクガンダムの頭から見える様子が映し出される。

.....

「さあ！ファイターの準備も完了したようです！今回のルールは前回に説明した通り、総撃墜数の多い上位4組のみが決勝へと進むことが出来ます！勿論、途中で他のプレイヤーに倒された場合はその場でGAME OVERとなってしまうので注意して戦いましょう！それではミスター、開始の合図を！」

MCハルはミスターガンプラへと降った。

「ファイターの諸君！今回も熱いガンプラバトルを期待しているよ！そこで！ジャパンカップに優勝したチームはこの私、ミスターガンプラと戦うエキシビジョンマッチを用意した！優勝目指し、頑張ってくれたまえ！行くぞ！ガンプラファイト！レディー… GO!!!」

「ビルドストライクガンダム ユウキ、出るよ！」

「ガンダムアザレアパワー ド ミサ、行くよ！」

「フルアーマー騎士ガンダム ロボ太、参る！」

3機は掛け声と共に射出される

今回のステージは街の様だ。

「ちよつくら辺り見回すか！」

ビルドストライクは上昇して空中に浮かぶと辺りを確認する。

「うーん… 敵機も見えないし何だが不穏だな…」

ユウキはそう呟き地上へと戻ろうとする

「ユウキ君危ない！」

ズバババババババ!!!

地上へと戻ろうとするユウキを歓迎しないように、地上からビルドストライクを目掛けて銃弾が飛んできた。

「あぶね！」

ユウキは瞬時にチヨバムシールドを構えて事なきを得た。

「ミサー・ロボ太！あそこだ！ビルスの近くにいますぞ！」

ユウキは攻撃を行ってきた方向を特定し、地上にいるミサとロボ太に指示を出した。

「了解（した）！」

2機はすぐにユウキを襲った機体の方へ向かい、交戦の準備をする。

「俺も向かうか！」

ユウキのビルドストライクも向かおうとするが近くには敵反応が三つ。

「囲んできやがったか…！」

「フハハハハその通り！」

「優勝は…！」

「我ら、新手鉄鋼ガンプラチームが頂く！」

ビルドストライクガンダムを囲んだのは新手鉄鋼ガンプラチームのザクだ。

モブA「行くぞ！少年！」

リーダー機であろう黒いザクは右手にビームアックスを携えてビルドストライクガンダムへ向けて突っ込んできた。

「…！ 3機はきついな…！」

ユウキはそう呟きながらも腰からビームサーベルを二本抜き、こちらへ向かってくる黒いザクのビームアックスの一撃を受け止めた。

モブB「私達も…！」

モブC「いるんだぞ！」

後方から赤色のザク2機がこちらへ目がけてザクバズーカを撃ち尽くす。

「っ…！ しまった！」

黒いザク1機の対応で2機の事を忘れ、ビルドストライクガンダムはバズーカの一撃を食らった反動でバランスを崩してしまう。

モブA「隙があるぞ！貰ったあ!!」

鈍ったビルドストライクガンダムへ対して、黒いザクは渾身のビームアックスによる一撃を喰らわせた。

「うわあああああ!!!」

そのまま地面目がけて落ちていくビルドストライクガンダム。

「このまま諦められるかよ...! どうにかして...!」

ユウキは何とか空中で体勢を取り戻そうと足掻く。

「そうはさせない!!!」

今度は上からビルドストライクガンダムの胴体へ向けて2機のザクが蹴りを入れようとする

「まだ... 行ける... 俺なら!!!」

そう念じるユウキのビルドストライクガンダムを赤い光が包み始めた。

モブB「うお!」

モブC「なんだ!」

あまりの眩しさに蹴りを入れようとするも怯んでしまう2機。

ビルドストライクガンダムは何とか体勢を取り戻し、脚から着地する。

「体から湧き上がってくるこの力...!」

覚醒だ。ユウキの諦めない心によりビルドストライクガンダムは赤く光る。

ユウキは上空のザク3機を見つめて、

「今なら...! あいつらを...!」

そう呟き、ビルドストライクの腰から再びビームサーベルを抜き、握ると

「行くぜえええええ!!!」

掛け声を上げ、物凄い速さで上空へと再び飛び立つ

モブB「ならば...! もう1度落とすのみ...!」

モブBのザクは近づいてくるビルドストライクへ向けてザクバズーカを構えるが――

「遅いぜ!!!」

覚醒したビルドストライクは一気に距離を詰めると、片手のビーム

サーベルでモブBのザクの頭を貫く。

モブB「これでは前が見えぬ……！」

「今だー！」

ユウキのビルドストライクガンダムはビームライフルに持ち替え、モブBのザクへと照射を行う

「うわあああああ!!!」

ビームライフルによる一撃はザクを貫くと爆発

モブBはGAME OVERとなった。

モブC「仲間の分まで……！」

仲間を落とされたモブCのザクはビームアックス片手にユウキへと突っ込み……

モブC「その首貫ったああああ!!!」

ビルドストライクガンダム目がけてビームアックスを振りかざすが、

「胴がガラ空きだぜ……！」

攻撃に集中するばかりに胴の部分に守るものが何も無いと気づいたユウキはそのまま胴へ向けてビームサーベルで水平に切りつけた。

モブC「しまったああああ!!!」

モブCの断末魔と共にザクは爆発した。

「残るは……！」

モブA「私だあ！」

唯一残った黒いザクのファイターはそう言うどルドストライクの背後から襲いかかる。

「引き金は二度引かない！この1発が全てだ！」

ビルドストライクは振り返る際に腰からビームサーベルを抜き切りつけて、その後に至近距離でビームライフル向かってくるザクの胴体目がけて飛びつきりの1発を放った。

「我ら…… 新手鉄鋼は不滅だああああ!!!」

上空では三回目の爆発が起こり、ユウキを包んでいた赤い光は消えた。

「ハアハア…… 何とか…… 倒せたか……！」

覚醒が発動した事によりユウキには疲れがどつと来る様な感覚があった

「そうだ！ミサ達の方へ行かなくちゃ！」

ユウキはそう言うのとビルドストライクガンダムでミサ達の方へと向かった。

.....

こちらはユウキ達から少し離れた場所。

「はあ!!」

カケルのアストレイレッドフレームはバツクパツクのタクティカルアームズを弓の様な形へ変形させて自分を襲う機体を目がけて何度も撃つ。

「へへーん！当たらないぜ！」

ストライクノワールをベースにした機体　ガンデイライユは対艦刀を片手に、アストレイレッドフレームから次々と放たれる攻撃は躲してみせた。

「チツ...！弾切れかよ！」

どうやらストライクノワールを狙っていたタクティカルアームズの弾は切れたようだ

「それなら、今度はこっちの番だぜ！」

「ツキミ！気を抜かないでよ！」

「分かってるって！行くぜ！」

ツキミのストライクノワールは大型対艦刀を手に、カケルのアストレイレッドフレームへと近づく

「早々簡単にはやらせないぜ!!」

今度はタクティカルアームズを一つの大剣へと変え、自分へ向かってくるツキミの機体に対抗する構えだ

「二おりやああああ!!!!」

2人の声とタクティカルアームズと大型対艦刀のぶつかり合う音が周辺へと鳴り響く。

「悪いが勝つのは俺達だぜ...！」

ツキミはカケルにそう言う

「いいや！俺達速水兄弟だあああ！」

カケルはそう叫ぶとタクティカルアームズで対艦刀を弾いた

「おもしれえ…まだ行けるよな？」

「当たり前だ！こっからだぜ！」

2人はそう言い合い、再び剣を交えた

.....

ミサとロボ太はユウキを襲った機体と交戦中だ

「逃がしはしませんよ!!」

アストレイブルーフレームセカンドリバイはタクティカルアームズを変形させて機銃の様な形へと変えるとミサとロボ太へ向けて撃ち尽くす

アストレイブルーフレームセカンドリバイを操るのは速水兄弟の弟 ケンタだ。

速水兄弟は別々の行動を行っているようだ。

「いつまでだつて逃げてられない…！ロボ太！突っ込もう…！」

「しかし…先ほどあのバックパックを変形させて双剣にしたのを見ただろう、無闇に近づくのはあまりいい手段とは言えない…」

「大丈夫、私達は2人だよ！それに…あのバックパックさえ破壊出来れば勝機はある！」

「という事は…何か策があるのだな？ミサ」

「うん！えつとね……………」

「いつまでお喋りするつもりですか！」

ケンタのブルーフレームはミサとロボ太を捉え、2機へと向かってくる

「行くよ！さつき言った事忘れないでよ！」

「承知…！」

2人はどうにか作戦会議を終える。

アストレイブルーフレームは最初にミサを倒す気の様だ。

「はあああああ!!!」

タクティカルアームズを双剣に変え、アザレアパワードに突っ込むアストレイブルーフレーム。

「させない…！」

アザレアは回避行動をとり、後ろへ下がりながら握っているマシンガンのアストレイブルーフレームセカンドリバイへ撃つ

「遠距離攻撃なら負けませんよ！」

ケンタはタクティカルアームズを再び機関銃の様なものへと変形させてアザレアへ向けて撃ち尽くした。

「ここまでは作戦通り…！」

ミサはそう呟きながらアザレアを目掛けて飛んでくる銃弾から逃げるように操縦する。

「弾切れ… か！」

ケンタはタクティカルアームズを元のバックパックに戻すと今度はアーマーシュナイダーを手に、アザレアへ向けて加速する。

「きた…！」

アザレアはマシンガンを捨て、ビームサーベルに持ち替えると迫ってくるケンタの機体の一撃を防いだ

「ロボ太！今！」

「分かっている！」

「しまった!!」

アザレアばかりに気を取られフルアーマー騎士ガンダム existence を忘れていたケンタ。

ロボ太に背後を取られるのを許してしまった

「喰らえー炎の剣！」

アストレイブルーフレームセカンドリバイは、フルアーマー騎士ガンダムから離れたEXアクション 炎の剣をバックパックに喰らってしまいパーツアウトしてしまう。

「バックパックは封じた！ミサ今だ！」

「OK！行くよ！」

鏢迫り合い状態のアザレアとブルーフレーム、最初に動いたのはミサだ。

ビームサーベルでアーマーシュナイダーを弾いた後にブルーフレームの頭目がけて渾身の蹴りを御見舞した。

当然、頭に一撃を喰らいまともな筈が無く、ブルーフレームセカンドリバイはバツクパツクに続いて頭のパーツを失った。

「前が…！」

メインカメラをやられ状況が把握出来ないケンタ。

手当り次第にアーマーシユナイダーを降るが当たるはずなどない。

「貫い！EXアクション！クロススラッシュユ!!」

チャンスとばかりにミサのアザレアはEXアクションをアストレイブルーフレームセカンドリバイへ向けて叩き込む。

「ごめん…！カケル…！」

ケンタはカケルにそう謝ると、アストレイブルーフレームセカンドリバイは爆発

ケンタのコックピットにはGAMEOVERの文字が。

「やったねロボ太!!!」

「やったな！ミサ！」

両機はハイタツチ

ロボットと人間の美しい友情だろうか。

「ミサ！ロボ太！大丈夫だったか!？」

ユウキのビルドストライクガンダムは遅れて登場

彩渡商店街ガンプラチームが揃った。

「へへーん！私とロボ太のコンビでどうにか倒したよ！ねー？ロボ太！」

「ああ！ミサの作戦でどうにか倒せた」

「それは良かった！こつちもどうにか倒してきたぜ！」

2人と1機はそれぞれの戦果を語る。

「これで1チームは壊滅、もう一つのチームは1人やられた事になる… 制限時間はまだある、気を抜かずに行こう」

「うん！」

「ああ！」

ユウキの呼びかけに答えるミサとロボ太。

しかしその裏では他のチームの死闘が繰り広げられていた。

続く

ガンダムブレイカーズ 第24話 仲間との強さ

現在までに、新手鉄鋼ガンプラチームの3組と速水兄弟チームの弟ケンタの4名のファイターは敗退。

速水兄弟に関してはカケルがここからどうにかして上位4名へと入らないと危ない状況だ。

.....

「執拗い人は嫌われるわよ！」

沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチームのメンバー ミソラは自分を追いかけて攻撃してくる2機へ向けてそう言い放つ。

モブD「我々山口電工ガンプラチームはここで負けるわけには行かない……！」

モブE「君には悪いが、ここで倒させてもらうよ……！」

ミソラのGNアーチャーをベースにした機体を山口県の企業 山口電工のガンプラチームが追いかけてながらビームライフルでの攻撃を行っている

「くっ……！」

ミソラの機体を追い詰めるようにファンネルが囲みだした。

「こっちも負けるわけにはいかないの！」

GNアーチャーはランチャーストライクのバックパックに付いている超高インパルス砲へと手を伸ばし、

「はああああああ!!!」

付近のファンネル^{!!}に対して高圧縮されたプラズマエネルギーを放つ

GNアーチャーを囲んでいたファンネルはどうにか撃ち落とされたが……

モブD「ファンネルばかりに気を取られ過ぎじゃないか？」

モブDの百式がミソラ目がけて突っ込んでくる

「させないわー！」

ミソラは間髪ビームサーベルを取り出してその攻撃を受け流す。

モブD「優勝するのは我々山口電工だ、その為には心苦しいが君を

倒さないといけない……！この千式と！」

モブE「このH i | Zでね！」

.....

千式 山口電工仕様

頭 百式

胴 百式

腕 百式

脚 百式

バックパック Z+

このジャパンカップのために山口電工ガンプラチームが組み上げた機体。

カラーは全身Z+の色の灰色をしており、百式を超える力を出すという願いを込めて千式と名付けられた。

H i | Z 山口電工仕様

頭 Zガンダム

胴 H i | Zガンダム

腕 Zガンダム

脚 H i | Zガンダム

バックパック H i | Zガンダム

千式と同じくこのジャパンカップの為に組み上げた機体。

カラーはH i | Zをイメージした配色となっている。

両腕にはウイングバイダーが付いている

.....

「くうう……!!」

モブD「まだまだあ！」

ミソラのGNアーチャーへ向けて容赦ない攻撃を繰り返す2機

ミソラも応戦するが……

モブE「そこだあ！」

「ぎゃあー！」

GNアーチャーへ向けてH i | Zからの容赦ない射撃が行われてしまう。

攻めていても2対1では不利。
かと言って守りへと転じて、2機分の攻撃を防げる程の実力はな
い……

まさに詰みに似た状況だ。

モブD「許してくれ……！これも勝つ為だ……!!」

千式は怯むミソラの機体へとビームサーベルを片手に急加速する

「やられちゃった…… ごめん…… ツキミ……！」

ミソラはそう呟く……

「まだ終わりじゃないぜ……！」

モブD「何イ!?!」

GNアーチャーの前に立ち、千式のビームサーベルの一撃防いだ機
体……

間違いない…… ツキミのガンデライユだ。

「おりゃあー！」

大型対艦刀でビームサーベルを受け止めたツキミはそのままビー
ムサーベルを押し返す。

「遅れてごめんなーミソラ！」

ツキミはミソラに対してそう言った。

……………

数分前……

「はあああああ!!!」

相変わらず罅迫り合いを続けるアストレイとストライクノワール。

「このままじゃ罅が開かねえ……それに、さつきからミソラも応答が
無くて心配だ…… これで決めるか……！」

ツキミは次の一撃で決める事を決意し、タクティカルアームズを弾
き返した

「次で決めてやるぜ……！」

「望むところだ……!!」

カケルのアストレイレッドフレームとツキミのストライクノワー
ルは今出せる最大の力を振り絞り、再びお互いの対艦刀とタクティカ
ルアームズをぶつけ合った

「お前の本気は…！そんなもんか…!!」

ツキミはカケルに対してそう挑発を始める

「もつと出せるんだろ…!? やってみろ！俺がその一撃すら防いで見せるぜ…!!」

更に挑発を続けるツキミ、すると

「上等だ…！喰らいやがれ…！俺の一撃イイイイ!!」

カケルは挑発に乗ってしまい、変形させたタクティカルアームズに更に力を入れる

「よし！挑発に乗りやがった！恐らくあともう少しで…！」

「うおおおおおおお!!」

カケルは更に力を入れる!

「くっ…！耐えろ…俺のガンプラと対艦刀…！あと少し…!!」

凄まじい力に圧され始めるストライクノワールと大型対艦刀…

ピシッ…

ぶつかり合う2人のどちらかから亀裂が入る音がし始める

「まさか…!?」

音の正体はカケルの変形させて大剣にしたタクティカルアームズ。

「この瞬間を待ってたぜ…!!」

ツキミのストライクノワールはようやく大型対艦刀に力を込めた。

ツキミの狙い、カケルを挑発して力を込めさせて、その力に耐えきれなくなったタクティカルアームズを破壊させてそこからの逆転を狙う事。

「おりやあああああ!!」

ツキミは掛け声と共に大型対艦刀に力を込めてからタクティカル

アームズを破壊させてみせた。

「しまった！これが狙いか!？」

「当たり前だあああ!!」

タクティカルアームズが破壊した今、アストレイレッドフレームには武器が無い

「今なら…!!」

「甘いぜー！」

一気に攻めの体勢に入り、カケルをそのまま真つ二つにしようと言う作戦は、アストレイレッドフレーム改の脚パーツから抜かれたガーベラストレートとタイガーピラスによって防がれた。

「甘いぜ…！甘い！」

「二筋縄では行かねえってか！おもしれえ…！！」

タクティカルアームズを失ったカケルだったが今度は二刀流の構えに入ると、ガンデイライユから放たれる大型対艦刀の攻撃を次々に受け止めていく。

カーン キーン

街には剣と剣のぶつかり合う音がそこらじゅうに響き渡る。

流石は二刀流、ストライクノワールの大型対艦刀の一撃を悠々と弾き返すとそのまま切りつけてくる。

「うお…： 流石に2本と大きいのが1本じゃ無理か…： だがやるしかない…： 隙が必ずあるはずだ…：！」

ツキミは再びカケルのアストレイレッドフレームへと突っ込む。隙がいつかはあるはず、または勝機をここから見つけなければい

その思いだけでダメージも顧みずにとただ大型対艦刀での攻撃を続けた。

このやり取りを2分、お互いにそろそろ限界が見え始める。

「まだまだあ…：！」

「何度来ようと…：！」

ガンデイライユは水平に大型対艦刀を振る。

当然、カケルはその一撃をガーベラストレートとタイガーピラスで受け止める。

その時、

「上がガラ空きなんだよ!!!」

ツキミは大型対艦刀を掴んでいた片手を離してアストレイレッドフレームの頭をは離れた手で殴り飛ばす。

無茶苦茶な行動だが、このお陰で頭をパーツアウト。

カケルはメインカメラを失い映像が映らない。

「今だあああ!!」

ツキミのガンデイレイユは怯んだ瞬間をつき、今度は左腕でアストレイレッドフレームの胴を殴りつける。

ガンデイレイユの左腕はアストレイレッドフレームの胴を貫通し、カケルのコックピットはピンチになったことを知らせるように赤く点滅し出した。

「悪いが勝つのは俺達だ!」

ツキミは大型対艦刀を拾い上げるとカケルのアストレイを縦から真つ二つ。

当然耐えきれずに爆発、速水兄弟チームはここで敗退となる。

「チクシヨオオオオオ!!」

カケルはコックピットでそう叫んだ

「待つてろミソラ!今すぐ行くぜ!」

.....

「ツキミ!」

ミソラは自分を守ってくれた機体を見つめ、そう呟く

「こつからは2対2だぜ!」

ツキミはそう声を上げる

モブE「これでフェアだが!手を抜く気は無い!」

モブEはそう呟く。

「ミソラ!お前はあのZガンダムを狙え!俺は灰色の百式を狙う!」

「分かったわ!」

2人はそう会話をし、それぞれの狙いを目掛けて加速する。

「おっさん!俺達の逆転はこつからだぜ!」

モブD「面白い!若い子達の力を見せてみる!」

千式とガンデイレイユはぶつかり合う。

「はああ!!」

ミソラのGNアーチャーは逃げ回るHi-Zへ向けて何度も射撃を行う。

モブE「易々とやられる訳には、いかないな!」

Hi-Zは反撃とばかりにミソラへとビームライフルから照射を

行う

「もう私は… 1人じゃない！」

ミソラは再びランチャーストライクのバックパックに手をかけて、H i — Z へ向かって高圧縮されたプラズマエネルギーを解き放つ

ぶつかり合う2つのエネルギー

「はあああああ!!!」

モブE「負けるかあ…!!」

勝ったのは…

ミソラだ

モブE「うわあああああ!!!」

320m超高出力パルス砲から放たれた一撃はH i — Z から放たれた照射を押し返しそのままH i — Z へと向かって突っ込む

モブE「素晴らしいものを見せてもらったよ… ! 私の負けだ… !」

モブEはそう呟き、コックピットの画面にはGAME OVERの文字が現れた。

モブD「仲間がやられたか… !」

「仲間の心配ばかりじゃ足元掬われるぜ… !」
ツキミは千式へ向けて大型対艦刀で切りつける。

モブD「そうだな… ! 今は君を倒すのが私の役割だ… !」

千式は大型対艦刀に対してビームサーベルで対応、そのまま防ぎきった。

しかし、限界は突然やって来る。

「やばい… !」

ガンデイライユは突然膝から崩れ落ちる

先の戦いでガンデイライユはだいぶ傷ついており、かなり無茶状況で戦っていたのをずっと隠していた。

モブD「今だ！少年、その首貰うぞ… !」

千式のビームサーベルは怯んだガンデイライユに対してビームサーベルを切りつける

その瞬間…

モブD「何…!?」

千式の手からはビームサーベルが弾かれその場に落ちる

「まだ… 終わりじゃない… そうでしょ? ツキミー!」

少し遠くからミソラの機体はビームライフルの一撃を放ち、的確に千式のビームサーベルを弾いた様だ。

「そうだな… まだ終わりじゃない…!」

借りるぜ…! アンタのビームサーベル…!」

ツキミは近くに落ちた千式のビームサーベルを拾い上げると、そのまま千式の胴を貫く

モブD「やはり若い力には敵わない、か…」

ガンデライユの一撃により動きが止まる千式。

ビームサーベルの一撃により機能を停止したようだ

モブD「君たちの勝ちだ…!」

モブDのコックピットにはGAMEOVERの文字が現れた

「やった… やったああ!!!」

ツキミはその場で喜びを表す。

「やったねツキミー!」

ミソラも嬉しそうだ。

ピピーッ!!!

ステージに笛のような音が鳴り響く

.....

「ここまで! 制限時間が来ました! ただ今から集計をします! ファイターの皆さんはシュミレーターから出てお待ち下さい!!」

MCハルの一言と共に暗かったシュミレーター内に明かりが灯され、画面は真っ暗になった。

「終わった…!」

ユウキは深く座りため息をついた。

「お疲れ様、2人とも。後ロボ太もね」

ミライはシュミレーターから出てきた2人とロボ太に労いの言葉を掛けた。

「良かったぜ！2人とも！」

マモルも声をかける。

「疲れたぜ……」

ユウキはそのまま控え室に戻り、机に寝そべった

ユウキは先ほどのバトルで感じた感覚を思い出す

「負けたくない、ここじゃ終われない……その想いが覚醒として現れているような気がしていた。」

「覚醒をものに出るかもしれない……」

ユウキは顔を上げそう呟き、再び伏せた

「さあ！結果発表です！ジャパンカップ決勝へと進めるチームはこちら！」

会場の大型ディスプレイにチーム名が現れる

彩渡商店街ガン普拉チーム

鹿児島ロケットガン普拉チーム

沖縄宇宙飛行士訓練学校ガン普拉チーム

トヨサキモーターズ

「以上のチームは2時間後に行われるジャパンカップ決勝に進出です

！それでは2時間後に会いましょう！それでは！」

「ユウキ君！決勝だつて！決勝！」

「ああ！これに勝てば日本一だ……！」

ユウキとミサは声を上げる

「驚いたぜ……まさか助力したチームが決勝まで行くんだ」

今度はカドマツだ

「私！絶対に勝ちたい……！勝って彩渡商店街の名前を日本中に広めてもう1度お客さんを商店街に呼びたい……！」

「それなら尚更負けられないな……頑張れよ！二人共！」

ミサの決意にカドマツは応援する。

「頑張ろうな……ビルドストライクガンダム……」

ユウキはガン普拉を見つめそう呟いた

……

研究ルーム

「やっぱり決勝まで上がったか……」

リユウジはディスプレイでジャパンカップ準決勝を見ていたようだ。

「待ってる……お前を越えるのはこの俺と俺のガンプラだ……」

リユウジはディスプレイの電源を落とすとそう言い、制作中のガンプラを見た

「デスサイズヘル……お前となら……！」

ガンダムブレイカーズ 第24・5話 暗躍を始める影

（これは24話と25話の間のお話）

ジャパンカップ準決勝が終わり、2時間後に始まる決勝へ向けてファイターは最終チェック 観客は展示コーナーやシュミレーターでのバトルなどで暇を潰していた。

その中でミライも他の客と同じく暇を潰す。

「何だかお腹が減ってきたな…」

よく考えれば朝から何も食べてない事に気づいたミライは会場の別フロアに出ている出店へ向けて足を進める。

「色々出てるんだなあ…」

会場のこのフロアには焼きそば等の食べ物の出店が出ており、並んでいる客を見るにどれも繁盛している様子だ。

「お前が如月ミライだな。」

後ろから突然自分のフルネームを呼ぶ声がする。

ミライは振り返り声の主を見た

肩まで伸びた銀髪の女性…

黒い帽子を被っており目までは見えない

「僕の名前を知っている…？何者だ」

「黙って付いてこい。」

「そうはいかない、見るからに怪しい奴に付いていくほど僕が頭悪いように見えるかい…？」

ミライはメガネをクイツと上げる

「ならば私とガン普拉バトルをしろ。そちらが勝てばお前の言う通り引こう、但し私が勝てば付いてきてもらうぞ。」

銀髪の女性はそう言い放つ。

「腕に自身があるようだね…いいだろう、僕は簡単には負けないよ」「決まったな。付いてこい。」

ミライと銀髪の女性はシュミレーターへと向かった。

「???あれミライだよな... 女の人と歩いてるなんてアイツ何してんだ。」

「マモルは銀髪の女性と共に歩くミライの背中を見て焼きそばを食べながらそう呟いた。」

.....

「エクシアセブンソード ミライ、出る」

「暗黒騎士ギャンL 04、出る。」

「2機は射出されステージへと着地する」

「今回のステージは街の様だ。」

「早速行かせてもらおうよ...!」

「エクシアはGNソード片手に紫色のメタリックカラーのギャンめがけて加速する」

「エクシアはGNソードを振りかざし、ギャンに切りかかる」

「カンツ と何かを弾く音」

「GNソードをギャンのGNランスが弾く音だ。」

「まだだ!」

「エクシアは右脚でギャンへ向けて蹴りをかますが、」

「...」

「ギャンはそれを手で掴み上げ、」

「何...!?!」

「驚くミライを他所に振り回し、ぶん投げた」

「投げられたエクシアは何とか空中で体勢を立て直し、着地する」

「中々やるようだね...!なら、これはどうかな... トランザム...!」

「!」

「エクシアは光り、ギャンへ向けて物凄い速さで加速しGNソードで切りつける。」

「...!」

「流星のギャンもトランザムには追いつけず、GNランスの攻撃も避けられてしまいエクシアによるGNソードの一撃を何度も食らう」

「口ほどにもないね、これで決めさせてもらおうよ...!」

「エクシアは再びギャンへと加速する」

「…………… 覚醒。」

銀髪の女性はそう呟くと、ギャンは紫色に光り出す

「……………!? 覚醒だと……………」

紫色のオーラを漂わせるギャンに少し驚くも、エクシアはギャンめがけてGNソードの一撃を叩き込

んだはずだった……………」

「何?! いない……………」

ミライがGNソードを振りかざした場所にギャンはいない……………」

「どこだ……………? ……まさか!?!」

ミライのエクシアは上を見上げる

そこにはGNランスを構えたギャンの姿が……………」

「終わりだ。」

紫色のオーラを纏うギャンは上空からエクシアへとGNランスを突き刺す

「ぐわああああ!!!!」

GNランスの一撃を胸に受けたミライのエクシア

ギャンのGNランスはダブルオークアンタの胸を貫くと、

ミライのエクシアは機能を停止した。

「僕が負けた……………」

ミライはコックピットに映るGAME OVERの文字、見るのはユウキに負けた時以来だろうか。

「…………… 約束通り、私に付いてきもらうぞ。」

銀髪の女性はミライへ向けてそう言った。

「……………!」

「なんだその目は、こい。」

ミライは会場の前に止まっているセダンに乗せられる。

「僕をどうするつもりだ……………?」

「お前にはこれから私の上司に会ってもらおう。」

「ふざけるな、僕は友人の大会の結果を見ないといけない! 大会が終わってからにしてくれ」

「それはできない。私の上司も忙しい。」

「ならば決裂だ降ろさせて貰うよ。」

「そういう訳にはいかない。」

ミライと銀髪の女性は言い合いになる

「お前は私に負けた。素直に受け止めろ。それでも嫌と言うなら実力行使だ。」

「何を!? うわっ……」

銀髪の女性はミライの首元にスタンガンを当てる

スタンガンを食らったミライは気を失い、ミライを乗せた車は会場を離れていった。

.....

「ここは……」

目が覚めたミライは辺りを見回す。

どうやら自分は建物の中にいるのだろう

「思い出せ……確か……銀髪の女性に負けて、車に乗せられたと思ったらスタンガンを首に……」

「気づいたか。」

ミライの元へと自分を連れ去った張本人が現れる

「お前……!」

「私の上司がお呼びだ。着いてこい。」

ミライは女性に立たされ引つ張られた

「君が如月ミライ君だね……?」

大きなテーブルの奥に如何にも優しそうな紳士の様な男が食事をしながら座っていた

「貴方の事は知っていますよ、サイバーコーポレーション社長のカワグチ社長……」

「見た目の通りに賢そうな少年時代だね、君は……」

「お褒めの言葉ありがとうございます。しかし、僕はサイバーコーポレーションの社長に呼ばれる程の人間ではありませんよ。僕を帰してください」

「私もそうしたいのは山々なのだがね……」

カワグチは口を拭き、本題に入る

「君を連れてきたのは他でもない… 君には力を貸してもらいたいだ…」

「生憎ですが、僕に貴方に力を貸すほどの力は持ち合わせていません」
「ハハハ！面白いな君は… 何簡単な事さ、君にはガンプラバトルで力を貸してもらいたい」

「それに関しても僕をここに連れてきた彼女の方が良いんじゃないですか？彼女は僕を圧倒しましたし」

「それと同じ事を言っている男をこの前も見たよ…」

カワグチは思い出すかのようにそう語る

「君には我社のファイターになって欲しい」

「お断りすると言ったら…？」

「その時はその時だ、私は君がどの返答を出そうが必ずYESとかわせてみせるよ…」

カワグチは笑いながらそう言った

「お断りさせてもらいます。それでは…」

「待ちたまえ、君は力が欲しくないか？例えば、君には倒したい相手がいるはずだ…」

「…」

「私の会社の技術力をもってすれば君にあつた機体だつて用意できる… それに、君を洗脳する事だつてね…！」

「何!?うわ…」

「03、04 彼を例の部屋に…」

「かしこまりました。」

03と04は再びスタンガンで気絶させられたミライを抱えて部屋から出た

「彼には悪いが利用させてもらおう… 邪魔になる芽は早めに摘んでおくとするか」

カワグチは含み笑いしながらそう呟くと、スマホの画面を見る

「彩渡商店街ガンプラチーム… 奴らはいずれ邪魔になる…」

トントン 何者かドアを叩く

「入りなさい」

カワグチは部屋に入るよう言うとドアから男が入ってきた

「新入りを連れてきたか：： 更には奴の友人だなんて、アンタも相当趣味が悪いな」

部屋に入ったのは黒パーカーの男 リユウジだ

「彩渡商店街ガンプラチーム：： 彼らはいずれ君の邪魔になる：： その前に彼の力を借りて潰しておこうと思ってるね」

「アハハハハ!!!」

アンタ筋金入りのクズだな：：」

笑っていたリユウジは突然真顔になり、そう言い放つ

「君はただ勝つ事だけを考えろ：：」

カワグチはリユウジに対してそう言い返す

「言つとくが厄介なのはアイツらだけじゃねえよ、これ見ろ」

リユウジはカワグチに対してスマホを見せた

「タイムズユニバースの社長：： ウイルか：：」

「コイツも相当やるぜ：： それに正義感が強いというアンタが嫌いそうなタイプだ：：」

「彼を潰すのも君の実力次第だ：： 君には期待しているんだよ：：」

「コイツはアイツら程簡単には行かねえよ：： 現にアンタの悪い仲間間のバイラスもコイツに会社潰されてるしよ：：」

リユウジはそう言うとタバコを啜え、火をつけた

「ここは禁煙だ：： タバコは慎んでくれ」

「ふうー：： そいつは知らなかった悪いな。とにかくこのウイルつて奴には警戒しといた方がいいぜ、後彩渡商店街の奴らもな じゃあ俺は戻るわ」

リユウジはそう言うと部屋から出ていった

「バイラスの奴：： ! 私の事を他言していなければいいが：：」

カワグチは焦り始める

プルルルル カワグチの携帯に電話だ

「もしもし、準備ができたか。終わったら彼にあのエクシアを渡せ、以上だ。」

カワグチは電話を切ると外の風景を眺める

「まずは君たちに標的になってもらおう…」
カワグチはそう呟いた

続く

ガンダムブレイカーズ 第25話 不穩

時計は準決勝終了の時刻から2時間後の時間を指す

「ユウキ君… 行こう…！」

「ああ…！絶対に勝つぞ…！」

最終チェックを終えた2人はもうすぐ始まるジャパンカップ決勝へ向けて決意した。

「せつかくここまで来れたんだ… 勝つても負けてもいいから楽しんでこい！」

「うん！」

「ああ！」

カドマツの一言に2人は頷き、控え室を後にした

「なあー？」

「？」

カドマツに話しかけたのはマモルだ。

「何だ？AGE3の修理でも頼みたいのか？」

「それもあるけどそれは自分でするし… じゃなくてミライ来てないか？」

「ああ、あのメガネかけた真面目そうな奴か。いや、控え室なんて1回も来てないが」

「マジか… いくら探してもいないしここに来てると思ってたのに…。」

マモルは少し落ち込んだ様子だ

「どうしたんだよ、まさか喧嘩でもしたのかあ…？」

「いや！してない！… 昼頃に出店のエリアで銀髪の女の人と歩いてるの見てからいないんだよ…。」

マモルはカドマツの疑いを否定してそう言った。

「銀髪の女… まさか誘拐か…？」

「ええ!? 誘拐!? 確かにアイツ頭良いし… 悪い事の為に拐われたって事か!?!」

「そうとも言いきれないが… とりあえずスタッフに聞いてみる、俺

もできる限り探し探してやる！」

「わ、分かった！行ってくる！」

「ったく…… よりによって今からアイツらの決勝始まるのに何処ほつつき歩いてんだ……」

カドマツもマモルの後を追うように控え室を出た。

.....

「ビルドストライクガンダム、スキャン」

ユウキはシュミレーター内に自分のビルドストライクガンダムをセツトしてスキャンする。

「はあ……」

「ユウキ君？ため息？」

「深呼吸だよ…… ミサ、ありがとう」

「どうしたのいきなり……？」

突然のユウキのありがとうの一言に驚くミサ。

「こうしてミサがガンプラチームに誘ってくれなかったら俺はここには立ってないんだ。俺を誘ってくれてありがとう……」

「うん…… ユウキ君のお陰でここまで来れたんだよ…… 感謝するのはこっちの方だよ……」

「2人なら不可能なんてない…… そう思ったのはミサがいたからだよ。俺が心が折れそうな時も支えたくれた、本当に感謝してる。行こう……！勝って、彩渡商店街ガンプラチームの名を全国に轟かせよう……！」

「うん……!!」

「さあ！全チームの準備が完了しました！ミスター、それでは開始の合図を」

「決勝へと進んだ4組のファイターよ！これに勝てば私とのエキシビジョンマッチだ！心の底からガンプラバトルを楽しみ、優勝目指して頑張りたまえ！行くぞ！ガンプラファイター！レディーGO!!」

「ビルドストライクガンダム ユウキ、出るよ!!」

「ガンダムアザレアパワード ミサ、行くよ!!」

「フルアーマー騎士ガンダム ロボ太、いざ参る!!」

彩渡商店街ガンプラチームの3機は射出される。

それぞれが優勝を目指しながら…

「(見せてもらうよユウキ君…君の実力を)」

ミスターガンプラはサングラス越しにユウキの機体を見つめた。

.....

ステージに現れた3機をクシャトリヤとギラドーガが待ち構えていた。

「ここは俺が一掃する！」

アザレアとフルアーマー騎士ガンダムの前に出たビルドストライクガンダムはビルドブースターを變形させ、前に持つてくると大型ビームキャノンの一撃で目の前のギラドーガを殲滅する

「おつーと！最初に動き始めたのは彩渡商店街ガンプラチームです！ビルドストライクガンダムの大型ビームキャノンの一撃によりギラドーガを一掃したー！」

MCハルは実況を行う

「ジャパンカップ決勝に出場するチームを改めて紹介します！彩渡商店街ガンプラチーム、トヨサキモーターズ、沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチーム、鹿児島ロケットガンプラチームの4組です！さあ！今年のジャパンカップはこの4組の内どのチームが優勝するのでしょうか！」

ハルは熱く実況続けた

次々にビームサーベルでギラドーガをなぎ倒していくアザレアの背後をローゼンズールが襲いかかる。

「危ない!!」

突然アザレアの背後で爆発が起こり、ミサは振り向いた

「無事か!?ミサ！」

「ロボ太！ありがとう！」

ローゼンズールに的確に重い一撃を加え、ミサを襲う前に倒したよ
うだ

一方こちらはユウキ、ビルドストライクはクシャトリヤと交戦して
いる

「こつちだ！」

ビルドストライクは岩陰に隠れながらビームライフルの一撃をクシャトリヤに御見舞したようだ。

ビルドストライクを見つけたクシャトリヤは襲いかかるが

「遅い……！」

岩陰からビームサーベル片手に飛び出し真つ二つにした

「こつちは倒したぞ！そつちは!？」

「こつちも終わったよ！」

アザレアの周りにはギラドーガの亡骸が転がっている

「主殿、先へ進もう！」

「ああ！行くぞみんな！」

彩渡商店街ガンプラチームは付近の敵を全滅させ、先へと向かった。

.....

「どうだった!？」

「そんな人見てないって……」

「畜生……！連れ去られたか……！マモル、その女の特徴は？銀髪以外に、」

「えーと…… あ！黒い帽子を被ってたな……！」

「黒い帽子で銀髪…… そういやあの時……！」

カドマツはふと思い出す

く 1時間前 く

「会場内どこも禁煙なんて冗談キツイぜ……」

カドマツは煙草を加えながら会場の外へ出た。

「ふう…… この2日間煙草そんな吸わなくて行けたし禁煙でもするかな……」

カドマツは入り口近くの喫煙所でそう呟きながらタバコを吸う

「ん……？」

カドマツの目には会場に入っていく黒い帽子の女性が見えた。

「……アイツなんかで見たな…… まーいいや、戻るとすつかー！」

カドマツは煙草の火を消すと会場へと戻っていった。

「あの時見た奴か… それにアイツどつかで…」

「そいつ見かけたの？カドマツさん!」

「ああ一時間前位にな、それにしてもアイツどつかで見たような…」

「とにかく!これって誘拐なら事件だぜ!警察に言おうぜ!」

「ああ、とにかく行方不明状態だからな。あとの事は俺に任せろ!」

「ああ!頼んだぜ!俺はスタッフにもう1回聞いてくる!」

マモルは会場へと再び走り出した

.....

続く

ガンダムブレイカーズ 第26話 終幕と影

マモルとカドマツによるミライの搜索の中、会場では熱戦が繰り広げられていた。

「おつーとートヨサキモーターズ、相方のケンジ選手がやられたー！」
彩渡商店街ガンプラチームVSトヨサキモーターズ
どうやらトヨサキモーターズの片方は倒されたようだ。

「よくも私の仲間を…!!!」

彩渡商店街ガンプラチームへ向けてそう呟くトヨサキモーターズガンプラチームのシヨウジ。

「どうにかPGの片方落としたなー！」

「このまま突き進むぞー！主殿ー！」

シヨウジのPGアストレイへ向けて、ビルドストライクとフルアーマー騎士ガンダムは突き進む

「簡単には落とされんよー！」

PGアストレイはタクティカルアームズを變形させ、大型の弓の様な形へと姿を変えると2機目がけて撃ち尽くす

「まずい…！避けるぞー！」

「承知!!」

ビルドストライクとフルアーマー騎士ガンダムは散開し、影へと逃げる

「逃がしはしないで!!」

PGアストレイはタクティカルアームズを今度は大剣へと変えてビルドストライクが逃げた方へと機体を動かす

「ミサあー今だ!!」

「OK…！」

ユウキの呼びかけに答えたミサのアザレアは飛び出すと、シヨウジの機体へ向けてマシンガンによる射撃を行った。

「背後にもいたか…！」

アストレイはミサのアザレアの方へと向くと、大剣に姿を変えたタクティカルアームズをアザレア目がけて振った。

「くっ…!! 今だよ…! ユウキ君!!」

何とかその一撃を耐えたミサはユウキへと呼びかける

「サンキュー…! ミサ!」

ビルドストライクガンダムはビルドブラスターを變形させてアストレイへ大型ビームキャノンを放つ

「しまった!」

ショウジはビルドストライクガンダムのやろうとしている事に気づいたが既に遅い。

ビルドストライクガンダムから放たれた大型ビームキャノンはショウジのPGアストレイを貫いた。

「まだだ…!!!」

ショウジはまだ諦める様子はない

「ミサ! ロボ太!」

「私達に…!」

「任せろ…!!」

ユウキのビルドストライクガンダムの背後からロボ太は飛び出し、フルアーマー騎士ガンダムはPGアストレイの正面、アザレアはPGアストレイの背後めがけて切りかかる

「はああああ!!!」

2機の力のこもった一撃は互いの方向からPGアストレイへと加わった

「この… 私の… PGがああああ!!!」

トヨサキモーターズ、ショウジ選手は断末魔を上げるとPGアストレイは爆発した。

「ここでトヨサキモーターズは敗退となります! 残るは彩渡商店街ガンプラチーム、鹿児島ロケットガンプラチーム、沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチーム! 果たしてどのチームが日本一になるのでしょうか!」

.....

こちらは彩渡商店街ガンプラチームとは別の場所

「まさか、決勝で母校に当たるとはね!!」

鹿児島ロケットガンプラチームの選手、ロクトは沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチームのミソラへと射撃を行う。

「危ない……！」

ミソラは間髪それを避け、ロクトの機体 スターゲイザーカスタムへとランチャーストライクのバックパックから高圧縮されたプラスマーエネルギーを放つ。

「まだまだ……！」

ロクトはそれを回避するがその先には

「先輩でも!!」

ツキミのガンデイルイユが大型対艦刀をスターゲイザーCへと、上空から振り下ろす。

「先輩は立てるものじゃないのか？」

ロクトのスターゲイザーCはビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを握ると大型対艦刀の一撃を受け止め弾き返した。

「そ……！」

ミソラのGNアーチャーCはスターゲイザーCへとビームサーベルに切りかかるが

「甘い!!」

同じく弾き返されてしまった

「しかし、ここで後輩達を倒してもあのチームがいるのか……なら……！」

ロクトは何かを決めた口ぶりで呟く

「なあ！後輩……！」

「なんすか……！」

ロクトの問いかけにツキミは答えた

「このままだと、俺達どっちも勝てないと思うんだ………」

「失礼します。」

「入りましたまえ」

サイバーコーポレーションの社長室に銀髪の少年が尋ね、カワグチは部屋へと入れた

「どうだね、彼の様子は」

「良好です。」

「03、君を呼んだのはこれだ」

カワグチは03と呼んだ少年にガンブラを見せる

「これは。」

「彼に渡しておいてくれ、我がサイバーコーポレーションが生み出した今の彼に適合するガンブラだ」

カワグチの見せたガンブラ、黒のエクシアだろうか？

.....

レクイエムエクシア サイバーコーポレーション仕様

頭 エクシア

胴 ダブルオークアンタ

腕 ダブルオークアンタ

脚 エクシア

バックパック エクシア

武器 GNソード

色は黒を基調としており、目の部分は赤く妖しく光る

右腕には改の文字が描いてある

.....

「とにかくこれを渡しておいてくれ」

「了解しました。“マスター”」

カワグチをマスターと呼んだ03はレクイエムエクシアの入ったケースを抱えて社長室を出た

「さて、私も見るとするかな... ジャパンカップ決勝をね」

カワグチは自分のPCを起動させてジャパンカップ決勝の様子を見始めた。

.....

続く

ガンダムブレイカーズ 第27話 終幕ジャパン カップ

〈研究所〉

白衣の男「これよりテストを開始する。」

白衣の男はそう言うとかかのシステムを起動させた。

「ミライ君、さあ出撃しろ」

白衣の男はミライにそう語りかけるとミライのレクイエムエクシアは出撃した。

「まずはレベル5で行こうか・・・」

白衣の男はパソコンで何かを始める。

するとレクイエムエクシアの前にはドムが3機現れた

「ミライ君、今の君から“アレ”が使えるはずだ。試してみたまえ。」

ミライは無言で返す

するとレクイエムエクシアは紫色の光を纏い始めた。

「そうだ・・・そのままドムを撃破しろ」

白衣の男の声と同時に紫色の光を纏ったエクシアはドムめがけて物凄いスピードで距離を詰め、GNソードでその内の一機を破壊。

更にエクシアの背後から2機のドムが襲いかかるが、振り向き様にGNソードを振り、一機は爆発。

残りの1機となったドムは止まらずに、ビームサーベルで突撃するも今度はライフルへと変形したGNソードをドムの胴部分へと密着させてそのまま4発程撃ち放ち、最後の1機も機能を停止した。

「素晴らしい・・・これが我がサイバーコーポレーションの作り出した機体・・・！」

そう語る白衣の男の背後へと男が近づいてくる。

「ほう・・・出来たのか、アイツの機体」

白衣の男の背後から近づいていたのはリュウジだ。

「心配するな、君の機体ももうすぐで完成だ。」

白衣の男はリュウジへとそう語る

「それにしてもあのオッサン恐ろしいな… あんな顔して作る物がおぞましくて震えちまうよ…！」

リュウジは震える真似をしてそう言った。

「あの人の考えには驚かされるよ… 使用者の感情を奪い、ただただ戦闘ロボットへと変えるシステム… ハッキリ言つて人間のやる事じゃない…」

「そんな奴の下で働いてるアンタらも俺からしたら恐ろしいぜ、おー怖 おー怖」

リュウジは白衣の男にそう言い放つと煙草に火をつけ研究室から出ていった。

「さて、システムはいい方へと進んでいる… 擬似覚醒システム… これを誰でも行うことが出来れば…！」

白衣の男は再びパソコンで何かのシステムを起動させた。

「さあ、ミライ君… 君には悪いがこれもガン普拉バトルを面白くする為…！ 犠牲になってくれ…！」

白衣の男は再びシステムを起動させ、ミライは敵の機体へと突っ込んでいった。

……………

くジャパンカップの会場く

こちらの砂漠のステージの方では熱いバトルが繰り広げられている

「何で…！ 敵が3機…!?!」

ミサは目の前の状況に驚く

先ほど彩渡商店街ガン普拉チームはトヨサキモーターズとの戦いで勝利し、残るチームは3組。

自分達がトヨサキモーターズと戦っている間にどちらかが残っている… そう思っていた。

しかし、目の前には鹿児島ロケットのスターゲイザーCと沖縄宇宙飛行士訓練学校ガン普拉チームのストライクノワールCとGNアー

チャーC。

「ごめん…！私達も勝ちたいの… それに就職したい…！」

ミソラは2人へと謝った

するとツキミは

「宇宙飛行士になれるのはせいぜい2人… ここでお前達を倒して優勝すれば鹿児島ロケットに借りができる… 安心しろ！手は抜く気はないぜ!!」

ガンデイルライユはビルドストライクガンダムへと向けて、両手で大型対艦刀を握りしめて加速する。

「当たり前だ…！こっちも手を抜く気はない！」

ビルドストライクガンダムは向かってくるエンハンスドデファンスに対して腰からビームサーベルを抜くと…

「はあああ!!!」

ツキミとユウキは声を上げ、大型対艦刀とビームサーベルはぶつかり合う

「ロボ太！スターゲイザーの相手をお願い！」

「承知した!!!」

ミサとロボ太も遅れを取らぬようにそれぞれの相手へと向かっていく

「ミサちゃん!!」

「ミソラちゃん!!」

ミソラのガンデイルライユとミサのアザレアはビームサーベルでの鏢迫り合いを始める

「絶対に負けられない…!!」

ツキミとユウキの様に2機はぶつかり合った

「そこだー」

スターゲイザーCから放たれたビームライフルの一撃はフルアーマー騎士ガンダムへと向かうが

「まだまだ!!」

小柄な体型を活かし、ロボ太はそれを軽々と避ける

「こうなったらこっちも直接いくしかないね！」

「望む所だ！」

スターゲイザーCもビームサーベルを持ち、フルアーマー騎士ガンダムへと向かっていった

以前鏢迫り合いを続けるユウキとツキミ。

「せっかくなこまで来たんだ… 楽しもうぜ!!」

ビルドストライクは頭からバルカン砲を放ち後ろへ下がって行く。

「くっ…！ まだまだあ!!」

放たれたバルカンにより少しツキミは少し怯んでしまう。

負けじとエンハンストドデファンスは下がっていくビルドストライクへとビームライフルの一撃を放つが、ビルドストライクはそれを左腕のシールドで吸収した。

「吸収した!? おもしろえ…！ やっぱりこうじゃねえとな…！」

ツキミは驚きながらも何処か楽しそうだ。

……………

一方こちらはミサとミソラ

「ミサちゃん！ 逃がさないよ!!」

ミソラのガンデイルイユはランチャーストライクのアグニへと手をかけ、アザレアへと高圧縮プラズマエネルギーを放つ

「やば…！ だけどまだ終わりたくない…!!」

放たれた一撃をアザレアは間髪避ける事に成功する。

「今度はこっちだよ!!」

アザレアはミソラの機体へとマシンガンの一撃を放ち制圧射撃を行う

「くっ…！」

ミソラはシールドでその一撃を耐えたが、ミサの攻撃はこれで終わりではない

「まだまだだよ!!」

怯んだGNアーチャーへとミサはビームサーベルを片手に突っ込むと、その一撃はミソラのガンデイルイユを貫いた

「ツキミ…！」

そう言い残しミソラの機体は機能を停止した

.....

「ちよこまかとお!!」

スターゲイザーはビームサーベルの一撃をフルアーマー騎士ガンダムへと放つが

「簡単には当たらぬ!!」

ロボ太は再び軽々とそれを避けた

「今度はこちらから行かせてもらうぞー!」

フルアーマー騎士ガンダムは攻撃を避けた後、スターゲイザーへと突っ込んだ。

「長い戦いでおかしくなったかいー!」

ロクトは突っ込んで来るロボ太へと再びビームサーベルを降るが、
「遅いー!」

ロボ太は凄まじい速さでスターゲイザーの胴へと突っ込んで行く
と右腕で渾身の一撃を御見舞した

「何!?!」

反動で後ろへと吹き飛ぶスターゲイザー、勿論ロボ太はそのチャンスを見逃さない

「EXアクション 炎の剣!」

手に持つ剣に炎を宿し、その剣の一撃をスターゲイザーへと叩き込んだ

「私の勝ちだ...!」

ロボ太はそう呟くとスターゲイザーは爆発、ロクトは画面に表示されるGAME OVERの文字を見つめて

「僕の負けか...」

そう呟いた。

.....

「ミソラ!先輩...!」

ミソラとロクトは倒され、残されたツキミ

「俺1人でも...諦められるかよ...!」

ツキミはそう呟き、エンハンスドデフアンスはビルドストライクへ

と再び突き進む。

「俺達もこれで終わりにしようぜ…!!」

「望むところだあ!」

ツキミの問いかけに応えたユウキは腰から再びビームサーベルを抜き、突き進んでくるエンハンストデファンスへと駆け抜ける

「はあああああああ!!!」

まさに負けたくないという意地のぶつかり合い。

「楽しいな…! ユウキ…!」

「ああ…! けどいつまでも楽しんでいられない…!」

「当たり前だ…! 決着、つけようぜ…!!」

「ああ…!」

鏢迫り合いを続けるユウキとツキミ。

お互いに引く様子はない。

「ユウキ君! 頑張れ!」

「主殿!」

ミサとロボ太はこの戦いを邪魔せず遠くからただ眺め応援していた。この間に入って戦うのは野暮な気がしたからだ。

「ツキミ…! お願い!」

既に負けてしまったミソラもツキミを応援する

「ユウキ…! 行け!」

「負けるんじゃないわよ!」

応援席でユウトとレナが声を上げ応援する

「兄貴!」

「負けるな!」

「ユウキ! 諦めるな!!」

その隣には弟のユウシと母と父

2人とも頑張れ! いけ! 諦めるな!

それを見ていた会場の観客も2人を応援し始めた

「会場は2人の決着を声を上げて応援しています! どちらが勝ってもおかしくないこの勝負、制するのはどちらの選手でしょうか!!」

MCハルは熱く実況を行う

「燃えてくるぜ……！ ユウキ、勝つのは俺だああ!!！」

ツキミのエンハンスドデファンスは更に大型対艦刀を握る手を強めた。

次第に圧倒し始めるエンハンスドデファンス、ビルドストライクは少しづつツキミの気迫に圧されていく。

ダメだ……！ 圧されていく…… ユウキの心の中は次第にその思いが溢れていく

「まけるな——ユウキ君——！」

「主殿——！」

「ユウキ——!!！」

折れそうな心の自分に対してそれでも仲間は諦めずに応援してくれている

「そう……だよな…… 諦められないよな……！ こんな所で……！」

ユウキの心は諦めない心を取り戻し始める

「感じるぜ……！ この力……！ 皆の応援の力が……ガンダムに!!！」

そう呟いたユウキのビルドストライクは赤く光出し始める。

「ビルドストライク……！ 俺に!! 力を貸してくれええ!!！」

叫んだユウキのビルドストライクはレンの時と同じように7色へと光り出した。

「覚醒か……！ だけど俺も諦められるか!!！」

ツキミは更に力を込める。

「今の俺はビルドストライクと一心同体……！ 誰も俺の想いを止められない!!！」

7色の光を纏ったビルドストライクはビームサーベルに力を込める。

先程はエンハンスドデファンスへと圧されていたが、最後まで諦めない心。そして仲間の応援の力で更なる覚醒をしたユウキのビルドストライク。今度はツキミのエンハンスドデファンスを圧倒し始めた。

「やっぱり楽しいな……！ ガンプラバトルは……！」

「ああ！だけど…これだけは譲れない…！」

「俺が!!!一番強いという事は!!!」

「これが俺の…！」

「究極の力だあああ!!!」

出せる力を全て出し切る両機。

すると

ピシッ…

ポキッ…

あまりの力に耐えきれず、ビームサーベルと大型対艦刀は壊れ始めた。

「これだけじゃない…!!」

ビルドストライクは腰から2本目のビームサーベルを抜くと、武器を失ったエンハンストデフアンスへと切りかかる。

「全てをこれにかける!!!」

ビルドストライクは出せる限界までの力をビームサーベルに込め、エンハンストデフアンスへと叩き込んだ。

「これで終わりじゃねえ…!!!」

ツキミはビルドストライクから放たれたビームサーベルの一撃を素手で何とか受け止めようと掴み始めた。

「いっけえええええええ!!!」

「こい!!!ユウキ!!!」

ぶつかり合う2つの力の影響で辺りに爆風が起こり砂煙が舞ってしまい、2機の姿が確認出来ない

「ユウキ君!」「主殿!!」

「ツキミ!!」

チームメイトは未だに姿が確認出来ない自分の仲間へと声をかけた

砂煙が消え、状況が確認できる…

アンテナが折れ、左腕もない程ボロボロになったビルドストライクの足元には、上半身と下半身のバラバラになったエンハンストデフアンスが倒れている。

ビルドストライクは唯一残った右腕を上げる。

右手には折れた二本目のビームサーベルがあった。

「強かったぜ……！ユウキ……！」

ツキミはGAMEOVERと表示される画面を見つめ、ユウキにそう言った。

「勝った…… 勝ったあああああ!!!」

「主殿!!!」

ボロボロになったビルドストライクへとアザレアとフルアーマー騎士ガンダムが近づいてくる。

「ユウキ君！」

「ミサ…… 俺やったか?……」

「うん……！」

「と言う事で…… 今回のジャパンカップ優勝は…… 彩渡商店街ガンプラチームです!!!」

うおおおおお!!!!!!

ハルの一言に会場は湧く!!!!!!

「ユウキー！」

「よくやったわよー！」

ユウトとレナは労いの言葉をかける

「兄貴ー！おめでとー！」

「ユウキー!!」

「かっこよかったぞー!!」

ユウキの家族もユウキへと叫んだ

「ユウキ……!!カドマツさん！ユウキ達優勝したって!!」

「何!?本当か!? 行くぞー！マモル！」

「おうー！」

カドマツとマモルはユウキ達の方へと向かった。

「おめでとー！彩渡商店街ガンプラチームの諸君ー！」

ユウキ達の近くへとやってきたのはミスターガンプラだ。

「優勝した君達と、私は数時間後にエキシビジョンマッチを行おう！」

「あの… ミスターガン普拉とバトル出来るって！ユウキ君！」

「ああ…！僕も負けませんよ！ミスターガン普拉！」

ミサとユウキはそう語る

「是非とも楽しんでバトルしよう！では数時間後にまた会おう！」

様々なライバルとの死闘やウイルスによる妨害などの事があつた波乱のジャパンカップは彩渡商店街ガン普拉チームの優勝で幕を閉じるのだった。

「やはり彼らは我々の障害になり得るな… “彼”には彼らの相手をして貰おうか…」

カワグチはモニターを見てそう呟くと電源を落とした。

続く

ガンダムブレイカーズ 第27・5話 戦士達の休息

激戦の末に、仲間達の応援等により再び覚醒したユウキはツキミのエンハンスドデフアンスを撃破した。

これにより彩渡商店街ガンプラチームはジャパンカップ優勝の称号を手に入れ、

優勝特典の一つ、世界初のプロガンプラファイター ミスターガンプラとのエキシビションマッチが数時間後に迫っていた。

「なあ？そう言えばミライは？」

ユウキはカドマツとマモルにそう尋ねる

「ああ…！そうだった！ミライがゆうk…！」

「あいつなら！塾のテストがあるって言って帰ってったぞ!!」

カドマツはマモルの口を抑え、そう語った

「ミライ君も見てくれてたかな…！」

「当たり前だろ！アイツも残念そうに帰ってたぜ。そうだお前ら、喉乾いただろ？ほら」

「モゴモゴ…」

カドマツは変わらずマモルの口を抑えながらミサとユウキに1000円札を渡した

「これでジュースでもなんでも買ってこい！」

「ありがとう！カドマツさん！それよりマモル君苦しそうだよ…？」

口を抑えられたマモルの顔は、呼吸が苦しくなりどんどん赤くなっ
ていく。

「とりあえず行ってこい！」

「うん… 行こうミサ」

「うん！」

ミサとユウキは控え室を去っていった

「ぷはあー！なにすんだよ！めちやくちや苦しかったじゃねえか!!」

「お前が変なこと言おうとするからだろ...?」

「でも！2人にも言わないと!」

「馬鹿野郎、まだこれからエキシビジョンマッチあるのにあいつらに心配掛けさせれるかよ... いいか?この事はしばらく俺とお前の秘密だ いいな?」

「でも...」

「それと、ほらこれ」

カドマツはマモルに対して何か書いてある紙を渡す

「俺の連絡先だ。お前にはウイルス退治の時に迷惑掛けたからな...」

「なんかあったら俺を頼れ」

「おつさん...」

「おつさんじゃねえよ！いいか?とにかくアイツを見つけたりしたらまず俺に言え わかったな?」

「ああ...!」

.....

「さっきのユウキ君のビルドストライク凄かったね！なんか虹色に光ってたよ」

「いやー... アレに関しては俺もやり方が分からないんだよね...」

「でも！覚醒は何となく掴めてきた！ なあミサ！俺達はここで終わる気はないよな?」

「え? うん...! 私達ならまだまだ上を目指せるよ!」

「ジャパンカップで終わりじゃない...! 今度は世界に彩渡商店街の名を轟かせようぜ!」

「おおーう!!」

ミサも同意し声を上げる

「あ！そう言えばユウキ君、ビルドストライク大丈夫なの?」

「そうだった...」

ユウキはビルドストライクを取り出す。

アンテナは折れており、左腕はあの衝撃で外れている

とてもエキシビジョンマッチに出れる様な状態じゃない

「おーい！ユウキー！」

ミサとユウキの2人に向こうから声をかける

「兄貴！それにレナ姉！」

ユウトとレナが向こうから声をかけてきたようだ

「ユウキ~~~~!!!」

ユウキの名を叫びながらレナはユウキに抱きつく

「ちよ!!!」

いきなり抱きしめられ驚くユウキは声を上げる

「おいおいレナ、ユウキ抱きしめる為に来たんじゃないだろ...」

ユウトは苦笑いしながらレナを窘める

「ユウキ、ビルドストライク今使えないだろ？」

「ああ...」

「ほらこれ、次のエキシビジョンマッチはこれを使いなさい」

レナは思い出したかのようにユウキへとガンプラを渡した

「これって！」

ガンプラを見たミサは声を出す

「パーフェクトストライク...！」

レナとユウトに渡されたガンプラはあのパーフェクトストライクだ。

遡る事とリージョンカップ。

リュウジのデスサイズヘルを最後の力を振り絞り倒した後、その勝利を認めないリュウジによってパーフェクトストライク破壊されてしまった。

リージョンカップ決勝には兄のユウトのインパルスガンダムと破壊されても尚何とか残ったパーツで組み上げたパーフェクトインパルスで何とか優勝出来た。

ビルドストライクガンダムを使う今でもたまたまにストライクガンダムのことを思い出す。

「リージョンカップの後に俺とレナで何とか復活出来ないかやってたんだ。それでここまで直した訳だ！」

壊された時に折れたアンテナは少し右の方が欠けているもパツと

見何らおかしな点はない。

胴の部分は流石に無理だったようで新しいストライクガンダムの胴を使っている。

「ありがとうー！兄貴、レナ姉！」

「よかったね！ユウキ君！」

「早速調整しよう！ミサ！」

ユウキはミサの手を掴み、控え室へと走っていった

「良かったぜあいつの喜ぶ顔がまた見れて」

「親みたいなさ言うのね。」

走っていくユウキ達を見ながらユウトとレナはそう呟く

「お前もユウキの前だと母親みたいになるけどな」

「それは…… あまり否定出来ないわ……」

……………

「ほーん、やっぱり勝ったのはアイツか……」

テレビを見ながらリュウジはタバコに火をつけてそう呟いた。

「えーと、『彩渡商店街、ガンプラチームによる復興』??アホくさ……」

」

リュウジはスマホで彩渡商店街ガンプラチームのネット記事を読み、そう言うスマホをベッドに投げた。

「一足先に世界大会で待ってるぜ…… お前を狩るのはこの俺だ……」

リュウジはデスサイズヘルを見ながらそう言った。

……………

「おーい！」

走るユウキとミサの後ろから声をかけたのはツキミだ。

「ツキミ……！」

「最後の戦い、楽しかったぜ。決勝に相応しい終わりだった…… 全力でぶつかったし後悔はしてねえ！ちよつと悔しいけどな！」

ツキミは笑いながらそう言う

「今度また一緒にガンプラバトルする事があったら勝つのは俺だ!!!」

「ああ……！だけど、俺も負けねーぜ！」

ユウキはツキミへとそう答えた

「じゃあ俺達は帰るぜ。　じゃあな！エキシビジョンマッチ頑張れよ！ミサもー！」

「ミサちゃんもユウキ君もじゃあねー！」

「ミソラちゃんもツキミ君もバイバーイ！」

「またやろうなー！」

沖縄宇宙飛行士訓練学校ガンプラチームの2人は一足先に地元へと帰っていった。

.....

「彼の様子はどうだね？」

「良好です。このまま行けば擬似覚醒システムをマスターするかと。」

カワグチに対し、そう答えたのは03だ。

「リュウジ……　彼の方はどうだね？」

「特にはありませんが、性格に難あります。」

04は若干不機嫌になりながらそうカワグチに報告した。

「宜しい、下がりましたえ。」

「はい。」

2人はそう答えると部屋から出た。

「04、お前は進歩したな。」

03と呼ばれている少年は歩きながらそう呟く

「どういう意味だ。」

当然04も気になり03へと問う。

「お前に感情が産まれたのだ。これは凄い事だ。」

真顔のまま03はそう呟いた

「我々は生まれ持つて感情が無いはず。しかしお前はあの男のお陰で怒りという感情が生まれた。このまま行けばお前なら悲しみや喜びの感情も覚えるのかもな。」

03はそう言うのと足早に去っていった。

「私達は所詮戦う機械だ。そんなものを持つていてもなんの意味もなし。」

04は去っていく03の背後を見ながらそう言った。

.....

決勝から数時間経ち、遂にエキシビションマッチが始まる

「さあ！8年振りにこの場に立った…！ ユウキ君、ミサちゃん…！
楽しいバトルにしよう！」

ミスターガンプラはミサとユウキに対してそう言った。

「負ける訳には行きません！僕達も本気で行かせてもらいます！」

ユウキもミスターガンプラへ向けてそう言った。

「さあ！8年の沈黙を破りこの舞台に立ったミスターガンプラと今年
の優勝チーム 彩渡商店街ガンプラチームはどう戦うのでしょうか
！エキシビションマッチ遂に開催します！」

うおおおおおおお！！！！

ハルの一言に会場は盛り上がる。

8年振りのミスターガンプラの試合、当然誰もが興奮する。

しかしその光景を快く思わない青年が立って見ている。

「チャンプ…！」

続く

ガンダムブレイカーズ 第28話 ぶつかり合うプ
ライド

「ここはジャンカツプエキシビジョンマッチの最中だ。

「はあああああ!!!」

ミスターガン普拉^{!!}のケンプファーは、ガーベラストレートを片手に
アザレアへと切りかかった

「危ない!」

ミサの危険を感じたユウキのパーフェクトストライクはビームラ
イフルでケンプファーの手を撃ち、何とかミサへの攻撃を防ぐ。

「ユウキ君!ありがとう!」

「主殿!まだだ!」

ロボ太はユウキへと呼びかけた

「行くぞ!ユウキ君!!」

それと同時にミスターガン普拉のケンプファー、今度はユウキの
パーフェクトストライクへと向かっていく。

「負けられるかよ...!」

ユウキはパーフェクトストライクのバックパックからシュベルト
ケーブルを両手に握り、ケンプファーへと突っ込んでいく。

ぶつかり合うシュベルトケーブルとガーベラストレート

「はあああああ!!!」

互いに声を上げ、剣を交えるその様はまさに負けられないというプ
ライドのぶつかり合いだろう。

「おらあああ!!!」

ユウキのパーフェクトストライクは力を込め、ミスターガン普拉の
ケンプファーのガーベラストレートを弾いた。

「くっ...!」

攻撃を弾かれたケンプファーは後ろへ下がり、膝を付いた。

「この感じ...! 思い出すよ、私がファイターだと言うことを...

!!!」

そう言ったミスターガンプラのケンプファーは赤く光り始めた。

「まさか… アンタ…!!」

覚醒…

過去にもユウキの他にリュウジと呼ばれていた黒パーカーの男やレンが使用したのは見た事はある

そもそもユウキは最近までガンプラバトルに興味など無く、ミスターガンプラの名すら知らなかったのでミスターガンプラが覚醒システムを使える事など知らない。

「君達もファイターなら感じるはずだ！心の中から滾る戦いたいという思い…！さあ、覚醒したまえ！」

ミスターガンプラのケンプファーは彩渡商店街ガンプラチームの3機へと再び向かってくる。

「行くぞー！ミサ！」

「うん！」

アザレアはマシンガンを、パーフェクトストライクはアグニに手を掛け、ケンプファーへと放つ。

「いい攻撃だ！だが！」

覚醒したケンプファーはその一撃を避け、止まることはない

「ロボ太！」

「承知！」

ユウキの声に応えるように、パーフェクトストライクとアザレアの背後からは、ケンプファーへ向けてフルアーマー騎士ガンダムが飛び出した

「EXアクション！ 炎の剣!!」

向かってくるケンプファーへ向け、フルアーマー騎士ガンダムは炎の剣の一撃を叩き込むが、

「遅い…!!」

EXアクションを叩き込んだ筈の場所にはもうケンプファーの姿はない

「速い…！」

ミスターガンプラは、ロボ太の一撃を覚醒する事により可能になる

凄まじい機動力で避け…

「背後がガラ空きだ！」

フルアーマー騎士ガンダムの背後からガーベラストレートの一撃を叩き込んだ。

「しまった…!!!」

一撃により地面へと叩きつけられるフルアーマー騎士ガンダム。

「ロボ太！」

その光景を見たミサはケンプファーへと突っ込んでいく。

「ミサー！」

ユウキの声は届かず、ミサのアザレアはビームサーベル片手にミスターガンプラへと突っこむ。

「仲間を思いやるその気持ち…！素晴らしいが、ただ救いたいという想いだけではどうにもならない！」

ケンプファーはアザレアの一撃をガーベラストレートで受け止めた後弾き返す。

「きゃああああ!!!」

ミサも同じように吹き飛ばされてしまった

「パーフェクトストライク…！力を貸せ…!!!」

ユウキのパーフェクトストライクは赤く光出す。

「行ける…！ おりゃああああ!!!」

覚醒したユウキはパーフェクトストライクでミスターガンプラへと突っ込む。

「さあ！来い！」

ケンプファーはユウキと同じように突っ込んだ。

「はああああああ!!!」

先ほどとは違い、互いに覚醒した2機のぶつかり合うガーベラストレートとシユベルトゲーベルの衝撃で辺りへと衝撃波が起こる

何とか立ち上がったアザレアとフルアーマー騎士ガンダムはその衝撃を耐えるが、

「きゃああああ!!!」

再びアザレアは吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされたアザレアに対し、ロボ太は駆け寄ると

「ミサ、私達は離れていよう…。」

驚きの言葉がロボ太から放たれる

「でもー」

当然ミサは反論した

「主殿の邪魔になる…。」

そう言ったロボ太とミサの目線の先には、互いに剣を交えるケンプファアとパーフェクトストライクの姿があった。

とてもアザレアでは追いつけないスピードでの戦いだ

「私達は日本一のチームなのに…？」

「世界は広いな…。」

ミサは渋々ロボ太の考えに同意しその場から離れた

……………

「私が思っていてた通り、君たちは素晴らしいチームだ…！　だが、君達の中には差が生じてしまっている…！」

ケンプファアはガーベラストレートによる一撃を放ちながらそう語る

「差なんてない…！」

パーフェクトストライクはシュベルトゲーベルでガーベラストレートの一撃を弾き返しながらそう反論した。

「覚醒システム…　使えると使えないとは戦いに差が生まれてしま…　う…　しかし、私は君達ならその壁すらも超えられると信じている…!!」

「当たり前だ！俺達は日本一のチーム…　！必ずどんな壁も超えてみせる…!!!」

ミスターガンプラの一言にユウキはそう返した

「その想いだ！その想いこそが君達を強くする…　超えられない壁など無い…　その想いを忘れずに進んでくれ…！」

「ああ…　！絶対に忘れない!!!」

そう応えたユウキのパーフェクトストライクの一撃はケンプファアへと直撃し、ミスターの機体は再び膝を付く。

「君の…勝ちだ…！」

ミスターガンプラは自ら負けを認めた

「エキシビジョンマッチ…！勝者は彩渡商店街ガンプラチームです！！会場の皆様！あのミスターガンプラを撃破した彩渡商店街ガンプラチームに拍手を！」

うおおおおおおお！！ パチパチパチパチ

会場からは惜しみない拍手と声援が飛ぶ

「素晴らしいバトルだった。年甲斐もなくはしゃいでしまったよ。」

ミスターのケンプファーはパーフェクトストライクへと握手を求めた。

その瞬間

「はしゃぎ過ぎだよ…！」

「な?!」

突如ケンプファーへと何かしらの機体による攻撃が当たり巻き添えになる形でケンプファーとパーフェクトストライクは吹き飛ばされる。

「何なの!？」

いきなり吹き飛ばされたチームメイトを見てミサはそう声を上げる

「外部から侵入してるのか!？」

ロボ太は2機へと攻撃した機体を見つめ、そう呟く

「あのー?こんな予定にはー?」

大会運営側のMCハルにすらこの状況は知らされていないようだ。

「君は…まさか…ウイル少年なのか?…！」

乱入してきた機体 アストレイゴルドフレームをベースにした機体を操る少年の事をウイル少年と呼んだミスターガンプラ。

「引退したチャンプがバトルをしたのでね。その無様な機体にやられた様だけど手加減して上げたのかい?」

ウイルは悪態を付く

「テメエ…！」

当然ユウキはイラつく。

「私は手加減などしていない！」

当然ミスターガンプラは反論する

「へえ、八年前は手加減してくれたのにかい？」

ウイルはミスターガンプラへとそう反論する

「君、よかったね。手加減してくれる優しいチャンプでさ。彼もこう言ってるんだ、さっさと日本一のトロフィーを持って帰りなよ」

「お前…！」

ユウキはシユベルトゲーベルに手をかけると

ウイルへ向け、急加速した。

「へえ、凄いスピードだ。」

ウイルも負けじとガーベラストレート片手にユウキへと加速し、互いにすれ違った。

その後ウイルの機体はガーベラストレートを鞆にしまうと、

「止まって見えたよ」

その一言共にパーフェクトストライクは全身バラバラになった。

「このおおおお!!!」

ミサはウイルに対して突っ込むも、

「下手くそ。」

アザレアの頭を持ち、地面へと叩きつける

「君は力の差が分かってるみたいだね。」

ウイルはロボ太の頭を撫で、その場から姿を消した

「なんだよもお…」

叩きつけられたアザレアは上を見ながらそう呟いた

「すまない…。全て私の責任だ…。」

ミスターガンプラはそう呟いた。

続く

第7章 動き始めた影

ガンダムブレイカーズ 第28.5話 動き出す計

画

「ああああああ!!!」

ユウキはミサの実家の模型屋で突如叫ぶ

「思い出しただけでイライラする…!!! なーにが

止まって見えたよ（キリッ） だよ！かっこいいとでも思ってたのかああー!!!」

ユウキは二日前のバトルを思い出しいライラしていた。

ジャパンカップエキシビジョンマッチ…

互いに覚醒したミスターガンプラのケンプファーとユウキのパーフェクトストライクは互いに引けを取らぬ戦いでケンプファーを撃破。

その後のミスターガンプラとのやり取りの最中に、ミスターにウィルと呼ばれたアストレイゴルドフレームをベースにした機体を操る少年の乱入によって楽しく終わるはずの大会は無茶苦茶にされてしまった。

「あーもう！折角楽しい大会だったのに!!」

ミサも同じようにイライラしている様だ…

「アイツは空気が読めないのか!!! あーもうイライラするぜ…」

ユウキは相変わらずの様だ。

「そんな事言ったってしょうがねえだろ… それよりお前らジャパンカップを制覇して終わった気じゃないだろうな？」

イライラし続ける2人を窘めるように口を開いたのはカドマツだ。

「そっか… 私達ジャパンカップ優勝したから次があるんだ…」

「次は世界… だとしても絶対にアイツと当たる気がする…!! ああああ!!!もう!!!」

ユウキは再びウィルの事を思い出し再びイライラし始めた。

「大丈夫かこいつら…」

流石のカドマツも呆れる

「お邪魔するよ」

3人に対して声を掛ける金髪の青年とメイド服を着た女性が模型屋へと入ってきた。

「誰だアンタ、待てよお前の声どつかで聞いたぞ！」

ユウキは金髪の青年の声に聞き覚えがあった。

「なあ… お前さてはウイルとか言う奴だろ？」

ユウキは怒りを抑え、冷静に青年へと問いたです。

「そうだ。この前は邪魔してすまないね。」

「ああ!? て m… モガモガ」

ウイルに対して突つかかろうとするユウキに対してカドマツは口を抑えると、

「アンタ… 確かタイムズユニバースの社長か何かだったな？ そんな人間がこの商店街に何のようだ？」

ユウキの抑えながらカドマツはウイルに対して問う。

「僕が用事があるのはそのエースさ。」

ウイルはカドマツに口を抑えられ暴れるユウキへと指を指した。

「ハアハア… 俺に何のようだ?…」

無理やりカドマツの手を離れたユウキはウイルに答える

「今度の大会… 世界大会は僕も参加する事にしたよ。一昨日はチャンプとの戦いで弱っていたらしいけど、今度はきちんとした状態で戦いたくてね。また君のガンプラをバラバラにして上げるよ」

「なんだと!?!」

ユウキは再びウイルに突っ込んでいこうとするが

「ユウキ君！」

今度はミサに後ろから抱きつかれ止められた。

するとメイド服の女性がユウキの前に立ち

「ウイル坊っちゃんの一言は一タイライラするかもしれませんがご了承下さい。」

ペコリと頭を下げた

「ドロシー…」

余りにドストレートな物言いにカドマツやウイルも苦笑いする。

「さあ、ウイル坊っちゃま。次は雷門です。行きましょう」

ドロシーはそう言うのと模型屋を出た

「楽しみにしてるよ一ヶ月後の大会」

ウイルもそう言い残り店を出た。

「ふざけんな…！どれだけ人を馬鹿にしやがる…!!!」

ユウキの怒りは頂点。これだけ怒ったのは黒パーカーのアイツにパーフェクトストライクを壊された時以来だろうか。

「どうするんだ？」

カドマツは口を開く。

その一言はユウキではなく、ミサを向きながら言った。

「え…？」

「ウイルとか言う奴はユウキを見ながらエースつつつたる？ この彩渡商店街ガンプライムのエースはミサ、お前じゃないのか？」

「うん…」

「俺は別にこの商店街が潰れようと何も思わない…けど、お前らは救いたいんだろ？この商店街を。なら強くなるしかない…アイツ超えるくらいにな。」

「決めた… 私、ちよつと修行してくる！」

ミサは店を出ると何処かへ行ってしまった。

「カドマツさん…」

「しようがねえよ、強くなるにはこれくらい言わねえとな…」

プルプルプル

静寂に包まれた空間の中、カドマツの携帯が鳴り始めた

「もしもし、ん？お前か…何!?アイツが見つかった!」

カドマツはいきなり声を上げる。

「分かった。俺とユウキで向かう！ 場所はどこだ!? ゲームセンターか！分かった!」

カドマツは電話を切ると、

「ユウキ！車出すから付いてこい！」

「え？なんだよ？」

「詳細は車の中で話す！ いいから速く！」

「わ、分かったよ……」

……

「で？何でこんなに急いでゲームセンター向かってんの？」

「お前達には申し訳ないが、心配かけないように俺とマモルで秘密に
してた事があるんだ……」

「秘密……？」

ユウキはカドマツの一言に謎の不安感を覚える

「ミライ……最近見てないだろ？」

「アイツに関係あんのか？」

ユウキは更に不安になる。

ミライ……確かにここ数日みていなかった。

ジャパンカップ決勝にも姿を見せずに。

「アイツはジャパンカップ決勝からずっと行方不明なんだよ……あ
の時はお前らに心配掛けたくなくて黙ってたがな……」

「はあ!? ミライが行方不明!? 誘拐……？」

カドマツの口から出た言葉に驚きを隠せないユウキ

「俺たちも誘拐だと思ってるが…… ゲームセンターにミライがい
るってさっきマモルから連絡があつてな」

「それなら早く行かないと！」

「分かってる！」

……

モブA「うわあああああ!!!」

赤色のズゴックはGNソードで両腕を切り落とされると、ライフル
に変形したGNソードの一撃を胴体にゼロ距離でくらしい爆発する。

モブB「なんだよ……あの機体……」

モブC「化物じみてやがる……」

「……」

震える2機のガンプラに対し、一言も発さずに倒したズゴックを踏
みつけるのはミライのレクイエムエクシアだ。

レクイエムエクシアを操るミライの目には光など無い。

まるで何かに囚われ操られているかのようだ

.....

「おおーい！2人ともこっちだ!!」

ゲームセンターの入口付近でマモルがユウキとカドマツに対して手を振る

「あれ？ミサちゃんは？」

「修行してくるって出てったよ... それよりミライは!？」

「シュミレーターだ！こい！」

マモルは2人を誘導した

「行くぞユウキ！」

「うん...！」

二人もマモルの後ろを追いかけ、ゲームセンターのシュミレーターへと向かっていった。

.....

「お前がミライを連れ去った奴か？」

シュミレーターの付近には髪の毛の色が白く、片目は前髪で隠れている少年へとカドマツは尋ねた。

「直接連れ去ったのは俺じゃないが。連れ去ったと言えば連れ去ったな。」

「お前... ミライを返せ！」

ユウキも続けて少年へと話す

「俺も返してやりたい所だがそう簡単に返せない。上の判断でな。」

そう語る少年に感情などない。まるでロボットだ。

ロボ太の方が感情があるくらいだ。

すると3人の前にシュミレーターから出てきたミライが現れた。

「ミライ！」

「お前！心配したんだぞ！」

ユウキとマモルはミライに対してそう声をかける

「今のこいつに言葉は通じない。」

白髪の少年はそう語る

「はあ?!?どういう事だよ!?!」

納得の行かないマモルは反論した。

「お前等を潰す為にこうなった。恨むならこんな風にした俺の上司を恨め。」

白髪の少年……もとい03はそう語った。

「……！今日は本当に俺をイライラさせるな……！」

既にイライラしていたユウキは更に怒りが込み上げてくる。

「返して欲しいならコイツに勝て。それしか方法はない。」

03はそう語るとミライをシュミレーターへ向かわせた。

「上等だ……！」

怒りの極みのユウキはシュミレーターへと入っていく

「ユウキ……これ受け取れ！」

カドマツはユウキを呼び止め、ガンプラを渡した。

「ビルドストライク……」

ジャパンカップ決勝で、ツキミのエンハンストデフアンスとの死闘を繰り広げてボロボロになったビルドストライク。エキシビジョンマッチはレナとユウトが修復してくれた。パーフェクトストライクで出撃したが、その間にカドマツが治してくれたようだ。

「ありがとう……」

「絶対……勝ってアイツを取り戻せ……！」

「ああ……！」

ユウキとカドマツはそうやり取りした後

「俺も行く」

マモルもシュミレーターへと向かう

「マモル……」

「俺もアイツを止めたい……！よくわかねえけどアイツは苦しんでる。まるで操られてるみたい……だから俺も行かせてくれ！」

「分かった、行こうぜ！」

「おう！」

マモルとユウキもシュミレーターへと入っていった。

「お前に教えといてやるよ」

シュミレーターの外で待機しているカドマツは03へとこう切り

出す。

「何をだ。」

03は聞き返した

「アイツらの友情パワーとやらに洗脳は効かねえ、どれだけアイツらがこの戦いで苦しみ追い詰められようが、そのパワーには勝てないだろうな」

「ほざいてろ。勝つのは我々の技術だ。」

カドマツの言葉に対してそう冷静に03は返した

「そう言えば…… さつきからずつと言おうとしてたが、お前、人間じゃないだろ?」

「何……?。」

カドマツの一言に若干の焦りだす03。

「俺も仕事柄ロボットやらアンドロイドやらを扱うからな、見た所ワークボットだろ? 何処からの差し金だ……? やけに精巧に出来るから人間かと思ったがな」

「それに答える義務はない。俺は自分の仕事をやるだけだ。」
「……」

03の返答に黙り込んだカドマツは戦況を確認し始めた。

……

「マモル、お前機体大丈夫なのか?」

「ああ少しだけ治した、だから心配すんなって。」

さあ、行こうぜ……!」

「ああ……!」

2人はシミュレーター内に自分のガンプラをスキャンした。

「ビルドストライクガンダム ユウキ、出るよ!」

「AGE3フルアーマーフォートレス マモル、行くぜ!」

「レクイエムエクシア ミライ、出る……」

3機は射出され、戦場へと放たれる

「必ず取り戻す……! ミライ……!」

ユウキはそう呟き、ビルドストライクは動き始めた。

.....

「遂に対峙したか…… 彩渡商店街ガンプラチーム 相楽ユウキ、我がサイバーコーポレーションが生み出したレクイエムエクシアと擬似覚醒システムにどう対抗するかな……」

カワグチは03から送られた情報を見てそう呟き、製造中の自分のガンプラを確認すると背後にいた男へと話しかける

「バイラス、あのウイルスの様子はどうか？」

「良好だ。世界大会ではアレを使ってタイムズユニバースの彼に復讐するんだらう？」

「ああ……！。こちらももう少しで完成だ。最強のガンプラがね……」

「素晴らしい…… フハハハハハ!!」

バイラスと呼ばれた男は高笑いする

カワグチの目線の先には…… ネオ・ジオングが制作されていた。

「覚えている…… ウイル……！」

カワグチは近くにある、ウイルスの写真が写っている記事を睨みつけそう呟いた。

続く

ガンダムブレイカーズ 第29話 嫉妬と友情の狭間で

「宇宙空間のステージ」

「マモル、来るぞ……！」

「ああ……！」

ユウキとマモルは自分達へと向かってくる灰色のエクシアを警戒する

「……」

灰色のエクシア——レクイエムエクシアを操る少年、ミライ。

ジャパンカップの最中に連れ去られ、少しの間姿を見ていなかった彼はまるで感情の無い戦闘ロボットのような姿となりマモルとユウキの前へと現れ、2人に勝負を挑んだ。

「ミライ……！思い出せ！」

そう呟き先陣を切ったのはマモルのAGE3 フルアーマーフォートレスだ。

ジャパンカップで起こった、コンピューターウイルスによる大会の乗っ取りに対して出撃したマモルのAGE3は激闘の末にプロヴィデンスガンダムによって両腕や脚がもげボロボロの状態となったが、この3日間のために修復出来たようだ。

「……」

何一つ喋らないミライのエクシアは向かってくるAGE3のビームサーベルの一撃をGNソードで受け止める。

「ずっと心配してたんだぞ!!俺も、カドマツのオッサンも！」

半分怒りも込めた一撃をエクシアに向けて放つも、どれも受け流されてしまう。

「ミライ……！」

AGE3の後ろからはビルドストライクがビームライフルを握り、エクシア目がけて数発放つ

「ミライ あのシステムを使い。」

シユミレーターの外にいる03はミライへとそう言い放つ

「あのシステム…？」

これを聞いたカドマツは少し不安になると自分もマモルとユウキの2機へと通信を入れる

「お前等！なにか仕掛けて来る気だ！気を付けろ！」

カドマツは2人へと警告するも遅かったようだ。

「…ッ!!」

少しだけ声を出したミライのレクイエムエクシアは禍々しい紫色のオーラを纏い始める。

「なんだ…これ…」

今まででミライが見せた事無いようなオーラに驚くマモルは少しばかり判断が遅れ、

「マモル！気を付けろ！」

ユウキは警告するも

「遅い…」

「しまった…！」

あつという間に距離を詰めたエクシアから放たれたGNソードの一撃がAGE3に叩き込まれてしまう。

マモルはそれを間髪右腕で防ぐも、GNソードはそれを切り落とし、AGE3は右腕の関節から先を失ってしまった。

「これじゃあ… EXアクションが撃てない…」

EXアクションを失った事はかなりデカい。

もはやマモルは残された左腕での攻撃に賭けるしかない。

「マモルを… よくも…！」

加速したユウキのビルドストライクはミライのエクシアに距離を詰め、腰からビームサーベルを1本抜きエクシアに切りかかる。

「…！」

当然GNソードで受け止める

「マモル！」

「え？ あ、おう！」

鏢迫り合い状態になっているエクシア目がけてAGE3 フォー

トレスの左腕から一撃を放つ

「はっ！」

自分のビルドストライクにフォートレスの一撃が当たる前にとユウキは離れようとするが、

「逃がしは…しない…」

そう呟くミライのエクシアに左足を掴まれてしまう。

「くそーミライー！」

ドオオオオオオオン

宇宙空間に爆破音が轟く

A G E 3 フォートレスから放たれた一撃がぶつかった場には

無傷のレクイエムエクシアの姿があった

一方のビルドストライクは何とか脱出したようだが爆発に軽く巻き込まれてしまい、足の部分が壊れたようだ。

「ミライ…！お前強くなったな！」

ユウキはミライへ対してそう言い放った。

「だけど、その強さはお前の強さじゃない… 与えられた強さだ。」

「君に… 何が分かる…」

あれだけあまり喋らなかったミライは遂に会話を始めた。

「君にタウンカップで負けてから… 僕はもう一度君に並ぶ為に努力した… それでも君はどんどん僕を置いて強くなる…！ その為には例え与えられた力でもいい… それでも僕は君と同じ位の力で戦いたかった…！」

ミライはそう語る

「馬鹿じゃねえの…」

ユウキはミライの言葉に対してそう返す

「… ツ？」

「貰った力なんてお前の本当の力じゃないだろ？ そんなんで俺と戦って何が楽しいんだよ！ 本当に俺を超えたいなら…！ 自分の力がかかってこい!!」

「ユウキ…」

「強い弱い… そんなのどうでもいい…！ ガンプラバトルを楽し

めない今のお前はどうかやっただって俺達には勝てない！ それを今から俺達が教えてやる…！マモル、まだ行けるか？」

「ああ！腕がもがれようが関係ねえ！」

「行くぞ…！ミライ！ お前も自分の力でかかってこい…！」

ユウキのビルドストライクは腰から二本目のビームサーベルを抜き、二刀流の構え。

そのままエクシアへと突っ込んでいった。

「何を悩んでいる。 お前には擬似覚醒システムがある。 それを使い奴を倒せ。」

03はミライへと命令した。

「君に言われなくても分かっている…！」

エクシアは再び禍々しい紫色のオーラを纏い、自分へと向かって来るビルドストライクを迎え撃つべく、GNソードをビームライフルへと変形させビルドストライクへと放つが

「行くぜ！ミライ!!!」

ビルドストライクは赤く光りはじめ、更にエクシアへと突っ込んでいくスピードが上げ、ビームライフルの一撃を避けると

「おりゃあああああ!!!」

声を上げたユウキは二本のビームサーベルの一撃をエクシアへと叩き込んだ。

「くっ…！」

ビームサーベルはエクシアへと喰いこみ、パーツは悲鳴を上げるかのようにミシミシと音を立て始める。

「ミライ…！お前は元から弱くなんかない…!!!」

「…!!」

「だけど今のお前は心が弱い…！ それさえ越えればお前は誰にも負けない！」

「ユウキ…！ だが僕も負ける訳には行かない…！」

エクシアは力を振り絞り、擬似覚醒システムの力を右手に込め、ビルドストライクの右腕に叩き込む。

ビルドストライクの右腕は破壊されエクシアに対して一撃を叩き

込んでいるのは左腕だけになった。

後は左腕…… エクシアは今度は左腕に力を込め同じように攻撃しようとするが

「させるかよ!!!」

今度は背後からビームサーベルの襲い掛かった。

「マモル……！」

AGE3のビームサーベルはエクシアのバックパックへと攻撃を叩き込んだ。

「ミライ……！ 約束しただろ！俺とお前のコンビで大会に出るって……！」

「僕を許してくれるのか…… 君達を倒そうとしたというに……！」

「当たり前だろ……！ 俺達親友だからな！」

「だから……！1人で抱え込むなあああ!!!」

2機の力は更にエクシアへと喰い込む。

「2人とも……ありがとう……！」

ミライはそう呟くとレクイエムエクシアは耐えきれなくなり爆発した。

コックピットにはGAMEOVERの文字が。

「……ッ!!」

ミライのレクイエムエクシアは完全に壊れ、同時にミライの頭に激痛が走った。

「やはり無理か……。」

その光景を見ていた03はその場から離れ始めた。

「凄かっただろ？アイツらの友情パワー？」

カドマツは03へと話しかけた

「友情パワー。下らない。」

「なんだよ、お前にも1人くらいはいるだろ？守りたい奴が。」

「……」

03の頭には1人の女性が浮かぶ。

「……そんなものはない。」

03は頭に浮かんだものをかき消しそう答えた。

「お前の上司…… いやマスターとやらは何者だ？ 子供連れ去って洗脳なんて恐ろしいなんてもんじゃない…… 犯罪だ。 それを分かってやってんか？ お前らは！」

カドマツの口調は少しばかり怒りが見えた。

「お前に話す義務などない。所詮俺はあの方の言いように扱われる口ボットだ。」

「お前……！」

「これで終わりだと思ふな。 あの方は執念深い。 またお前等を邪魔しに来るように仕向けるだろうな。」

03はそう語り、ゲームセンターから出ていった。

……

「ミライ！おい！」

「おい！大丈夫かよ！」

ミライの目は少し開き、そのまま起き上がった。

「僕は……何を……」

「ミライー！」

「心配したんだぞー！この野郎ー！」

ユウキとマモルはミライへと抱きついた。

「ちよ！君達！離れろ！」

「この馬鹿野郎ー！」

「グスツ！ うわーん！」

抱きついてくる2人を引き離そうとするミライだったがガシツと掴まれなかなか離れない。

「気分はどうだ？何か覚えてるか？」

「いえ…… と言うかジャパンカップは!?」

「そこから記憶がないのか…… 安心しろ彩渡商店街の勝ちだ。日本1になったんだよ。」

「うわーん！」

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ー！」

半泣きになっているユウキとマモルを見てミライは少しクスリと

笑った。

「おめでどう… ユウキ。そして2人共ありがとう…」

「へへー！いいってことよ！」

「それより大丈夫か？ミライ？」

「ああ…！だけどこれが…」

ミライの手元にはボロボロになり壊れた灰色のエクシアがあった。

「そーういやアイツが擬似覚醒システムって言ってたな… ちよつと

調べたいからエクシアを貸してくれないか？」

「構いませんよ。 僕にはまだガンプラありますし。」

「助かるわ、なにか分かったらまたお前らに連絡する。 とりあえずミライ、お前は休め。 じゃあな」

カドマツはそう言い残しゲームセンターから去っていった。

……………

「報告は以上です。」

「彼もやられたという訳か…」

カワグチは03の報告を聴き顔を顰める。

「情報の方は大丈夫なんだろうな!?カワグチ!」

「安心しろバイラス。 負けたら彼の頭からは記憶を消す様に細工してある。 とは言え… 彼らに擬似覚醒システムがバレたら大変だがね…」

「そこは安心を。 こちらに回収した物がございます。」

03はエクシアを取り出した。

確かにボロボロだがあの時にやられた物ではない。

「ならば安心だ。 まあ03、お前が私に偽物を渡していない限りはな… まあいい下がりましたまえ。」

「はい。」

03はバイラスとカワグチの居る部屋から出た。

「これでいい… 奴らがアレに気づけば…」

「アイツらが擬似覚醒システムに気づけばどうにかなるってか…？」

「…!？」

03が顔を上げるとそこにはリュウジがいた。

「安心しろ、誰にも言わねえよ」

「お前は…あまり信用できない…。」

「なら別に信じなくてもいいぜ？」

「…」

「俺もあのオッサンはあまり好きじゃねえからなあ…俺こう見え
ても口硬いからよだから安心しとけ？な？」

リュウジは口に煙草を啣えながらそう言った。

「ここに居たか。それに03も。」

廊下の奥から04が現れた。

「研究長がお呼びだ。お前のデスサイズヘルが完成したらしい。」

「それなら行きますか ほら、早く行こうぜ04ちゃんよお？」

「お前… その呼び方をやめると何度も…!!」

04は怒り堪えながらそう言いリュウジの後を追いかけた。

「…」

.....

続く

ガンダムブレイカーズ 第30話 新たなる力を

高校は長期休暇に入り各々は休みを満喫していた。

ユウキはミサの実家の模型屋に寄った。

「ユウキ君か！ おはよう、今日は何か探し物かい？」

店主のユウイチは入ってきたユウキに挨拶し、こう尋ねる。

「それもありますけど… ミサはまだ帰ってきてきてないですか？」

「ミサか… あの娘なら「ちよつと色んな大会出て力付けてくる!!」

「って言ったまま帰ってきてないなあ… まあ、心配しなくて

もミサなら無事に帰ってくるよ。」

「だといいんですが…」

ユウキはミライの事を思い出す。

ミサも同じように誘拐されてないよな…？ ただそれが心配

だった。

「そうだ！後これ下さい！」

ユウキはガンプラの箱手に、ユウイチに見せた。

「！なるほど4機目の相棒機かい？」

「どうしても倒したい相手が… それにはこれかなって…」

「うんうん！ それじゃあこれね！」

ユウキはユウイチにお金を渡して商品を受け取った。

「この後どこか行くのかい？」

「3日間程地元に戻ろうと思って！ それじゃあ！」

商品を受け取ったユウキはそう言い残し店を出た。

……………

「着いた…！」

ユウキの目には久々に見る地元の風景が広がる。

「懐かしいなあ…」

目に映る海や橋などを見ながらそう呟き、実家へと歩みを進めるユウキ

ウキ

「おーい！」

そんなユウキの背後から男の声がした。

「ああ！ 久しぶり！ ケント！」

ユウキの小さい頃からの友達、ケントがユウキの後ろから手を振りながら声をかけた。

「なんだよユウキ！ 帰ってくるなら一言いえよー！」

「悪い悪い！ 急に帰るって決めたもんだからさ！」

「それより！ 聞いたぜ！ お前ガンプラバトルのジャパンカップ優勝したんだろ!? すげーな！」

「ああ！ 俺の誇れる物だ！ と言うかお前もやってるのか？」

「俺か...？ やりたいけどそれを許さねえ奴がいんだよ...」

ケントの顔が曇る

「もしかしてタツキか？ あいつまだガキ大将紛いの事やってんのか...」

「あいつらは3人1組で初心者狩りやってんだよ... 反抗すればガ

ンプラを壊される... 何人かが組んであいつらに立ち向かっても

やられちまう...」

「それなら任せろ！ 俺も協力するぜ！ 独り占めなんて絶対許せるかよ！」

「ユウキ...！ ありがとう！ でも今日はもう居ないぜ。 アイツら

今日はゲームセンターにいないからな やるなら明日だ」

「わかった、俺も今日はちよつとやる事あるし明日な！」

「おう！」

ユウキはケントと別れ実家へと進んで行った

.....

「おかえり、ユウキ」

実家へと帰ったユウキを父のユウジロウは迎えた。

「ただいま、父さん」

ユウキも父にただいまの挨拶をし、部屋へと入っていく。

「ああー！ 自分の部屋なつかしいなー！」

久々にアパート以外の部屋で寝そべりユウキそう声を出す。

「ユウキ！」

ユウキの部屋へと兄のユウトが入ってきた。

「兄貴！帰ってたの？」

「ああ、レナも帰るって言ってたし、多分お前も帰ると思ってるな。と言うかその箱……ガンプラか？」

「うん！今から作ろうと思ってる！」

「よし！それなら俺も手伝ってやるよ！どれどれ……」

ユウトは袋から箱を出し、機体を見た。

「ストライクフリーダムガンダムか……！ 今後はこれ使うのか？」

「ううん、バックパックが欲しかったんだ！」

「なるほど……ドラグーンか……」

「でも何か使うことがあるかもしれないからストライクフリーダムのバックパック以外も持っとくよ」

「ああ、そうしとけ！ さあ作るか！」

「おうー！」

……

次の日、ユウキは早速タツキに久々に会うためにゲームセンターへと向かった。

「ここに来るのもなつかしいなー……」

ユウキはゲームセンターに入りそう呟く。

「インフォちゃんはこないか…… そりゃそうだな……」

ユウキは歩いて奥へと向かう

「ユウキーー！」

「ケント！ あいつらは!?」

「居るよ！ 行こう！」

「おうー！」

シユミレーターでは既に3機のチームと一機が戦っていた。

「おらおらおらあ!!」

リーダー機であろう黒色の指揮官用ザクはジムコマンドをヒートアックスで切りつける

モブ「うわあああ!!」

その猛攻をジムコマンドのシールドで防ぐも難なく破壊されてしまふ。

「今だ！お前ら！やっちまえ！」

タツキの掛け声に2機の黒色のツダがジムコマンド目がけて飛びかかる。

リヨウ「了解！」

ジュン「任せろ！」

モブ「くそ……！ここまでか……」

モブは諦め目を瞑る

おかしい……何故かgame overを知らせる音が鳴らない……

モブは目を開け画面見るとそこには見慣れないガンダムが自分を守っていた。

「誰だ……！」

「てめえは……！」

ツダによるヒートアックスの渾身の一撃をチョバムシールドが防ぐ。

「とりやあああ!!！」

そのガンダムはその一撃を弾き返すとその一瞬の隙を付き、腰からビームサーベルを一本抜いてリヨウのツダへと突き刺した。

「嘘だろ……早くて見えなかった……」

リヨウのツダはそのまま爆発。

リヨウはGAME OVERになった。

「すげえ……これがジャパンカップ優勝の実力……」

ケントは背後から現れ、その光景を眺め立ち尽くした。

「誰だお前は……!?!」

指揮官用ザクを操るタツキは突然現れたガンダムに尋ねる

「お前まだガキ大将紛いの事やってんのか……」

「その声……！ユウキか!?!」

「聞いたぜ？お前から初心者狩りしてるらしいじゃねえか?」

「うるせえ！俺達が楽しめればそれでいいんだよ！行くぞジュン！あいつを倒して日本一の称号を奪ってアイツのガンプラ破壊してやろうぜ！」

「おう！」

「相手はユウキだけじゃないぜ！」

「ケントオオオ!!」

再び飛びかかるツダに対してケントの機体、ジムパワーガードイアンが立ちはだかる。

「ユウキ！こっちは任せろ！」

「分かった、任せた！ 行くぜ！タツキ!!」

「この野郎……！」

怒りを募らせるタツキはユウキの機体 ビルドストライクフリーダムへとヒートアックス片手に突き進む。

「ユウキィィィ!!! お前を倒すのは俺だああ!!!」

ヒートアックスの渾身の一撃はビルドストライクフリーダム目がけて放たれた。

しかしその場にユウキの姿はない。

「後ろがガラ空きだぜ！」

ユウキはEXアクション ドラグーンを起動し、あつという間にザクの背後に回っていた。

そしてそのまま、腰から二本目のビームサーベル抜き、そのままザクの背後を切りつけた。

「クソが……！」

背後に一撃を喰らい、軽く吹き飛ばされたザク。

「これで終わりじゃない……！ バーストアクション……！」

ユウキのビルドストライクフリーダムはビームライフルに持ち替えて、更にはバックパックからビットの様に放たれる。

「なんだ…… なんだよ！」

「バーストアクション！ フルバースト!!!」

ビルドストライクフリーダムから放たれたビームライフル等の一撃はザク目がけて一斉掃射され、ザクは耐えきれなくなり爆発した。「覚えてろおおおおお!!!」

.....

一方こちらはジュンとケント

「このおー！」

ツダはザクマシンガンへと持ち替え、ジムパワーガードイアンへと乱射する

「させない！」

ジムパワーガードイアンのバックパックは変形し、二つの盾がジムパワーガードイアン本体をザクマシンガンの攻撃を防ぐ。

「なんだよ！それは！」

「お前達を倒すために作ったんだ！ これなら多方向からの攻撃も怖くない！」

ケントはそう言い放ち、ビームサーベルを握ってツダへと距離を詰める

「くそおー！」

ツダもザクマシンガンの攻撃をあきらめ、ヒートアックスな持ち替えるも時すでに遅し、ケントのビームサーベルの一撃は斜めにツダを切りつけてそのまま後ろへと下がり、瞬間にビームライフルに持ち替えツダに照射を喰らわせた。

「くそおおおおおお！！！」

ツダは爆発。

ジユンの画面にもGAME OVERが現れた。

.....

「クソー！」

「おぼえとけー！」

「うわーん！」

あれだけ威勢の良かった3人はそう言い残し足早にゲームセンタ―を去っていった。

「あの・・・お兄さん達・・・」

「うん？」

小さい男の子がユウキ達に話しかける。

その手にはシールドが破壊されたジムコマンドが握られていた。

さっきの男の子だろうか・・・

「ありがとうございました！（ペコッ）」

男の子は頭を下げ、ユウキ達にお礼を言った。

「大丈夫…？ シールド破壊されてたけど…」

「うん！ 本体じゃないから大丈夫！ 僕も… お兄さん達みたいに強くなれるかな…？」

「ガンプラバトルを楽しめる心があるならきつと強くなれるよ！ そうだ！ これ！」

ユウキはカバンからユウキが過去に使っていた対ビームシールドを出し、男の子に渡した。

「これ…」

「君のジムコマンドに付けてあげたらいいよ！」

「ありがとう、お兄さん！ 大事にするね！」

「うん！」

「じゃあねー！ お兄さん達ー！」

男の子はユウキ達に手を振りながら走ってゲームセンターから出ていった。

「さーて！ 俺達も帰るか！」

「そうだな！ 今日ありがとな！ ユウキ！」

「いいってことよ！ 俺明日までしかないけど今度俺が住んでる所に来いよ！」

「わかった、いつか絶対行くからな！ じゃあなー！」

ユウキとケントも離れ、そのまま帰っていった。

……

「これか… アイツの言ってた擬似覚醒システムとやらは…」

カドマツはあれから擬似覚醒システムについて調べていた。

「何何… なんだこれは… 非人道的過ぎる…！」

カドマツはボロボロになったレクイエムエクシアを見つめる。

「使用者の感情を奪い、最悪の場合暴走する程の力を引き出す… 誰がこんなものを…」

……

続く

ガンダムブレイカーズ 第30. 5話 疑惑と思惑

「それじゃああつちでも頑張れよ！」

父のユウジロウはユウキへそう言う。

「体につけてね？ユウトもね？」

母のユキもユウキへそう言った。

「うん！」

「ああ！」

ユウキとユウトは母の言葉に答え、実家を後にした。

「よし、レナの家へ寄ってくか。そうだ、その間に買うもんあるなら買っ来ていよ」

「うーん、特にないな… それよりレナ姉の家に行つて戻ろう」

「分かった、それじゃあ行くぞー！」

ユウキとユウトは同じ日に帰る事になっているレナ姉の家へ寄り、一緒に帰ることにした。

.....

「待たせたかしら？」

2人の前にレナは家から出てきてそう言った。

「いいや、俺達も丁度今来た所だ。 電車の時間もそんなにない、急ごうか」

「そうね」

「うん」

3人は駅を目指し歩き始めた。

.....

ユウキのアパート

♪

ユウキのスマホは電話がかかってきた事を知らせるように着信音が鳴り始めた。

「もしもし？」

「ユウキか？」

「そうだけど…カドマツさんどうしたの？」

電話の相手はカドマツだ。

「あの灰色のエクシアを調べたらな… とんでもない事がわかったんだ…」

「とんでもない事…？」

「これに関しては改まって話そう。明日あの模型屋に昼前位に着てくれ」

「分かった。それじゃあね」

ユウキは電話を切り、自分のベッドへと倒れた。

「眠い…」

長い移動に疲れたユウキはそのまま深い眠りへと落ちた。

～翌朝～

「ふあゝ ってもう10時かよ…」

ユウキはすぐに着替え、家を出た。

向かった先はミサの実家の模型屋だ。

「おはようございますー」

「おはよう、ユウキ君！カドマツさん達ならフリースペースの方だよ」

ユウイチはユウキに挨拶しカドマツの居場所を伝えた。

「ありがとうございますユウイチさん」

場所を教えてくれたことに対して礼をいい、ユウキはその場所へと向かった。

「遅いぞユウキ」

ミライはユウキに対して少し冷たく言い放った。

「ごめんごめん！昨日帰ってきて疲れてたからさー！それより何の話が？」

「そうだ、これを見てくれ」

カドマツは自分のPCを3人に見せた。

「お前のエクシアを調べた結果だ。あの白髪の少年が言っていた疑似覚醒システムとやらが気になってな。」

「うーん良くわかんね…」

マモルはPC見てそう呟く

「あのシステムは調べれば恐ろしいもんだ。使用者の感情を奪い、洗脳し完全に自分の手駒にする… 恐らくあれを考えた奴はミライを俺達に差し向ける為に連れ去ったんだろう…」

「ただ感情を奪うだけか？」

ユウキは話を聴いてそう尋ねる

「いや、恐ろくだがそれを利用して機体性能などを底上げしているはずだ。実際にあの機動力は覚醒に並ぶ程だった。」

「確かに… めちゃくちゃ速かったし… それにパワーもかなり強かったな…」

マモルは自分のAGE3がああエクシアと戦った時の事を思い出す。

「今回はミライ自身が割と自我があったから良かったが、完全に乗っ取られていたら暴走して最悪死んでたかもな… それ程非人道的なシステムだ。」

「一体誰が… ミライ覚えてない？」

「いや、僕が覚えているのは彼と同じように白髪の女の人と戦った所まで… でもそこから誰かに会ったような…」

「恐らく奴らの事だ、負けたらこの記憶を消すくらいは仕組んでるだろ。じゃないと自分達が何者かがバレちまうからな」

カドマツはそう言いながら煙草に火をつけた。

「うーん… 確かどっかで見た事あるような顔だった…」

ミライは思い出す為に考え込む

「お、ここテレビ見れんのか」

カドマツはテレビのリモコンを見つけ、テレビを付けた

「どうやらこの時間はニュースをやっているようだ。」

「次のニュースです。サイバーコーポレーション社長、カワグチジュンイチ社長が自社で開発したコンピュータウイルスを悪用し様々な事件を起こし、現在も逃亡中のバイラス被告を匿い何らかの事件に関わったのではないかとの疑惑が浮かび上がっています。」

「ほーん、まだあのおっさん捕まってねえのか…」

カドマツは煙草を吸いながらニユースを見つめ、そう呟いた。

「カワグチ… そうだ！カワグチ社長だ！」

「ミライ…？」

「カドマツさん思い出しました！ あの後僕はカワグチ社長と会って少し話したんです！」

「お前… それ本当か!？」

「はい！」

「カワグチって…」

「誰だ…？」

ユウキとマモルは首を傾げる

「お前らたまにはニユースも見ろよ… いいか？カワグチ ジュンイチってのはな、宇宙エレベーターの開発にも携わったサイバーコーポレーションの社長だ分かったな？」

「宇宙関連の仕事の会社なのか？」

マモルは更に尋ねる

「サイバーコーポレーションは元々宇宙関連だけじゃなくワークボットやらアンドロイドとかも携わってた… 待てよ？アイツ…」

カドマツは説明の途中で考え込んだ。

「どうしたんだ？」

「アイツらさてはサイバーコーポレーションが作ったワークボットかなにかか…！ あの会社怪しいな…！」

カドマツはそう呟くと立ち上がった。

「ちよつとサイバーコーポレーションについて色々調べて来るわ！それじゃあな！」

カドマツはそう言い残して店から出ていった。

「行っちゃった…」

「どうするよこれから？」

「久しぶりにシユミレーターでバトルでもしに行くかい？」

「いいね！行こうぜ！ユウイチさんお邪魔しました！」

「行ってらっしゃい！」

店から出るユウキ達をユウイチは笑顔で送った。

.....

「03... これはどういう事だ?」

カワグチは03を呼び出し机の上にあるレクイエムエクシアを指さす。

「私の目にはとても戦闘で傷ついた機体には見えない... まるで故意に傷つけたようにしか見えないがね?」

「... 本当に戦闘でやられた機体です。」

「... ふざけるな!」

カワグチは怒号を上げる

「もう一度聞こう... 本当に彼が負けたものを回収したものか... ?」

「はい... 回収したものです。」

「そうか... お前には呆れたよ... 主人を騙すロボなど要らん... カトウ!!」

「... !」

03の近くへと白衣の男が近づく。

「03は廃棄だ、データを消し捨てておけ!」

すると部屋をノックする音が響く

「誰だ!」

「よう... !」

部屋へとリユウジと04が入ってきた。

「何の用だ... 今取り込んでいる... !」

「なんかアンタの怒鳴り声が聴こえてきたんでな?」

「何も無い、少し取り乱しただけだ。」

「本当か?... 俺には今からその奴を廃棄やら何やら聞こえたんだがな?」

「... ! 03!」

「...」

04の呼びかけに03は黙り込む

「マスター! 03の廃棄を辞めて頂けないでしょうか?」

04はカワグチへとそう頼みこんだ

「…いつからお前は主人に上から頼み事をしてくる程偉くなったのだ04…」

「…！」

04も黙り込んでしまう

「貴様らは私が生み出し命を与えてやった…！なら…お前達の命を終わらすのも私の勝手だ!!!」

カワグチは再び声を荒らげそう言う

「03…！お前は私から託された役目を破る所かマスターである私を騙そうとした…！自分のした事が分かっているか…？これで私のやった事がバレれば私は破滅だ！お前のせいだな!!!」

普段の見た目は優しそうな紳士の様な男であるカワグチ。

今はまさに鬼の形相で03へと怒り続ける。

「私の決めた事は変わらない…カトウ、コイツを廃棄しておけ」

「ハッ… 03来い…」

カトウはカワグチの言葉に従い03を連れていく

「04…悪いな…俺はここまでだ… 04を任せただぞ、リユ

ウジ…」

「ふん… じゃあな、無表情ロボ」

「ああ…」

03は少し笑った

「これが面白いという感情か… 最期に少しだけ理解出来た

よ…。」

「03来い」

カトウは急かす

「…！」

04は下を向いて黙り込んでいる

「04、これを。(小声)」

03はすれ違いざまにそっと04の手にボイスレコーダーを握らせた

「俺の最期の償い… お前に託す。」

03はそう言い残し部屋を後にした。

もう二度と会うことはないだろう。

パタン とドアが閉まる音は同時に03との別れの音でもあった。

「やはり信用ならん… 01は私の行いを否定し私を殺そうとした、02も同じだ… 03… 奴は私を告発しようとした。 所詮

鉄屑… 信用など最初からするものでは無いな」

カワグチは窓から見える風景を眺めながらそう呟いた。

「アンタ、自分の行いが正しいとでも?」

リュウジはカワグチに聞いた

「当たり前だ。 私は財力という力で邪魔するモノは消してきた。 私が楽しければそれでいい、君も同じだろ?」

「確かに俺も俺が楽しめればそれでいいが、俺はアンタと違って子供を攫って洗脳して、邪魔な奴を消す程イカれてないぜ」

「何とでも言え、私は世界大会で消したい人間がいるのだ。 その為に君には手伝ってもらおうぞ。」

「へいへい、社長様の言う通りに。 行くぞ04、こんなおっさんと長い時間一緒に居たら気が狂っちゃう」

「… 失礼します。」

リュウジと04は部屋から出ていった。

「どうした随分お怒りじゃないか」

カワグチへとバイラスが話しかける

「情報を外部に漏らされた… 対処はするが誰かが嗅ぎつけるかな。」

「何!?それはとても厄介だぞ!」

「わかってる! 安心しろ、計画に影響のないようにはしておく…」

「ならばいいが… そうだ、これをお前に渡しておこうと思つてな」

バイラスはアタッシュケースを出し、カワグチに渡した。

「出来たか。」

「ネオ・ジオングの方はまだだ、だがこっちは用意できたから渡しておこう。」

アタツシユケースの中身はガン普拉だ。

「これがグラヴィティシナンジユ…」

「私の方も用意は出来た… 後は世界大会に奴が現れれば… クク
クツ…」

バイラスは含み笑いをする

「この計画が上手く行けば私の敵はいなくなり、バイラス、お前の恨み
も晴れるだろう?」

「その通り…。 ウイル…！ 私の会社を潰した報いは必ず受け
させる… !!クククツ フハハハハ!!」

バイラスの高笑いは部屋中に響いた。

続く

ガンダムブレイカーズ 第31話 近づく真実

「なあ？04ちゃんとアイツはどんな関係なんだ？」

リュウジは社長室から出ると04に尋ねた

「私と03は同じ時期に作られたアンドロイド。 目的は今のあのお方の計画を遂行する為よ。」

04は冷静にそう語った。

「(なんだよ... 怒んねえのか...)」

リュウジは心の中でそう呟いた

普段なら”ちゃん”呼びなんてすれば怒りを堪えながら訂正してくるが今の04にはそんな心の余裕なんて無かった。

「アンドロイドでも仲間の死つていうか、居なくなるのは悲しくなるもんなんだな」

リュウジはそう言いながら煙草に火をつけ、04を置いて何処かへと出ていった。

一人残された04は廊下で立ち尽くす。

「03...！」

泣きそうな声で03の名を呟くその姿をリュウジは角から見守り、再び何処かへと歩き出した。

感情など無かった04。

リュウジとの出会いで怒りを覚え、03との別れで悲しみを覚えた。

自分は彼女に喜びなどを教えてやれるだろうか... リュウジの頭にそう過ぎった。

「馬鹿馬鹿しい... なんて俺がたかがロボットなんか...」

.....

場面は変わってシユミレーター内

「おりゃああああ!!!」

片手にビームサーベルを握ったビルドストライクフリーダムはミライのブリッツガンダムへと突っ込んでいく。

「甘いよ！ EXアクション、ミラージュコロイド！」

ブリッツガンダムは姿を消した。

「くそ！またやられた…！」

辺りを見回しても姿は見えない

「そっちがその気なら…！」

ストライクフリーダムのバックパックからはビツトの様なものが飛び出した。

「オールレンジ攻撃で追い詰めてやる…！」

ドラグーンを起動させ、ビルドストライクの周囲を飛び交う

これでは迂闊に近寄れない

筈だった…

「近寄れないなら… 遠距離で!!」

ブリッツガンダムは少し離れた所からデイスティニーガンダムのバックパックを變形させて、ビルドストライクを狙い一斉照射を行った。

「マジかよ…！」

想定外の一撃に対処が遅れユウキの画面にはGAME OVERの文字が浮かび上がる

「久々に見た…！」

ユウキはミライに負けたのだ。

「これである時の雪辱は果たせたかな…！」

「これで終わりじゃないぜ！」

「何!?!」

ブリッツガンダムの背後からシグマシスキャノンの一撃が襲いかかった。

「しまったー！」

一撃を右腕に受けて、ブリッツガンダムの右腕は弾け飛ぶ。

「マモル…！」

「へへーん！お前らが潰しあってる間に準備してたんだ！」

マモルのAGE3フルアーマーフォートレスは再び攻撃準備に映る。

「EXアクション!!! フォートレスフォアブラスター!!!」

AGE 3 フォートレスの腕からビーム攻撃を放ちながら逃げるブリッツガンダムを追い、フィールド事一掃していく。

「だめだ…!!このままじゃ…!」

「うおおおおお!!!」

マモルの掛け声と共にフォートレスフォアブラスターの一撃はブリッツガンダムを飲み込み、ブリッツガンダムは爆発した。

「君も強くなったね… マモル。」

「当たり前だろ!?誰がウイルス殲滅の時に活躍したと思ってるんだ!」

マモルは誇らしげに言った。

……………

「くそー…久しぶりに負けたあああ!!!」

ユウキはとても悔しがる

ユウキは大会では活躍するがこういう場では案外負けていたりした。

とはいえ負けたのは久しぶり… 当然とても悔しかった。

「まあまあ落ち着けてー!」

一人勝ちしたマモルは笑みが溢れる

「くそおおお!!!」

「…」

ミライはもはや苦笑いするしかない

「そう言えばミサはどうしたんだい?」

ミライはユウキに問う

ミサが出ていったのはミライを取り戻す前だった、その事もありミライはミサがいない理由を知らない。

「えーとかくかくしかじか…」

「成程、彼女らしいね」

居ない理由を聞き、ミライはそう言った。

「だけど心配なんだよな…」

連絡しても出てくれないし…

既読

は付くのに無視するし…」

ユウキは少し落ち込んだ様子で答える

そんな様子を見てミライは少し笑い、

「ユウキは本当にミサの事が好きだね」

そう言い放った。

「ちよーそんなんじゃないってー!」

ユウキは焦りながらミライへと答える

「本当は好きなんだろう?」

マモルまで茶化し始めた。

「本当に! 違う! ほら、チームメイトだし何かあったら心配じゃん!」

あたふたしながらそう返答するユウキを見てミライとマモルはニヤニヤした。

「ちよ、お前らその視線はやめろってー!」

.....

「ほら、食べなさい」

「いったただきまーす!」

レナのアパートでご飯を食べるユウキ。

自炊するのがめんどくさいという理由でユウキはちよくちよくレナの家に晩御飯を食べに来ていた。

「ミサちゃんから連絡はあった?」

「いいや... 既読は付くけど何もかえってこない...」

「忙しいのよきつと」

「うん... そうだよね...」

ユウキとレナはそんな会話をしながら晩御飯を食べ続けた。

「ご馳走様でした!」

「ハイハイ、それじゃあ皿洗い任せたわよ」

「ウイッス...」

当然タダで晩御飯を食べさせてくれる訳ではない。

ユウキは皿洗いや風呂洗いなどをして食べさせてもらっている。

「♪」

鼻歌を歌いながら皿洗いをするユウキ。

「ん...? ユウキーほらー!」

レナがスマホの画面をユウキへと見せた。

「えーと… なになに…」

「マリーoncアップ準優勝… ミサ！ ミサ、一人で準優勝したのか!!」
「ちやんと元気そうで良かったじゃない。ユウキも負けてられないわね！」

「うん！俺も強くならなきゃ…」

……………

「ふう… あー眠い」

自分のアパートに戻ったユウキはベッドに寝そべり、机の上に置いてある自分のガンプラを眺めた。

「ビルドストライク… 俺はあの覚醒を身につけられるかな…」

ユウキの頭にはジャパンカップ決勝が過ぎる

覚醒が進化し虹色に光だしたビルドストライク… あの時は意識していなかったが自分なりに更なる進化を感じた。

「もっと強くならないと… それに、ミライを誘拐した奴らとは何らかの形で戦いそうだし…」

ユウキはそう呟くと深い眠りに落ちた。

……………

「成程な… 表向きはいい評判だが何かしら裏がありそうだなここは…」

カドマツは自分の会社でPCを見つめ、そう呟いた。

画面にはサイバーコーポレーションの社長、カワグチ ジュンイチが写っている。

ガコツ

この時間は誰もいない筈なのに何かの音がした。

「誰だ…？」

すると置くから帽子を深くかぶった女性が現れた。

「貴方がカドマツね…」

そう言った女性の帽子からは白髪が見える

「こんな時間に何の用だ… 俺を連れ去ろうってか？…」

「ちがうわ。これを渡そうと思って。」

女性はカドマツにボイスレコーダーを渡した。

「お前がウチを調べてるのは上にバレ始めている。自分の身が惜しいならこの件から手を引く事よ。」

「わざわざ忠告どうも…。これは何だ？」

カドマツは渡されたボイスレコーダーを持ち、女性へと訪ねた

「貴方が一番欲しい物。それを受け取ったならこの件からもう手を引いた方がいい。」

帽子をかぶった女性はそう言い残しその場から姿を消した。

「アイツ…。あの白髪の男となんか雰囲気似てんな…。まさかアイツがミライさらった奴か…。！」

「それなら尚更なんで俺にこれを…。と言うかなんだこれ…。」

カドマツはボイスレコーダーのボタンを押した。

「03…。！お前は私から託された役目を破る所かマスターである私を騙そうとした…。！自分のした事が分かってるか…。？これで私のやった事がバレれば私は破滅だ！お前のせいだな!!!」

「誰だこの声…。どつかで聞いたことある気もするが…。」

カドマツは今度は別の音声聞き始めた。
「もう一度聞こう…。本当に彼が負けたものを回収したのか…。？」

「負けた…。？回収…。まさかこれの事か…。！」

カドマツは机の上にあるボロボロのレクイエムエクシアを見た。

カドマツは別の音声を聞く。

「彼の様子はどうだね？」

「良好です。このまま行けば擬似覚醒システムをマスターするかと。」
今度は2人の声だ。

「この声…。アイツの声だ」

片方の声にカドマツは聞き覚えがあった。

ミライと共にゲーセンにいたあの白髪の少年の声だ…

「と言うことは…。この男の声が黒幕の声か…。まあとりあえずはここまでだ…。色々やる事あるしな」

ガンダムブレイカーズ 第32話 それぞれの思い

「おはようユウキ君！」

ユウキは何となくミサの実家の模型屋へと寄ると、そこにはミサが居た。

「ミサ!!」

2週間振りだろうか…。ミサを見るのは。

「そうだ、準優勝おめでとうミサ！」

ユウキはネットニュースで見たミサが準優勝した記事を思い出し、ミサにお祝いの言葉をかけた。

「ありがとうユウキ君！ これで私も多少はレベルアップしたかな」

ミサは得意気な顔をした。

「よう」

そんな2人の背後から白衣を着た男性が話しかけた。

「カドマツさん！ 久しぶり！」

「なんだミサ、帰ってたなら言えよ。祝いになんか買ってきたのによ。」

「それより何かあったんですか？」

ユウキはカドマツに問う

「ああ…。ほら、4日後に世界大会だろ？ その為にお前らのシステムの調整をと思ってるな？ ほら、2人ともガン普拉貸せ。」

ユウキとミサはそれぞれの機体をカドマツに渡した。

「それじゃあ結構時間かかるかもだからなんか適当に時間潰しとけ」

そう言うカドマツは2機分の調整を始めた。

「時間潰すって言うてもなあ」

「うーん…。そうだ！ お互いにガンプラ今から作ってシユミレーターで時間潰そうよ！」

ミサの提案は賛成だ、たまには違う機体を使うのもいいかもしれない。

「わかった、さて何使おうかな」

「ちわー!」

「マモル… きちんと挨拶しなよ…」

模型屋へとマモルとミライが入ってきた。

「よう! ミサー! 聞いたぜ、準優勝したんだってな!」

マモルはミサを見つけそう言った。

マモルもネットニュースで見たようだ

「んふふ… まくね」

ミサはまたまた得意気な顔をした。

「2人は何してるんだい?」

ガンプラの箱を眺めている2人に対してミライは問い詰めた。

「今から簡単にガンプラ組んでシユミレーターで遊ぼうと思ってさ。

ミライ達もやるか?」

「確かに楽しそうだし、色んな機体を使うのもいい練習になるね…

分かった僕もやるよ」

「俺も! 俺も!」

マモルも当然やる気だ。

「それじゃあ早速決めてから組むか!」

「「おう!」」

.....

「お久しぶりですね。ミサさん。」

「うん! インフォちゃんも元気そうだね!」

ミサ達へと挨拶をするインフォちゃんに対してミサは返答した。

「インフォちゃん、シユミレーター空いてるかな?」

「今なら五つ全部使用できます。」

「ありがとう!」

ユウキはインフォちゃんに礼を言い、シユミレーターへと歩みを進めた。

「勝つのは俺だぜ!!」

「いいや… 僕だね…」

マモルとミライはお互いに闘士を燃やす

「こうやって皆と戦うの久しぶりだな!」

「よし、俺なら行ける…!」

ミサとユウキも準備はできている

「任せたぜ! パワードジムガーディアン!」

マモルは緑色のパワードジムガーディアンをスキャンする。

「僕はこれで行くよ」

ミライはシャアカラーのズゴックをスキャン。

「私はこれ!」

ミサはベアツガイをスキャン。

「俺はこれだ!」

ユウキはガンダムAGE1をスキャンした。

「!!」出撃!!」

4機は射出され、ステージへと向かう。

見慣れた街の光景が4機のコックピットに映し出された。

「ユウキ… 君の相手は僕だ!」

先陣切ったミライのズゴックはユウキのAGE1目がけて、右手の一撃を放つ

「何の!」

ズゴックから放たれた一撃をAGE1のシールドで防ぐが…

「甘いね!」

ズゴックはそのまま力を右腕に込め、ズゴックの右腕はAGE1のシールドを貫いた。

「マジかよ!!」

想定外の事態にユウキはシールドを切り離し、ズゴックへと右脚で蹴りを入れる

「くっ…!」

ズゴックにシールドなど付いていない為に防ぎようのなくその一撃を許してしまい、ズゴックは怯んでしまった

「今のうちに!」

ユウキはズゴックから距離を取り後ろへ下がると、右手に握ったドゥズライフルを構えてズゴックを狙い、放った。

「まだだ…!!」

ミライはまだ諦めない

ドツズライフルの一撃を何度か受けながらもユウキのAGE1目指して突き進む。

「マジかよ……！」

止まる気配の無いズゴックを見てそう呟いたユウキは何度もドツズライフルでズゴックに対して攻撃する。

蓄積したダメージにより左腕が吹き飛ぶズゴック、

「僕は……これでも止まらないよ！」

左腕を失いながらもなお進み続けるズゴック、

「しまった……」

ドツズライフルは弾切れになってしまい、何度引き金を引いても意味は無い

「しよがねえ……！」

ドツズライフルを投げ捨てたAGE1はビームサーベルに持ち替えた。

「ユウキイイイ!!!」

「ミライイイイ!!!」

AGE1へと飛びかかり右腕を突き出すズゴックと

それを迎え撃つべくビームサーベルをズゴックへと向けるAGE1……

このぶつかり合いに勝者などいなかった。

「まさかね……」

「まあある種平等かもな」

ズゴックの胴を貫くビームサーベルと、AGE1の胴を貫くズゴックの右腕。

両者の機体は機能停止し、互いの画面にはGAMEOVERと現れた。

……

一方こっちはマモルとミサ。

「何処だ！何処だ!!」

マモルのパワードジムガーディアンはミサの姿を探す。
ビルの影に隠れたベアツガイは反撃のチャンスを伺う。

「あの機体に遠距離攻撃してもあのシールドで防がれちゃう…も
う突っ込むしかない…！」

ミサのベアツガイはビームサーベル片手にビルの影から飛び出し、
マモルへと飛びかかった。

「そこか!!!」

握っているビームマシンガンの攻撃をベアツガイへと放つが、ミサ
からしたらそんなもので怯んでいる場合ではない。

「おりやああああ!!!」

ミサはマモルへとビームサーベルの一撃を叩き込むが、

「まだまだあー！」

パワードジムガーディアンはバックパックからサブアームを展開
し2枚のシールドでその一撃から防いだ。

「今度はこっちの番だぜー！」

ベアツガイを退けたマモルはバックパックに接続された2本の大型
ライフルを稼働させ、ベアツガイへと撃ち尽くした。

「きやああああ!!!」

モロに一撃を喰らったミサのコックピットは残りのゲージが僅かな
事を知らせる様に赤く点滅し始めた。

「さて、行かせてもらおうかー！」

マモルは両肩からビームサーベルを抜き、ミサのベアツガイへと近
づく。

パワードジムガーディアンを守っていたシールドは使用限界が来
たようで2枚のシールドはバックパックへと収納されていく。

「(これに賭けよう…:~)」

「とりやあああ!!!」

自分へと声を上げ迫ってくるパワードジムガーディアン… 両
手を上げ、握られたビームサーベルの一撃はベアツガイへと襲いかか
る…

その隙を付きベアツガイはガラ空きの頭部へとビームサーベルを

突き刺す。

「嘘だろ！何も見えねえ!!」

マモルのコックピットにはメインカメラがやられた事で何も映らず状況が確認出来ない。

「貫つたよ！EXアクション クロススラッシュ！」

ビームサーベルをX状に振り、その一撃をパワードジムガーディアンへと叩き込んだ。

「もう少しだったのにー！」

パワードジムガーディアンは機能停止、勝者は唯一残ったミサだ。最後まで諦めずに逆転のチャンスを狙った事が勝利へと繋がったのだろう。

.....

「いえーい！私の勝ちー！」

シユミレーターから出てきたミサは喜びの舞を踊る

一足先に終わっていたユウキとミライはその光景を苦笑いしながら見つめた。

「くそー... もう少しだったのに...」

マモルはパワードジムガーディアンを握り、シユミレーターから出てきた。

「そろそろ終わったんじゃないかな？」

あれから割と時間は経った方だ、調整も終わっていても不思議ではない。

「それじゃあ僕は今から塾だし失礼するよ」

「あー俺も、頼まれ事あるんだった！じゃあな！」

ミライとマモルは用事がある為に帰っていった。

「じゃあ行こうかミサ」

「そうだね」

ミサとユウキもゲームセンターを後にし、カドマツが待つ模型屋目指して帰っていった。

.....

「準備は出来たかね？」

カワグチはリュウジへと尋ねる。

「アンタはアンタで持つていく物多すぎじゃねえか？」

「私は現地でやることがあるのでね・・・」

「ウイルとかいう奴を潰すことか？」

リュウジは煙草に火をつけ、そう尋ねた

「ここは禁煙だと何度言えば・・・ まあそうだ。彼はどうしても邪魔でね、それに私の友人の復讐相手でもあるからね・・・」

「あの胡散臭いオッサンか、類は友を呼ぶってな・・・」

「言葉を慎め、彼は素晴らしい友人だ。何度も世話になっている程に。」

「ほーん・・・ で、俺のやることは何だ？」

「君には・・・ 彩渡商店街ガンプラチームを倒してもらいたい、それに君も恨みがある相手とそのチームに居るだろう？」

「別にアンタ程そいつを恨んでねえよ・・・ ただ今度こそ俺が強いと教えてやりたいだけだ・・・」

「まあいい・・・ 彼らに負けることは許さない・・・ どんな手を使ってでも彼らを潰せ。いいな？」

「はいはい・・・ 社長の言う通りに・・・」

「それでは失礼するよ、まだ準備があるのでね」

カワグチは部屋から出て行った

「・・・」

リュウジはピツと何かのボタンを押した

「これじゃあ証言としては足りねえか・・・」

リュウジはボイスレコーダーをポケットにしまいそう呟いた。

「正義の味方気取りをする訳じゃねえが・・・ あのオッサンのやり方は気にいらねえ・・・」

リュウジは煙草の火を消して、部屋から出た。

.....

「ほら、出来たぜ」

カドマツは2人にそれぞれの機体を渡した

「ありがとう！」

「ありがとうカドマツさん」

2人はそれぞれカドマツに対してお礼を言った

「いいってことよ、こっちも自社製造のトイボットの名前が広がって感謝してるぜお前らにな。」

「折角ここまで来たんだ…絶対勝とう！」

「うん！彩渡商店街の名前を今度は世界に轟かせようね！」

「それなら、ますます負けてられないな」

「うん！」

「ああ！」

カドマツの言葉に答える2人。

何気ない事から始まったユウキの日々

タウンカップから始まったその舞台は遂に世界大会へ

必ず勝つ…！

ユウキやミサの心の中にはその思いがあった。

「2人なら不可能なんてない…俺たちの力見せてやろうぜミサ

！」

「うん！」

2人の少年少女の思いは世界大会へと闘士を燃やす

……

「待ってろ…今度こそ俺がお前より強い事を証明してやる…！」

リュウジは彩渡商店街の名前を見てそう呟く

……

「楽しみにしてるよ…彩渡商店街ガンプラチーム…」

ウィルは自分の機体、ガンダムセレナスを見つめそう呟いた。

……

それぞれの思いが重なる世界大会

そこにはカワグチによる罨等が待っていた。

最終章、ついに開幕

第8章 舞台は世界大会へ

ガンダムブレイカーズ 第32.5話 舞台は世界へ

「緊張してる？ユウキ君？」

ミサは飛行機の機内で、横に座るユウキに対して声をかける。

どう見ても顔色が悪い…。まさか…

「ユウキ君… 飛行機乗るの初めて…？」

「う… うん…」

ユウキはガクガク震えながら返答した

「おい大丈夫かユウキ？」

ミサの右隣に座るカドマツも心配して声をかけた。

「安心しろって… 別に落ちやしねえよ」

「ほ… 本当…？」

「大丈夫だよユウキ君！」

まるで生まれたての小鹿の如く震えるユウキを見てミサとカドマツは元気づけた

「… 間もなく飛ぶぞ… ユウキ、気をしっかりな」

「なにそれ！やっぱりやばいんじゃないんじゃん！」

ユウキの言葉と同時に飛行機は加速する

「うおおああああくあwse drift gyふじこーp」

言葉にならない声を上げたユウキを乗せた飛行機は世界大会の場所… 宇宙エレベーターのある太平洋へと向かうために1度ハワイまで行きそこから出る特別船を乗り継いで太平洋上にある宇宙エレベーターへと向かう

「おーい！ユウキ君ー」

ユウキは半分気を失い掛けている

「まあ初めて飛行機乗ったらこうなる奴もいるだろ。今は寝かせといてやれ」

「うん…」

「うひょー！ここが常夏の島！」

ミサは初めて来るハワイにテンションMAXだ

「俺も鳥取の羽合には行ったことあるがこっちのハワイは初めてだな
… おーい、ユウキ起きろ」

「うう……飛行機怖い……」

ユウキは半分魘された様子でブツブツと呟く

そんなユウキを見てミサとカドマツは苦笑いした。

「明日の朝に船に乗って出るからそれまでは自由だ。いいか？気を抜いて迷子になったりすんなよ。」

「はーいー！」

「ウイッス……」

元気に答えるミサに対してユウキは小声ながらも返事を返した

「それと帰ってくる場所だけd… いねえ！」

カドマツがまだ話しているというのにミサはユウキを連れ既に出発していた

……

ミサに連れられユウキはダイヤモンドヘッドを眺めたり等色々回ったり食べたりした。

「あいつらにもこれ買って帰ったら喜ぶかな……」

ユウキはABCショップで見つけたサングラスとアロハシャツを見てユウトがこれを着たのを想像し笑った。

「ふー楽しかった！ そろそろ戻らないとね」

ミサはお土産の入った買い物袋を持ち笑顔でそう言った

「俺も楽しかった… って言うかどこに戻るの……」

「……」

「どこに帰ればいいか聴くのわすれてたー!!!」

ユウキとミサの叫び声がハワイの街に響いた

……

「全く人の話を最後まで聞いてから遊びに行けよ……」

「ごめん……」

「ごめん…」

カドマツに対して謝るユウキとミサ

「ほら、それより腹減つたる飯食いに行くぞ」

「うん！行くこう、ユウキ君！」

「腹減つたー」

3人はそれぞれ財布を持ち部屋から出た

「なあユウキ、ルームキーは？」

「え？俺持ってないよ？」

「私も持ってないよ！」

「え」

オートロックのホテルのドアはガチャンという音を立て閉まった

「… 後で開けてもらうか…」

「うん…」

「そうだね…」

.....

「さて、お前ら忘れ物は無いな？もう昨日みたいに色々なんか起こすのは嫌だぞ」

「ちゃんと荷物持ったし！」

「こつちも大丈夫！」

「よし、じゃあ船に行くか」

3人は世界大会の舞台、宇宙エレベーターがある太平洋上に向かうための特別船に乗り束の間の急速に入った。

「最初から船で行けばいいのに…」

ユウキはブツブツと呟く

飛行機の事をまだ忘れていないようだ。

「船の速力によるが12kt位だとハワイまで12日かかるんだぞ、飛行機の方が速いの」

カドマツはユウキの言葉にそう返して煙草に火をつけた

「君達も来たみたいだね」

ユウキ達の背後から聞き覚えのある声がある

「ウイル…」

「世界大会、楽しみにしてる…。 もう1度君のガンプラをバラバラにして上げるよ」

「言ってる！俺達はあれから強くなった！お前を倒すのは俺達だ！」

「ふうん…。 まあいいやそれじゃあまた後でね」

ウイルはそう言い残り何処かへと去っていった。

「お前がウイルとやらか」

「誰だい君は…。」

ユウキ達から離れ、廊下の角を曲がる際に壁に男が寄りかかっている。

「俺の上司がアンタにお怒りでね、どんな奴かと思って顔を見に来たんだよ」

リュウジは煙草を吸いながらウイルの顔を見た

「僕にお怒りだなんて、僕が潰した悪い大人の知り合いかな？」

「まあ実際はそんなに知り合いでもないがこちとら雇われでな まあ仲良くしようぜ…。」

「別に僕は君と仲良くなりたいたいなんて思っていないが…。」

「ふっ…。 まあいいや。」

リュウジは携帯灰皿で煙草の火を消しそう呟く。

「ここに居たのか。」

白髪の女性がリュウジへと話しかける

「調整をしておけといったはずだ。」

「はいはいそうカリカリすんなって…。 行こうぜ04ちゃん」

「…。 !ちゃん付けを止めろと言っているだろ！」

白髪の女性は怒りながら変な男の後ろを追った

「何だアイツら…。」

「ウイル坊っちゃんか？まいたがなさいましたか？」

メイド服の女性、ドロシーがウイルへと呼びかけた

「別に…。 変な男に絡まれただけさ。」

「お茶が入りましたよ如何ですか？」

「有難く貰うとするよ」

ウィルはドロシーにそう返し自分の部屋へと戻って言った

.....

「そろそろ着くぞ... お前ら調整は十分か？」

「うん！」

「大丈夫！」

「それじゃあ着いたら早速1回戦が始まるらしいから用意しとけよ」

「了解!!」

2人の元気の良い返事が部屋に響いた

「必ず勝って見せる...優勝してな...!!」

ユウキは自分のスマホにあるミライやマモル、レナやユウト等が写った写真を見てそう呟いた

.....

「うわあ!ここが宇宙エレベーターの内部!」

「決勝は実際に宇宙空間で行うらしい。」

「へえー!」

ミサとユウキはあたりを見回す

目の前には大きなエレベーターの入り口があった

これに乗り宇宙空間へと向かうのだろうか...

「あ!見つけた!おーいアナタ達!」

ユウキとミサに対して声をかける女性がいる

その姿には2人とも見覚えのある...

MCハルだ。

「日本代表の貴方達に取材する為に遥々日本から来たわ!　じゃあ早速あのカメラに一言!」

「え?カメラどこ?」

ミサは周辺を見るがカメラマン等どこにも見えない

「ほらあそこ!小型ドローンで撮ってるから一言!」

ハルは空中に浮かぶ本当に小さなドローンを指さした

「えつと...　日本代表として頑張ります!」

「ほら、そこの君も!」

ハルはユウキの前にマイクを差し出した

「彩渡商店街の名前を世界に広めてきます…！」

「OK！完了よ！それじゃあ私は別の人にもインタビューしてくるからー！」

そう言うとハルは足早に何処かへと向かっていった

「日本代表… 何だか責任重いね…！」

「ああ… だけど勝たなきゃ…！」

「うん！絶対に！」

……………

「何だ、オッサン来てたのか」

リュウジは近くにいたカワグチへと話しかけた

「あの計画を始める為だ」

カワグチはリュウジへと答える

「なあ…？前から気になってたが計画、俺にも教えてくれよ」

その一言共にリュウジはポケットに入れていた機械のボタンを押す

カワグチは今回の計画を喋り始める

「つまりこういう事だろ？俺がユウキのチームを倒して本来はこのエレベーターで宇宙空間へ行く所をウィルとやらだけ乗せて胡散臭いオッサンの作ったウィルスでシステムをめちゃくちゃにして永遠に帰ってこれないように切り離す… こういう事か？」

「そう言う事だ…！」

「そのウィルとかいう奴が負けて敗退した場合は？」

「彼が敗れる事などないだろう… 彩渡商店街ガンプラチームとは

仮に当たるとしても決勝だ…！」

「ほーん何の邪魔も無く成功したらいいな… 何の”邪魔”も無くな」

「失敗など許されない…！」

奥からはバイラルが現れた

「とにかくお前は奴らに勝つことを考えろ…！」

カワグチは冷酷にそう言い放つ

「俺達が負けたら…？」

「その時はその時で考えよう．．． 手をかけるのは君だけじゃないと思いたまえ．．．」

「04になにかする気か．．．？」

リュウジはカワグチへと睨みつける

「彼女は私が作り出したものだ．．． 前にも言ったが生み出した私が彼女の終わりを決めるのも私の勝手だ．．． 勝つことだけ考えろ、その為に君をこうして雇った」

「チツ．．． やっぱリアンタと手を組まない方がある種平和だったな．．．」

リュウジはそう言い残してカワグチ達から離れた

「信用して大丈夫なのかあの男を．．．？」

「04がいる限り彼は迂闊な事は出来ないだろう．．． ロボに恋する

男か．．． あほらしい．．．」

バイラスへとそう言い返したカワグチは去っていくリュウジの背中を見つめた

続く

ガンダムブレイカーズ 第33話 翼

「お前らー！予選始まるぞー！」

カドマツは控え室に待機するミサとユウキへと声をかけた。

「いよいよかあ……」

「俺なら行ける……俺なら行ける……」

それぞれが緊張し、ユウキに関してはブツブツ自己暗示を呟いている

「ほら、こいつも連れてけよ」

カドマツはアタッシュケースからロボ太を取り出し、2人へと託した

「ロボ太だあ！久しぶりに見た気がするよ〜！」

ロボ太の外見は前と変わっておりフルアーマー騎士ガンダムの姿はバーサル騎士ガンダムへと変わっていた。

「お前らが特訓してる間にコイツも新たな進化を遂げたって訳だ、さあ張り切って行ってこい！」

「うん！」

……………

ユウキとミサ、そしてロボ太はシュミレーターの中へと入っていき。

「進化したのはロボ太やユウキ君だけじゃないよ！」

ミサはそう言いながら自分のアザレア・フルフォースをスキャンした。

「俺だって……！」

ユウキも自分のビルドストライクフリーダムをスキャンする。

コックピットの画面はメインカメラからの風景を映し、目の前には射出口が見える

「始まる……まずはここを越えよう！」

「ミサ&ロボ太「うん！」」「承知！」

「ビルドストライクフリーダム ユウキ、出るよ！」

「アザレア・フルフォース ミサ、行くよ！」

「バーサル騎士ガンダム　ロボ太、参る！」

彩渡商店街ガンプラチームの3機は射出され、ステージ目掛けて飛んでゆく。

「よつと…　こは…」

無事に着地したユウキは周辺を見回す

3機の周辺は砂漠で覆われており所々に岩がある以外にらくに見当たらない

「とくにレーダー反応もないけど…　もしかしたら隠れてるのかも…　俺はあっち側を探すから2人は向こう側の敵を頼む！」

「OK!」承知した、主殿も注意を」

「ありがとうロボ太！それじゃあ！」

そう言い残しユウキは北側を目指して飛んでいった

「ミサ、私達は南側へ進もう」

「ユウキ君大丈夫かな…」

「それなら先にこちら側を片付けてから主殿の所へと向かおう」

「そうだね…　よし！行こうロボ太！」

ロボ太の提案を飲み、ミサ&ロボ太は先に南側の敵を倒すことに決めた

……………

「それにしても何の反応も無いな…」

スラスターでの移動をしながらユウキは辺りを確認するも何の反応も無い。

「あっち側…　何か怪しいな…」

ユウキはビルドストライクを向こう側の岩場へと進める。

その場所には岩が複数あり、なんとも怪しい

ユウキは疑惑の岩場へと到着すると…

ピピッ！

警告音がコックピットへと響く

モブA「かかった!!」

岩場からは灰色のグフがヒートソード片手にビルドストライクへと襲いかかる

「やっぱりか…」

ユウキはそう呟く

「わざわざ引つかかってくれてありがとよ!!!」

モブAはヒートソードの一撃をビルドストライクへと叩き込んだ

筈の場所にビルドストライクの姿はない

「何処だ…：…上か!!」

モブAのグフは上に向けてヒートロードを伸ばした

「惜しいな…：！背後だよ！」

モブAのグフの背後には腰部に手をかけるビルドストライクの姿がある

「速い…：！」

それもそのはずユウキのビルドストライクは赤く輝いている

僅か一瞬の間に覚醒を起動させてグフの一撃を避けた様だ。

「頂くぜ…：！」

抜刀と同時にした斜め下からビームサーベルでグフの左手へ向けて切り上げて盾を持っている部分を切り落とすと、今度は斜め上からグフを切りつけた。

「…：…この！」

せめて一撃を当てようとモブAはヒートソードを振りまくるが、ユウキはそれを躲してカウンターとばかりにビームサーベルをグフへと突き刺して後ろへと下がった

「せつかく世界大会まで来たのにいいいい!!!」

男の断末魔と共にグフは爆発、この時点でモブAは予選敗退となった

ビルドストライクを包んでいた赤い光は消えビルドストライクは普段通りの機体性能へと戻る

「3分か…： 何とか自分の使いたいタイミングで覚醒できるようになったけど継続時間5分は欲しいな…：」

考え事をするように立ちっぱなしになるビルドストライクに対してCPUのジム3機が襲いかかる。

「……！しまったー！」

反応が遅れたユウキに対して、既にジムは間を詰めておりビームサーベル片手にビルドストライクへと飛びかかる

ユウキのビルドストライクは振り返り、ビームサーベルを抜いてジムへ応戦の構えを見せた瞬間に何処からか飛んできたビームライフルの一撃がジム3機を貫き、そのまま爆発した。

「うおっー！」

爆風が起こりビルドストライクは少し後ろへと飛ばされるが何とか耐え、攻撃の主を探す

「あれは……ウイングガンダム……？」

太陽を背に崖の上へと立つウイングガンダムは、ジム3機を撃ち抜いたであろうビームライフルを構えた状態で立っていた。

「大丈夫かい！少年！」

ウイングガンダムの操縦主は凄いいい人そうな声でユウキへと問いかける

「あ、ありがとうございます！でもどうして……」

「いやー……自分でもよく分からないけど何故か手が動いてね……！」

まあ君が無事ならいいや！また後で会おう！」

そう言い残すとウイングガンダムは何処かへと去っていった

「あのウイングガンダムの人……いい人だったなあ……」

ユウキはそう呟くと周辺に現れだしたCPU機へと向けて飛んでいった

……

大会は全世界へと配信されており、応援するべくテレビはスマホ等を見ながら自分の国の代表を応援する。

「ふう……心配したわ……」

自分のアパートのテレビで大会の様子を見つめるレナはピンチになったユウキの様子を見てため息を付いた

「あのウイングガンダムが助けてくれなかったら危なかったわね……」
ピンポーン

レナのアパートの一室にチャイムの音が鳴り響いた

「はい！ ってユウトじゃない……」

「ういーす！ 大会見てるー？」

レナのアパートへとずかずかと入り込んでいくユウトは早速テレビを見つめる

「何しに来たのよ…… アンタ」

「いやー俺のアパート、テレビなくてさ！ だからちよつと見せて貰おうと思っただけ！」

ユウトはニコニコしながらレナへとそう言った

「アンタのその笑った顔、本当にユウキにそっくりね……」

「そりゃあ…… 兄弟だからな！ それよりどう？ 彩渡商店街ガンブラチーム？」

レナの一言に対して少し適当に返したユウトは現在の状況を探ねた

「今のまま行けば予選は突破だけど、さつきは危なかったわ…… ウイングガンダムに助けられた感じだったわね」

「ほーん…… まあアイツらなら予選は行けるさ！ それより今回は助けに行けられないからな……」

ユウトはカバンの中にある自分のインパルスガンダムを手取る
あれから更に強化したようで、ガンダムダブルエックスだったバツ

クパックはデイスティニーガンダムの物に変わっていた
「もし…… ユウキが本当にピンチなら…… 宇宙空間だろうが俺が

助けに行ってやるからな!!!」
ユウトは日本から離れる際の見送りの時に、ユウキに言った言葉を

思い出した
「ちゃんと帰ってこいよ……！ ユウキ！」

「安心しなさい、本当にピンチの時は私も加勢するから」
「まあそうならない事が一番だけどな！」

「フツ…… そうね……」
ユウトとレナは再び視線をユウキ達へと移した。

.....

「喰らえええええ!!!」

ビルドストライクはバックパックのストライクフリーダムを装備した事で使用可能になるバーストアクション フルバーストを放ち、目の前にいた6機ものジムを殲滅した

「よっしゃあー!」

思わずガッツポーズを取るユウキ

そんなユウキの背後を倒し損ねたジムがビームサーベルを突き刺す構えで襲いかかる

「EXアクション…! サンダーバリエント!!」

ユウキの背後のジムへとロボ太のバースル騎士ガンダムは電気の様なものを選び、突っ込んで行く

その一撃を受けたジムはバースル騎士ガンダムへと連れていかれ、衝撃で爆発する

「ユウキ君大丈夫!?」

ビルドストライクの右側からミサのアザレア・フルフォースが走ってきた

「ありがとう…! ミサー! ロボ太!」

助けに来てくれた2機にユウキは感謝し、お礼を言う

ビッビー!!!

ステージ内に低い音が鳴る

「予選終了だ、お前から戻ってこい!」

カドマツが3機へと通信を行い、それを聞いた3機は戦闘終了した。

.....

「お疲れ様」

シユミレーターから出てきた2人へと、カドマツは労いの言葉をかける

「今の出撃でお前らは予選突破だ、本当に良くやったよ」

「本当!? やったー!」

「はあ… 緊張したあ…」

緊張が解けたのかユウキは膝から崩れ落ちた

「それよりユウキ、お前遂に覚醒制御できるようになったじゃねえか」「やつぱり分かった?」

「ああ、グフに襲撃されてたの見た時は終わったかと思っただが…瞬間に赤く光ってたからな」

「ユウキ君やったね!」

「ああ… けどもつと使いこなせる様にならなきゃ…!」

「行けるよ、お前ならな タウンカップからずっと戦いの中で成長してきたんだ… 例え負けてもきつとこの大会はお前のいい経験になるはずだ」

「そうだね… よーし!もつと強くなるぞー!」

「おー!」

ユウキの掛け声にミサも答えた

「おー、さっきの少年!」

右腕を上へ上げ、声を上げたユウキの背後から男性が声をかける

「貴方は!」

「おう!」

男はウイングガンダムを手に、ユウキへと返事をした

さっきは太陽を背に立っていたのでよく見えなかったが炎をイメージしたような色合いをしている

「次の戦闘は俺とだ、宜しくな!」

そう言う男は握手を求め

「はい!宜しく御願います!」

ユウキも快く握手に応えた

「よーし!それじゃあまた後でな!!」

「あ!あの名前を!」

去ろうとする男を止め、ユウキは名前を尋ねた

「俺か?俺はクロウってんだ!それじゃあいいバトルにしようぜ!!」
今度こそクロウは去っていく

「お前ら次はジャパンカップと同じルールの奴だがどうするんだ?」

カドマツは椅子に座りながら2人へと問いかけた

「あー… あの1人出場の選手に考慮した奴か…」

「なら、…： 今回もユウキに託すね」

「いいの？…：」

「うん！その代わり絶対勝ってね！」

「分かった！絶対準決勝の切符を掴んでくる！」

「決まったな…： それじゃあ30分後に始まるからユウキは用意しとけよ」

「OK！ そうだ！アレを使おう…：！」

ユウキは思い出したかのようにカバンを漁り何かの用意をした

……………

「1位で予選通過…： 流石だな」

カワグチは予選の結果を見ながらそう呟く

「やめろ、褒めても何も出ないぜ？…：」

リュウジはカワグチへとそう返し、自分の機体を見つめる

「その機体は我々が用意してやったんだ…： いいか、負ける事は許さない…：」

カワグチは冷たい声でリュウジへと言い放つ

「分かってるよ…： 勝てばいいんだろ？このツールギスXX5でよ…：」

リュウジはそう言い、ガンプラの調整を始めた

続く

ガンダムブレイカーズ 第34話 偽りの機動戦士

全世界へと同時配信されている世界大会

一次予選は無事に終わり、戦いは次のステージへと進む

「ユウキ君！二次予選始まるよ、見ないの？」

ミサは控え室でディスプレイに映る二次予選をまじまじと見つめる。

「もうちよい調整が……」

ユウキはビルドストライクの調整中のようにだ

「あ！始まった！」

……

ここは街のステージ

大きなビルが立ち並ぶこのステージの中心で、多少手の加えられたシヤア専用ザクが周囲を見回す

両肩には大型ビームキャノンが付属しており、両手にはビームアツクスが握られている

「くそ……！どこいきやがった……!!」

このザクを操る ゲイル はそう呟きながらリーダー等を駆使し二次予選の相手の機体を搜索している

「俺は……ここだああ!!」

ザクをめがけて、上空から放たれたビームライフルの一撃が襲いかかる

「舐めるな！」

かなり素早い動きでゲイルはそれを避け、地面へと着地する自分を襲った相手へと警戒態勢を取る

流星は世界大会、プレイヤーのレベルは今までとは比べ物にならない

「来たか……！」

「勝つのは俺……！レニーと機動戦士ガンダムだ!!」

機動戦士ガンダム……

レニーが作り出したこのガンプラ、ガンダムカラーのギャンの頭にはガンダムのアンテナを取り付け、シールドはガンダムシールドへと換装しているようだ

「ほぎけええええ!!!」

ゲイルのザクは両肩の大型ビームキャノンからギャンダムへと一撃を一斉に放つ

「遅いー!」

二つの砲台から放たれた攻撃の中心を素早い動きで進み、片手に握られたビームサーベルを突き刺すかのような動きで、レニーはザクへと距離を詰めた

「ふぎけた名前の癖にイ…!!」

ゲイルは何とか、両手に握られたビームアックスでその一撃を受け止める

「違うな! 楽しむ心こそが勝利に繋がる… このギャンダムも遊び心の一つだ!」

そう叫ぶレニーはビームサーベルを握る手に力を込める

「楽しむ心…? 遊び心…? ふぎけるな… そんなもので勝てるものかああああ!!!」

激昂するゲイルも負けじとビームアックスを握る手に力を込めた
「こんな言葉を知ってるか? 戦いは強い方が勝つんじゃない… ノリがいい方が勝つってな!」

そう言うと、レニーのギャンダムは後ろへと突然さがり始めた

「気に入らねえ… 力が強きものこそ正義だ!」

ゲイルは逃がすまいと後ろへと下がったギャンダムへ向けて進む

と同時にザクの足元が爆発した

「どういう事だ!?!」

突然の事に驚きの隠せないゲイルは思わず声を上げた

「HHHHH!… これだよこれ!」

ギャンダムの手にはクラッカーが握られている

恐らくビルダースパーツとして付属させたものだろうか、レニーは

笑いながら爆発したザクを見た

「……！ つくづくイライラさせる奴だな……！ お前は……！！！！」

「動けないお前なんて怖くねえ」

激昂するゲイルを尻目にレニーはビームサーベルをザクへと投げつけた

「くそがああああ!!!」

動けないながらに、ビームアックスで投げつけられたビームサーベルを撃ち落とす

「まだまだクラッカーはあるぜ！」

投げつけたのはビームサーベルだけでは無いらしい……

投げられたクラッカーは再びザクへと襲いかかり爆発。

ゲイルのコックピットは赤く点滅し始める

「くそ……！ くそ……！」

イライラの積もるゲイルはコックピットの操縦桿を握り、イライラを抑える

「そろそろ終わりにしてやるよ！」

レニーのギャンダムは今度はこの身一つでザクへと突き進む。

「落ちろお!!!」

既にボロボロのザクは残された力を使い、自分へと突き進んでくるザクへと大型ビームキャノンの攻撃を放つ。

「うお！ だけでもう遅いぜ!!」

そう言ったレニーのギャンダムは高く舞い上がると空中で一回転し、ザクへとめがけて蹴りの一撃をかました

「ふざけるなあああああ!!!」

限界を迎えたザクは機能停止、ゲイルのコックピットにはGAME OVERの文字が表示される

.....

「楽しむ心こそが勝利に繋がる……！」

ユウキはディスプレイを見つめてそう呟く

「俺も……楽しむ心を忘れない様に戦おう……！」

ユウキはビルドストライクを見つめて次の戦いへと備えた

続く

ガンダムブレイカーズ 第35話 燃える男

「さあ… 行こうか！俺のガンプラ…！」

ユウキは自分の機体を握りしめシユミレーターへと向かう

第一試合ではギャンとザクの戦闘が終わり、第二試合のユウキとクロウのバトルが始まろうとしていた。

「ユウキ君！任せたよ！」

ミサは控え室から出ようとするユウキへとそう言った

「ああ！ それじゃあ… 行ってくるー！」

ユウキはそう言い残して控え室を後にした

「ん…？」

ミサは先程までユウキが座っていた席に何か置いてあるのを見つけた

「これ…！」

「どうしたー？」

突然何か驚いた様な声を上げたミサに対してカドマツは近寄ってきた

「ほら、これ！ユウキ君の!!」

「これ…！あいつの ビルドストライク じゃねえか!! アイツ!!!」

カドマツは急いで廊下に出るが、既にユウキの姿は無いようだ。

.....

「ソレデハ、ココカラノ進行ハ私ガヤラセテ頂キマス」

「うおー！喋ったあー！」

ユウキは突如聞こえだした声の主を探す為に辺りを確認するが、目の前のレニー以外に姿などない

「私、宇宙エレベーターのシステムガ喋ツテオリマス」

「すげー!!!」

ユウキは喋り始めた宇宙エレベーターのシステムに対して輝いた目で見つめる

「それじゃあ… そろそろ始めようぜ！」

レニーはユウキへとそう言い放ち、自分のガンプラをユウキへと見せつける

「優勝は俺、レニーとこのウイングガンダムバーニングが貰うぜ！
もうあの時みたいに手助けはしないからな！」

レニーが見せつけた機体ウイングガンダムバーニング…

.....

ウイングガンダムバーニング

頭 ウイングガンダム

胴 ウイングガンダム

腕 ウイングガンダム (EW版)

脚 ウイングガンダム

バックパック ウイングガンダム (EW版)

武器 ビームサーベル ツインバスターライフル

カラーはバーニングという名にふさわしく、炎をイメージしたカラーリングとなっている

.....

「へへっ！俺だって負けるわけには行かないぜ！この俺の機体で！」

ユウキも負けじと自分の機体を見せつける

「頼むぜ！俺のストライクフリーダムガンダム！」

.....

「なんて機体持って行ってんだ… アイツ…」

カドマツは控え室で第二試合の様子を眺めながらそう呟く

「でも何でビルドストライク持っていかなかったんだろう…」

「決勝に備えてるんじゃないのか？ アイツもう決勝の事考えてやがる…！」

カドマツはそう呟き、クスリと笑うと煙草に火をつけた

.....

「喰らえええええ!!」

ウイングガンダムバーニングから放たれたツインバスターライフルの攻撃はユウキのストライクフリーダムへと放たれる

ライクフリーダムへ襲いかかる

「カリドウス複相ビーム砲… クスイファイアス3レール砲…！発射ああああ!!!」

ストライクフリーダムの腹部に装備している高出力ビーム砲と腰部に二つ装備している砲台からの一撃を自分へと襲いかかるツインバスターライフルの攻撃へとぶつけるかのように撃ち尽くす

ユウキ&レニー「負けられるかああああ!!!」

一歩も引く気の無い両者は雄叫びを上げるかのように声を上げる
ぶつかり合う二つのパワーは爆発し、辺りを煙が包み2機の様子を確認出来ない

「ユウキ君!!!」

控え室でその様子を見ていたミサは思わず声を上げた

「ユウキ!!!」

「ユウキ…！お願い…！」

レナの部屋でその様子を確認していたユウトとレナも固唾を呑んで見守る

煙は次第に晴れ、2機の姿が現れる

両機とも爆発で頭と左腕を失っている

「これで終わりか…!?!」

「そんな訳ねえ…！」

レニーの問いかけへとユウキは答えると同時に2機はボロボロになり、互いの姿は確認出来ない筈だがなんの迷いも無く突き進む

「例え姿が見えなくても!!!」

ユウキのストライクフリーダムは唯一残された右腕に握ったビームサーベルで、姿を確認出来ないウイングガンダムバーニングへとビームサーベルで斬りつける

「この勝負…最後まで諦めない方が勝つ…!!!」

レニーのウイングガンダムバーニングも残された右腕で同じ様にビームサーベルを握り、ストライクフリーダムへと斬りかかった

カアン！

何かにぶつかる音がどちらかの機体から聴こえた

「そこだあああああ!!!」
一撃をぶつけたのは

ユウキだ

「行ける…！俺ならああああ!!!」

叫びと共にユウキのストライクフリーダムは赤く光り出した

「これが…覚醒の力か…！」

ストライクフリーダムからの一撃を受け続けるウイングガンダム
バーニングは限界を迎えようとするのを何とか耐える

が、いつまでも耐える訳には行かない様だ

「行つけえええええ!!!」

「ハハハハ!!! 何の後悔もねえ… 絶対に優勝しろよ…！」

そう言い残し、耐えきれなくなったレニーのウイングガンダムバー
ニングの目からは光が消え、活動を停止した

.....

「やった！やったね！ユウキ君!!!」

「お疲れ様、ほらよ」

カドマツは戻ってきたユウキへとコーラを投げた

「次は準決勝…か」

「!?」

ユウキの背後から聞き覚えのある声を聴き思わず振り返る

「お前…」

「よう…！」

因縁の2人は太平洋の上で再びぶつかり合う

続く

ガンダムブレイカーズ 第35. 5話 イラつくア
イツ

モブA「お前… 一体何なんだよお！」

「気になるか…？ だが俺に狩られるお前に教える訳ねえ」

黒色のトールギスはその一言共に、地面へと転がっているピンク色のジンクスへと近づいた

モブA「やめろ… 近づくなあ…！ もうやめてくれえええ
!!!」

モブAは必死に黒色のトールギスへと懇願する

モブAのジンクスは既に両腕をもがれ、全体的にボロボロとなつて
いる

この間にもいつでもトドメを指す隙はあつた

しかし少し痛めつけてはトドメを刺さずに止め、再び痛めつけると
言つた事の繰り返しを行つている

「ハツハツハツ!! いいねえ… その絶望な感じ…！ もつと俺を
楽しませろよ…!!!」

男はそう言うと、黒色のトールギスはビームアックスでジンクスを
斬りつける

モブA「もうやめてくれ…！ 何で…！」

「何でか？ 今の俺はな、気に食わねえ奴の顔を見てイライラしてん
だよ…！」

モブA「俺には関係ないだろ!? もうやめろよ！」

「関係ない… まあそうだが、俺の相手がお前なんだよ… ちよつ
と付き合え… よ!!!」

男のトールギスは再び、ジンクスへと斬りつける

「おい、そろそろ終わらせろ。」

突如、男のコックピットへと通信が入る

肩まで伸びた白髪の女性だ

「へいへい……04ちゃんにそう言われたら止めとか……」

「ちゃん付けをやめろ何度も……!!」

04はイライラしながら男 リユウジへとそう言う拳を握りしめる

「04の言う通りだ、目的を忘れるな」

後にくくかの様にサイバーコーポレーション社長 カワグチが通信へと入ってきた

「社長までに言われたらしようがねえ……」

おい喜べ、お待ちかねのゲームオーバータイムだ

EXアクション……! サイクロンアックス……!!」

黒色のツールギス…… トールギスXX5はもはや達磨状態に等しいジnkスへとEXアクション、サイクロンアックスを放った
……

「アイツ……!!! 何で……!」

ユウキは不満気な顔で控え室でお菓子を食べる

「不思議だな、確かアイツは『あの件』以来は公式大会は参加出来ないはずだが……」

カドマツは煙草を吸いながらそう言う

「じゃあ何でこの大会に?」

ミサもお菓子を食べながら問う

「考えられるとすれば…… 何かしらの権力者が大会運営側に圧力をかけて参加できる様にした、とかだろうがそれならどこが……?」

流石のカドマツも分からない様だ

「あー!!!もう!!!ただでさえウィルで手一杯なのに何でアイツがあああああ!!!」

最高にイライラし始めるユウキ

「ユウキ君…… もう少しで二次予選も終わっちゃおうよ?」

「分かっているけど…… 次のバトル、絶対俺の事を狙ってくるはず……」

「次の決勝進出はエースポイントによって決まるし…… 確実に私達の

事を潰しに来るだろうね…。」

「ぐぬぬ…！」

想定外の事にユウキは頭を抱える

.....

「どうだね？ トールギスXX5の調子は？」

「最高だ、俺のデスサイズヘルの方がな」

「なんだ、合わないって言うのか？」

カワグチは不満気な顔でリュウジを見つめる

「俺はな、自分の機体でアイツを倒したいんだよ… アンタから

貰った機体で勝っても嬉しくねえよ…。」

「まあいい… 君は君のやる事をしろ、破れば彼女がどうなるか分

かっているね…？」

カワグチはニヤリと笑い、リュウジを見た

「屑が…。」

「何とでも言い給え、こうなった以上… 君も共犯者だ」

「…。」

「早く調整に戻れ、機体しているんだ君には」

カワグチはそう言い残すと控え室から出ていく

「リュウジ… お前はマスターと何の約束をしたんだ？。」

「何でもねえよ… それより、次は絶対負けられないんだ… 04

ちゃんも調整怠るなよー」

「だからーお前！。ちゃん付けをやめろ!!」

去っていくリュウジの背中を見ながら04は怒りの声を上げる

「03… お前の恨みは晴らしといてやる…。」

リュウジはポケットからボイスレコーダーを出すと録音を終わら

せそう呟いた

ユウキ&リュウジ 「アイツには絶対負けられるか…！」

遂に戦いは準決勝へ

そこにはカワグチの罠が…

続く

ガンダムブレイカーズ 第36話 強者

「遂に始まるか…。」

時計の針は間もなく13時を指す

この時間は大事な決勝へと繋がる、準決勝が始まる時間だ。

「いよいよだね… ユウキ君…。」

「ああ… だけどまだここじや立ち止まれない… 行こう、ミサ！」

「うん…！」

「ロボ太の調整もバツチリだ」

心を決める2人の後ろからカドマツが話しかける

「ありがとうカドマツさん」

「いいんだよ、俺にはこれ位しか出来ないしよ 決勝の切符を掴んでこいよ…。」

「うん！」

2人の返答に満足したカドマツはニヤリと笑うと

「それじゃあ行ってこい！」

2人の背中を叩き、控え室を離れる2人を見送った
……………

「この私を用意した機体だ… 丁寧に扱いたまえ」

カワグチはリュウジへとそう言いつつ、ガンプラを渡した

「別に俺のデスサイズヘルでもいいだろ…。」

「駄目だ、私は君を信頼しているが裏切られたら困るのでね… 作戦の妨げになるなら即刻破壊し、私が直々にやらせてもらうよ…。」

不服を言うリュウジに釘を指すかのようにカワグチは言い放つ

「それに…。」

「？」

「負ければ彼女がどうなるか分かっているな…？」

「あんたはやっぱり屑だな…。」

「ハハハハ!!! バイラス！用意を…。」

カワグチは笑った後にバイラスへと呼びかけた
「安心しろカワグチ、こちらは用意出来ている。」 後はそいつの腕
次第だな。」

バイラスはリュウジを見つめ、そう言った

「頼りにしているよ。」 この為に君をスカウトしたんだ」

「それなら一つ聞かせろ。」

「手短にしたまえよ、試合はまもなく始まる」

「本当に孤高に生きて何事も上手く行くと思うか?。」

「無論だ 友情、愛情 そんな物下らん。」 私は孤高に生き、このサ
イバーコーポレーション社長の座を掴んだ。」 過去に私をコケに
したものは今や私の足元にも及ばぬ。」! この財力すら私の
力。」 誰にもこの計画を邪魔させない、邪魔者。」 ウイル 奴には
この場を借りて消えて貰おう」

「ほーん、まあいいわ それじゃあ行ってくるわオツサン達」

リュウジはそう言い残すと控え室から出ていく

「待たせたな。」

「。」

控え室の近くの廊下には04が立っていた

「アイツの仲間は04ちゃん。」 アンタに任せませ」

「ちゃん付けをやめろと。」!!!」

「ハッハッハ!!」

リュウジは高笑いしながら準決勝のステージへと歩いて行く

「絶対に勝つ。」

リュウジは心にそう刻みながらこの先に待っている好敵手との戦
いへと突き進んで行く

.....

「来たか。」!

「俺はアンタには負けない。」 俺のパーフェクトストライクの恨み
を晴らしてみせる。」 この機体で。」

「面白い。」 なら俺もこの機体でやらせてもらおうか。」

リュウジも片手に先程、カワグチに渡された機体を握る

「各選手ハシユミレーターニ入ツテ下サイ」

宇宙エレベーターのシステムの声に従い、各選手はシユミレーターへと入っていく

「ミサ、今回のルールは？」

「えっーと…… そうだ！エースポイント獲得順位2位までが決勝だつて！」

「2位までか……」

「大丈夫！私達なら行ける……！」

「ミサがそう言うのと本当に行ける気がするよ…… そうだな…… 絶
対勝とうぜ！ミサ！ロボ太！」

ミサ&ロボ太「了解（承知）!!!」

各選手はシユミレーター内の機械へと自分のガンプラを次々にスキャンし始める

「よし、準備完了……！」

「パーフェクトビルドストライク ユウキ、出るよ！」

「アザレアフルフォース ミサ、行くよ！」

「バーサル騎士ガンダム ロボ太、参る！」

「トールギスXX5 出る……」

「暗黒騎士ギャン 04、行くわよ。」

それぞれの覚悟共に機体は次々に射出されていく

……

パーフェクトビルドストライク

頭 ビルドストライク

胴 ビルドストライク

腕 パーフェクトストライク

脚 ビルドストライク

バックパック パーフェクトストライク

武器 ビームサーベル 強化ビームライフル

少し前の大会でレナとユウトに渡されたパーフェクトストライクのパーツを使った姿

過去にリユウジよって破壊されたパーフェクトストライクを使い、過去の恨みを晴らす為に戦う

「頂きイー！」

準決勝、先陣を切ったのは ガンダムユニバーンを操るカイル選手だ

左手に握られたガンダムバルバトスのメイスを巧みに扱い突き刺すと、次々に付近を飛ぶザクを落としていく

「何だ何だ… 手応えねえな！」

カイルはそう言いながらメイスをジムへと突き刺し、撃破すると自機へと近づく敵に警戒し始める

「いいねえ… せっかく準決勝まで来たんだ、楽しまねえとなあ！」
カイルは自分へと近づいてくる敵機を迎え撃つ様に向かつていった

.....

ガンダムユニバーン カイル仕様

頭 ユニコーンガンダム

胴 バンシイ

腕 バンシイ（アームドアーマー装備）

脚 ユニコーンガンダム

バックパック フォースインパルス

全体カラーは灰色

ユニコーンガンダムとバンシイを組み合わせた機体

勿論Dモードも使用可能となっており、Dモード中はカイルの気分も高まって攻撃も変わる

.....

「来たかあ…!!!」

向かい側から自分を目掛けて来た機体 恐らくZガンダムをベースにした機体だろうか…？

その機体を目の前にし、カイルも完全な戦闘モードへと移行した
「他のプレイヤーを落とせばエースポイントもたんまりだ… 悪い

がお前にはここで倒れてもらうぜ!!」

カイルはその一言と共に加速すると、左手のアームドアーマーで目の前のZガンダムへと殴りつける

「そうは……行かねえな……!!!」

「嘘だろ……」

カイルのガンダムユニバーンから放たれたアームドアーマーの一撃を ユーリのドットプラスゼータは掴み、止めた

.....

ドットプラスゼータ

頭 Zガンダム

胴 インフィニットジャスティスガンダム

腕 ファッツ

脚 EX―Sガンダム

バックパック V2バスターガンダム

ビルダーズパーツ ブレードアンテナ、ダブルガトリングガン

全体カラーはZガンダムをイメージしたカラーリングをしている

V2バスターのバックパックのお陰で光の翼が使用可能となっている

いるなど、オプション装備も充実している

.....

「畜生……」

カイルは一旦後ろへと下がり、再度攻撃のチャンスを探す

しかし、ユーリはそれを許さない

「逃がしはしないよ!!」

ドットプラスゼータはV2バスターのバックパックからメガ・ビーム

ム・キャノンガンダムユニバーンへと放つ

「なっ……!」

反応に遅れたカイルのガンダムユニバーンは右手にメガ・ビーム・キャノンの一撃を受けてしまい、右腕を失ってしまった

「まだまだあー!」

ドットプラスゼータは追い討ちとばかりに、両腕に取り付けられたガトリングガンから放つ弾丸の雨と、脚部に付いているビーム砲によ

る攻撃を撃ち尽くす

「俺の本気は：：　ここからだあああ!!!」

カイルの言葉と共にガンダムユニバーンは光と共に姿を変える

「デストロイモード：：　起動!」

先程とは見違えた機動性であつという間にドットプラスゼータへと距離を詰めたカイルのガンダムユニバーン。

「速い：：!」

流星のユーリも追いつけない

そしてガトリングガンとビーム砲は底を付いてしまう

「さっきは俺の右腕を：：　これはその仕返しだあああ!!!」

カイルはアームドアーマーをドットプラスゼータの胴へと密着させる、

「行つけええええ!!!」

センサーユニット等が連動し、高制度　高収束のビームがドットプラスゼータを貫いた

「負けた：：　僕のドットプラスゼータが：：!」

胴の中心を貫かれたドットプラスゼータは機能停止し、Zガンダムの頭からは光が消える

同時にユーリのコックピットの画面にはGAMEOVERの文字が現れ、ユーリはここで敗退が決定した

「よっしゃあ!　これで1人GAMEOVERだぜ：：!」

「いや、2人だね」

「へ?：：!」

呆気に取られたカイルは自分の機体の胴を見る

カイルの目には、ガンダムユニバーンの胴が背後からビームサーベルで貫かれている様子が映る

「君が二人目の敗退者だ、お疲れ様」

「嘘だろ：：　そんな：：!」

カイルのコックピットにはGAMEOVERの文字が現れた

カイルを背後から襲った機体、アストレイゴールドフレームの目がキラリと光る

「僕と戦うまでは負けないでくれよ、ユウキ」

ウイルはそう呟くと、ガンダムユニバーンからガーベラストレートを引き抜き、その場あとにした

続く

ガンダムブレイカーズ 第37話 因縁

ユウキ「これで… 48機目！」

ビルドストライクの強化ビームライフルから放たれた一撃は目の前を飛ぶ2機のジムの胴を貫くと、ジムは空中で爆発した

ミサ「お疲れ様、ユウキ君」

着地するビルドストライクの近くへとミサのアザレアが労いの言葉をかけながら近づいてくる

ユウキ「結構落としたけど、まだ不安だなー…」

ミサ「世界大会だし… きっと他の皆も沢山倒してるんだろうね…」

ユウキ「(俺の不安はそれだけじゃない… アイツは必ず俺を狙ってくるはず…)」

ユウキの頭にデスサイズヘルの男がよぎる

ユウキ「そもそも何であいつがここに… 大会系は出禁のはずじゃ…」

ロボ太「主殿!! 後ろだ！」

ユウキ「!?!」

「待たせたなあ！」

ユウキ「来た! アイツが…!!」

ユウキ達3人の前に聞き覚えのある声と見慣れない機体が近づくと…

ミライ「ユウキ達、結構やってるみたいだね…」

ミサの実家の模型屋にあるテレビを見ながらミライは呟く

マモル「アイツらならきつと準決勝だって越えるさ! 俺達も…

何時かアイツらみたいに世界大会に行こうぜ！」

マモルはニコツと笑いながらミライへとそう言う

ミライ「そうだね… 君と僕で何時かは…」

ミライはそう答えると手元にある自分のガンプラを見つめる

ミライ「エクシア… 僕は2度と君を傷つけない…」

マモル「あの時の事、まだ引き摺ってんのか」

ミライ「うん… 記憶に無いとはいえ、君とユウキには迷惑かけたよ…」

マモル「いーんだよ！ 今度は助ける番になればいいんだ！それに、ファイターは助け合いだろ？」

ミライ「それを言うならファイターじゃなくてライダーだろ？」

まあ、ありがとう… 何時か僕も君達を助けられる様に頑張るよ」

マモル「ああ…！」

そう言うと2人は再びテレビの画面に視線を移す

テレビは黒色のツールギスとビルドストライクのぶつかり合いを映していた

マモル&ミライ「勝てよ… ユウキ…」

………

リュウジ「いいねえ… これだ… 俺はこれを求めていたんだ…!!!」

ユウキ「クソ…！ 強い…」

ビルドストライクは片手にシュベルトゲーベルを握りしめ、再びリュウジのツールギスに向かっていく

リュウジ「俺の姿が見えるかな…！」

ユウキ「な?! 消えた… レーダーにも反応がない… 逃げたのか…？」

ユウキは再び周囲を見回すが、辺りには何も見えない…

ユウキ「待てよ… 確か同じような事ができる機体が… 俺があいつなら…！」

ユウキのビルドストライクは振り返ると同時に強化ビームライフルへと持ち替えて、後ろへと数発銃撃を行う

すると何発か擦る音がした

ユウキ「やっぱりそこか！」

リュウジ「チツ… やっぱりコソコソ隠れながら戦うのは向いてねえ… 真正面から行かせてもらうぜ…！」

リュウジのツールギスはビームソードへと持ち替え、ビルドストライク目掛けて襲いかかる

ユウキ「簡単には… やらせるか！」

ユウキも負けじとシユベルトゲーベルを再び握り、ツールギスへと向かっていく

ビームソードとシユベルトゲーベルのぶつかり合う音が周辺と響き渡る

リュウジ「お前はな… 隙だらけなんだよ!!!」

ビームソードでユウキのビルドストライクの攻撃を弾くと、ビルドストライクへと回し蹴りを放つ

ユウキ「しまった！」

隙を突かれたユウキは回し蹴りをまともに食らってしまい吹き飛ばされる

リュウジ「そろそろ… 本気で行かせてもらうぜ… !!」

リュウジの言葉と共にツールギスXX5を紫色の光が包み始める

見覚えのある光… 間違いない、覚醒だ… !

リュウジ「来た… !来た… 来た来た来たあ！ 見せてやる…

俺の… 本気… !!!」

その言葉と共にリュウジのツールギスはあつという間に距離を詰めると、片手に握られたビームシザーズによりビルドストライクは空へと打ち上げられる

ユウキ「うお!!!」

空中へと吹き飛ばされたビルドストライク目掛けてツールギスは上昇すると、今度はビームソードへと持ち替えた

リュウジ「これで終わりだ… ! EXアクション… デッドエ

ンドインパクトオオオオ!!!」

ツールギスXX5が握るビームソードへと渾身の力が込められ、そのままビルドストライクへと叩き込められる

ユウキ「させる… かああああ!!!」

空中でバランスを崩しながらも左腕に装着されたチョバムシールドで何とか抑えようと試みるユウキ

リュウジ「お前を倒して… 俺は今度こそ自分の力を証明する…！ 俺には負けられない事情があるんだよ!!!」

ユウキ「それは俺だって…!!! お前を倒して… 世界に彩渡商店街の名前を轟かせるんだああああ!!!」

ユウキの言葉と共にパーフェクトストライクのバックパックは起動し、ビルドストライクは体勢を取り戻す

リュウジ「その夢もここで終わり…！ 左腕を見ろ！もう耐えられない筈だ！」

リュウジの言う通り、左腕はミシミシと言う音と共に亀裂が入る。そして遂に限界を迎え、左腕の関節から先はもげてしまった

ユウキ「例え… 左腕が無くても 俺には右腕がある…!!!」

腰からビームサーベルを引き抜くと同時に、ユウキのビルドストライクはトールギスXX5の頭へとビームサーベルを突き刺した

リュウジ「くそが…！」

焦ったリュウジはビルドストライクから離れると後ろへと下がっていく

ユウキ「逃がしはしない…！」

今度はバックパックからアグニへと手をかける

ユウキ「行つけええええ!!!」

ビルドストライクは高圧縮されたプラズマエネルギーを下がつていくトールギスXX5へ向けてアグニから放った

リュウジ「くそが… クソがああああ!!!」

リュウジは避けようと試みるが、同時に右腕へとアグニから放たれたエネルギーが直撃し右腕を失ってしまう

ユウキ「今度は…！俺の番だ！」

ユウキのパーフェクトビルドストライクを赤い光が包み始めた

リュウジ「上等じゃねえか…！ 来やがれ… 最強は俺だああああああ!!!」

ユウキからはトールギスIIに付けられた強化センサーで目の部分がよく見えてなかったが、リュウジが更に力を出した事によって目が光っているのを確認出来た

ユウキ「今度こそ教えてやる……！俺が強いという事を！」

……

04「遅い……。」

ミサ「キヤあああ!!!」

ロボ太「ミサ！」

ロボ太は04の操るギャンの回し蹴りによって吹き飛ばされるミサへと叫ぶ

04「他人の心配をしている場合か。」

ロボ太「速い……！ぐわあああ!!!」

ギャンの片手に握られたGNランスの一撃をまともに喰らったロボ太も、あまりの威力に吹き飛ばされる

ミサ「何て強さなの……。」

04「当たり前だ。お前達の機体とは性能が段違いだ。」

ミサ「この……！」

アザレアはビームサーベル片手に突っ込むが、

04「無意味だと言うことを知れ。」

ミサ「くっ……！強い！」

GNランスで受け止められてしまう

04「そろそろ終わらせるとしようか……。」

04のギャンはアザレアのビームサーベルを弾くと、GNランスをライフルへと変えてアザレアの脚を撃ち抜いた

ミサ「しまった……！体勢が！」

脚をやられたアザレアは膝を付いてしまう、頭を上げるミサ。

同時にギャンから放たれたGNランスの振り払いの一撃をまともに受け、アザレアは反動で動けなくなる

ミサ「アザレア！動いて！お願い……！」

ミサはコックピットで何とか動かそうと奮闘するが反応がない

ミサの脳裏にはGAMEOVERの文字が過ぎる

04「諦めろ。お前はここで終わりだ。」

ミサ「ごめん……ユウキ君、ロボ太……！」

ロボ太「トルネード!!! スパアアアアアアアアク

!!!」

04「何!?!」

ミサ「ロボ太あ!」

04の視界外からバーサル騎士ガンダムEXアクション、トルネードスパークが放たれる

雷の嵐は04のギャンを巻き込むとミサのアザレアとは別方向へと吹き飛ばす事に成功した

ロボ太「ミサ、立てるか?」

ミサ「ちよつと待って! うん!行けた!」

アザレアは何とか機能を取り戻し、何とか立ち上がる

ロボ太「行こう、ミサ!我々の力を奴に見せるのだ!」

ミサ「OK! 行こうロボ太!」

04「ロボと人間の友情... そんなもの有り得ない... お前

は感情があると言うのか...?」

ロボ太「私にも感情というものは分からない。しかし... 主殿やミサが嬉しいのならば私は嬉しい、主殿やミサが悲しければ私も悲しい それは理解している」

04「何故貴様の様な人の姿をしていないロボなのにそれが分かる...!?! 私は人の姿でありながらそれがわからないと言うのに...!」

ロボ太「何故かだど? 私はトイボットだ! 持ち主の気持ち位は理解出来る!」

ロボ太は04のギャンへと剣を向けてそう言った

ロボ太「人間とロボットの絆、今から貴様に見せてやる! 行くぞ

ミサ!」

ミサ「了解!」

アザレアは04のギャンへと突き進む

ミサ「行つくよー!!!」

アザレアはビームマシンガン牽制射撃を行うと同時に両肩に付けられたシユツルムファウストと、脚につけられたミサイルポッドか

らミサイルを放ち、ミサイルの雨がギャンへと襲いかかる

04 「小賢しい真似を…！」

04 のギャンはGNランスをライフルへと変えると、自分へと飛んでくるミサイルを当たる前に落とそうと試みる

ミサ 「そうはさせない…！」

アザレアはギャンへとフラッシュバンを投げつける

強烈な光がギャンを襲い、04は怯む

04 「くっ…！ 無意味なことを…！」

ミサ 「無意味なんかじゃない！」

04 「何!? まさか！」

アザレアから放たれたシュツルムファウストとミサイルはもう目の前

ミサはフラッシュバンを使い目を眩ませて、撃ち落とす事を失敗に終わらせた

04 「私が… この様な手に… !!」

ミサイルの雨を浴びたギャンは大ダメージを負ってしまう

ミサ 「ロボ太！」

ロボ太 「承知！」

ミサの呼びかけに答えたロボ太は飛び出すと04へと距離を詰める

ロボ太 「勝つのは私達だ！ EXアクション！ 炎の剣!!」

ロボ太の握りしめている剣から炎が出てくると、その炎をギャンへと放つ

04 「私が… 負ける… だと」

ロボ太 「ミサ！」

ミサ 「OK！ EXアクション！ スラッシュユペネトレイト！」

アザレアが持つビームサーベルは大きなエネルギーを纏い、突進しながらギャンを切り払った

04 「すまない… リユウジ…！」

04 のコックピットにGAME OVERの文字が現れた

ミサ 「やったああああ!!!! やったよ！ロボ太！」

ロボ太「ああ… 我々で勝ち取った勝利だ！ しかし… あの者…」

ミサ「どうしたの？ロボ太？」

ロボ太「いや、何でもない… 主殿の元へ向かおう」

………

リュウジ「どうした…！その程度か…!？」

ユウキ「既にお前もボロボロの癖に…!」

リュウジ「ふん…！ん…？なんだよ、オッサン」

リュウジのコックピットへと通信が入る

カワグチ「04が負けた、君が負けたらどうなるか分かっているな…？」

リュウジ「アイツ…」

カワグチ「早くそいつを潰したまえ、君なら出来るはずだ。どんな手を使っても構わない」

リュウジ「横から口出してんじゃねえ！俺は俺のやり方でやるんだよ！確かに手伝うとは言ったがやり方をアンタが決めていいと一言も言った覚えはねえ…!」

カワグチ「私に楯突くと言うのか君は？それならこちらにも考えがある… もう君は用済みだ…」

カワグチはそう言うと同線を切った

リュウジ「なっ… おい！何すんだ…!」

ユウキ「なんだ…!？」

リュウジ「くそ！操作が…効かねえ…!」

再びリュウジのコックピットへと通信が入る

カワグチ「リュウジ…君には失望したよ… 君が楯突かなければ04は廃棄にならずに済んだというのに…」

リュウジ「お前ええええええ!!!」

カワグチ「どれだけ叫ぼうともう遅い… ついでにXX5の操作権も剥奪した、私はもう君無しで計画を進めるとするよ… そうだ…君が10分以内に暴走するXX5を止められたら04の廃棄は考えてやろう… 楽しみにしているよ精精愛したロボットのた

めに抗い給え… フハハハハハハ!!!」

カワグチの言葉と同時に今までは比べ物にならないスピードで
ツールギスXX5はビルドストライクへと加速する

ユウキ「なんだよ… どんだけ成長するんだ!この機体…!」

ユウキのビルドストライクはXX5へと強化ビームライフルで狙
い打つが、あまりの速さに狙いが定まらない

ユウキ「強い… 今まで戦ってきたどの機体よりも…!」

リュウジ「くそ… 使えねえ機体なんかにはねえ…!」

リュウジはコックピットにおいてあるXX5の接続を切り、デスサ
イズヘルへと変えた

ユウキ「お前… そんな事したらその時点で敗退だぞ!」

リュウジ「知った事か! もう決勝に出ようが出まいがもうどうで
もいい… 俺はアイツを止めてやるべき事をやる…!」

デスサイズヘルが接続され、ビルドストライクの隣へとデスサイズ
ヘルが現れる

リュウジ「気に食わねえがあの機体を止めるのを手伝ってやる…

俺の足引つ張んなよ…!」

ユウキ「分かった…! 行くぞ!」

リュウジのデスサイズヘルとユウキのビルドストライクによる決
死のXX5の暴走停止作戦が始まる…

続く

ガンダムブレイカーズ 第38話 決戦

もはや操縦者も居なくなったツールギスXX5は暴走に等しい状態で活動を続ける

リュウジ「くそがあ…！」

リュウジのデスサイズヘルはXX5へと加速し距離を詰めるとビームシザーズの渾身の一撃を叩き込む

XX5はその一撃を片手で受け止めると弾き返した

リュウジ「俺が言うのもあれだが… とんでもねえなこれ…」

ユウキ「片腕は破壊したのにこの性能かよ…！」

ユウキのビルドストライクも左腕を失い、右腕で強化ビームライフルを握りながらも何とか戦っている状況

リュウジと共に手を組んでもある程度のダメージしか入らない

リュウジ「どうするよ… このままどつちが力尽きるまで待つか？」

ユウキ「そんなのお断りだ… と言うか何か無いのかよ！お前の機体！」

リュウジ「お前の機体の方が色々てんこ盛りじゃねえか！」

ユウキ「お前のせいでビームサーベルと強化ビームライフルしか使えねんだよ！しょうがねえだろ！」

いきなり喧嘩を始める2人へとXX5は真っ直ぐ向かって行く

リュウジ「しょうがねえ…！ 喰らえ!!」

デスサイズヘルの両腕に装備されたダブルガトリングガンを近づいてくるXX5へと放つ

弾丸の雨はXX5へと飛んでいくが、まるで効かないとばかりに突き進んで行く

ユウキ「あれ…！ おい！そいつの気を引いとけ！」

リュウジ「俺に… 指図をするなあ!!」

何かを見つけたユウキはその場所へと向かう為にリュウジへと命令をする

当然気に食わないリュウジだが、状況が状況の為に渋々従い再びX5へとダブルガトリングガンでの牽制を続ける

.....

ミライ「あの2人が協力してるなんて・・・」

マモル「世の中、追い詰められたら何があるかわかんねえな・・・」

ミライ「頑張れユウキ・・・！ 何とかあのツールギスを・・・！」

ミライはただ祈ることしか出来ない自分に嫌気がさす

それでもミライ達はただ祈り続けた

.....

リュウジ「くそ・・・弾切れかよ！」

あれだけ放ったガトリングガンの弾も当然底を尽きた

リュウジのデスサイズヘルにはビームライフルと言った遠距離系の武器を搭載しておらず、ダブルガトリングガンの玉が底を尽きた時点で近距離戦以外に戦う選択肢は無くなった。

リュウジ「上等だ・・・！ 来いよ、俺の手元から離れたガンプラ何かに未練なんてねえ・・・ さっさと倒して04を・・・！」

そう呟いたリュウジのデスサイズヘルはビームシザーズへと持ち替えた

リュウジ「付いてくれるか・・・ 俺の速さに・・・」

リュウジは再び覚醒の構えに入り、デスサイズヘルを紫色の光が包むとX5へと加速する

キーン！ とX5のビームシザーズとデスサイズヘルのビームシザーズのぶつかる音が辺りへと笈響した

今度は向こう側から何かが近づいてくる音がし始めた

ユウキ「待たせたな・・・！ こいつを喰らええええ!!!」

メガライダーへと跨ったユウキのパワーフェクトビルドストライクはデスサイズヘルと交戦中のX5へとメガバズーカランチャーからのレーザー攻撃が放たれる

当然避けようとするX5、しかしそれをリュウジは許さなかった
ユウキ「お前・・・！ 離れろって！」

リュウジ「俺に指図を・・・するな・・・！ 俺はこいつを道連れ

に… して… 04の元へ…!!」

離れようともがき続けるXX5をつかみ続けるデスサイズヘル
そんな2機をメガバズーカランチャーの一撃が飲み込んで行く

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

凄まじい衝撃波が辺りへと起こり、ユウキのビルドストライクも耐えきれずに吹き飛ばされて行く

ユウキ「無茶…しやがって…!!」

吹き飛ばされていくユウキのコックピットの画面にはボロボロになったデスサイズヘルとXX5を映すと画面が暗転した

……………

ミサ「ユウキ君！ ユウキ君！」

ロボ太「主殿！ 大丈夫か！」

ユウキのビルドストライクは立ち上がり周囲を見渡す

衝撃波はかなりのものだった様子で、割と離れていたミサとロボ太のいた近くまで吹き飛ばされたようだ

ユウキ「そうだ！ 準決勝は!!」

ミサ「終わったよ… ユウキ君…」

ユウキ「え…？」

ミサ「決勝出場だって！」

ユウキ「本当!?! やったあ！」

ロボ太「撃墜数と我々が倒した敵パイロットによりエースポイントで2位… 1位は…」

ウィル「僕だよ」

ユウキ「ウィル…」

ウィル「見ない間に全員力を付けた様だね、決勝楽しみにしている

よ」

ウィルはそう言い残すとガンダムセレナスは姿を消す

ユウキ「俺達も戻ろう」

ミサ「うん！」

ロボ太「ああ！」

.....

リュウジ「すまねえな... こんなにボロボロにしちまって、デスサ
イズヘル...」

リュウジはボロボロになったデスサイズヘルを手に取りカバンに
仕舞った

リュウジ「行かねえと... あいつを止めに...！」

リュウジはシュミレーターから飛び出すと一目散にカワグチの元
へと向かう

.....

リュウジ「04!!」

控え室に戻ったリュウジの目の前には横たわる04とカワグチの
姿があった

カワグチ「遅かったじゃないか、悪いがもう手遅れだもう時期04
はデータが初期化され君のことも忘れるどころか2度と動かなくな
る... これも全て君が招いた事だ...」

リュウジ「04!! 04ちゃん！ 何でだよ... いつもみたいに怒
れよ... ”ちゃん”付け止めろって！」

04「アと ノ 事ハ 託シた。」

04からボイスレコーダーと04が使っていたギャンがリュウジ
へと手渡された

同時に04は動きを止め、機能を停止した

カワグチ「さて、この事を公言されては困る カトウ、こいつを眠
らせておけ」

カワグチの言葉と共に白衣の男が現れる

研究所に居た男、リュウジも当然見覚えがある

カワグチ「私はこれから忌々しいタイムズユニバースと社長と愚かな彩渡商店街の子供達を楽しい宇宙旅行へと向かわせる為の準備があるので失礼するよ、少しだけ君には感謝するでしょう　そしてさよならだ」

カワグチはそう言い残り控え室から出ていく

リュウジ「どうした？　速く俺を永遠の眠りにつかせろよ……」

カトウ「私は罪のない子供もあの人の命令で擬似覚醒システムの実験台にした……　今こうして人として生きようとしたロボットも葬った……　私は……　もうあの人には付いていけない……　！　だから頼む！あの人を止めてくれ……　！」

カトウは膝を付くと、リュウジへと懇願する

脳裏には03と04が過ぎり、カワグチへの怒りが募り始める

リュウジ「必ず恨みは晴らしてやる……　覚えとけクソ野郎」

リュウジは04のギャンを握ると控え室から出た

……

「さあ！遂に決着！　我々日本代表からは彩渡商店街ガンプラチーム！　対する世界大会決勝の相手はタイムズユニバース社長　ウイル選手です!!」

MCハルは熱い実況を始めた

戦いの場は遂に宇宙エレベーター内部へと移り、窓からは自分の住んでいる地球が見える

カドマツ「いよいよ小さな商店街の復興も宇宙にまで来たか……

いいかお前ら、この試合勝つても負けてもいい、お前らが今まで積み重ねてきた物をアイツにぶつけて来い！」

ユウキ「ああ！　絶対に勝つ！そして何より楽しむぜ！」

ミサ「私も……　！　彩渡商店街の名前を世界……　いや宇宙に轟かせて来る！」

カドマツ「その意気だ二人共、優勝して地球に戻ったら何時もの居酒屋で乾杯だ　行ってこい！」

ユウキ&ミサ「うん！」

ユウキ「行こう、ビルドストライク！」

ビルドストライクガンダム 最終決戦仕様

頭 ビルドストライク

胴 ビルドストライク

腕 ビルドストライク

脚 ビルドストライク

バックパック ストライクフリーダムガンダム

シールド チョバムシールド

武器 ビームサーベル 強化ビームライフル

.....

ミサとユウキとロボ太とカドマツは最終決戦のステージへと向かう

ウイル「来たねユウキ、ミサ 今回は僕も全力で行かせてもらおうよ」

ユウキ「俺達もだ、あの時の借り 今日晴らすぜ！」

宇宙エレベーターシステム「両選手 各自シユミレーターに入ってください」

進行の宇宙エレベーターシステムに促され3人と1機はシユミレーターへと入っていく

ユウキ「なあ、ミサ 俺をガン普拉バトルのチームに誘ってくれてありがとう」

ミサ「やめてよユウキ君！何か今から死ぬみたいじゃん！」

ユウキ「いや、こういう時位しか言うタイミングないかなって

2人なら不可能なんて無いって事見せつけてやろうな！」

ミサ「うん！ 絶対勝とうね！ロボ太も！」

ロボ太「ああ！」

自分の機体をスキャンするユウキ ミサ ウイル

ビルドストライクはカタパルトへと現れ、出現を今か今かと待ち構えている

ユウキ「絶対に勝つ……！ ビルドストライクガンダム ユウキ、出るよ！」

ミサ「ガンダムアザレア フルフォース ミサ、行くよ！」

ロボ太「バーサル騎士ガンダム ロボ太、いざ参る！」

ウイル「ガンダムセレナス ウイル、出撃する」

4機は一斉に射出され、最終決戦の舞台へと向かう

.....

ウイル「楽しいバトルにしようじゃないか！」

着地と同時にウイルのガンダムセレナスはガーベラストレートを握りしめ、ビルドストライクガンダムへと襲いかかる

ユウキ「何の！」

ユウキも負けじと腰からビームサーベルを引き抜くと同時に、ガーベラストレートの一撃を受け止める

ミサ「ユウキ君だけじゃ！」

ロボ太「ないぞ！」

ガンダムセレナスの背後へと回ったアザレアとバーサル騎士ガンダムが飛びかかる

ウイル「やるね！ だけど..！」

ウイルは凄まじい速さで2機の間をすり抜けると同時に切りつけ、ガンダムセレナスの通った後にアザレアとバーサル騎士ガンダムにパーツアウトまでとは行かないがダメージが入る

ミサ「うっ..！」

ロボ太「くっ..！」

ユウキ「ロボ太！ミサ！」

ウイル「仲間の心配をしている場合かい!？」

再び物凄い速さで突っ込んで来たウイルは回し蹴りをお見舞いしようとして飛びかかる

ユウキ「同じ手が効くとも！ ドラグーン！」

ユウキのビルドストライクはストライクフリーダムのバックパツクを装備した事で使用可能となったスーパードラグーンを起動させて高速に移動し、ガンダムセレナスの背後へと一気に回った

ウイル「何!？」

ユウキ「背後は貫つたぜ！ EXアクション！ グラウンドシエイカー!!!」

ユウキはビルドストライクの脚へと力を込めてガンダムセレナスへと落下蹴りを喰らわせ、そのまま地面へと叩きつけた

ウイル「くっ……！」

更にウイルはドラグーンをどうにかしながら戦わないと行けない為、苦戦を強いられているこの状況

ウイル「どうやら腕を上げたね、あの時は大違いだ…… これなら僕も本気で……！」

カドマツ「全員気をつけろ！ システムがウイルスを感知した！」
ミサ「え……？ また……？」

ユウキ「よりにもよって世界大会かよ……！」

突如、4人のコックピットの画面は移り変わり何かを映す

ウイル「なんだこれは……！」

……

「やあ、愚かなファイター達！」

ウイル「この声…… バイラスか……！」

バイラス「ご名答！ そんな君達に宇宙旅行のプレゼントだあ！

今から30分で君達のいる宇宙エレベーターは完全に切り離されて宇宙を彷徨い続けるのだ！ ウェハハハハハハ!!!」

ミサ「何でそんな事を……！」

「私怨とは言いたくないが私怨でね」

ユウキ「また来た……！」

何者かの声と共に、4機の元へ黒色のシナンジュが飛んでくる

ウイル「その声どこかで……」

「別に思い出さなくても構わない…… 君達はこれから長い長い宇宙旅行へと旅立つのだ…… ウイル、君は特に目障りだそのまま地球へと帰らなくても構わないよ……！」

カドマツ「おい！ 一旦帰還しろ！」

バイラス「無駄だ！ あの時と同じ様にシユミレーターのをドアをロツ

クした！出たければ… 前の様にウイルスの根源を除去すればいい…！まあ、今回ばかりは無理だろうがね…！！！！」

カドマツ「あの時と同じ… リージョンカップで大会を乗っ取ったのもお前らか!？」

バイラス「その通りだ、まああれはこの為の予行に過ぎんがね… さあ空を見ろ！ あれが君達が除去すべきウイルス…！」

カドマツ「待ってる！今ウイルスを全てガンプラに変える！」

カドマツは焦りながらもパソコンを操作し始めた

カドマツ「出来た！今ウイルスを全てガンプラに変えた！これを落とせば…！」

ユウキ「カドマツさん… 無茶だ… 敵が多すぎる…！」

4機の上には600を超えるジンクスやガフランが空を覆っていた

カドマツ「なんて数だ…！」

バイラス「ウエハハハハハハハハ！！！！」 だから初めから無理だと言っただろ

！ さあ無様なファイター！ 無惨に私達にやられて宇宙を彷徨うがいい！」

バイラスの一言共に黒色のシナンジュの隣にバイラスが操っているであろうジンクスが現れる

バイラス「さあ、ショーの始まりだあ！！！！」

続く

ガンダムブレイカーズ 第39話 明日をかけた戦い

TVの前に少年2人が座り、テレビが映し出す映像を食い入る様に見守る

??? 「あの時のお兄ちゃんだ……！」

黒色のシナンジュと死闘を続けるビルドストライクを見ながらそう呟いたのは、ユウキの地元ゲーセンに居たジムコマンドを使っていた小学生の男の子だ。

??? 「頑張つて……！ お兄ちゃん！」

少年は自分のジムコマンドに付いている、ユウキから貰った対ビルムシールドを見つめてそう呟いた

……………

ユウキ「ミサ！ロボ太！ あのガフランとジンクスの大軍は任せたい！」

ミサ「ユウキ君は!?」

ユウキ「俺はあのシナンジュを何とかする……！ 頼むぞ！」

ユウキはそう言い残すとミサとロボ太の元を離れ、黒色のシナンジュへと向かって行く

ミサ「ユウキ君!!」

ロボ太「主殿!!」

……………

シナンジュの元へと辿り着いたユウキは腰からビームサーベルを二本抜き、両手で握る

??? 「君には私の送り出したエクシアを破壊された怨みがある……」

ユウキ「エクシア……？ まさかマモルを攫ったのは」

??? 「私だ…… 正しく言えば攫うように指示したのは私だ 彼はいい実験体になってくれたよ…… その成果が…… 今こうしてあるのだから！」

男のシナンジュは一瞬の間にビルドストライクの背後へと回ると、ビームアックスでストライクフリーダムのパックパックを破壊して見せる

ユウキ「…!? 一瞬で背後に… 覚醒!」

???「いや、本来覚醒の使えない私でも、このシステムを使えば使
用出来る… 君の仲間の犠牲になってくれたお陰で研究が進み何
のデメリットも無く使用可能になったのだ 本当に、君達には感謝し
かない!!!」

ユウキ「お前…!」

???「ハハハハ!!! さてと、伝えたかった礼は言った 私のこれか
らの計画に ウイルも、そして君達も必要なあい…!!! このまま宇
宙を漂うゴミとなり無様に… 死んで行け!!! ふははははは!!!」

ユウキ「お前だけは… 絶対に許せない…!!!」

ユウキのビルドストライクを赤い光が包み込む

???「ほう…これがオリジナルの覚醒か… 面白い…! その
力、私が生み出した力で超えさせて貰おうか!!! シナンジュ…!!!」

ユウキ「バックパックが無くなった…! 俺は止まらない!!!」

???&ユウキ「はああああああ!!!」

ビルドストライクの二本のビームサーベルとシナンジュのビーム
アックスは互いにぶつかりあい、そして反動で弾き返される

ユウキ「それなら、一旦後ろに…!」

ビルドストライクは後ろへとさがりながら頭部のバルカンでシナ
ンジュへと牽制する

???「小賢しい… 絶対に逃がしはしない!!!」

バルカンによる攻撃を物ともせずシナンジュはビルドストライ
クへと突き進んでいく

ユウキ「こつちも逃げる気なんて更々ないぜ…!」

ビルドストライクは自分へ向かってくるシナンジュへと強化ビー
ムライフルの銃口を向け、ビームによる一撃を放つ

???「ぬううう… 貴様…!! 出てこいジンクスウ…!!!」

シナンジュの目の前に3機のジンクスが姿を現すとシナンジュの

盾となり大破する

過去にもリージョンカップが乗っ取られた際に現れたプロヴィデンスガンダムが行えた行為

今回も何者かの操るシナンジュが行う

ユウキ「どれだけ現れようが……！」

ユウキのビルドストライクは次々とジンクスを斬り捨てながらシナンジュへと向かって行く

……

ウイル「はあああああ!!!」

ガーベラストレートはバイラスのジンクスへと近づくと渾身の一振り振りかざす

しかし、間髪その一撃は避けられてしまった

バイラス「ウイル…… 君はつくづく私をイライラさせるな！ 行

け……ガフラン!!」

バイラスのジンクスはガンダムセレナスの方へと手をかかざすとガフランが3機、姿を現した

ウイル「僕に気安く近づくな！」

ウイルはまず1機目のガフランへと蹴りをいれて怯ませると、そのままガーベラストレートで切り払う

続いて2機目はそのまま斬り捨てるとその場で爆発

3機目も同じようにすれ違い様に斬り捨てた

バイラス「喜べ！まだまだおかわりはあるぞ!!」

バイラスは再びガフランを生み出すと、ガフランはウイルへと向かっていく

ウイル「くっ……！」

……

???「そろそろへばって来たんじゃないか……？」

ユウキ「まだだ……！」

ユウキのビルドストライクは次々にジンクスをビームサーベルで薙ぎ倒すが、数は減らない

ユウキ「(耐えてくれ… ビルドストライク…！)」

そんなユウキのビルドストライクの背後を、倒し損ねたジンクスが襲いかかる

ユウキ「やば…！」

反応に遅れたユウキはジンクスの襲撃を許してしまう

終わった… ユウキは一瞬そう思う

だが…

「爆熱…！ ゴッドオオオオオ…フィンガーアアア…!!!」

ジンクスの胸を突如現れた見覚えのある機体が貫いた

ユウキ「…！ レン!!」

レン「待たせたなあ！ユウキ！」

かつてリージョンカップで共に死闘を繰り広げたレンと愛機 ビ

ルドゴッドバーニングの姿がそこにはある

???「どこから侵入してきた… 貴様ア！」

「彼だけじゃない…！」

「俺達もいるぜ！」

シナンジュの近くにいたジンクスはどこからともなく飛んできた
シグマシスキャノンの一撃をモロに喰らい大破する

ユウキ「ミライ…！ マモル…！」

???「どうやってここに…！」

マモル「カドマツさんに言われたんだ！ユウキ達を助ける為に力を貸してくれって！」

ミライ「そしてモチヅキ…って人に協力してもらってここまで来た

来たのは僕達だけじゃない！」

「テメエ…！よくもユウキに…！」

???「…！ 貴様…！いつの間に背後に…！」

紫色の様な光に包まれたデイスティニーインパルスはシナンジュの背後へと回るとアロндаイトでシナンジュのバックパックを破壊する

ユウキ「兄貴…！」

ユウト「言つただろ！ お前がピンチなら例え宇宙だろうがなんだろうが助けに来るって！」

バックパックを破壊され片翼を失うシナンジュ…

???「イライラさせる奴らだ…！ 貴様らあああああ!!!」

怒り狂うシナンジュは、ユウキのビルドストライクへと凄まじいスピードで迫る

筈だった

???「…!? 何故だ！ 何故動かん…!!」

レナ「間に合った様ね」

動きを制限されたシナンジュの近くにレナのローゼンジャスティスが現れた

???「これは、サイコ・ジャマー…！」

レナ「正解♪」

ユウキ「レナ姉!!」

レナ「ユウトが「ユウキを助けに行く!!!」っていきなり飛び出すから何事かと思ったけど… 無事で良かったわ… ユウキ」

カドマツ「揃ったか！」

レン「俺達以外にも沖縄宇宙飛行士訓練学校の奴らが既にユウキの仲間達に合流して次々に倒してるぜ！」

ユウキ「カドマツさん、これは一体…！」

カドマツ「何とか地上に連絡が繋がったからモチヅキに頼んだんだ、優秀なファイターを集めてくれてな」

レン「例えお前が宇宙にしようとか何処にしようとか俺達は仲間だぜ！」

ミライ「だから必ず帰って来るんだ！」

マモル「約束だぜ！」

ユウキ「皆…！」

???「どいつもこいつも…揃いも揃って私の邪魔ばかり…！もう遊びは終わりだ…出てこい、ネオ・ジオング!!!」
呼びかけに応えるかのようにステージへとネオ・ジオングが姿を現す

ユウキ「なんだあのガンプラ…！PGなんかよりもデカイ…！」

ミライ「何て機体を…！」

「面白い事になってんな」

ユウキ「この声は…」

ユウキは振り返り、聞き覚えのある声の主の姿を捉える

紫色のギャン… 準決勝でリュウジのデスサイズヘルの隣にいた機体だ

リュウジ「よお、オツサン 本来永遠に眠っている筈の俺に会った感想はどうだ…？ オツサンいや、サイバーコーポレーションの社長 カワグチ・ジュンイチさんよお!!!」

カドマツ「あのサイバーコーポレーション社長の… 確かに、サイバーコーポレーションは宇宙エレベーターの開発に…」

???「どうして…そう言いきれぬ…？」

リュウジ「これを聴いても本当にまだ嘘をつけるか？」

リュウジはボイスレコーダーをONにすると、カワグチによる今回の計画の音源が流れた

リュウジ「この放送は全世界に流れている、アンタはここで終わりで 諦めて投降しろそして罪を償え」

カワグチ「フフフ… フハハハハハハ!!!! やはり君も信頼に値する人間では無かったか… こうなった以上、嘘は意味もなし…」

改めて自己紹介しよう… 私はカワグチ サイバーコーポレーション社長 カワグチだ」

カワグチは声高らかに自己紹介をする

ユウキ「何でそんな人間がこんな事を…！」

カワグチ「何で…？ か？ 私は私の邪魔をする人間がこの世で1番
嫌いでね… ウイル…？ そして彼を消す為の計画を妨げる君達を
消す為さ… さて、ゲームの続きといこう… 君達に残された時間は
15分…？ それまでに私と、そして全てのウイルスを除去出来るか
な…？？」

ユウキ「やってやるさ…？ 俺が…？ 俺達が！」

カワグチ「君達の無駄な抗い、見せてくれたまえ…！ ヒヤハハハ
ハハハ！！！！」

ユウキ「俺が…？ 止めてやる！」

続く

ガンダムブレイカーズ 第40話 最終回 可能性の未来へ

カワグチ「愚かなファイター…、精精残りの15分間足掻き続けるがいいさ 君達が勝てる可能性は99%ありはしない！」

ユウキ「残りの1%… 俺達はそれに賭ける…！俺も… ミサも… そしてここにいる皆も！誰1人負ける事なんて考えてない！俺達はお前を倒して必ず帰ってみせる！」

カワグチ「寝言は寝ていいたまえ…！ これだけの機体… 君達だけでどうやって倒すと言うのだ…！」

ユウキ達の近くをかなりの数のジンクスとガフランが待ち構えている

ミサとロボ太、そしてツキミやミソラのお陰で確実に数は減っているがそれでも終わりは見えない

ミライ「僕達がいる！」

マモル「俺達だつてまだ諦めてねえ！」

ガフランとジンクスの群れへとミライのエクシアライザーとマモルのAGE3 フルアーマーフォートレスが突っ込んで行く

レン「俺だつて！」

あとを追うようにレンのビルドゴッドバーニングもジンクスへと蹴りを入れると、EXアクション 爆熱ゴッドフィンガーで確実に落としていく

ユウト「ユウキ！これを使え！」

ユウトは自分のデイスティニーインパルスからバックパックを引き離すと、先の戦いでバックパックを失ったビルドストライクへとデイスティニーガンダムのバックパックを装着させた

ユウキ「これ！」

ユウト「いいか、お前は1人じゃない 俺も、レナもミサちゃんだつているんだ 絶対勝つて、帰ってこいよ！」

ユウトはそう言い残しその場から消えると、新たな機体をスキャン

して再び現れる

ユウキ「パーフェクトストライク…！」

ユウトが新たに使用する機体 パーフェクトストライク

今まで色々な敵を倒してきたユウキの愛機を今度はユウトが扱うようだ

ユウト「俺だってファイターだ！ これ位使いこなしてやるぜ！」

レナ「本当… 昔から変わらないわね…！」

ネオ・ジオングの前に並び立つユウキのディスプレイニービルドストライクとユウトのパーフェクトストライクを後ろから見守るレナはそう呟いた

カワグチ「力こそ全て… 絆など、力の前には無意味という事を無力な貴様らに教えてやる!!!」

ユウキ「お前のそれは力なんかじゃない！ 無理矢理手に入れた力なんて… なんの意味もないんだ！」

カワグチ「うるさい…！ 貴様に何がわかる!!!」

カワグチの操るシナンジュはネオジオングへと同期し一体化すると、ビルドストライクを巨大なアームで握りしめた

ユウキ「うお…！ なんて力なんだ！」

握りしめられたビルドストライクはミシミシと音を立てる

カワグチ「そのまま粉々になるがいい…！ 貴様のその機体など！」

「させるか！」

ビルドストライクを握りしめたネオジオングのアームへと何処から放たれたビームライフルの一撃が直撃し、ビルドストライクは何とか解放される

カワグチ「誰だ!?!」

クロウ「何とか間に合ったみたいだな！」

ユウキ「クロウさん！」

世界大会でユウキの窮地を助けたウイングガンダムバーニングを操る男 クロウが、再びユウキを助ける為に戦場へと降り立った

クロウ「テレビで救助を手伝うファイターを募集しているのを見てな、まだ完全に修復出来ないがリペアパーツで間に合わせた！俺も参加させてもらうぜ！」

ユウキとの戦いでボロボロになったウイングガンダムバーニングは腕をウイングガンダムプロトゼロに変えてこの戦いに参加した

クロウ「助けに来たのは俺だけじゃない！ まだ来るはずだ！」

その言葉の通り、様々な機体が次々とジンクスやガフランを落とすていく

カケル「貫け！タクティカルアームズ!!!」

カケルのアストレイレッドフレーム改はタクティカルアームズを弓の様な形に変形させ放った一撃はジンクス2機を貫いていく

ケンタ「カケルに負けてられない…！」

ケンタのブルーフレームセカンドリバイも負けじとタクティカルアームズを双剣へと変形させるとガフランの四肢を切り裂き撃破した

ウルチ「姐さん！ 調整バッチリつすよ」

モチヅキ「よし！ ウルチ、ウイルス共を落としていけーい！」

ウルチ「了解…！」

ウルチのアプサラスもこの戦場に現れ、巨大な砲台から放つレーザー光線は1度に沢山のジンクスを撃ち落としていく

ミスター剣山R「かつての好敵手が集い、一つの目的の為に戦うか… 素晴らしいではないか！ このミスター剣山Rも戦わせて頂く！行くぞ！武神ジンクス！」

タウンカップとリージョンカップに参加していたミスター剣山も今度こそ見せ場を作ろうと、更にカスタムした武神ジンクスで戦いへと参戦

武神ジンクスはカーベラストレートとタイガーピアスの二刀流でガフランを切り裂くと凄まじい速さで近くに居たジンクスの背後に回り、胴体を貫いた

ユウキ「皆…！」

ユウト「言っただろ？お前は1人じゃないって！」

カワグチ「おのれ……！ファイター共があ……！ガン普拉バトルも……貴様らファイターも下らん!!」

リュウジ「アンタもそろそろ負けを認めた方が良いんじゃないか？」

カワグチ「負けを認めるだと……？ そんな事してたまるかあ！貴様ら3機だけでも落としてやる……！」

コロニーレーザー！ジエネレエエトオオオオオ!!」

ネオジオングはユウキ ユウト リュウジから離れると、ネオジオングにコロニーレーザーを模したものを作り出した

ユウト「あれは……！」

リュウジ「まずいぜ……！」

そんな2人の中心をユウキのビルドストライクは駆け抜けた

ユウト「ユウキ！戻ってこい！あれを喰らったらGAME OVERだ！」

ユウキ「これ以上……！ 皆に手を出させるかああああ!!」

コロニーレーザーをジエネレートしたネオジオングへとユウキのビルドストライクは向かっていく

加速するビルドストライクを包んでいた赤い光は、次第に虹色への光へと変わりユウキを包み込む

カワグチ「私に近づくなあああ!!」

ネオジオングのアームはユウキのビルドストライクへと射撃の体勢へと入る

「させるかあ……！」

左上のアームからの射撃を止めるべく、ガンダムが全力のタックルをかます

ユウジロウ「ユウキ！大丈夫か！」

ユウキ「父さん……！」

ネオジオングの攻撃を妨害したのはユウキの父 ユウジロウだ

カワグチ「よくも邪魔を……！」

ネオジオングは今度はユウジロウのガンダムへと標的を変え、右下のアームで殴りつけようと動かす

ミサ「させない！」

ミサの操るガンダムアザレア・フルフォースの脚に付いているミサイルポッドからミサイルと、肩に付いているシュツルムファウストを全放出してミサイルの雨を降らす

ミサイルの雨はユウジロウを攻撃しようとした右下のアームへと直撃し、機能を停止した

カワグチ「クソがああああ!!!」

リュウジ「俺達も…！」

ユウト「忘れんなよ!!!」

リュウジのギャンを紫色の光が包み込むと、まだ動かす事が可能な、ネオジオングのアームの関節部を狙ってGNランスを突き刺す

リュウジ「これは… 03と04と… 俺の怒りの分だあああああ!!!」

ギャンの赤いモノアイがキラリと光ると同時に、くい込ませたGNランスへと限界まで力を込め、関節部を破壊させて左上のアームを破壊した

ユウト「ユウキ程上手くは扱えないが…！」

ユウトはパーフェクトストライクのバックパックからアグニを構えると、残された右上のアームへと高圧縮されたプラズマエネルギーを撃ち尽くす

ユウト「これでも… くらええええ!!!」

カワグチ「せめてこの腕だけでも…!!!」

ネオジオングは最後の抵抗とばかりに右上のアームからレーザー攻撃をパーフェクトストライクへと放とうと構える

レナ「そうはさせないわ！」

ユウトの手助けの為に接近したレナのローゼンジャスティスは再びバックパックからサイコ・ジャマー放ち、右上のアームの自由を奪う

ロボ太「助太刀しよう！」

ユウト「サンキュー…！ロボ太！」

バーサル騎士ガンダムは小柄な体を活かして、使用不可になった右

下の腕を伝い、右上のアームまで登っていくと両手に握られた剣を全力で突き刺す

カワグチ「私のネオジオングの腕があああ!!!」

遂に右上のアームも破壊し使用不可に成功

これでネオジオングの攻撃を殆ど止めた

.....

ウイル「執拗い...!」

ガーベラストレートの一振りでガフランをなぎ倒して行くウイル

長期戦という事もあり次第に辺りへの注意が鈍りだした

バイラス「背後は貰ったぞ!ウイル!!!」

ウイル「しまった...!」

同時にウイルは目を瞑る

完全に終わった...

それなのにおかしい... GAME OVERの音が聞こえない...

そう思ったウイルは目を開け、振り返る

ウイル「チャンプ...!」

ミスターガン普拉「腕が落ちたんじやないか?ウイル」

バイラス「なんだ!? 貴様!」

バイラスによる背後からの攻撃をミスターガン普拉のケンプ

フアーは受け止めていた

ミスターガン普拉「はああああ!!!」

ミスターガン普拉仕様のケンプフアーはバイラスの攻撃を弾き返

すと同時に腹部へと渾身の蹴りを入れた

ミスターガン普拉「ウイル... 今度は私と一緒に戦ってくれ!」

ウイル「しようがない人だ... 協力するよ!」

バイラス「幾ら増えようと私は倒せない! ガフラン!」

バイラスの目の前に3機のガフランが姿を現す

ミスターガン普拉「私達を舐めないで欲しいな!」

ウイル「その通りだ...!」

2機のガーベラストレートによる一撃は一瞬で、目の前に立ちふさがるガフランを真つ二つに切り裂く

ミスターガン普拉「行くぞ！ウイル!!」
ウイル「ああ！チャンプ！」

2機のガンプラは残り1機のガフランとバイラスのジンクスへ向けて加速を始める

バイラス「やめろお！来るなああああ!!!」
ミスターガン普拉&ウイル「はああああああ!!!」

2機から放たれたガーベラストレートの一撃はガフランとバイラスのジンクスを縦に真つ二つにすると、耐えきれなくなったバイラスの機体は爆発した

バイラス「この私の… 機体がああああ!!!」

バイラスの断末魔と共に爆発したジンクス、その叫び声はユウキ達の所まで響き渡る

……………

ミライ「僕に的を絞ったか…！」

7機のジンクスはミライのエクシアを追いかけるかのように、エクシアへ向けてビームライフルから攻撃を放ちながら襲いかかる

マモル「ミライ、俺に任せろ！ EXアクション！ フォートレス
フォアブラスタアアアア!!!」

AGE3のシグマシスキャノンから放たれたレーザー攻撃はミライへと襲い掛かるジンクス7機の内、4機を沈める

ミライ「これ位なら僕にも…！ トランザム！」

動きが高速化したエクシアはまず目の前のジンクスへと距離を詰めると、片手に握られたGNソードでジンクスの胴体を貫くと同時に切り上げる。

続いて、2機目のジンクスはライフルへとGNソードを変形させてゼロ距離で3発撃ち込むと爆発。

3機目のジンクスはGNソードで四肢を切り落とすと、1機目と同じように胴体を貫かせ今度は切り下げた

レン「俺も負ける訳には行かないな！ 覚醒……！」

レンのビルドゴッドバーニングを赤い光が包むと、レンのビルドゴッドバーニングは技の構えへと入る

レン「まとめて落としてやる……！ バーストアクション！ 石破天驚拳!!」

ビルドゴッドバーニングから放たれた気孔弾はジンクスやガフランを飲み込み、1度に大量のがフランとジンクスを落としていく

ツキミ「うお！すっげえ……！」

ミソラ「ちよつとお！よそ見しないでツキミ！」

ツキミ「悪い、すっげえファイターが居たもんだからさ！」

ミソラ「ほら、来るよ！ツキミ！」

ツキミのエンハンスドデファンスとミソラのガンデイライユへ向けて大量のガフランとジンクスが襲いかかる

ツキミ「ユウキ達の元へは行かせねえぜ！」

エンハンスドデファンスは大型対艦刀を掴み、次々とジンクスを破壊して行く

ミソラ「ミサちゃん達の邪魔はさせない……！」

ミソラのガンデイライユも負けじと、ランチャーストライクのバツクパツクのアグニへと手を掛け、ガンデイライユの直線上にいるガフラン数機へとプラスマエネルギーを放ち、確実に落として行く

あれだけいたジンクスやガフランはユウキ達を助けに来たファイターの活躍もあり次々と数を減らしていく

かつてユウキ達と戦った者、ユウキの友達、ガンプラバトルを通じて仲間を増やしたユウキ達は様々な仲間を支えられながらこの戦いへと挑む

……………

カワグチ「有り得ない……この私の最強のガンプラがあああああ
!!!!」

全ての腕を封じられたネオジオング、カワグチは非常イラついた様子で声を上げる

リュウジ「終わらせろ！」

ロボ太「主殿！ミサ！」

レナ&ユウト「行っけええええええ！」

ここまで一緒に戦ってきた仲間の声援を受けたユウキはネオジオングへと加速する

ユウキ「感じる… みんなの力が、ビルドストライクに！」

虹色に光続けるビルドストライクはユウトから渡されたデイスティニーガンダムのバックパックを展開させた

ミサ「行こう、ユウキ君！」

ユウキへと手を伸ばすミサのアザレア

ユウキ「ああ！終わらせよう！」

ユウキはその手をがっちり掴む

離しはしない… その思いで掴んだ

カワグチ「私が負ける訳ない… 負ける訳無いのだあああああ

あ!!!」

互いに手を握るアザレアとビルドストライクを虹色の光が包み込

む

ここまで一緒に来た1番の仲間、苦しい時も嬉しい時も一緒にいた

そんなユウキとミサの絆は

大きな剣へと姿を変える

可能性溢れる2人の未来を切り拓く為に!!!

ユウキ&ミサ「行っけええええええええええ!!!」

巨大な剣はネオジオングへと叩き込まれ!!ネオジオングの中心部に

居たカワグチのシナンジュは真つ二つに切り裂かれる

カワグチ「私が… 負けた… この機体をもつてしても…」

ユウキ「俺達は賭けたんだ… ！1%の勝利の確率に… ！」

アンタの負けだ、カワグチ社長！」

カワグチ「有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない

!!!!

覚えている… ！ この屈辱忘れはしない…!!!!」

そう言い残すとカワグチのシナンジュとネオジオングは姿を消し、

同時に空を覆っていた大量のジンクスとガフランは姿を消した

ユウキ「勝った…」

ミサ「やったあ!!!」
ロボ太「主殿!」

彩渡商店街ガンプラチームは集結し喜びを分かち合う
ユウト「良かったぜ、またアイツの喜ぶ姿が見れて」

レナ「こつちはヒヤヒヤしたわ、いきなりバツクパツクを引き離す
んだもん でもまあ、こうやって無事に終わって良かったわ...」

ユウジロウ「そうだな...」

3人ははしやぐ3機を見てクスリと笑った

リュウジ「03 04 お前らの仇は取つといたぜ」

リュウジは空を見てそう呟くと、何処かへと姿を消した

ウイル「終わったか...」

ミスターガンプラ「ウイル、お疲れ様」

ウイル「チャンプ、僕は何時か思い出せるだろうか 彼らの様に...」

そして昔の様にガンプラバトルを楽しむ気持ちを

ミスターガンプラ「思い出せるさ、君がガンプラバトルを好きでい
られるなら」

ウイル「なら良かった...」

.....

いくつかの事件から始まり、終いには世界大会を巻き込んだカワグ
チとバイラスの野望は小さな商店街のガンプラチームとその仲間達
の活躍によつて無事に防がれた

.....

ウイル「来たね、ユウキ」

ユウキ「ああ、待たせたなウイル」

MCハル「という訳で!ハプニングによつて開催が中断された世界
大会決勝を再び開催したいと思えます!」

うおおおおお!!!

会場は熱狂に包まれる

ユウキ「わざわざこんな大きな会場じゃなくても…」

ウイル「決勝にふさわしいじゃないか」

ユウキ「まあ、そうだな！」

MCハル「ここでルールの説明を、ミスターガンブラー！」

ミスターガンブラ「今回は3対1では不平等なので彩渡商店街ガンブラチームからは1人代表として1体1の時間無制限のバトルだ！2人とも…ここで決着をつけるといい！」

ウイル「手加減する気は無いよ、ユウキ！」

ユウキ「俺だって…！」

MCハル「それでは両者、準備を始めてください！」

カドマツ「アイツ、なんの機体で出るんだ？」

ミサ「うーん… ストライクフリーダムのパックパックを付けた

ビルドストライクのカスタムじゃないかなー？」

ミスターガンブラ「両者準備完了！ さあ！ガンブラファイト…

レディーGO！」

ユウキ「ビルドストライクガンダム ユウキ、出るよ！」

ウイル「ガンダムセレナス ウイル、出撃する！」

2機はカタパルトから射出され、決戦の舞台へと突き進む

決戦の舞台は街、高層ビルが立ち並ぶこのステージで2機は対峙した

ウイル「未改造のままのビルドストライクか… 面白い！」

先に動いたのはウイルだ。

ガーベラストレートを巧みに扱い、素早い動きでビルドストライクの懐へ潜り込むと早速ビルドストライクの胴へと切りかかる

ユウキ「やらせるか！」

ユウキは腰から2本のビームサーベルを抜くと、ガーベラストレートの一撃を2本のビームサーベルで受け止める

キーン！ とビームサーベルとガーベラストレートのぶつかり合う音がステージの端まで響き渡る

ユウキ「一旦引くか…！」

ビルドストライクは頭部のバルカンをガンダムセレナスへと放ち、

セレナスは怯んでしまった

ウイル「小賢しい真似を…！」

ウイルがバルカンの一撃で怯んでいる間にビルドストライクはビルの物陰へと姿を消す

ウイル「一体何処に…！」

ユウキ「俺はこつちだ!!」

ビルの物陰から姿を現したビルドストライクは、セレナスの背後をとると強化ビームライフルでセレナスのバックパックへと数発お見舞いする

ウイル「くっ…！　だが、みつけた…！」

セレナスは強化ビームライフルの攻撃を受けながらも、ビルドストライクの方へと振り返り、ガーベラストレートの切り上げを強化ビームライフルへと当てる事に成功、ビルドストライクが握っていた強化ビームライフルは爆発して使用不可になる

ユウキ「…　おもしろえ…！」

再び腰からビームサーベルを抜くと、ビルドストライクはセレナスへと切りかかる

ウイル「まだまだ！」

素早い動きでそれを避けたセレナスは回し蹴りをビルドストライクの胴体へとお見舞いして、ビルドストライクは後ろへと吹き飛びばされて巨大なビルへと叩きつけられる

ユウキ「くっ…！」

ウイル「これで終わりだ！」

セレナスはガーベラストレート片手に、ビルへと叩きつけられたビルドストライクへと加速する

ユウキ「来い！ビルドブースター！」

ユウキの呼びかけに応える様に、遙か向こう側から何か飛んでくる

ウイル「なんだあれは…！」

セレナスの前をビルドブースターは横切るとそのまま上空で回転し、今度はガンダムセレナスへと2門の砲台部分から射撃を行う

ウイル「別に稼働しているのか…！」

ユウキ「ビルドブースターに見とれてる場合か！」

ウイル「しまっ…」

ウイルがビルドブースターへと注意を逸らしている間にビルドストライクは何とか脱出すると、ビルドストライクのビームサーベルはセレナスの胴を切る

ユウキ「もう1度！」

再び角度を変えて振り向くビルドストライク、今度はバックパックを切りつけてセレナスのバックパックの破壊に成功した

ウイル「これ以上は…！」

セレナスは振り返り、ガーベラストレートを水平に動かしてビルドストライクを切り裂こうと試みる

ユウキ「あの日以来ずっと！言いたかった！」止まって見えるぜ、お前の動き！」

水平に飛んでくるガーベラストレートを体を下げて躲したビルドストライクは、今度こそビームサーベルをセレナスの胴目掛けて渾身の一振りで叩き込む

ウイル「なっ…！」

ユウキ「この一撃に全て込める…！行っけえええええ！！！」

叩き込んだビームサーベルを握る力を強め、全ての力をビームサーベルへと込める

ウイル「認めよう…」

君の勝ちだ…！」

ユウキ「あの時の借り、返したぞウイル！」

ビルドストライクのビームサーベルはガンダムセレナスの胴を切り裂くとセレナスは真つ二つとなり、アストレイゴルドフレームの目から光が消える

ウイル「この熱い思い… 君のおかげで思い出せたよ、ユウキ…」

MC「き、決まったああああ！！世界大会 優勝は彩渡商店街ガン普拉チームのユウキ選手！！会場の皆様、彩渡商店街ガン普拉チームに惜しめない拍手と声援をー！！！」

会場は大量の拍手と彩渡商店街のコールが響く

ミサ「ユウキ君!!!」

ユウキ「ミサ……俺達勝ったんだよな……！」

カドマツ「ああ、良くやったよお前らは……」

拍手と声援はしばらく間、消えることなく響き続けた

……

???「僕もいつか……あのお兄ちゃんみたいに……！僕達も頑張

ろう！タツキ！」

???「ああ！いつか僕達もあの舞台に立つんだ！必ず……！」

二人の少年は彩渡商店街ガンプラチームを見ながらそう呟いた

……

〜某日〜

ユウキ「ごめんお待たせ！」

マモル「遅いぞー！」

ミライ「まあまあマモル」

ミサ「これで全員揃ったね！」

ユウキ「ああ！始めようぜ！ガンプラバトル！」

それぞれの機体を取り出す4人

色々な思い出の詰まった愛機を操り今日も少年達は戦う

ユウキ「未来はまだ分からないけど……こうしていつまでも、ガ

ンプラバトルをしたい！俺、ガンプラバトルに出会えて良かった！」

た！」

ガンダムブレイカーズ 終わり

「潰えぬ……私の野望は……！覚えていろ……ファイター
共……！」

ガンダムブレイカーズACE 第1章 新たなる世界
ガンダムブレイカーズACE 第1話 変わりゆく世界

ユウキとミサ、そしてその仲間達の戦いから5年

少しずつ世界は進歩し色々な物が生まれ、そして変わっていた

彩渡商店街はユウキとミサの活躍により、タイムズユニバースとまでは行かないが少しずつ活気を取り戻し、シャッター街と化していた通りも何軒か店を再開させるなどガンプラチームによる宣伝が功を奏していた。

更にハイムロボティクスは試験段階中だったトイボットの一般販売を開始。

五年前は彩渡商店街ガンプラチームのみにしかSDガンダムは居なかったが、今では様々な大会にてその姿を見られるようになっただけは無く、自らがSDガンダムを操るというファイターなども現れた。当然、子供用の遊び相手としても非常に人気でSDガンダムだけではなくハロもトイボットとして出るなど非常に人気が出た。

一方事件を引き起こしたカワグチとバイラス。

バイラスはシュミレーターから出てきた所を取り押さえられたが、黒幕とも言うべきカワグチは依然として捕まっておらず現在も逃亡を続けている

宇宙エレベーター開発に携わった企業が宇宙エレベーターを使い引き起こした事件で各地では、安全性の問題等が問われるだけでなくサイバーコーポレーションは社会的にバッシングされ、遂には倒産するなどいいことだらけではないようだ。

少しずつ未来へ向けて変わりゆく世界、そんな中1人の少年は今日もガンプラバトルをしに、ゲームセンターへ向かう

??? 「レイナさん！ おはようございます！」

レイナ「おはよう、レイ君！」

髪型をポニーテールにしている茶髪の髪の女性　レイナと呼ばれた女性はレイと呼んだ少年へと挨拶を返した

レイナ「あれ？今日はタツキ君は来てないのかな？」

レイ「あー…　後で追いつく!!　とか言ってたけど何だか色々準備で大変そうなんだ…」

レイナ「そう言えばレイ君もタツキ君も明後日から高校生だもんね…　レイ君は準備しなくて大丈夫なの？」

レイ「俺は大体終わってるし！　まあきつと後から来ると言うけど…」

レイナ「そう言えば今日はどうしたの？シユミレーター？　それともガンプラでも買う？」

レイナがレジの担当をしているこの店、ヒグチホビーパークはゲームセンターと模型屋の2つが一つになっている

土日は学生等で溢れかえる位の人が来る程には盛況している様だ。

レイ「今日はシユミレーターでタツキとやるんだ！　今空いてるかなと思ってレイナさんに聞こうと思って！」

レイナ「えーとちよつと待っててね…　うん！今はまだ空いてるよ！」

レイ「ありがとう！タツキが来たら先にやってるって言つといて！」

レイはそう言い残すとシユミレーターへと走り出した

.....

レイ「あつたあつた！」

レイはシユミレーターの前へと到着し、ポケットから財布を取り出す

ガンプラバトルを行うシユミレーターは五つ程横に並んでおりレイはその中の一番左端のシユミレーターへと入って行く

レイ「それじゃあ、始めようか！」

レイは背負っていた鞆へと手を入れて自分のガンプラを取り出す

レイ「行こう、ジムコマンド！」

レイは取り出したジムコマンドをスキャンするとシユミレーター

内はコックピットへと変わり、目の前の画面はジムコマンドの頭部の視点へと変わる

レイ「よし！ ジムコマンド レイ、行くぜ！」

射出されたジムコマンドはステージへ目掛けて速度を上げて飛び出していく

.....

レイ「来た...！」

ステージへと到着したレイを待っていたのはザクⅡ3機だ

レイ「来るぞ... ザクマシンガンの攻撃が！」

レイの言葉の通り、3機の内1機はレイのジムコマンドへと向けてマシンガンでの先制攻撃を始めた

レイ「簡単には... やられない！」

ザクⅡのマシンガン攻撃を左手に付けられたシールドで防いだレイは仕返しとばかりにビームライフルでザクマシンガンへと数発撃ち放つと、ビームライフルの弾はザクマシンガンへと命中して爆発した

レイ「よし！まずは1機目を落とす！」

ビームサーベルへと持ち替えたジムコマンドは武器を失ったザクⅡを真っ二つに切り裂いた

その背後では2機目のザクⅡがバズーカを構えてレイのジムコマンドを狙っている

?? 「今...！」

何処かから放たれた一撃はレイを狙っていたザクⅡの胴を貫き、レイの少し後ろで2機目のザクⅡが撃破された

レイ「な...！」

驚いたレイは後ろを振り返るとそこにはハイパーメガランチャーを構えたライトニングガンダムが佇む

レイ「タツキ！」

タツキ「ごめん！遅れた！ ってレイ、来てるぞ！」

レイの注意がタツキへと向かっている隙を付いて、残された1機のザクⅡはジムコマンドへとビームアックス片手に襲いかかる

レイ「腹部がガラ空きだ！」

振り返ると同時にビームサーベルを左斜め下から振り、ザクIIを真つ二つにしたレイ

トドメと言わんばかりに、真つ二つにした上半身の部分へとビームサーベルを突き刺すとザクIIは完全に機能を停止した

.....

レイ「すげえ...！ライトニングガンダムじゃん！」

タツキ「俺はまだまだこつから改造するつもりだけど、レイはずつとそのジムコマンドでやるのか？」

レイのジムコマンドは外見は特に弄っている訳でもカラーを変えているわけでも無い

唯一変わっている所と言えば、シールドがストライクの対ビームシールドの所な位だろうか

レイ「うーん... この機体は小学生の頃から使ってるしなあ...

それに... 強くなるうと思つた事のきっかけの人がくれた物でもあるから...」

レイはジムコマンドに付いているシールドを見つめそう呟いた

レイの脳裏にはあの時のユウキとのやり取りが頭に浮かぶ

レイ「いつかあの人みたいに...」

タツキ「折角レイも上手くなつたんだから色々な機体使つてみたらいいのに... シールドはその機体に付けたら良いし」

レイ「それもそうだな... よし、分かつた！ 俺新しい機体作るよ！ 折角ガンプラバトルのチームがある学校に行くんだ！新しい機体で新しい生活を！」

タツキ「よーし！それならレイナさんのところへ行こうぜ！ うー

ん、レイに何が合うかな... ダブルオー？ ストライクガンダ

ム...？ エクシア...？ あー思い付かねえ...」

レイ「まあそれは行って見て決めるよ」

レイとタツキはゲームセンターから再びレイナが居た場所へと戻っていく

.....

レイ「うーん… 色々あるんだな…」

レイはズラつと並ぶガンプラの箱を見つめて考える

レイ「F91… バルバトス… V2ガンダムもいいな…

あつ！アメイジングエクシア！」

レイは店中を歩き回り自分に会いそうな機体を探し求める

タツキ「レイー？これなんかどうだい？」

タツキはガンプラの箱を持ちレイへと見せる

レイ「AGE2ノーマル… これだ… 俺これ買うよ！ レイナ

さん！これ下さい！」

レイナ「はいはい！ それじゃあAGE2ノーマルね！ここで作るならフリースペースでつくってね！」

商品を受け取ったレイは早速フリースペースへと向かうとAGE2ノーマルの組み立てへと入った

……………

レイ「出来た…！ AGE2ノーマル！」

タツキ「やつぱりかつこいいなあ… AGE2…！」

レイナ「おー！上手く出来たね！このまま戦うの？」

レイ「ううん、少し色変えたりしてみるよ！」

タツキ「俺も帰ってライジングガンダム改造しなきゃな！」

レイ「それじゃあ今日はこの辺でお開きにしようか」

タツキ「そうだな、それじゃあ俺のライトニングガンダムの進化見せてやるからな！ じゃあな！」

タツキはレイにそう言うのと店を出て帰っていく

レイ「それじゃあ俺も、レイナさんフリースペース貸してくれてあ

りがと！ じゃあ！」

レイナ「気をつけてねー！」

レイも店から出た後、近くのテレビはニュースを映す

キャスター「次のニュースです、今回これで7件目となったガンプラバトルの誤作動問題、ガンプラバトルをシュミレーターで行っている際にシステムが異常を起こして暴走する事態となる問題となっております、現在も原因究明の為の調査が行われています。これまでに起

こつた7件の関連として一部地域を中心として広がっている事が指摘されている事から専門家からはガン普拉バトルをする事により感染し、広がっているのではないかという指摘が上がっております」

レイナ「勝手に暴走… 嫌な話ね ところで起きないといいのだけど…」

レイナはテレビを消すと商品棚の仕分け作業へと戻っていった

……………

モブA「おい！どうした！」

モブB「だめだ…！操作が効かねえ！」

モブBのジnkスは急に立ち止まる

モブC「何があつたんだ？」

モブCのジムIIが様子を確認する為に近づいたその時

モブC「なっ…！」

操作が効かなくなったモブBのジnkスはモブCのジムIIの頭部を掴むと、地面へと叩きつける

モブA「おい！何やってんだお前！」

モブB「俺がやったんじゃない…！こいつが勝手に！」

ジnkスは何度もモブCのジムIIを叩きつけ、遂には頭をもいでそのまま踏みつけて破壊した

モブA「この…！」

モブAのドムはジnkスを止めるためにビームサーベルを構えて戦闘態勢に入る

その背後からは頭を失ったジムIIがモブAのドムを背後から物凄い力で掴みかかる

モブC「どういう事だ！俺は動かしてないぞ！」

モブA「何が起こっているんだ…！まさか…！」

モブAが思い当たった瞬間、モブBの手元から離れたジnkスはモブAのドムの胴へと腕で貫き破壊すると再び機能を停止した

……………

レイ「出来た… 俺のAGE2！」

レイはそう言うと同時に眠りに落ちた
レイ「zzzz… 俺もいつか… あの舞台に…」
そんな寝言をいいながらレイの意識は深く落ちていった

続く

ガンダムブレイカーズACE 第2話 部長の焦燥

レイ「ん… 今何時だ…？」

レイは眠い目を擦りながら時計を見て現在の時刻を確認する
時計の短針は7時を指している

レイ「そうだった… こいつを試しに行くんだった！」

レイは机の上に置いてあるガンプラを見つめる

レイ「俺のAGE2…！ うっひよー！かっこいいぜ！」

……………

ガンダムAGE2 レイ専用機

頭 AGE2

胴 AGE2

腕 AGE2

足 AGE2

バックパック ビルドストライク

武器 ビームサーベル ハイパードツズライフル

シールド 対ビームシールド（ストライク）

カラーはレイの好きな赤色を基調としている（文字で現すなら青い部分を赤色に）

ビルドストライクのバックパックのウイング部分には二つの太陽炉が付属しており、ここぞと言う場面でトランザムが使用可能

また、ハイパードツズライフルはチャージショットではなく照射が出来るようになっている

……………

レイ「おはようございまーす！レイナさん！」

レイナ「おはよう、レイ君！ 今日シユミレーターかな？ 今一つ使ってるけど四つ空いてるよ！」

レイ「ありがと、レイナさん！」

レイナ「どーいたしましたして、そうだ！あれからAGE2は改造したりしたのかな？」

レイ「こんな感じには…」

レイナ「おー！ やっぱりカラーを変えたりするだけでもオリジナ
ル感が出るからね！」

レイ「それじゃあ、ちょっと試してくるよ」

レイナ「はい、タツキ君きたらシユミレーターの所に居るって一
応伝えとくね！」

レイ「ありがとう！ じゃあ」

レイは礼を言うと、シユミレーターの方へと歩いて行った

.....

シユミレーターでは一足先に他のプレイヤーが戦闘を行っていた

???「ここまで追ってくるか...！」

廃墟と化した街に立ち並ぶ崩れたビルの上には黒色のグフカスタ
ムが立ち、その周りにはグフカスタムを囲うように2機の陸戦型ガン
ダムがライフルを構えていた

カズヤ「創介学園のエースとも言われたお前が... 今は無様だ
な...」

陸戦型ガンダムの間から緑のマットカラーのミリタリー迷彩柄の
ガンダムEz-8が現れる

???「陸宗高校ガンプラチームが俺に何の用だ...」

カズヤ「挨拶がてら会いに来たんだよ、あれから部員は集まったか
？」

???「...」

カズヤ「その反応... 集まってない様だな 春の学校対抗戦はど
うするつもりだ」

???「俺1人でもやれるさ...」

カズヤ「ハツ、幾らお前でも無理だな！」

???「何だと...！」

黒色のグフカスタムはヒートサーベルを強く握ると、カズヤのガン
ダムEz-8へと襲いかかる

カズヤ「流星は創介学園のエース、速い... だが、」

???「くっ...！」

カズヤ「こっちは3人だ」

グフカスタムを2機の陸戦型ガンダムがビームサーベルで抑える
カズヤ「お前を倒すのは大会までとつときたい所だが・・・」

EZ-8は陸戦型ガンダムにより抑えられるグフカスタムへと近づくと・・・

カズヤ「そもそも俺たちの所まで来れないかもな、1人じゃな！」
ビームサーベルの先端をグフカスタムの首元へと近づけた

カズヤ「まずはメンバーを集めて来ない限り予選落ちかもな、カズマ」

カズマ「・・・っ！」

カズヤの言う通り、まずはメンバーを集めない限りどうにもならないという事は分かっている

しかし、ガンプラバトルをやっているとんでも部員として、そして学校代表として戦うのはとても荷が重いようで誰も参加したから
ない

カズヤ「まあいい、春の大会楽しみにしてるぜ お前が参加するなら
な、いや参加出来るかなあー？」

カズマ「お前・・・！」

カズヤ「おいおい、今は3対1だけ？ 反抗するには適わないが
前としてはフェアじゃないだろ？ いいから大人しくしとけて」

カズマ「くそ・・・！」

.....

レイ「さーて！それじゃあ行こうか！」

レイは鞆からガンプラを出すと機体をスキャンする

シュミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。 プレイヤー

ネーム：アイカワ・レイ」

レイ「ジムコマンド以外で戦うのは初めてだなあ・・・！ワクワクする！」

シュミレーターシステム「スタンバイ完了。」

レイ「よし！ ガンダムAGE2 レイ、行くよ！」

レイの掛け声と共にAGE2は射出された

レイ「よつと……」

射出され無事に着地したレイは辺りを見渡す

レイ「何も居ないなあ……　なんて言うか、不自然な程静かだ……」
周囲を見渡しても、映るのは崩れたビルやボロボロになった車両の
み

まさに廃墟と化した街。

道路は戦いの後を現すかのようにとてもじゃないがまっすぐな道
とは言えないだけでなく、大きな穴が空いている箇所がいくつか見え
る

レイ「レーダーで周りを見るか……」

レイはコックピットでレーダーの映る範囲を拡大する
すると、

レイ「近くに機体が4機……　配置を見るに3対1の状態かな……
？」

1機は3機から離れながら戦っているのはレーダーの反応を見る
と一目瞭然

まさに3対1の構図が出来上がっている

レイ「行ってみよう……！　必要なら手助けを！」

レイのAGE2は飛行形態へと変形すると4機の元へと向かって
いった

………

カズヤ「鬼ごっこは終わりだ！　行け！」

カズヤの指示に従う様に、陸戦型ガンダムはランチャーを構えると
逃げ続けるカズマのグフカスタムへとミサイルを放つ

カズマ「当たる前に……破壊する！」

グフカスタムは左腕に付けられたガトリングシールドを構えると、
自分へ向けて飛んでくる3発のミサイルへとガトリングを撃ち放つ
ガトリングの弾が直撃したミサイルは爆発し残りの2発も誘爆す
ると、爆煙が辺りを覆う

カズヤ「狼狽えるな！進め！」

Ez-8は2機の陸戦型ガンダムへと指示すると、2機は応えるか

のように爆煙の中へと突っ込んで行く

カズマ「来るか……！」

煙で前が良く見えない中、とりあえず当たってくれの思いで、グフカスタムはガトリングを辺りへと乱射する

モブA「背後はもらったア！」

煙の中からグフカスタムの背後を取るように、1機の陸戦型ガンダムが飛び出す

カズマ「簡単には……！」

ガトリングによる乱射をやめたカズマは振り返ると同時にヒートサーベルで斜め下から切り上げて、陸戦型ガンダムのビームサーベルをもつ腕を切り落とすと、そのままヒートサーベルを反転させてクナイの様に持つと、頭を切り落とした

モブA「しまった、このままでは前が……！」

カズヤ「行くぞ！Ez-8コマンダー！」

モブAへとトドメをさせまいと、カズヤのEz-8コマンダーは飛び出し、タツクルを喰らわせる

カズマ「チツ……！」

タツクルを喰らい、体勢を崩したグフカスタムの際をカズヤは見逃さない

カズヤ「良くも仲間の腕を……！」

ビームサーベルへと持ち替えたEz-8コマンダーは、ビームサーベルで同じようにグフカスタムの右腕を切り落とすと同時に蹴りを喰らわせる

カズマ「くっ……」

モブB「……！ 隊長！こちらに急速に近づいて来る敵機確認！」

モブA「ぐわああああ!!!」

突如、モブAの陸戦型ガンダムは断末魔と共に爆発する

カズヤ「おい！ どうした！」

モブB「隊長！ 上です！」

レイ「余所見は良くないぜ……！」

モブAの機体を貫いたのはレイのAGE2のハイパードブスライ

フルだ

カズマ「後ろがガラ空きだ…！」

カズヤ「しまっ…」

カズマ「EXアクション、クロススラッシュ！」

カズマのグフカスタムは衝撃破を発生させて、E Z―8 コマンダーへと一撃を叩き込む

カズマ「撃墜までは行かなかったか…！」

カズヤ「助けられたなお前… まあいい春の学校別大会で決着を付けようじゃないか…！」

レイ「おい！何処に行くんだよ！」

レイの言葉を見無視する様に、カズヤのE Z―8と陸戦型ガンダムはその場から姿を消した

カズマ「君には助けられたな、礼を言うよ ありがとう」

レイ「いやー、何か3対1になってたからピンチかなーって まあ

良かったですよ。 それより、春の学校別大会って何ですか？」

カズマ「ああ… 各高校のガンプラ部が集まって行う大会があるんだ、この春に。 しかし恥ずかしながら我が創介学園はメンバーが俺しかいなくてね…」

レイ「創介学園… もしかして僕の先輩に当たるのかな…」

カズマ「な！君は創介学園の生徒か!? なら話が早い！ 力貸してくれ、我が創介学園ガンプラチームに！」

続く

ガンダムブレイカーズACE 第3話 創介学園ガ
ンプラチーム

レイ「ここが創介学園……！」

タツキ「レイー、おまたせ！」

レイ「行こうぜタツキ！入学式始まるぞ！」

2人は走って自分の教室へと向かっていった

……

司会「それでは、我が創介学園生徒会長 ユウキ・カズマから新入
生へ挨拶を。」

司会に促され、カズマは壇上へと上がり新入生を見つめるとスピー
チを始める

カズマ「私が、この創介学園生徒会長 ユウキ・カズマだ。この
学校で過ごす3年間を是非とも実りあるものにして欲しいと思っ
ている それから……」

カズマは長々と壇上で新入生へと歓迎の言葉を語り続ける

レイ「あの人……生徒会長だったのか……」

タツキ「レイ知ってるの？（ヒソヒソ）」

レイ「この前……3機に囲まれてた所を助けたんだよ（ヒソヒソ）」
カズマ「以上で私からの新入生への歓迎の言葉は終わりだ。」
新入生からの拍手により、カズマの言葉を終わった

……

カズマ「確かレイと言ったな？ 答えは出してくれたかい？」

下校しようとするレイとタツキの背後からカズマは声をかける

レイ「俺は構わないですよ」

タツキ「答え……？」

レイ「あー、タツキは居なかったなそーいや」

カズマ「それなら私から説明しよう、単純な話だ 創介学園ガン
プラ部に力を貸して欲しいんだ。頼む」

タツキ「ここガンプラ部なんてあるんですか……？」

カズマ「ここだけではない、今ほどの高校にも殆どあるさ」
レイ「でも何で俺達に？ 部員はいないんですか？」

カズマ「いた。前まではね……」

カズマの脳裏には過去の出来事が頭をよぎる

……

タケシ「うわああああ!!!」

カズマ「タケシ!」

創介学園ガンプラチームのメンバー、タケシのザクIIは何かにか
き飛ばされ、身動きが取れない状態になっていた

???「あの創介学園もこの程度か…… 10年に1度の天才ファイ
ターとやらも地に落ちたな……」

カズマ「……!」

???「カズマ、俺達のガンプラチームに來い」

カズマ「断る…… 俺に構うなガイ……!」

ガイ「ほう…… シュウ、やれ。」

ガイの指示に従う様にシュウと呼ばれた少年はドライセンをベ
スに組んだ機体、ドライセンDでタケシのザクの胴体を踏みつける
カズマ「やめろおおおお!!!」

怒りを堪えられなくなったカズマのグフカスタムは飛び出してタ
ケシのザクIIを踏みつけるドライセンDへとヒートサーベルを投
げつける

カアン! という音が辺りへと響き渡る

カズマ「そんな……」

カズマの投げたヒートサーベルは

ドライセンDではなく、ガイに盾にされたザクIIへと突き刺さつ
ていた

ガイ「ギャハハハハハ!!! どこ投げてんだ!」

カズマ「お前……！」

ガイ「おいおい……天才ファイター様がお怒りだぜ…… まあいい、帰るぞシユウ、カオル」

3機のドライセンDは姿を消し、完全に機能停止したザクイーは倒れ込んだ

カズマ「タケシ！ おい！」

タケシ「ごめん…… カズマ、俺もう辞めるよ……」

カズマ「お前何言ってる……」

タケシ「またあんな思いするのはごめんだ…… お前には悪いけど……」

カズマ「でも約束しただろ…… 俺達でジャパンカップ優勝するって……」

タケシ「お前は強いし…… 俺がいなくてもきつとやってけるよ…… だから……」

そう言い残し、タケシのザクも姿を消した

カズマ「諦めたくない…… 俺は必ずあの舞台へ立ちたい……！」

あれからカズマは部員1人となりながらも必死にメンバーを集めた

しかし、皆すぐに辞めていってしまう

自己嫌悪に陥る日もあった。 それでも諦めたくない……

その思いでめげずにチームを集めようと努力を続けた

……

カズマ「まあ…… 皆家庭の事情とか色々あってな……

辞めていってしまったんだ……」

レイ「そうなんですか……」

カズマ「それより、君も手を貸してくれるのかい？」

タツキ「俺ですか？ うーん…… 少しでも考えさせて下さい……」

カズマ「まあ無理には言わない、気が向いたら俺に声をかけてくれ。大体は生徒会室にいるさ」

タツキ「分かりました...」

カズマはタツキの返答を聞くとニコリと笑いながらその場を去っていった

カズマ「今年が最後のチャンスだ... まずは学校別対抗大会...

それを越えなくては...！」

.....

レイ「こんにちはー！」

レイナ「あら？レイ君1人だけ？」

レイ「うん 何かタツキはやる事あるからって... 後で追いつく

とは言ってたけど...」

レイナ「最近2人で来るの見かけないから... 喧嘩でもしてるのか
と思っただわ」

レイ「喧嘩はしてないけど...」

テレビのキャスター「次のニュースです。依然として被害が増えて
いるガン普拉バトルでの暴走事件、遂にトイボットまでにも影響が及
んだ様です。」

レイナ「あー、まだ被害減ってないのね...」

レイ「あー、これ最近たまに聞くなー ここではまだ起きてないよ
ね？」

レイナ「うーん... ゲームセンターの方は私の管轄外だから分か
らないわね... 私はあくまでもこの模型屋の管理任されてるか
ら...」

レイ「そうだ！生徒会長待たせてるんだった！ レイナさん！シユ
ミレーター行ってくるね！」

レイナ「変なウイルスが有ったら伝えてね！」

レイ「はい！」

レイは走ってシユミレーターの方へと向かっていった
.....

レイ「すみません！遅れました！」

カズマ「別に構わないさ、それより君の友達は？」

レイ「何かやる事あるから先にやってて…」

カズマ「そうか、まあいい先に色々実戦を行いながら教えよう。

さあシユミレーターに入って」

促されるままレイもシユミレーターに入っていく

レイ「俺のAGE2！スキャン！」

シユミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。プレイヤー

ネーム アイザワ・レイ」

コックピットの画面はAGE2の目線を映す

カズマ「今回はフリーバトルだ、他のプレイヤーが乱入してくる可能性もある、十分に注意してくれ！」

レイ「了解！」

カズマ「グフカスタム・改 カズマ、出るぞ」

レイ「AGE2カスタム レイ、行くぜ！」

2機は射出され、飛んで行く

……………

レイ「学校別対抗大会って何するんです？」

カズマ「全国の高校のガンプラ部の頂点を決める大会だ 俺が1年生の時に始まったんだ」

レイ「へー… やっぱり優勝したら色々貰えるんですか!? 純金

で出来たガンダムとか！」

ハハ… といった顔でカズマは笑う

カズマ「いや… 純金のガンダムなどはないが、一番でかいものとしてはジャパンカップのシード枠だな。」

レイ「シード枠…!? つまり優勝したらジャパンカップにいきなり出れるって事…! 俺、絶対に優勝したいです！」

カズマ「君もジャパンカップに何か目指すものがあるのか？」

レイ「俺… 憧れのチームがあるんです… 彩渡商店街ガンプラチーム、俺もいつかあのチームみたいになりたいってタツキと2人で…!」

カズマ「…!」

レイの夢を聞き、カズマはタケシとの誓いが頭をよぎる

カズマ「なら…絶対には勝とうな」

レイ「はい！」

カズマ「つと、どうやら話ばかりしていられる様じゃないな」

カズマのグフカスタム・改のモノアイからの映像には3機のジムコマンドが映る

カズマ「まずは君の力を見せてくれ、レイ」

レイ「は、はい！ 行くぞ！AGE2」

レイの言葉に応える様にAGE2の目がキラーンと光ると同時に飛行形態へと移ると、AGE2は急加速でジムコマンドへと突っ込んで行く

レイ「まずは1機を！」

MS態へと姿を変えたAGE2はビームサーベルを引き抜くと、ジムコマンドの胴体へと突き刺した

カズマ「後ろからも来るぞ！」

カズマの言葉の通り、AGE2の背後へとジムコマンドがビームサーベルを突き刺す構えで襲いかかる

レイ「ビルドブースター！」

レイの呼びかけ応える様に凄まじい速さでビルドブースターが駆けつけると同時に、二つの大型ビームキャノンからジムコマンドへ向けてビーム攻撃が放たれ、これを直撃したジムコマンドはそのまま動きを止めた

レイ「よし！ 残り1機！」

最後に1機だけ残されたジムコマンドはAGE2へとビームライフルによる射撃を行おうと構えるが…

レイ「させるか！」

ハイパードツズライフルに持ち替えたAGE2による照射がジムコマンドを飲みこみ、そのまま大破した

レイ「どうです！ 俺も中々やるもんでしょ!？」

カズマ「確かにこれなら… レイ！後ろを見ろ！」

レイ「へ…？」

レイが振り返ると同時に、倒した筈のジムコマンドが起き上がって

おり、倒す前とは比べ物にならないスピードでAGE2へと距離を詰める

レイ「なんだこいつ…！まさか！」

レイの脳裏には、さつきレイナと見たニュースが頭に浮かぶ

レイ「こいつ… あのウイルスの…！」

目が赤く光るジムコマンドは倒れていたジムコマンドに突き刺さっていたビームサーベルを引き抜くと、AGE2へと襲いかかる
ビームサーベルの一撃はAGE2に突き刺さる…

前に何処からの攻撃でビームサーベルは弾け飛ぶ

レイ「な…!?!」

タツキ「ごめん、レイ！遅れた！」

両手にハンドガンを握ったライトニングガンダムをベースにした機体がジムコマンドからビームサーベルを離れた様だ

レイ「タツキ！それ…」

タツキ「これが俺のガンプラ、ライトニングストライクガンダム！」

.....

ライトニングストライクガンダム

頭 ライトニングガンダム

胴 ストライクフリーダムガンダム

腕 ライトニングガンダム

脚 ストライクノワール

バックパック フォースインパルスガンダム

シールド デイバイダー（ガンダムXデイバイダー）

武器 ビームサーベル、ハイパー・メガ・ランチャー

ライトニングガンダムをベースにタツキが組み上げた機体
カラーはライトニングガンダムを意識した配色をしている

.....

タツキ「これがあの暴走機体か…！」

目が赤く光るジムコマンドは標的をAGE2からライトニングス

トライクへと変え、タツキの方へと凄まじいスピードで向かって行く
タツキ「俺に近づくな！」

再びストライクノワールの脚から2丁のライフルを抜くと、向かってくるジムコマンドへ向けて全力で放つ

次々と2丁のライフルによる射撃を受けたジムコマンドの動きは鈍り出し、タツキはその隙を突いて機体を一気に前に出した

タツキ「EXアクション！ エクス… カリバー!!!」

エクスカリバーを何処からか出したライトニングストライクは動き野鈍ったジムコマンドへ向けて全力の力を両手に込め渾身の一撃を叩き込み、ジムコマンドは今度こそ動きを止めた

……………

タツキ「カズマさん、俺も手を貸します。 創介学園ガンプラチームに」

シュミレーターから出たタツキは先に出ていたカズマへとそう言った

カズマ「本当か…!?」

タツキ「はい、俺もレイと誓ったから…！」

カズマ「本当に、ありがたい… よし、創介学園ガンプラチーム再出発だ！」

タツキ&レイ「おう！」

こうして創介学園ガンプラチームによる春の学校別対抗大会へ向けた準備は進んでいく

続く

ガンダムブレイカーズACE 第4話 再起の商店街

レイナ「そう… 遂にうちでもあのウイルスがね…」

レイからの報告を聞いたレイナは溜息を付きながらそう呟いた。

レイ「一体何処から… と言うか、NPC機体が暴走するなんて

俺聞いたことないよ」

タツキ「俺も」

カズマ「考えられるのはウイルスが進化したという事だな」

レイ「ウイルスが… 進化…」

レイナ「一応お父さんに言つといたから色々対策してるとは思っけど… また何か有つたら言つて頂戴ね？」

レイ&タツキ「親父さん帰ってきてるの!?!」

レイナの言葉にレイとタツキは反応する

カズマ「何だ、そんなに有名な人なのか…?」

レイ「レイナさんのお父さんはガンダムグレートフロントであったバトルライブーGのファイナリストなんです!」

カズマ「あのバトルライブーGの…!?!」

カズマはバトルライブーGと言う言葉に反応する

バトルライブーG、東京ダイバーシティで行われたガンダムグレートフロントのイベントの中でも特に大人気だったガン普拉バトルシミュレーションの事だ

当然、ファイターを志す者なら1度は耳にした事があるイベントでありカズマも過去に聞いたことはあった

タツキ「親父さんには昔色々聞かせてもらったんです! 他の仲間と協力してグラントマスターガンダムを倒した話や色んなガンダムのPGを倒した事… 俺達はその話を聞いて何時かは俺達も…! って!」

カズマ「成程な、君達の強くなろうと思ったきっかけでもあるという事か」

レイ「はい！」

カズマ「(強くなるろうと思っただきっかけ...)」

再びカズマの脳裏にあの時の事が過ぎる

カズマ「...っ！」

レイ「大丈夫ですか？何だか顔色が...」

顔を青ざめるカズマに対して、心配したレイが声をかける

カズマ「大丈夫だ... 生徒会長は何かと忙しくて、ね」

タツキ「椅子ありますよ...？」

カズマ「すまない...」

タツキに差し出された椅子へとカズマは腰をかける

カズマ「そうだ、君達には言っただけな。4日後に他校と練習

試合をしようと思っただけ」

タツキ「練習試合...？ そんな事までやるんですか？」

カズマ「一応部活だ、それに一ヶ月後に大会もある。君達はまだ対

人の経験が浅いだろうし、この練習を有意義なものにして欲しいと

思っているんだ」

レイ「分かりました...！ 俺頑張ります！」

カズマ「うん」

カズマはやる気に満ち溢れるレイを見てニコリと笑った

カズマ「(カズマ... 俺はお前を今度こそ...！)」

.....

「よー坊主共！」

店の奥から元気の良い声で3人へと話しかける男性が現れた

レイ&タツキ「親父さん！」

カズマ「この人が... ファイナリスト...」

??「お！お前は初めて見る子だな！」

2人に親父さんと呼ばれた男性はカズマへと話しかけた

カズマ「カズマです。彼らと同じ高校で生徒会長をしています」

ケンイチ「ほおーカズマか！ 俺はケンイチって言うんだ、宜しく

な！」

カズマ「ケンイチ... あっ...！ 貴方が最初の覚醒システムの

！」

ケンイチ「おー知ってたのか！ そうだ、この俺が一番最初の覚醒者だ！」

覚醒……

ユウキやレン、リュウジやミスターガンプラも使用することが出来たこのシステム

最初に使用可能にしたのはこの男、ケンイチだった

ケンイチ「初めてならなんだ、俺の昔話でもしてやろうか？」

レイ「聴きたい！ 親父さんの昔話また聴きたい！」

タツキ「俺も！ 俺も！」

カズマ「僕も気になります…… 貴方程の有名なファイターの話

は……！」

ケンイチ「よし来た！ まず驚いたのはシャンブロが現れた時だな！

アイツには……」

ケンイチは自分が過去に体験したバトルライブーGでの出来事を話し始めた

……

ケンイチ「フルアーマーダイテツ、アイツの機体は中々かつこよくてな？ ヘビーアームズのカスタム機を見た時は痺れたぜ…… っと、もうこんな時間か」

模型屋の壁に掛けてある時計の短針は6時を指していた

ケンイチ「模型屋の方はそろそろ閉めるし話はここまでだ、さっさと帰って、課題もしろよ？」

レイ「えー……」

タツキ「まだ聴きたいー……」

カズマ「こら2人共、帰るぞ」

ケンイチ「また暇な時に聞かせてやるからよー！」

レイ「そんなこと言って、いつつも聴きに行ったら旅に出てるとかじゃん！」

ケンイチ「いいか？ 俺はファイターを引退した訳じゃない…… 何かお前らにも見せてやるよ 熟練の技をな！」

タツキ「絶対だぜ!? 約束な!」

ケンイチ「本当に強いファイターは嘘はつかねえよ、またな!」

カズマ「お邪魔しました」

ケンイチ「カズマとか言ったな、あの2人を頼んだぜ!」

ケンイチは手をグツドのポーズにしてカズマの方へと向けた

カズマ「はい!」

元気よく返事をしたカズマへとケンイチはニコニコした顔で頷いた

.....

く彩渡商店街く

???「ここも賑やかになったなー!」

シャツター街と化していたかつての光景とは違うように、多くの人達が彩渡商店街での買い物を楽しんでいた

居酒屋 肉屋 模型屋しか無かった彩渡商店街は、ユウキ ミサによる彩渡商店街ガンプラチームによる宣伝もあり、八百屋や電気屋などが再び店を開けるなどと、2人が目指していた彩渡商店街の復興は無事に成功した様だ

???「会うのは三年振りか...」

白衣を着た男は模型屋を目指して歩みを進める

???「すまない、失礼するぞ」

「あ!!!久しぶり!!! カドマツさん!」

カドマツ「お前も変わったな、ミサ」

ミサ「そんなカドマツさんは変わらないね」

カドマツ「俺ももういい歳だからな」

白衣の男、もといカドマツが訪ねたのは模型屋

そこでは模型屋のロゴが入ったエプロンをしているミサの姿があった

胸の方は... 相変わらず成長していないようだ...

カドマツ「ユウキは元気か? 暫く連絡だけしか取ってないが...」

ミサ「ユウキ君は... 丁度昨日 「ミサ!ちよつと大会出てくる

!店は頼んだ!」って言ってどっか行っちゃった... どこ行くか位

は言ってくれてもいいのに……」

ミサは似ていないユウキの真似をしながらブーブー文句言う

カドマツ「弱ったな…… あいつの力はどうしても借りときたかったが……」

ミサ「何それ！私だけじゃ力不足って訳!?!」

カドマツ「そうじゃねえよ……！ 戦力が多いほうがいいだろ？」

そっだ、ミライとマモルも呼んどくか……」

ミサ「ねえ、いきなり尋ねるのはいいけど要件聞いてないんだけど……！」

カドマツ「そうだった！ 頼む…… もう1度俺に力を貸してく

れ……！」

……

レイ「タツキ！後ろの敵は任せた！」

AGE2を操るレイは目の前のドムへとハイパードツズライフルで射撃を行いながら牽制する

タツキ「OK！ 行こうぜ！ライトニングストライク！」

タツキのライトニングストライクは腰から2丁のライフルを抜くと、レイの背後に居たゲルググへと数発 2丁のライフルから射撃を行う

放たれたライフルの一撃はゲルググの頭と胴を貫き、ゲルググは爆発する

レイ「サンキュー！タツキ！」

タツキ「レイ！来るぞ！」

タツキの警告通り、AGE2へと目掛けてドムが2機 ビームサーベルを片手に飛びかかる

レイ「今日こそこれを使ってやるぜ……！ トランザム！」

AGE2はバックパックのビルドブースターの羽に付けられた太陽炉からGN粒子を出すと、AGE2を包み込む

トランザムしたAGE2は、先ほどとは比べ物にならない素早い動きで2機のドムの攻撃を避けると

レイ「今度はこっちの番だ！」

そう言い、ビームサーベルを引き抜いてドムへと突き刺す

筈だった

レイ「なっ……！」

突如、右側の太陽炉が爆発したAGE2はトランザムを解除され、右翼の爆発の影響で体勢を崩して地面へと滑り込む

レイ「やば……！」

今度こそドムの攻撃を避けられないレイは目を閉じて攻撃を受け入れる他無かった

タツキ「大丈夫か!？」

ドム2機の攻撃を受け止めたのはタツキのライトニングストライクだった

レイ「悪い！」

タツキ「構わねえ！それより立て！」

レイ「ああ！」

何とか立ち上がったAGE2は攻撃を受け止めるライトニングストライクを飛び越えるとドムの背後へと回り、ビームサーベルをドムの胴体へと突き刺す

タツキ「こいつは俺が！」

残された1機のドムは、ライトニングストライクがビームサーベルを弾き返してガラ空きとなった胴へと、2丁のライフルを至近距離で放ち、怯んだ隙についてビームサーベルへと持ち替えて上半身と下半身を切り離れた

………

レイ「……っ！」

シュミレーターから出てきたレイはAGE2を握りしめる

タツキ「おちこむなって！今日はちよつと調子が悪かったただけだつて！」

レイ「こんなんじゃ……」

足を引つ張るかも……」

タツキ「：：」

タツキも遂に何も言えなくなってしまふ

レイ「トランザム、必ず使いこなしてみせる。：：！
練習試合までに！」

タツキ「ああ。：：！ やってやろうぜ！」

タツキは右手を上げる

レイ「おう！」

レイも応えるように右手を上げて、ハイタッチした

練習試合まで 残り3日

G ガンダムブレイカーズACE 第5話 迫り来るP

時計は夜の10時を指す中、カズマは自分の部屋でスマホを使用し連絡をしていた

カズマ「・・・もしもし、俺だ」

???「・・・お前から電話だなんて珍しいな、何の用だ？」

カズマ「練習試合、お前達ガン普拉バトル部とやらせてくれ」

???「何度も言うが1人じゃ無理だつて・・・」

カズマ「俺1人じゃない・・・俺の仲間達とだ」

そう語るカズマの目は決意を表していた

.....

く創介学園く

カズマ「という訳だ、練習試合は陸宗高校のガン普拉バトル部と行うぞ」

タツキ「陸宗高校：・・・？」

カズマ「去年の学校別対抗で準優勝したチームだ。お前達はこれが初の対人になるだろうが気楽にやって欲しい」

レイ「初のバトルが準優勝のチーム：・・・！」

カズマ「確かにいきなり感じがするが、いぎ大会にできれば去年の優勝高校といきなり当たる可能性もある。」

タツキ「確かに：・・・」

カズマ「練習試合は明後日だ、それまでに各自調整をしておいてくれ。それじゃ俺は仕事があるから失礼するよ」

レイ&タツキ「分かりました！」

.....

く陸宗高校く

カズマ「という訳で明後日、創介学園のガン普拉バトル部と練習試合を行うぞ」

テツ「創介学園、ですか？」

カズヤ「ああ、あの天才ファイターと呼ばれた奴がエースをしている高校だ」

ケン「でも、それは昔の話でしょ？ここ2年、創介学園なんて予選落ちじゃないですか・・・本当に天才ファイター何ですか・・・？」

カズヤ「そりやあ部員は1人だからな」

テツ「1人!? 春の学校別対抗戦なんて基本3人で出場するチームが殆どなのに・・・」

カズヤ「本当は2人だったんだが・・・ 昔、大会の前に色々あつてな・・・」

ケン「色々・・・ですか？」

テツ「と言うか部長、その創介学園のエースについて詳しいですよね。」

カズヤ「そりやそうだ、何てつたつてアイツは双子の弟だからな」
カズヤは お前達何言ってるんだ？ と言った表情でとんでもない事言い放った

テツ&ケン「ええええええええ!!?????!!」

2人の声は、陸宗高校の全体!!と響き渡った

.....

〈模型屋〉

ケンイチ「ほーん、それで特訓して欲しいって事で俺の元に来た訳か」

レイ「親父さん、一応ファイナリスト何だろ！俺達の特訓相手になつてよ！」

ケンイチ「うーん・・・」

タツキ「強くないと行けないんだよ！俺達！」

ケンイチ「・・・よし！ そんなに言うんならやってやる！」

レイ「やったー！」

タツキ「流石親父さん!!」

ケンイチ「ただし！」

レイ&タツキ「？」

ケンイチ「俺もまだ現役のファイターだ。手は一切抜かん！そこん

とこ意識して戦えよ！」

レイ「望む所だ！」

タツキ「俺達だって… 戦う男、ファイターだ！」

ケンイチ「という訳でレイナ、店番頼むわ！」

レイナ「ちよつとー!!」

.....

レイ「俺のAGE2！スキャン！」

シュミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。 プレイヤー

ネーム アイザワ・レイ」

タツキ「行くぜ！ ライトニングストライク！」

シュミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。

プレイヤーネーム ミナセ・タツキ」

2人はシュミレーターに自分のガンプラをスキャンし、出撃準備を
行う

レイ「AGE2 レイ、行くぜ！」

タツキ「ライトニングストライク タツキ、出るぜ！」

ケンイチ「お前達にはこれで行かせて貰う！ 行くぞ… ガンダム

!!!
」

3人のガンプラはカタパルトから射出され、出撃した

.....

レイ「よつと… 着地OK！」

タツキ「よつ、俺も着地完了！」

レイ「親父さんの機体… 一体どんなだろう…！」

タツキ「マスターガンダムとかかもな！ … 危ない!!!」

タツキのライトニングストライクはレイのAGE2を押し倒し、突
如飛んできた攻撃から回避した

レイ「ありがとうタツキ…」

タツキ「レイが大丈夫ならいいよ、それより… なんて威力だ…」

2機を目掛けて飛んできた一撃は近くのビル群を貫き、ビルには大
きな穴が空いている

ケンイチ「戦場に足を踏み入れた時点で… 戦いは始まっているぞ

！」

レイ「なんだこの反応……まさか……！」

ケンイチ「そのまさかだ！ お前達に与える最初の関門は、このガンダム PGだ！」

先ほど2機を通り抜けた後、ビルに大穴を開けた攻撃の正体……

それは PG ガンダムによるビームライフルの一撃だった。

レイ「デカイ……デカすぎる……！」

レイとタツキの機体はそれぞれHG

それに対してケンイチの操るガンダムはPG

大きさに関しては、かなりケンイチが有利だ。

ケンイチ「ボーツとしている暇はないぞ！」

ガンダムは再びビームライフルを構えると、射撃の態勢へと移る

レイ「俺が注意を引きつける！タツキは隙について攻撃してくれ！」

タツキ「引きつけるってどうやって!？」

レイ「俺が飛行形態で飛び回る！」

AGE2はMS形態から飛行形態へと姿を変えると、ケンイチのガンダムを誘導する様に飛び回り始めた

ケンイチ「撃ち落としてやる！」

ケンイチはガンダムを操り、目の前を飛び回る蚊を仕留める如くビームライフルで何度も打ち付ける

タツキ「今なら……注意がレイ……！」

タツキのライトニングストライクもビル群の隙間からハイパー・メガ・ランチャーを構え、今か今かと攻撃のタイミングを見計らう

ケンイチ「いい加減……落ちろ！」

痺れを切らしたケンイチは片手でビームサーベルを引き抜くと、目の前を通り過ぎるAGE2へとビームサーベルの一撃を叩き込んだ

レイ「やば……！」

ビームサーベルの一撃は物の見事にAGE2へと直撃し、飛行形態のAGE2は叩き落とされ、ビル群へと次々に突っ込んでいく

AGE2はビルを四つ貫きながら堕ちていくと、遂に五つ目のビル

に突き刺さり止まった

レイ「くそ！くそ！動けない… MS形態に変形!!」

コックピット「その命令を実行出来ません。」

ビルに突っ込んだAGE2は押し潰され、MS形態への変形もままならない。

ケンイチ「鬼ごっこは終わりだ。まずはお前からだレイ！」

AGE2が押し潰されているビルへ向け、ケンイチのガンダムはビームライフルを構える

ガンダムが引き金へと指をかけたその瞬間…

タツキ「今だあ！」

タツキのライトニングストライクから放たれたハイパー・メガ・ラ
ンチャーの一撃はガンダムの右脚関節へと命中すると、その凄まじい
威力によりケンイチのガンダムは膝から崩れ落ち、ビルを薙ぎ倒しな
がら倒れる

タツキ「レイを助けるなら今だ…！」

ライトニングストライクはAGE2を救出すべく、レイが押し潰さ
れているビルへと向かう

ケンイチ「まだだあ!!!」

救出へと向かわせまいと、何とか態勢を立て直したケンイチのPG
ガンダムはライトニングストライクへ向け、渾身のパンチを叩き込
んだ

PGから叩き込まれる一撃はHG機体にとって、当然とんでもない威
力となる

それをモロに喰らってしまったタツキのガンプラは、

凄まじい程に吹き飛ばされるとビルへと叩きつけられ、そのまま身
動きが取れない状態となる

レイ「ビルドブースター!!!」

再びケンイチのガンダムの注意を引くべく、レイはコックピットで
別コンソールを開きビルドブースターを操縦する

ケンイチ「いつまでもその手が通用すると思うな！」

ケンイチはビルドブースターを無視して、ライトニングストライク

の方へと歩みを進める

レイ「動け……！ 動けよ！ AGE2!!」

レイはコックピットでどうにかしてAGE2を動かそうと足掻き続けるが、押し潰されている影響で身動きの取れない状態だ。

レイ「タツキを…… 助けなきゃ……！」

???「それなら、まだ諦めてないよな？」

AGE2を押しつぶしていたビルは突如押し退けられ、AGE2は晴れて自由の身になった

レイ「先輩！」

カズマ「次はタツキだ！行くぞ！」

………

一方、こちらはタツキも同じように身動きが取れない状態。

ライトニングストライクもビルにめり込んだ状態で体の自由が奪われていた。

タツキ「ツイてないな…… 俺。」

タツキのコックピットからはゆっくりと自分の方へと歩みを進めるPG ガンダムの姿を捉えた。

ケンイチ「タツキ、悪いが手加減はしないと宣言したからな 悪く思うなよ！」

ケンイチのPG ガンダムはライトニングストライクへ向けて走り出すと、ビームサーベルを引き抜いた

ビームサーベルでトドメを刺すつもりだろう

カズマ「さつき言った通りだ！任せたぞ！」

レイ「はい！」

ケンイチのガンダムを追うように、カズマのグフカスタム レイのAGE2は背後からガンダムへと迫っていく。

ビルドブラスターと並列に飛翔するAGE2は加速し、MS形態へと姿を変えるとビルドブラスターと合体した

レイ「AGE2合体完了！ 行くぜ…… 大型ビームキャノン!!!」

2門の大型ビームキャノンを構えたAGE2は目の前を走るPG ガンダムのバックパックへ向け、出せる限りの最大出力で攻撃を放

っ

レイ「行つけええええ!!!」

放たれた攻撃は確実にガンダムのバックパックへと命中し、同時に爆発すると再びガンダムは反動で態勢を崩してその場に膝を付く

ケンイチ「いつの間にか脱出した…!?」

太陽を背にしてその場でホバリングするAGE2を見て、ケンイチは言葉を漏らす

カズマ「それは… 僕が来たからですよ…!」

膝を付いて地面に手をつくガンダムの腕を伝い、カズマのグフカスダムはガンダムの腕の上を走りその場から高くジャンプすると、ヒートサーベルでガンダムの頭へ斬りかかった

ケンイチ「何…!? メインカメラをやられたか…!」

ケンイチのコックピットはメインカメラをやられた事により暗転し、何も見えずただ音が聞こえるのみ

レイ「タツキ!大丈夫か!」

タツキ「ああ、サンキュー!」

カズマ「2人とも!これで終わらせよう!」

タツキを救出したレイと救出されたタツキの2人に対してカズマは呼びかける

レイ「ビルドブースター連結解除! しっかり掴まれよ、タツキ!」

タツキ「あれ”やるか!いいぜ!”」

カズマ「何しているんだ二人共…?」

何故かビルドブースターを外したレイの行動にカズマは首を傾げる

タツキ「行つくぜえええ!!!」

ライトニングストライクはその場で踏み込むと、高くジャンプする一方のAGE2は再び飛行形態へと変形すると、円を描くように一回転し、ジャンプしたライトニングストライクの着地点へと加速する
タツキ「よっと! 成功、行くぜ!」

飛行形態のAGE2の上へと着地したライトニングストライクは振り落とされないように気を付けながら、ビームサーベルを2本握り

締める

タツキ&レイ「行っけええええええええええ!!!」

AGE2とその上のライトニングストライク!は膝を付くガンダムへ向けて急加速すると、ライトニングストライクは高くジャンプして凄まじいスピードでガンダムへと斬りかかり、ガンダムを切り刻んだAGE2もMS形態へと姿を変え、ハイパードツズライフルの照射でガンダムの胴を貫いた

2機によるコンビネーション攻撃はPG ガンダムへと多大なダメージを与え、ケンイチのガンダムは機能を停止した

.....

レイ&タツキ「やったあ!!!」

ケンイチ「うむ... 今のはいいコンビネーション攻撃だった。よし、第1関門クリアだ!」

レイ「え? 第1関門...?」

ケンイチ「第3関門まであるぞ、まあ第2、第3は今度だ」

カズマ「飛行形態のAGE2の上に乗って加速を付けて攻撃する、か... よく成功したな...」

カズマ「あの行動には流石に驚いた様子

ケンイチ「幼馴染みの友情が可能にした技だろうな、実用性などもかく」

レイ「先輩!」

カズマ「どうした?レイ」

レイ「俺、練習試合頑張ります! 本番に繋がるように!」

カズマ「そうだな... 頑張ろう!」

レイ「はい!」

カズマ「負けてられないな、俺も...」

カズマ「(負けられないんだ...!絶対に... カズヤお前を絶対に倒す...)」

カズマは空を睨みつけ、心の中で呟いた

.....

モブA「ヒィィィ!!!何でだ!俺の機体が言う事効かない!!!」

モブAのゲルググは突然機能を停止したかと思えば、仲間のモブBのジムカスタムへと攻撃を行っていた

モブB「落ち着け！ 取り敢えずゲームからログアウトしろ！」

モブA「そ、そうだな！ 　　なっ…！ ログアウト出来ない…

!!」

モブB「嘘だろ… 前までは強制離脱したら暴走が止まった筈じゃ…！ ウイルスが進化したつてののかよ！」

???「進化出来たようだな… いいぞ…」

モブAの機体が暴走する様を、上空から灰色のプロヴィデンスガンダムは眺めていた

???「ガン普拉バトル… 下らん… 必ずこの私が滅ぼしてやる… 私の邪魔をした忌々しい物は…」

そういう残し、プロヴィデンスガンダムはその場から立ち去って行く

???「大好きなガン普拉バトルで苦しむがいい… 覚えていろ」

つづく

E ガンダムブレイカーズACE 第6話 陸宗のACE

時計の短針は0時を指し、夜空には月が上っていた

レイ「さーて……調整終わり！」

部屋で自分の勉強机に向かいながら椅子に座っているレイは、自分のガンプラ ガンダムAGE2の最終調整を行っていた

レイ「遂に今日だ…… よし、もう寝よう！」

レイは部屋の電気を落とすと、ベッドに倒れ込みそのまま深い眠りへと落ちてゆく

……

同刻、カズマは自分の部屋でガンプラを組み上げていた

カズマ「…… これで一応素組みは出来たな」

机の上にはカズマ愛用の黒色グフカスタムと作りたてのHGバルバトスが並んでいる

カズマ「…… カズヤ 俺はお前を……」

カズマはそう呟くと眠りについた

……

くヒグチゲームパークく

レイ「おはようございま〜す！」

レイナ「おはようレイ君！ あ、シュミレーターは頼まれた通りに貸切りにしておいたから。練習試合頑張ってね！」

レイ「ありがとうレイナさん！」

レイはレイナへとお礼を言うと、シュミレーターの方へと歩いていった

……

レイ「お待たせしました！」

カズマ「よし、これで揃ったな。あっちの方も準備は出来る様だ」
タツキ「相手も既にあのシュミレーターにですか？」

カズマ「いや、彼らはここではなく他の場所のシュミレーターから

アクセスする。 相手を待たせている、行こう2人とも」

レイ&タツキ「はい！」

.....

レイ「俺のAGE2！スキャン！」

シユミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。 プレイヤー

ネーム アイザワ・レイ」

タツキ「行くぜ！ライトニングストライク！」

シユミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。 プレイヤー

ネーム ミナセ・タツキ」

カズマ「行こう... グフカスタム！」

シユミレーターシステム「ガンプラ、スキャン完了。 プレイヤー

ネーム イシカワ・カズマ」

スキャンされた3機の機体はカタパルトへと現れ、出撃を今か今かと待ち構えていた

カズマ「練習試合だが、気を抜かず行こう...！」

レイ&タツキ「了解!!！」

コックピットにレイとタツキの音が響き渡る

カズマ「創介学園ガンプラバトル部、出撃!!」

部長のカズマの掛け声と共に3機は射出した

.....

カズヤ「E.Z.8コマンダー、出撃準備完了 こちらカズヤ テツ、

ケン感度はどうだ？」

テツ「陸戦型ガンダム、こちらテツ。感度良好です」

ケン「陸戦型ガンダム(ジム頭)、こちらはケン。同じく感度良好です、隊長どうぞ」

カズヤ「今回のステージは前と同じく廃墟。敵機は3機とも真っ直ぐ来るはずだ。テツ、お前は大きく穴の空いた所から射撃。ケン、お前はビルの上からビームサーベルで襲撃。いずれも俺の指示があるまでは攻撃をするな、いいな？」

ケン「了解！」

テツ「同じく了解！」

カズヤ「よし、お前らは先に攻撃して配置に付け。俺は後から行く」
隊長のカズヤの命令に従う様に、2機の陸戦型ガンダムは一足先に
攻撃してそれぞれの持ち場へと向かった

カズヤ「そろそろ頃合いか・・・ E Z―8 コマンダー、攻撃！」

カズヤの愛機 ガンダム E Z―8 コマンダーは、バックパックのパ
ラシュートパックを起動させて上空からパラシュートでの落下を始
めた

.....

レイ「ここは・・・」

A G E 2の目の前に広がる光景は見覚えのある廃墟。

レイとカズマが初めて出会ったステージでもあった

カズマ「それにしてもやけに静かだな・・・ まるで敵1人居ない様
な感じだ・・・」

テツ「隊長、敵3機を確認」

ケン「こちらも同じく確認」

カズヤ「・・・よし、陸宗高校ガンプラバトル部 攻撃開始！」

テツ&ケン「了解！」

カズマ「・・・！来る！ 二人共守りに入れ！」

タツキ「え・・・？」

テツの操る陸戦型ガンダムの標的は・・・ タツキだ。

陸戦型ガンダムはバズーカを構え、タツキのライトニングストライ
クへと装填出来る分のバズーカの弾を一斉に撃ち尽くす

タツキ「まずい・・・！」

ライトニングストライクは脚のストライクノワールに取り付けら
れている2丁のライフルを引き抜くと、自分へと向かってくるバズー
カの弾を撃ち落とすべく、連射を試みた。

そしてライトニングストライクから放たれたライフルの射撃は見
事にバズーカの弾へと命中し、爆煙と爆風を起こす

ケン「こうなる事位は読んでるぜ！」

ビルの上へと待機していたケンの陸戦型ガンダムは待っていまし
たと言わんばかりにビームサーベルを引き抜いてビルを駆け下り、爆

煙の中へと突っ込んでいく

レイ「タツキが危ない……！」

陸戦型ガンダムの攻撃からタツキを守るべく、レイのAGE2もビームサーベルを引き抜いて陸戦型ガンダムへと距離を詰めていく

ケン「俺の相手はお前かああ!!」

標的をライトニングgstライクからAGE2へと変えたケンは自分へ向かってくるAGE2のビームサーベルによる一撃を弾き返し、左脚で回し蹴りを喰らわせた

レイ「くっ……!!」

間髪装備していたシールドで防ぎきったAGE2は反動で後ろへ飛ばされるものの何とか持ち堪えた

ケン「なら……もう一度!!」

カズマ「これ以上……俺の仲間に危害を加えさせるか……！」

ケン「なっ……いつの間に……！」

ケンの陸戦型ガンダムの背後へ回っていたカズマのグフカスタムはヒートロッドで陸戦型ガンダムを巻き付けると、AGE2とは逆の方向へと弾く

カズマ「まだだ！」

グフカスタムは踏み込むと、凄まじいスピードで弾いた陸戦型ガンダムへと距離を詰めて行き、ヒートサーベルの一撃を叩き込む

のを防いだのはカズマのEZ-8コマンダーだ

カズマ「……カズヤ」

カズヤ「良かったな、仲間を集めれて……だが、まだまだ！」

カズヤはヒートサーベルを弾き返してグフカスタムを怯ませると、確実にビームサーベルで斬り付けて行く

レイ「先輩！」

窮地に立たされるカズマを救うべく、飛行形態へと姿を変えたAGE2はハイパードブズライフルから牽制射撃を行いながらEZ-8目掛けて飛行する

カズヤ「ほう… 面白い、こい！」

ビームライフルへと持ち替えたEz-8 コマンダーは飛行形態のAGE2へと、数発 射撃を行う

レイ「当たるもんかああ!!!」

右に 左に と、飛んでくるビームライフルの弾を避けながらAGE2はEz-8へと突っ込んでいく

カズヤ「な…!」

Ez-8へ突っ込んだままなお飛行を続けるAGE2は近くの廃ビルへと突っ込んでいき、Ez-8をビルに叩きつけた

カズヤ「くそ… マジかよ…」

思う様に身動きが取れないEz-8、まさにまな板の上の鯉だ

テツ「隊長を助けるぞ！」

ケン「分かっている！」

隊長機 Ez-8を救うべく陸戦型ガンダムはAGE2へと射撃を始め、AGE2を引き離そうと攻撃を続ける

カズマ「レイ! 一旦引け！」

レイ「でもあと少しで…!」

カズマ「3対1は不利すぎる! 時間はまだあるし後からでも追い詰める… 今は退避しろ！」

レイ「…:了解」

レイはカズマの説得に渋々応じ、AGE2を飛行形態へと姿を変えてその場から立ち去っていった

カズヤ「何とか… 生きてたか…」

カズヤのコックピットからは退避していくAGE2が映り続けた
……………

カズマ「さて、これからどうするかだな…」

創介学園の3機は沢山のビルに囲まれた場所へと移して、作戦会議を行っていた

レイ「やっぱりさっきあのEz-8だけでも落とす方が…」

カズマ「お前の言い分も分かる… だが、仮に落とすとして

も……俺とタツキは向かえなかつたし残りの2機にお前は落とされてた……それなら一旦引いてもう一度完全な状態で倒した方がいい 俺は怖いんだ、仲間を失うのが……」

レイ「分かりました…… なら、次こそは……！」
カズマ「ああ、少しお願い何だが…… EZ-8は俺に任せて欲しい」

タツキ「つまり……俺たちで2機の陸戦型ガンダムを？」
カズマ「そうだ、何なら2機の陸戦型ガンダムを倒す案なら既に考えているさ」

レイ「本当ですか!? 教えてください！」
カズマ「ああ！ まずは……」

……

レイ「タツキ！ 作戦通りに！」
タツキ「ああ、そっちは任せませ！」

レイ「了解！ よーし、ビルドブースター……！」
レイはコックピットで別のウインドウを開くと、画面はビルドブースターからの映像へと移り変わる

レイ「見つけた……！ ポジションを送りますね！」
カズマ「ありがとうレイ、タツキ行こうか」
タツキ「了解！」

……

テツ「上空に敵機と思われる飛行物体確認」
カズヤ「了解、撃ち落とせ」
テツ「了解、射撃開始！」
ケン「こちらもバズーカによる攻撃を開始」

2機の陸戦型ガンダムの上空を飛び回るビルドブースターは陸戦型ガンダムの標的となり、ビームライフルとバズーカによる射撃が襲いかかる

レイ「来たか…… 耐えてくれよ、ビルドブースター！」
ビルドブースターは2門のビームキャノンから、反撃と言わんばか

りにビーム攻撃を陸戦型ガンダムへと開始した

テツ「敵機によるビーム攻撃！」

カズヤ「怯むな！撃ちつける！銃身が焼けるまで撃ち尽くせ!!」

ケン「了解！」

ビルドブースターの攻撃に怯んだ陸戦型ガンダムは隊長のカズヤの一言により、再び射撃を再開する

レイ「そろそろかな... 先輩！作戦通りに行きます！」

カズマ「わかった、タツキ！目標地点で待機を！」

テツ「敵機飛行物体、西の方へと退避して行きます！」

カズヤ「恐らくそこに敵機が居るはずだ、追いかけて追撃してくれ！」

ケン「了解！俺とテツの2人で追いかけます！」

カズヤ「頼んだ！状況は逐次報告してくれ！」

2機の陸戦型ガンダムは西側へと退避していくビルドブースターを追いかけて、西側へと続いていく 一本道 を突き進んで行く

テツ「こちらテツ、我々2機は西側へと続く一本道を頼りに敵機飛行物体を追跡中！」

カズヤ「一本道... まさか!!!」

タツキ「狙い撃つぜ...！ この一撃で！」

一本道の奥に立ち並ぶビル群の上ではライトニングストライクがメガ・ビーム・ランチャーを構えていた

カズマ「応答しろ！テツ、ケン！引き返せ!!」

タツキ「行つけえええええええ!!!」

ライトニングストライクのメガ・ビーム・ランチャーから放たれたビームは2機の陸戦型ガンダムを貫くと2機は爆発し、テツとケンのコックピットにはGAME OVERの文字が表示される

カズヤ「成程な... 誘導してた訳か。 流星は天才ファイターと呼ばれてただけはあるな、カズマ...！」

カズマ「お褒めに預かり光栄だ！」

Ez-8の背後を取ったグフカスタムはヒートサーベルを握り締め襲いかかる

カズヤ「はああああ!!!」

振り向き様にビームサーベルを引き抜いたEz-8も負けじと斜め下から斬りあげる

カズヤ「兄弟対決……」

カズマ「結果は、お預けみたいだな……」

両者のコックピットにはGAMEOVERの文字、そして廃墟には斜めに切り離されたグフカスタムと真つ二つになったEz-8が転がっていた

……

カズヤ「こっちの残りのファイターは0、そっちの残りのファイターは2人。創介学園、お前達の勝ちだ」

レイ「やったああ!!!やったね!タツキ!」

タツキ「うん!先輩の作戦のお陰です!」

カズマ「ああ、勝てたんだ……俺達……!」

カズヤ「これでもう少いで始まる春の学校別対抗戦も多少は自身が付いたんじゃないか さーて、俺達はこれでログアウトするぜじゃあな…… 決着はお預けだ。」

カズマ「ああ…… 分かっているさ……」

カズマは斜めに切り離されたグフカスタムのパーツを握りしめ、そう呟いた

???「ほーん、創介学園…… アイツ、まだ続けてたか……」

フードを被った男はニヤリと笑うとポケットに手を入れてその場から立ち去る

???「もう一度地獄を見せてやろうぜ…… 天才ファイター様によお…… ドライセン・D……!」

続く

ガンダムブレイカーズACE 第7話 カズマの過去／彩渡商店街、再び

暗い闇に包まれた砂漠を1機の機体が駆け回る

対ビームコーティングマントを身にまとった機体の目は周囲に現れる機体へ視線を向けると赤く妖しく光った

この機体、外見は黒いマントに包まれ、2本の角と1本のブレードアンテナ

恐らくビルダースパーツにより付けられたものだろう。

カズマ「前にジムが3機・・・ 行けるな」

機体は踏み込んで高く飛び上がると、メイスを目の前のジムへと突き刺した

カズマ「まずは、1機・・・！」

メイスがジムの胴を貫き爆発した後、残された2機の内の1機はビームサーベルを構えてカズマの機体へと襲いかかり始めた

カズマ「死角はない」

背後に察知した機体は振り向き様にメイスを横殴りに叩きつけ、横方向へと吹き飛ばした

カズマ「来い・・・ どっからでも・・・」

カズマの言葉に応えるかのように機体は両目を光らせた

黒塗りのバルバトスに武者ガンダムMK-1の角そしてブレードアンテナが装着され、対ビームコーティングマントを纏って体には金色が所々に見える

カズマ「どこから来ようが無駄だ・・・ この魔王バルバトスの前では！」

デスサイズヘルのバックパックを展開させた魔王バルバトスはメイスを構え、残されたジムへと戦闘態勢へと入る

.....

レイ「ウイルスが進化した・・・？」

タツキ「ああ、何か今まではシユミレーターからログアウトしたら

暴走は止まってたけど、新しいウイルスはログアウトしても止まらな
いらしい。まあ厄介なもんだよな」

レイ「…」

「何だ？ガン普拉バトルの話か？」

レイ「うお！びっくりした！」

レイは突然背後から話しかけられかなり驚いた表情だ

レイ「ビビらせんよ… ハヤト…」

レイの背後から話しかけたのはクラスメイトのハヤト。

創介学園の陸上部に所属しており、1年生ながら先輩にも負けない
程の実力らしい

ハヤト「ごめんごめん… w で？ガン普拉バトルの話だろ？」

タツキ「おう、ハヤトもやってんの？」

ハヤト「俺か？そりやあやってるに決まってんじゃん！ まあ、お
前ら程やってる訳じゃ無いけどな」

レイ「え？初耳！何使ってるの??？」

ハヤト「えーつと… あったあった… ほら、これだよ」

ハヤトは自分の席の隣に置いてある鞆の中からガン普拉を取り出
す

ハヤト「じゃーん、これが俺のガン普拉 ”ズアツグ” ！」

ハヤトが取り出したガン普拉、ズアツグは機動戦士ガンダムに登場
するズゴックをベースに改造されたガン普拉。

両腕はジュアツグの物に変えており、これにより3連ミサイルラン
チャーが使用可能になっている

レイ「ハヤトって名前だし、ガンタンクかと思った」

ハヤト「まあガンタンクも選択肢にあっただけだよ！」

???

1人の生徒が教室の影から楽しそうに談笑する3人を見つめる

レイ「…？」

???

何者かからの視線を感じるレイは周囲を確認すると、物陰から見て

いた生徒は何処かへと去っていった

タツキ「どうかしたか？」

レイ「いや…何か誰か見てた様な… まあいいか！ それで
な…」

??? 「…」

レイ「よーし… 帰りにゲーセン寄って帰るか！」

タツキ「大会も近いしな…」

??? 「ちよつといいか…？」

下校途中のレイとタツキへと1人の生徒が後ろから声を掛ける
見た事ない顔だが制服は同じ…

高校の先輩だろうか

レイ「いいですけど… 誰です…？」

??? 「君達… ガンプラバトル部の部員か？」

……………

↳彩渡商店街

ユウキ「いやー絶対ミサ怒ってるだろうなー…」

ユウキは彩渡商店街の入口の大きな看板を見つめ、呟いた

彩渡商店街の復興を目指し、ミサとチームを組んで戦い続けたユウ
キ。

世界一になるまでの間に様々な事件等にも巻き込まれたりしたが
相変わらずガンプラバトルは続けている

高校を卒業した後、地元へと戻るかそのままこの地で生活をするか
葛藤したが、彩渡商店街で出来た仲間達との生活を選んだユウキはミ
サの実家の模型屋で住み込みで働きながらプロのファイターの道を
進んでいた。

生死を掛けた宇宙エレベーターでのカワグチ社長との死闘から5
年…

ファイターとしての戦いを選んだユウキは各地を回って大会へと

出場しているが……

ユウキ「うーん……それにしても……」

ユウキ「今回もなんかこう……心の奥から燃え上がる様な戦いでは無かったなあ……」

様々な相手との死闘を経てプロのファイターになったユウキにとって普通の大会の相手では燃え上がる様な戦いは出来ておらず、退屈に似た思いで戦いを続けていた

ユウキ「ウイルの奴は忙しいとか言ってるし……リュウジはあの戦いの後から行方不明だし……レンは修行で国外だし……もう一度……心の奥から燃え上がる様なガンプラバトルしたいなあ……」

そんな事を呟きながらユウキは彩渡商店街の模型屋へと入っていく

ユウキ「ただいまー」

ミサ「おい……(怒)」

ユウキ「ヒイ！」

ユウキの目の前には相当腹を立てたミサが待ち構えている
胸に関する事を弄った時並にキレている……これはやばい……

ユウキ「殺される……！(震え声)」

ミサ「そこに座って……(怒)」

ユウキ「ハイ……」

ユウキは軽く死を覚悟しながらミサの言う通りに従った

……

場面は変わってレイとタツキ

レイ「創介学園ガンプラバトル部の元メンバー!?」

タケシ「カズマから聞いて無かったのか……」

タツキ「何で辞めちゃったんですか……?」

タケシ「ある高校とのバトルで自分のガンプラがどんどん壊されていくのに怯えて逃げたんだ……俺はアイツとの約束を破った……」

レイ「高校……? 約束……?」

タケシ「黒連高校ガン普拉バトル部のエース… ガイ そしてその仲間のシユウ、カオル。別名 黒い三年生… 3人とも今は三年生だからジオンの黒い三連星を真似てそう呼ばれてる」

タツキ「先輩が仲間を失いたくないって… もしかして…」

タケシ「俺が辞めて… 部員はアイツしかいなくなつた 何とかして部員を集めているアイツを見て俺ももう一度部員として戦おうと思つたが… 一度逃げた俺を許すわけなんてない… と言うか許されない そう思つて戻れずにいてな… 最近部員ができたって聞いて、君達を尋ねたんだ」

レイ「先輩… ずっと1人で戦つてたんだ…」

タケシ「アイツは親が離婚してから双子の兄は父親の方に着いて行つて、カズマの方は母親と2人で暮らしてる… 生徒会長で忙しいだろうに病弱な母親の看病してるし… 本当、アイツはすごいよ…」

タツキ「双子何ですか…?」

タケシ「なんだ、アイツ本当に自分の事何も喋つてないんだな… 双子の兄の方は陸宗高校でガン普拉バトル部の隊長してるって聞いてたが」

レイ「陸宗高校… あの迷彩柄のEz-8…」

タケシ「まあ、とにかくアイツの事を支えてやってくれ… 何でも1人で抱え込む節があるからな…」

レイ「タケシさんは仲直りしないんですか？」

タケシ「俺には… その資格がないと思つてる… アイツが俺の事をどう思つてるか知らないけどな それじゃあな… あいつのことを任せませ」

タケシはそう言い残して2人から離れていった

……………

ミサ「何日も出るなら連絡位する… 分かつた…? (怒)」

ユウキ「アツ、ハイ…」

ユウキは死ぬ程怒られた様で今まで見せた事がないほどに怯えていた

ミサ「それと、カドマツさんがこれから来るって」

ユウキ「え？ 凄い久しぶりだな…」

カラーン

模型屋のドアが開く音が店内へと響くのと同時にそこには懐かしい顔が姿を見せた

ユウキ「…！ ミライ、マモル！」

マモル「よっ！」

ミライ「久しぶりだね、ユウキ ミサ」

そこには五年前 彩渡商店街と共に戦ってきた戦友であり親友のマモルとミライの姿があった

マモルは高校卒業後に地元の会社 彩渡産業に就職、営業部に所属し 忙しい日々を過ごしているらしい

ミライは卒業後、大学へと進学して高校の先生を目指して頑張っている

ユウキ「って言うか何で2人が…」

「俺が呼んだんだよ」

ユウキ「カドマツさん！」

カドマツ「久しぶりだな、ユウキ」

マモルとミライの後ろから白衣を着た男性が姿を表す

この男性も彩渡商店街と共に戦ってきた仲間でありユウキ達のガンプラの調整や助言を行い彩渡商店街ガンプラチームの重要なサポーターを行っていた

現在もハイムロボティクスでロボ関係の仕事をしているらしい

カドマツ「早速だが、力を貸してくれ。お前ら4人の」

ユウキ「良いけど… 何に？」

ミライ「その点を僕らはまだ説明を受けていないのでなんとも…」

カドマツ「分かった、まずは説明からしよう…」

……………

20XX年、変わりゆく時代と共にガンプラバトルも同じく変わっていった。

SDガンダムの本格的な参戦や新たなルール追加、そしてシユ

ミレーターの対応ガンプラの追加…

そんな華々しい成長を遂げるガンプラバトルへと一つの影が…

正体不明のガンプラウイルスの登場により、戦闘中にシステムの暴走を引き起こして敵味方構わずに攻撃、暴走。

ver1.0までのガンプラウイルスなら、シユミレーターからの強制ログアウトにより暴走を回避出来たものの…

ある日を境に、ver.2.0へと変わりログアウトを受け付けず、ウイルスに感染した機体を倒すか、それとも暴走を続けて他に破壊するものが無くなるか、この二択でしか暴走は治まらないように進化を遂げた

ウイルスの感染は留まることを知らず、遂にはシユミレーターのドアをロックしてシユミレーター内部の人間を脱出不可能にしたり、ハイムロボティクスから販売されているトイボットを暴走させ、所有者へと怪我を負わせる事故が出始めた

……………

カドマツ「これが実際に暴走したトイボットだ。」

カドマツはアタツシケースを開け、中からトイボットのSDガンダム コマンドガンダムを取り出した

カドマツ「今は電源を切っているから暴走の心配はないが…。」

ユウキ「それで… 俺達はどうすればいい？」

カドマツ「お前達にはこのトイボットを暴走させまウイルスの根源を調べて欲しい」

ミサ「つまり…。」

カドマツ「こいつの中にアクセスして根源体を除去してくれ 知り合いに腕の立つファイターはお前達しかいないからな… 頼む、もう一度力を貸してくれ…！」

ユウキ「分かった、やるぜ カドマツさんには世話になったしな…。」

ミライ「ユウキがやるなら僕もやります」

マモル「俺も！」

ミサ「わ、私も！」

カドマツ「すまない… それじゃあ準備するから待っていてくれ…」

カドマツはPCを立ち上げて、トイボットにアクセスする為の準備を始めた

トイボットを暴走させたウイルスは…

そしてウイルスを散布した者の正体と目的は…

再び起こった事件へと彩渡商店街ガンプラチームが再び立ち上がった

続く

ガンダムブレイカーズACE 第8話 我ら、ガンプ
ラ盗賊団!?

イラトゲームパークへと場所を移したカドマツ達はウイルスの根
源を探るべく、トイボットの中へとdiveして原因を探る

カドマツ「よし、こっちは接続完了だ。 そっちはどうだ？」

ユウキ「こっちは準備完了だ！」

ミライ「僕達もOKです」

カドマツ「よし・・・ 悪いな婆さん、店のシュミレーター借りて」

イラト婆ちゃん「ふん・・・ 使用料は高く付くよ！」

カドマツ「それに関しては大丈夫だ・・・ 多分・・・ よし！いつ

でも出てくれ！」

.....

ユウキ「いやー・・・ こうして4人で一緒にシュミレーターでガンプ
ラバトルするのは久々だな・・・」

マモル「同感！ ワクワクしてきた！」

ミライ「全く・・・ 相変わらず緊張感が無いね・・・」

ミサ「久々に4人で行こう！」

ユウキ「ガンプラ、スキャン！ パーフェクトビルドストライク・・・

ユウキ、出るよ！」

マモル「AGE3 フォートレス マモル、出るぜ！」

ミライ「ダブルオーライザー ミライ、出る」

ミサ「ガンダムアザレアフルフォース ミサ、行くよ！」

4機は恒例の掛け声と共に出撃し、目的地を目指す

.....

く創介学園く

レイ「・・・」

放課後、帰りの準備をしているレイは相変わらず背後に視線を感じ
ていた

レイ「…（チラツ）」

???「…！（ガバツ）」

レイ「はあ…」

こんな生活がそろそろ1週間になる

レイ「いい加減姿見せろよ…」

呆れ返るレイへと1人の生徒が走り寄ってくる

ハヤト「うわわわわわ!!!レイく!!!」

半泣きになりながら走ってきたハヤト

流星は陸上部、速い…！

レイ「ど、どうしたんだよ…」

ハヤト「やられた… やられたんだ…！」

レイ「やられた…？ 誰に？」

ハヤト「ガン普拉盗賊団にく!!! 俺のズアツグく!!!」

レイ「ガン普拉盗賊団…？ なんだそりや…」

レイは聞いたことのない名前に首を傾げる

ガン普拉盗賊団… その実態はファイターに勝負をいきなり仕

掛け、勝負に負けたファイターからガン普拉を奪うと言う窃盗集団。

最近は何人か被害にあっており、ハヤト以外のレイの同級生も奪われていた

レイ「成程… バトルに負けたら奪うのか… そんなこと許せない！」

ハヤト「お、おい… どこ行くんだレイ！」

レイ「決まってるだろ！ そのガン普拉盗賊団とやらをぶっ飛ばしに行くんだよ！ ガン普拉バトルは楽しむものだ…」

そのガン普拉バトルを汚すようなことをする奴らを許すか！」

ハヤト「いくらお前でも… あいつらは3人だぞ！ タツキとか

カズマ先輩も呼んだ方が…」

レイ「でも、タツキは今日は忙しくて帰ったし… カズマ先輩は

生徒会があるし… やっぱり俺1人でも…！」

ハヤト「… 分かった！ 俺も行く、」

レイ「はあ!? お前ガン普拉ないのにどうやって…」

ハヤト「ある！　これがな」

ハヤトは鞆からHG試作品1号機を取り出した

ハヤト「1人よりは2人：　戦力にはならないかもだけど：：
やれることはやるぜ！」

レイ「よし！行こう！」

レイとハヤトは教室を飛び出し、早速ハヤトの案内でズアツグを奪
われた場所へと向かった

???「：：」

.....

ハヤト「えーと：　ここだ！　このゲームセンターでアイツら
に：　　っておーい！レイ？」

レイ「ハアハア：　ちよつとタンマ：　」

陸上部のハヤトにスタミナ的に適うはずもないレイはゼーゼー息
を切らしながらゲームセンターへとたどり着いた

ハヤト「いた！アイツらだ！」

???「アアン!?　なんだ：　俺達にガン普拉奪われた雑魚じゃねえ
か！」

レイ「黙れ！ハヤトのガン普拉を返せよ！」

???「ああ：　これか　ほらよ」

男はハヤトのズアツグを投げ捨てる

ハヤト「なんだ：　　案外簡単に返してくれんのか：：」

ハヤトは投げ捨てられたズアツグを拾おうとしたその瞬間：：

???「なーんてな！」

男はハヤトの手がズアツグに届く寸前にズアツグを踏み潰す

ハヤト「ズアツグ！」

???「ギヤハハハハハ!!!　俺達に負けた時点でお前のガン普拉の所有
権は俺達にあんだよ！」

ハヤト「そんな：　　俺のガン普拉が：：」

レイ「お前：　！」

???「ほう：　　なんだお前も俺達にガン普拉取られたいのか？」

レイ「ぜってえぶっ飛ばす：　！」

??? 「上等だ… リュウ！ ジュン！ 行くぞお！」

リュウ 「了解だ…！ タツキ！」

ジュン 「おうよ！」

レイ 「（…！…こいつらどっかで）」

………

〜五年前〜

レイ 「クソ…！ 俺のジムコマンド！」

追い詰められたレイのジムコマンドは自分を追いかけてくる2機のツダへとビームライフルを放ちながら逃げ続けていた

タツキ 「逃がすんじゃねえぞ！」

リュウ&ジュン 「おう！」

黒い指揮官用ザクを操るタツキの命令の元、2機のツダはジムコマンドへと襲いかかる

レイ 「いつまでも… 逃げるだけじゃ無理か…！」

ビームサーベルを引き抜いたジムコマンドはツダへと切りかかるが…

リュウ 「どこに攻撃してんだ！ 下手くそ！」

ジムコマンドの斬撃は空を切り、命中することは無かった

更にはカウンターにツダのタツクルを喰らってしまい、近くの岩場へと叩きつけられてしまう

レイ 「まだ… まだ行ける…！」

再び立ち上がるジムコマンドはボロボロになりながらもビームサーベルを離さない

タツキ 「しぶとい奴だ… 俺がやる…！」

黒の指揮官用ザクは2機のツダの間を縫って飛び出すとヒートアックスを片手にジムコマンドへと襲いかかる

負けじとレイもジムコマンドのシールドを構えて耐えようと試みる

タツキ 「おらおらおらあ！」

タツキのザクのヒートアックスによる連撃は確実にジムコマンドのシールドへと衝撃を与える

あまりにも凄まじい猛攻に耐えきれなくなったシールドは亀裂が入ると、音を立て崩壊してしまう

レイ「うわああああ!!!」

再び地面に叩きつけられるジムコマンド…

ジムコマンドのメインカメラからは太陽を背に立つ、黒いザクが映し出される…

タツキ「今だ！お前ら、やっちまえ！」

リュウ&ジユン「了解！」

レイ「クソ… ここまでか…！」

レイは目を閉じ、止めの一撃を受け入れた

レイ「(どうして… GAME OVERの音が鳴らないんだろ
う….)」

レイは再び目を開けてコックピットに映し出される光景に驚く

レイ「ガン… ダム…？」

2機のツダによるトドメの一撃を防いだのは…

ユウキのビルドストライクだった

そこからの光景はともレイの頭に焼き付いている

華麗な動きでツダの攻撃を避けつつ撃破する…

まるでガンプラが生きているかのように。

レイ「(いつか… あの人みたいに…!)」

レイはコックピットの画面に映し出されるビルドストライクへと手を伸ばした

レイ「(俺も…!)」

レイ「(そうだ… 俺が強くなろうと思ったきっかけ… あの
人に出会った時の….)」

タツキ「さあ… 始めようか…！」

レイとハヤトは早速シュミレーターへと入り、戦いの準備を行う
レイ「負ける訳には行かない… リベンジだ…！」

ハヤト「ズアツグの恨み…！」
それぞれの思いで2機は戦いへと足を踏み入れる

AGE2（レイ）「ハヤト！俺はあっち側を探してくる！」
試作品1号機（ハヤト）「了解！」

「いや、探す必要は無いぜ！」

タツキの言葉と共に現れた機体

レイ「AGE2 ダークハウンド…！」

今ここに、2つのAGE2が対峙した

……………

??? 「ガンプラスチックン、行くぞデユナメス！」

同時に、新たな力がレイ達の元へ

続く

ガンダムブレイカーズACE 第9話 4人目の狙撃手

対峙する2機のAGE2

タツキ「まずは俺様からだあ……！」

ガンプラ盗賊団・タツキのダークハウンドX1はABCマントを靡かせ、レイのAGE2を囲うように回り始めた

レイ「なんだ…… 何する気だ……！」

不穏な動きを始めるダークハウンドX1……

タツキ「喰らえ！」

ダークハウンドの腕部からアンカーショットが放たれ、レイのAGE2ノーマルへと命中した

レイ「ぐっ……！」

タツキ「これで終わりじゃないぜえ！ 行くぞお！」

アンカーを命中させたダークハウンドは再びAGE2ノーマルを中心に回り始めた

ダークハウンドが回ると同時に、アンカーの線がAGE2ノーマルを覆い始める

ガンプラ盗賊団・タツキの狙いはこれだ

レイ「くそ！ 身動きが取れない……！」

タツキ「おいおい…… さっきまでの威勢はどうした？ 反抗しないなら…… 貴様のガンプラも頂こう!!」

ドッズランサーを持ったダークハウンドX1は、アンカーの線が巻き付き身動きが取れないAGE2へと突っ込んでいく

タツキ「このドッズランサーには電撃が流れるようになってんだ…… 身動きが取れない状態で味わいな……!!!」

レイ「うわああああああああ!!!」

突き刺されたドッズランサーによる逃げ場の無い電撃がAGE2

ノーマルを襲う

機体全体へと電撃が流れ、確実に機体を蝕んで行くのを感じ取れる
タツキ「いいねえ… その叫び声… もっと聞かせろお!!!」

レイ「がああああああ!!!」

休息を与えぬまま、ドツズランサーによる電撃はAGE2へと流れ
続ける

レイ「ハアハア… このままじゃ…」

タツキ「休んでる暇無いぜ…!!」

レイ「あああああああ!!!」

………!!!

一方、ハヤトの試作品1号機は自分を追いかけるザクII2機から
逃げるので精一杯だ

ハヤト「2対1…! 不利だ…」

リュウ「そろそろ鬼ごっこも終わりにしようぜ!!」

リュウの紫色のザクIIはザクバズーカを構え、標準を定める…

リュウ「落ちろお!!!」

ハヤト「まず…!」

咄嗟に回避行動を取り、ザクバズーカからの一撃からは逃れたハヤ
ト

しかし

ジュン「相手は2人なんだぜ!」

予め回り込んでいたジュンの黒色のゲルググJのビームナギナタ

の一撃を喰らってしまう

ハヤト「うわああああ!!!」

リュウ「終わらせてやる!」

怯む試作品1号機の間を突いた紫色のザクIIはヒートアックス
で襲いかかり、右腕を切り落とす

ジュン「言い様だ(笑) さあ!トドメだあ!!」

ビームナギナタによる斬撃を試作品1号機へ喰らわせるゲルググ

J…

ハヤト「…!ごめん… レイ!」

「ジュン「な… クソがああああ!!!」

突如、ジュンの断末魔と共にゲルググJは爆発。

ジュンはGAME OVERに

「リュウ「なっ…！ 何処だ！出てこい!!!」

「

リュウは辺りを見回すも何処にも機体の姿など見えない…

??? 「ハヤト、今だ！」

「ハヤト「…！この声… じゃない… と、とりあえず！」

起き上がったガンダム試作品1号機はビームサーベルでザクIIの胴を貫く

「リュウ「しまった…！」

隙を突かれ、胴への一撃を許してしまったザクIIは何とか引き抜いて反撃に出ようと試みる

「ハヤト「俺のガンプラの恨み…!!!」

ビームサーベルをザクIIの胴に突き刺したまま、残された左腕でビームライフルを持ち変えると、ザクIIの頭に突きつけてビームライフルを放つ

「リュウ「くそ… クソがああああ!!!」

ザクIIは完全に動きを止め、爆発する

「ハヤト「これでいい… レイ、後は託したぜ！」

2機による攻撃でパワーは残されていなかったガンダム試作品1号機は至近距離でのザクIIの爆発を避けることが叶わず、そのまま爆発に巻き込まれてしまった

……………

「タツキ「ハハハハ!!!」 声が出ない程に心地よいか！」

「レイ「クソ… あああああああ!!!」

レイは相変わらず絶え間ない電撃を喰らい続けていた

「タツキ「さーて、そろそろ終わらせてやるよ…！」

電撃を止めたダークハウンドX1はアンカーに巻かれたままのA

GE2へと蹴りを入れる

レイ「だめだ… 力が… 俺はこんな奴に、負けるのか…？」

嫌だ 嫌だ…！ 勝たないと… 誓つ… たんだ いくつかあ… の人みたいに…」

タツキ「その夢とやらもここで終わり… 俺様にガンプラは奪われるんだからなあ！」

ピーコックスマツシヤーを構えるダークハウンドX1、既に引き金へと手を掛けている

タツキ「そうだ、お前に選択肢をやるよ」

レイ「選択… 肢？」

タツキ「俺達ガンプラ盗賊団に力を貸すってんなら助けてやる」

レイ「お前… らに力を貸せ だ、と？」

タツキ「ああ、どうだ？ 答え次第では引き金を引くぜ？」

ダークハウンドX1はピーコックスマツシヤーへと更に力を込める

レイ「お前らみ… たいな奴に… 力… なんて… 貸すかよ…！」

タツキ「そうか… 残念だが交渉は決裂… ここで終わりだ」

レイ「…」

ダークハウンドX1はピーコックスマツシヤーの引き金へと指をかける

タツキ「じゃあな…」

バアン！ という音が響き渡る

タツキ「な…！ 何処から…！」

レイ「!？」

ダークハウンドX1の胴を何処からか放たれた一撃が貫き、ダークハウンドは崩れ落ちる

??? 「いや… 危なかつたな…！」

タツキ「そこかあ！」

ダークハウンドが視線を向けた岩場の方ではスナイパーライフルを構えたガンダムデユナメスが居た

???「おっ、あっちも気づいたか！ 隠密は終わり！」

レイ「どこの誰かわからないけど… 今だ!!」

レイは残されたパワーを振り絞ってビームサーベルを2本引き抜く

タツキ「クソがああああ!!!」

怒り心頭のタツキのダークハウンドX1はピーコックスマツシャーを再び構える

レイ「これ以上は…！」

懐に潜り込んだAGE2ノーマルはビームサーベルでピーコックスマツシャーを真つ二つにすると、残された片手のビームサーベルでダークハウンドを斜め下から斬りあげた

???「俺も手伝うよ！」

いつの間にか距離を詰めていたデユナメスのファイターもGNビームピストルを構えて撃ち放つ

レイ「誰か知らないけど、サンキュー！ 来い！ビルドブラスター！」

レイの言葉に応える様に上空からビルドブラスターが下降する

レイ「飛べ！AGE2！」

踏み込んだAGE2は高くジャンプし、上空を飛んでいるビルドブラスターを目指す

レイ「行くぜー！ドッキング！」

上空でビルドブラスターは変形すると、AGE2のバックパックとなった

レイ「これで終わらせる！」

ビルドブラスターに付いている2門の大型ビームキャノンに手を掛けると膝を付くダークハウンドX1へと向ける

レイ「これが俺の答えだ！ お前らみたいな奴を俺は許さない！」
タツキ「うるせえええ!!」

レイ「行っけえええ!!!」

2門の大型ビームキャノンから放たれた一撃はAGE2ダークハウンドを貫くと、完全にダークハウンドは動きを止めた

.....

タツキ「覚えてろくく!!!」

リュウ「俺達ガン普拉盗賊団は不滅だあく!」

ジュン「2人ともまっつてくれく!」

レイ「なんだあいつら...」

さつきとは全く違うほど弱気な3人を見てレイは呆れ返るかのよう
に呟いた

ハヤト「... ごめんな、ズアツグ...!」

レイ「ハヤト...」

タツキによつて踏みつけられ、粉々になったズアツグを握りしめた
ハヤトをレイはただ見守るしか出来なかった

ハヤト「俺も強くならなきゃな...」

レイ「もし新しい機体作るなら... 俺も手伝うよ!」

ハヤト「レイ... そうだな、暫くはこのガンダム試作品1号機を
改造したりしてみるよ」

ハヤトの片手には右腕を斬られたガンダム試作品1号機があつた
プシュー

???「いやー! 疲れた疲れた!」

2人の背後のシュミレーターから1人の男の子が降りてくる
見る限り、レイ達と同じ年齢だろうか...

ハヤト「ああ!!! 思い出した!」

突如大きな声を上げたハヤトは降りてきた少年を指さす

ハヤト「ユウシ!」

レイ「ユウシ...?」

ユウシ「あ、丁度いいや 確か君がレイだったね」

レイ「そうだけど... 君は...?」

ユウシ「俺の名はユウシ! 1年C組のな! 早速だけど... 俺
を創介学園ガン普拉部に入れてくれ!」

.....

暗い部屋で男はパソコンでニュースを見ていた

見出しには、サイバーコーポレーション元社長 カワグチ ジュ
ンイチ氏 自殺 の文字

記事には、

ガン普拉バトル 世界大会中のファイターを乗せた宇宙エレベーターをバイラス容疑者と手を組み、ウイルスで安全装置に意図的に異常を起こして切り離そうとした罪で国際指名手配されていたカワグチ氏が遺書を残して自殺したと思われる

と書かれている

??? 「あのおっさんが簡単に死ぬか・・・？ いや、あの性格だと無いな」

男は少し笑いながら呟く

??? 「絶対何か起こすぞ・・・ アイツは・・・」

力貸してやるか・・・ エピオンゼロ・・・！」

エピオンゼロと呼ばれたガン普拉を見つめる男は立ち上がり、どこかへと去っていった

続く

ガンダムブレイカーズACE 第10話 「聖騎学園
のACE」

「ヒグチホビーパーク」

レイ「えーと…… あった！」

レイは商品台を隈無く探してお目当てのパーツを見つけたようだ

レイ「レイナさん！これ下さい！」

レイナ「はい！ちよつと待っててね……」

レイナは渡されたガンプラの箱を受け取って会計を行う

レイが購入したガンプラ、AGE2ダブルバレット

この機体の腕パーツを使用してレイのAGE2をパワーアップさせる為だ。

レイ「レイナさん、フリースペース借りるね」

レイナ「りょーかい、ガンプラ作りに夢中になるのもいいけど……

勉強もちゃんとしないとダメだよ……？」

ジト目でこちらを見てくるレイナ……

確かにここの所勉強が疎かになることがあり、母親に説教をよく喰らっていた……

レイ「ア、アハハ……」

苦笑いしてその場を凌いだレイは、足早にフリースペースへと向かっていく

………

「聖騎学園」

???「いよいよだな…… 春大会は」

少し長めの金髪を靡かせる男の目は鋭く、この男の冷静さを窺わせる

???「はい、ですがご安心を…… 今年も我ら聖騎学園が必ず優勝する

でしょう…… キョウヤ様が出るまでも無くとも、我ら聖騎親衛隊が
終わらせます……」

目の前の男をキョウヤ様と呼んだ少女は、この聖騎学園ガンプラ

チームの副リーダー リン。

キョウヤ「いや、今年は分からぬぞ… あの陸宗高校のエース カズマを破ったチームが居ると聞く…」

リン「陸宗高校を…？」

キョウヤ「創介学園… そこには天才ファイターがいると聞く… 大会までに1度手合わせをしておいた方が良いか…」

リン「天才ファイターですか？ ですが、所詮は去年の準決勝にすら出場していないチーム… 大したことな無いのでは？」

キョウヤ「どんな相手であろうが格下に見たり、手を抜くことは私の騎士道から逸れる…」
リン、創介学園へ練習試合を持ち掛けておいてくれ」

リン「は、はあ… 了解致しました…」

リンはキョウヤの言葉に従い、創介学園との練習試合の調整を始める

キョウヤ「天才ファイターか… どんな力を持つか示して見せろ… 私と、この白騎士ツールギスに！」

……………

く創介学園 生徒会室く

カズマ「それで… 君が、我が創介学園ガンプラチームに入りたいという…」

ユウシ「はい！ 入部許可してください!!!」

タツキ「凄いやる気だな…」

カズマ「まあまあ… それで君は何故この部に…？」

ユウシ「倒したい相手が居るんです…！ 兄k… じゃない… ユウキって奴なんですけど！」

ユウシの口から出たユウキという名にレイは反応する

レイ「ユウキって… あの…？」

ユウシ「ああ！ アイt… じゃなかった… あの人には色々恨m… じゃなくて…！ とりあえずぶっ倒したいんです!!!」

タツキ「なんかさつきから言い間違え多くないか…？ (ヒソヒソ)」

レイ「なんか怪しいな……（ヒソヒソ）」

カズマ「うーん…… よし、分かった！ メンバーは多い方がいい…… 君の入部を許可するよ あ、君のその野望は叶えられるとはあまり思わないけどね……」

ユウシ「はい！ありがとうございます！ という訳で2人とも宜しく！」

レイ「お、おう……」

タツキ「宜しく……」

カズマ「そう言えば…… ここに来る前に先生から伝言メモみたいな貰ってたな……（ゴソゴソ）」

カズマは制服のポケットに手を入れ、メモを取り出す

カズマ「おー、あったあった…… えーとなになに…… なあ!？」

レイ「!？」

タツキ「!？」

ユウシ「？」

カズマ「嘘だろ……」

レイ「あのー先輩……？」

カズマ「3人とも…… 緊急ミーティングだ……」

……

レイ「それで…… 何です？ 緊急ミーティングって？」

カズマ「練習試合の申し込みが来た……」

ユウシ「早速ですか！ 燃えますね!!」

タツキ「ユウシ…… ちよつとうるさい……」

カズマ「相手は…… 聖騎学園だ……」

カズマ「え？ 反応なし？」

レイ「聖騎学園……？」

タツキ「聞いたこと無いな……」

ユウシ「昨年の優勝高校ですよね！わかります！」

レイ&タツキ「はあ!？」

カズマ「その通り… 昨年の優勝校だ…」

タツキ「でも何で… 優勝校がうちに…」

カズマ「恐らく陸宗高校を倒した噂が流れたんだろ… しかし、

どうするか…」

カズマは頭を抱え込む。

この状況でc o o rなど気取れる程に余裕ではない…

ユウシ「とりあえず… ! 当たって碎けろです!!」

タツキ「いや碎けちゃいかんやろ…」

ユウシ「じゃあ当たって当たり続ける？」

タツキ「もういい… ちよつと座つてろ… ?な？」

レイ「それなら今回は前回の反省を活かして、先に作戦を決めた方が良いですね…」

カズマ「ああ、前回は何も考えずに突き進んで痛い目にあつたからな… 聖騎学園はリーダーのキョウヤを中心にしたフォーメー

ションでの作戦が主だ… これを見てくれ」

ユウシ「これ、去年の…」

カズマが見せた映像は去年の陸宗高校 VS 聖騎学園の決勝

聖騎学園のリーダー機体 白騎士トールギスを中心として、槍の先端の様に3人でのフォーメーションで、先頭のゲルググのカスタム機が突き進んでいく

レイ「なんだあのトールギス…」

……………

白騎士トールギス 聖騎学園キョウヤ仕様

頭 トールギス

胴 シナンジュ

腕 武者ガンダムMK-II

脚 風雲再起

バックパック

武器 専用ビームサーベル

シールド ミサイルシールド

白をベースにしたこの機体、脚はまさかの風雲再起を採用しているなど謎が多い

ケンタウロスではない。

.....

レイ「それで・・・ 返答はどうします？」

カズマ「・・・ 俺はやるつもりだ」

タツキ「俺もやります！ 優勝高校だか知らないけど・・・ 俺たち

だつて！」

ユウシ「俺も！」

レイ「答えは皆一緒ですね・・・ やりましょう、先輩」

カズマ「よし、これで大会までの目標は聖騎学園ガンプラバトル部を倒す事・・・ やるぞ、皆！」

3人「おおう!!!」

.....

くイラトゲームパークく

一方の彩渡商店街のメンバーはウイルスに感染し、暴走したとされるトイボットのデータ内部にDIVEし、原因を探っていた

ユウキ「これで・・・ 終わり！」

パーフェクトビルドストライクはシユベルトゲーベルでガフランを真つ二つにすると、遂に暴走の原因となったウイルスは完全に除去した

マモル「それにしても、結構な数だったな・・・」

ミライ「同感だ、リージョンカップの時までとは行かないが・・・

やけに手が込んでいる」

ミサ「もう終わったし戻る！」

ユウキ「ああ、そうだな・・・ ! ミサ、危ない!!!」

どこからともなく飛んできたビームライフルの銃弾はアザレアへ向けて飛んでくると、それに気づいたユウキは庇う

ミサ「ユウキ君!!!」

ユウキ「いや、大丈夫だ！ 一体誰が・・・？」

「笑わせるな、何が大丈夫だ」

ミライ「誰だ!？」

ミライのダブルオーライザーは周囲を見渡し、声の主を探し始める

「俺は…： ここだぜー!」

マモル「伏せろミライ!」

マモルのAGE3フォートレスは声の主を確認し、対象へとシグマシスキャノンでの射撃を始めた

「おつとつと…： 血気盛んな奴がいるな おもしれえ、勝手に作戦変えてやる!まずはためえから墮とす!」

遂に姿を現した機体は…：

ブリッツガンダムだ

ミライ「ミラージユコロイドで姿を消していた訳か」

過去にブリッツガンダムを使用していたミライは姿を消していた原因を突き止める

???「ピンポーン!正解…：」

ブリッツガンダムは男の言葉と同時にAGE3へと距離を詰めていく

マモル「ちかづくんじゃねえ!EXアクション…：」

「させるかア!!!」

今度は背後から、ブリッツガンダムとは違う機体がAGE3を追い詰める

ミサ「危ない!」

脚部のミサイルポッドから小型のミサイルの雨を降らし、マモルの背後を襲いかかる機体へと牽制した

???「なんだ、お前も来てたのか」

ブリッツガンダムは突如現れた機体 デュエルガンダムアサルトシユラウドへと声をかける

この2機は仲間だろうか?

???「言われた通りに従え、我々の目標はストライクを落とす事だろ」

???「あいよ、それじゃあ作戦通りに行きますかあ!!!」

今度は目標をユウキのパーフエクトビルドストライクに変え、再びミラージコロイドを起動させて姿を消す

ユウキ「今度は俺か！ 上等だ!!!」

パーフエクトビルドストライクは再びシユベルトゲーベルに手をかけて臨戦態勢へと入る

ユウキ「透明になろうが… 見つけてやるぜ！」

???「ほーん、そんなこと言いながら後ろがガラ空きだぜ」

姿を現したブリッツガンダムは背後へ回るとビームサーベルを握りしめて背後より襲いかかった

ユウキ「おらああああああ!!!」

当然、ユウキもただでやれる訳には行かない

ブリッツガンダムのビームサーベルを、振り向き様にシユベルトゲーベルで弾き返してそのまま右脚で強烈な蹴りを入れる

???「なっ!? 蹴りを… がああああ!!!」

パーフエクトビルドストライクの蹴りの凄まじい衝撃を示すように、ブリッツガンダムの胴部分には凹みが生じる

???「よくも、仲間を!!!」

デュエルガンダムはブリッツガンダムの仇と言わんばかりに迫り始める

しかし、ミライのダブルオーライザーがユウキへは向かせわせまいと立ちはだかる

ミライ「君の相手は僕だ」

ミライのダブルオーライザーはGNソードIIを構えて、デュエルガンダムへと臨戦に入る

???「邪魔を…！ しかし、時間は稼いだ…」

ミライ「これ以上… 仲間を傷つけさせるか!!! トランザム!!!」
両肩の太陽炉からGN粒子を放ち、ダブルオーライザーは更に凄ま

じい性能を持つ機体へと変化する

???「本当に愚かだな… 私達はタダの時間稼ぎだと言うのに！

逃げるぞ！」

ミライ「逃がすか！」

ダブルオーライザーはバーストアクションの発動体勢へと入る
GNソードIIを高く上げると、何かと見間違える程の大きさの超
巨大ビームサーベルへと変化する

ミライ「バーストアクション…！ ライザーソード!!!」

???「デュエルガンダムは失つてもいいが… ブリッツガンダムだ
けでも守らなくては…！ お前は行け！」

???「お、おう！サンキュー！」

ミライ「おりやああああ!!!」

ライザーソードによる巨大な一撃はデュエルガンダムを容易く飲
み込む。

同時にダブルオーライザーのランザムが解除され、かつてデュエ
ルガンダムがいた場所には真つ二つになったデュエルガンダムが転
がっていた

……………

ユウキ「あいつら… 一体何が目的で…」

カドマツ「さあな… ただ、あの空間に居たという事はウイルス
に関わってる奴らかもな それは調べて見よう」

イラト婆ちゃん「おい、アンタら 何かアンタに変われってさ」

イラト婆ちゃんは店の奥から電話の子機を持ってカドマツへと渡
す

誰だろうか？

カドマツ「電話…？ ハイムロボテイクスから俺の携帯な筈だ
が… …… もしもし」

「久しぶりだな、彩渡商店街ガン普拉チーム」

カドマツ「誰だお前？」

電話の相手の声はまるで機械音の様な声となっており、一体相手が
本当に人間なのかすら分からない

「私が送ったトイボットを受け取ってくれて助かるよ」

カドマツ「これ、アンタのだったのか？」

「ああ、私のだ 私が君たちへのお別れの意味も込めて送ったも
の…」

カドマツ「お別れ…？ なんの事だ？」

「ハイムロボティクスの商品には気をつけたまえよ」そして永遠にさようならだ」

電話の相手はそう言い残して電話を切る

カドマツ「商品に気をつけろ… お別れ…？ まさか！

お前ら！そのトイボットから離れろ！！」

ユウキ「へ？」

カドマツ「婆さんも！ 入口に向かって走れ！速く！！」

マモル「お、おう！とりあえず入口に向かって…！」

突然、トイボットの目に光が灯ると同時にカチカチ音を鳴らし始める

カドマツ「…！ なんて事しやがる…！！」

カドマツの言葉と同時に、トイボットのコマンドガンダムは閃光を放つと爆発する

どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおんんんんんんという爆音と共に、彩渡商店街を爆風が包み込む

続く

ガンダムブレイカーズACE 第11話 影／カズ
マの本気

爆風によつて壁へと叩きつけられたユウキ

視界はゆらぎ、思うように手が動かない

ユウキ「カハツ… ハア… ハア ミサあ！ マモル！ ミラ
イ！」

返答がない 今出せる全力の声を出している筈なのに

衝撃で割れたガラスの破片は体に突き刺さり、至る所から血が出て
いるが不思議と痛くはない…

感覚が麻痺しているのだろうか

ユウキ「クソ…！」

ユウキの視界からはボロボロになったゲームの筐体や大破したガ
ンダムバトルシュミレーターが見える

ユウキ「！」

何とか体を起こしてシュミレーターの方へと近づく

ユウキ「俺の… ガンプラが…！」

シュミレーター付近にはバラバラになったガンプラ。

ユウキ「これは… アザレアの脚… これはダブルオーライ

ザーの頭… これはAGE3の腕… これは…」

手で拾い上げたガンプラは ”恐らく” ビルドストライクの頭

だろうか 原型を留めていない

ユウキ「なんだよ… ふぎけんな…！」

ユウキ「折角… 立直せたのに… 彩渡商店街に人が戻つ

てきたのに…！」

バラバラになったガンプラを強く握りしめ、ユウキの頬を涙が伝う
ガラスの破片も混じっていたようで、ユウキの手からは血が流れ始
めた

ユウキ「チクシヨオオオオ!!!」

ユウキは、ボロボロになったシユミレーターへと何度も頭を叩きつける

今度は頭を切ったようで、おでこを血が伝う

ミサ「ユウキ君！」

ようやくユウキを見つけたミサは少し怪我をしていた

ユウキ「俺たちが何したってんだよ……！」

ミサ「ユウキ君！落ち着いて！」

ユウキ「俺は……ミサと……折角この商店街を盛り上げたのに……！」

ミサ「良いんだよ……！　また2人で立直せば……　だから！自分を傷つけるのは、もう辞めてよ……！」

ミサは泣きながらユウキを後ろから優しく抱きしめた

……

マチオ「おーい!!大丈夫かお前ら!!!」

マチオは瓦礫をどかして店内にいた人間の安否を確かめる

ミヤコ「ミサちゃん！ユウキ君ー！」

ユウイチ「ミサーー！」

爆発当時店は殆ど貸切状態だったため、カドマツとイラト婆ちゃん、そしてミライ、マモル、ユウキ、ミサの6人しかいなかった

ミサ「お父さんの声……」

ユウキ「まずは……ここから出よう……」

ミサ「うん……！」

何とか立ち上がる2人は二人三脚の様な感じで入口へ歩き出す

マチオ「イラト婆ちゃん！　大丈夫かアンタ!？」

イラト婆ちゃん「あんまり私を見くびるんじゃないよ！私は不死身だよ……」

イラト婆ちゃんは相変わらずの様子

マモル「ハアハア……　死ぬかと思っただぜー！」

ミライ「本当……　カドマツさんの呼びかけのお陰です……！」

カドマツ「お前らが無事でよかったよ……　後はミサとユウキ

だ……！」

……

ミサ「うわ！」

歩いている最中、ミサは何か足が引つかかり転ける

ミサ「痛た……!!!」

ユウキ「ミサ……大丈夫か？ どうし……!!!」

2人の視線の先には目から灯りの消えそうなインフォちゃんが倒れていた

ミサ&ユウキ「インフォちゃん!!!」

2人は駆け寄り、反応を確かめる

ミサ「インフォちゃん！ しつかりして！」

ユウキ「大丈夫か!? インフォちゃん！」

インフォ「ミ……サ……さ……ん ユ……ウ……

キ……さ……ん」

今にも消えそうな声で2人の名を呼ぶ

ミサ「インフォちゃん!!!」

インフォ「ま……た……の……来店……お

待……ち……し……てま……す」

ミサ「インフォちゃん!!しつかりして!!」

ユウキ「ツ……！」

いつもユウキ達が店を出る際に呼びかけていた言葉……

その言葉を言うのと、インフォちゃんの目からは灯りの消えた

ユウイチ「ミサ！ ユウキ君!! 大丈夫か!？」

ミサ「お父さん……!!! ウウツ…… うわあああん!!!」

何とかして店内へと入ってきたユウイチを見つけたミサは声を上げて泣きながら、父のユウイチへと抱きつく

ユウイチ「ミサ…… 良かった……！生きててくれて……」

ミサ「うわあああああん!!!」

……

何者かによって送られたトイボットによる爆発事故

ハイムロボティクスはこの件に付いて責任を負い、トイボットの生産を一時終了することを決定

これだけでは事は終わるはずもなく、ウイルスの媒介となっていたガンプラバトルシユミレーターの廃止の世論も出始めたようだ。

そしてその被害を被った彩渡商店街、

伸びていた客足も爆発事故の影響で再び減り始めてしまい、再び彩渡商店街はシャッター街になるかもしれないという不安が産まれてしまった

更にはシユミレーターを巻き込んだ爆発の為、4人のガンプラも爆発に巻き込まれてしまった

ユウキのパーフエクトビルドストライクは跡形もなく大破、マモルとミライのAGE3、ダブルオーライザーも大破した。アザレアは爆発地点から少し離れていた為、半壊で済んだがそれでも両腕両足を失った

かつて宇宙エレベーターの事故から生還した2人を更なる脅威が襲いかかり始めようとしていた

.....
くヒグチホビーパークく

彩渡商店街で爆発事故が起きている中、創介学園ガンプラバトル部部長のカズマは三人組のファイターに襲撃されていた

.....
タツキ「この前は... 糞ガキ共にやられたが！ 貴様1人なら俺たちで!!!」

少し前にガンプラ盗賊団として暴れていた三人組
今度はカズマのガンプラに目をつけたようで、負けたらガンプラを奪うというルールの元、ガンプラバトルを仕掛けていた

タツキ「いけ、リユウ！ジュン!!」
2人「あいよ!!!」

リーダーのタツキの呼びかけで黒いゲルググJと紫色のザクはカズマの機体へと襲いかかる

カズマ「うちのチームメンバーと同じ名前か...」

棒立ちの魔王バルバトスへと先陣を切ったのは紫色のザクだ。
ジュン「頂くぜえ！お前のガンプラー！」
飛びかかり、バルバトスへとビームアックスを叩き込む

筈だったのだが…

ジュン「な、何イ!?」

カズマ「あまり俺を怒らせない方がいい…」

飛びかかって来たザクの胴をバルバトスのメイスは容易く貫く

カズマ「飛んでけ」

ザクが突き刺さったままのメイスをぶん回すと、仲間のゲルググJの元へとぶん投げる

リュウ「やめろお！こっちにくるなあああ!!!」

ジュン「うわああああ!!!」

ザクの体はゲルググJへと命中し、衝撃により地面へと叩きつけられた

リュウ「お、おい！早くどけ!!!」

ジュン「このメイスのせいで立てないんだよ!!!」

リュウ「バカヤロー!!!」

口喧嘩をしている2機の元へと対ビームコーティングマントを靡かせて近づく

赤い両目はキラリと光ると、ゲルググJのツインブレードを持つ

ジュン「ヒ、ヒイ…！ 悪魔だあ!!!」

カズマ「悪魔じゃない、”魔王”だ」

ツインブレードは重なり合った2機へと突き刺して後ろへ下がる
と、落ちていたザクのザクバズーカを放って大破させた

タツキ「お前らあああ!!!」

カズマ「ふん…」

タツキ「よくもおおおお!!!俺の仲間を!!!」

怒りに燃えるタツキのAGE2ダークハウンドX1はドツズランサーを構えて突き進む

タツキ「てめえにはとびつきりの電流を味わせてやるよ…!!!」
カズマ「なぜ俺が… 天才ファイターと呼ばれたか…
それは…!!!」

メイスを大破した2機から引き抜くとバルバトスは姿を消す
タツキ「どこ行きやがった…!!」

カズマ「史上最少年で 覚醒 したファイターだか、だあ
ああ!!!」

紫色のオーラを纏う魔王バルバトスは、いつの間にかタツキの背後
へと回ってメイスの横殴りを直撃させる

直撃した反動で吹き飛ばされたダークハウンド。

タツキ「クソ… また糞ガキにやられるつてのかよ…!!!」

カズマ「ククク… ヒヤハハハハハ!!!」

タツキ「!?!」

先ほどとは性格が反転したような笑い方をするカズマ

カズマ「言い様だよ… 人のガンプラを奪って喜ぶようなゴミに
はなあ! ヒヤハハハハハ!!!」

タツキ「二重人格か?…!!」

カズマ「あ? まあそんな感じかもな! さあて…

ゴミはゴミらしく無様に死ね」

ダークハウンドの方へとメイスを突きつける魔王バルバトス。

タツキ「まだやられるか…!」

2本のビームサーベルを引き抜いたダークハウンドはメイスの一
撃を受け止める

カズマ「大人しくやられとけよ…!!!」

タツキ「やられるのはテメエだ…!!!」

メイスとビームサーベルによる罅迫り合い…

一歩も引かない2機…

カズマ「チツ…」

突然、後ろに向かつて飛ぶ魔王バルバトスは紫色のオーラが消えか
ける

カズマ「あーあ一旦終わりかよ つまんね…」

魔王バルバトスを包んでいた紫色の光は完全に消えると

カズマ「ハッ……！ また俺は暴走を……」

タツキ「（とんでもねえ…… こんな奴とやり合ってたら ガンプ
ラ破壊されちまう……!!!）」

ダークハウンドは飛行形態へ姿を変えると、

タツキ「に、逃げるが勝ちだああああ!!!」

そう言い残してシュミレーターからログアウトした

カズマ「……？」

………

「まーた彩渡商店街、面倒なことに巻き込まれてんな」

男は喫茶店でニュースをみながらそう呟く

「それにしてもあのオッサン…… もう引き返す気は無さそうだな……」

そう言い残して男はコーヒーを飲み干すと、店を出た

「また出てくるってんなら…… 今度こそ償わせてやる」

続く

ガンダムブレイカーズACE 第12話 二人のライド

ユウキは一人、居候させて貰っているミサの実家の模型屋で頭を抱えていた

突如起こった差出人不明のトイボットによる爆発事故…

当然影響は大きく、彩渡商店街の客足は再び減ってしまい再び商店街はピンチを迎えようとしていた。

ユウキ「…ッ！」

何も出来ない自分が憎い 商店街を狙った奴が憎い… 憎い憎い憎い…

そう思い詰めるユウキは憎悪に駆られる

ガンプラを失った今、出来ることは無いのだ

ミサ「ユウキ君、カドマツさん来たよ…」

ユウキ「今行く…」

………

カドマツ「この前は悪かった…！」

ユウキとミサの顔を見たカドマツは深く頭を下げる

ユウキ「顔上げてよ… カドマツさん」

カドマツ「俺がお前達に助けを求め無ければ… こんな事には…！」

ミサ「いいんだよ… カドマツさん また私達で盛り上げるから… この商店街を…」

カドマツ「だが…！」

ユウキ「そつちも… 本当は俺達のこと心配出来る程暇じゃないんだろ…？ 知ってるよ、トイボットが生産中止になったこと」

ユウキの言う通り、トイボットは爆発事故による影響で

、ハイムロボティクスは生産中止の決定をした

その他のロボットもウイルスによる影響が懸念され政府立ち会いの元、現在も会社への捜査が始まっている

例え、ハイムロボティクスが白だとしても… トイボットやその他ロボットの製造は止められてしまっている現状、売上にも影響が出るだろう。

ユウキ「それに、俺はあんな事じゃ… 諦めねえ 絶対商店街を

狙った奴を見つけてぶつ倒す…！」

「相変わらずだな… お前は」

3人「!?!」

どこかで聞き覚えのある声を聞いた3人は声の主へと視線を移す

ユウキ「お前…！」

リュウジ「よお」

リュウジ… 死神などと呼ばれていた男、リージョンカップではユウキのパーフェクトストライクとの死闘の末敗北、その後パーフェクトストライクを破壊するなどユウキからしたら天敵でもあった。

その後は世界大会で再び再開、決着の途中に命令に背いた事に激怒したサイバーコーポレーション社長 カワグチによる妨害ではまさかの共闘で、暴走を続けるトールギスXX5を撃破した。

ネオジオングとの最終決戦では、亡き相方 04に託された暗黒騎士ギャンRで参戦した後は姿を消していた

その男がなぜ今ここに… ユウキは困惑と少しばかりの憎悪と再開の喜びがあった

ユウキ「何の用だ…！」

リュウジ「おいおい… そんなカツカすんなよ 久々の再開を喜び合おうぜ」

ユウキ「分かったから で、何の用だ？」

リュウジ「 ほらよ、」

リュウジはユウキへ何かを投げ渡す

ユウキ「これ…！」

リュウジ「ガンプラねえんだろ しばらくそれ使ってる」

リュウジが渡したのはガンダムF91とクロスボーンガンダムX1を組み合わせたガンプラだった

ガンダムFX91
頭 ガンダムF91
胴 クロスボーンガンダムX1
腕 ガンダムF91
脚 クロスボーンガンダムX1
バックパック クロスボーンガンダムX1
シールド ABCマント

リユウジ「これで、”あの時”の恨みは終わりだろ？」

ユウキ「勝手に決めんな!! 　でも、ありがとな…！」

リユウジ「ふん…！」

ユウキは少しばかりあの時の事… パーフエクトストライクを破壊されていた恨みを引き摺っていたが、リユウジのまさかの行動に少し喜んでいた

カドマツ「で、要件はそれだけか？お前が来るって事はまだ他にもありそうだが…！」

リユウジ「ああ、お前らに教えといてやるよ」

リユウジは模型屋のフリースペースに足を組んで座る

リユウジ「この商店街を襲った奴についてな」

3人「…!!!」

ユウキ「知ってんのか…？」

リユウジ「逆に気付かねえのかよ… 俺はすぐ分かった

カワヅチのおっさんだ…！」

3人「!?!?!」

ミサ「でも、自殺したんじゃ…！」

ユウキ「遺体も見つかったって聞いたぞ！」

リユウジ「ハア… 頭ユニバースかよ… あいつの会社は宇宙工

レベーターに関わっただけじゃねえ…！」

カドマツ「…！ アンドロイド…！」

リユウジ「正解〜！」

リュウジは指を鳴らしてカドマツの方へと人差し指を向ける

カドマツ「アンドロイドで自分そっくりなものを作ってから死んだように見せたって言うのか!? 流石にバレるだろ…」

リュウジ「じゃあ聞くが、素人目で03と04がアンドロイドって見分けつくと思うか? そりゃアンタは仕事柄ロボットをよく見るだろうからすぐ分かると思うがな」

カドマツ「確かに… 言われてみればそうだな…」

ミサ「私も言われないと気づかないかも…」

ユウキ「??」

リュウジ「それに、あのオッサンはお前らに恨みを持つてる筈だ
当然あの金髪のいけ好かない奴にも そして俺にも」

五年前… 世界大会中にウィルと計画の邪魔をする彩渡商店街ガンプラチームの命を狙い、バイラスとカワグチで作成したウィルスで決戦の地 宇宙エレベーターを強制的に引き離し、宇宙の彼方へと葬るという計画が行わようとしていた

しかし、彩渡商店街ガンプラチーム ウィル、そして今まで戦ってきたファイター達の協力の元、何とかウィルスを根絶することに成功。

バイラスは捕まり、カワグチは逃亡を続けている

自殺したというニュースが世間を騒がせる中、もし本当に生きているなら確実に狙っては来るだろう…

ユウキ「それなら… あの時の2人は…」

ユウキはトイボットのウィルス殲滅中に出会ったブリッツガンダムとデュエルガンダムを思い出す

リュウジ「どうやら単独で動いている様じゃないな… まあい

い、分かったことがあったら伝えてやる ほらよ」

リュウジは紙の様なものをユウキへ投げつける

投げつけてきた紙には数字のようなものが書かれていた

リュウジ「俺の電話番号だ 覚えておけ」

リュウジはそう言い残して店から出ていく

リユウジという新たなる強大な戦力を得たユウキ達は、彩渡商店街を狙った敵へと対抗する想いが生まれた

.....

カズマ「遂に...この日が来たか...」

カズマは鏡に映る自分を見ながらそう呟く。今日は聖騎学園との練習試合...

昨年の優勝校との練習試合となつてくると、カズマもクールさを欠いてくる

陸宗との練習試合ではこれまで愛用していたグフカスタムを失つてしまったが...

カズマ「行けるはずだ...俺なら...」

魔王バルバトスを見つめ、カズマは気合いを入れる

「行けるはず...ねえ...」

カズマ「出てくるな...!」

「そう怒んなよ 誰がお前を天才ファイターと呼ばれるまでにしてやった?」

カズマ「お前なんか居なくても...俺は!」

「ハハハ!傑作だ! 仲間も救えないような奴に、何が出来るんだよ...」

その一言で、カズマの脳裏にはあの時の光景が浮かぶ

目の前でズタズタにやられていく仲間...そしてそれを救うことが出来なかった自分...

脳裏に浮かぶ光景でカズマを吐き気が襲う

「お前は無力なんだよ... 父親はお前を見捨て、仲間はお前から去っていった... 俺が居なきや覚醒も使えねえ... 何が出来るんだ?」

カズマ「うるさい... うるさいうるさいうるさい!!! 俺から消えろ!!!」

「俺はお前自身... お前が作り出した影だ 今のお前には俺は消せねえよ...」

カズマ「何なんだよ...! クソが...!!!」

カズマは洗面台の物を薙ぎ倒す

「ハハハハハ!!!」

謎の声は嗤いながら消えていく

カズマは吐き気を抑えながら、蛇口を全開にすると顔を水で濡らした

「カズマ...?」

洗面台の鏡には、カズマの背後に立つ1人の女性が映し出される

カズマ「ごめん... 起こしちゃった...? 母さん」

女性はカズマの母親、ユミだ。

ユミ「凄い叫んでたけど... 大丈夫...?」

カズマ「いやー嫌なこと思い出しちゃって! 俺は大丈夫だから!

母さんこそ大丈夫? ご飯ちゃんと食べた?」

ユミ「うん! カズマが作ってくれた朝ごはん美味しかったよ」

カズマ「それなら良かった... あっ! もうこんな時間! 母さ

ん、それじゃあ行ってくる! なんかあったら連絡して! 後、昼頃に

叔母さん来るって言ってたから!」

ユミ「怪我しないでねー!」

ユミは家から出ていくカズマの背後を見つめながら、叫んだ

ユミ「ゴホッ...! ハア... ハア...」

少し無理して声を出しすぎたのか、ユミは咳き込んだ

.....

くヒグチホビーパーク」

カズマ「待たせたな、3人とも」

レイ「おはようございます!先輩!」

既にレイ、タツキ、ユウシは集まっており、カズマの到着を待っていたようだ

レイ「聖騎学園の方は既に準備完了みたいです。俺達も行きますよ
う!」

カズマ「そうだな... それじゃあ行こうか、3人とも!」

3人「了解!!!」

レイ「AGE2 ダブルバレット レイ、行くよ！」

タツキ「FAライトニング タツキ、出るよ！」

ユウシ「デユナメスGNHW/R ユウシ、いくぜ！」

カズマ「魔王バルバトス… 出る」

キョウヤ「白騎士トールギス 出るぞ！」

リン「キョウヤ様をお守りするのだ！行くぞ！」

モブA、B「ハッ！」

前回優勝校 聖騎学園 VS 創介学園の2チームによる戦いが
遂に始まる

.....

ユウキ「すげえ……みんなガンプラ変わってる！」

ユウキの言葉の通り、ほかの3人のガンプラは前のは変わっている部分が多々見られ、カズマに関してはガンプラが変わっていた

タツキ「へへッ！これが俺の新しいガンプラ、FAライトニングガンダム！」

かつてのスタイリッシュなデザインとはかけ離れた重厚感のあるガンプラ、頭のライトニングガンダムと胴のストライクフリーダムは過去に使用していたライトニングストライクとは変わらないが、腕はEX-S、脚はファッツ、バックパックはアストレイブルーフレームセカンドLと、速さを捨てて攻撃力を増したガンプラへと姿を変えた。

更には肩部にビルダースパーツで、ウイングバイダーを装着させているなどてんこ盛りだ。

カラーリングも白を基調としており、所々にライトニングガンダムをイメージした青が見える

ユウシ「俺だって！俺だって！」

ユウシのガンダムデユナメスも少しばかり変化がある。

過去にレイのピンチを救った時は何も改造していないノーマルのデユナメスだったが、現在は腕と脚にケルディムガンダムGNHW/

Rのパーツを使用し、GNシールドピット

などを使用出来る他に、こちらもビルダースパーツで右肩に対艦ビームランチャーを装着させており、遠距離での支援が更に強力になっている

タツキ「先輩のは… 何だか、禍々しいですね…」

カズマ「カッコイイだろ？」

ユウシ「いやー… 厨二…」

カズマ「オホン！ 俺もグフカスタムも失ってからどうするか悩んでいたが、この機体案が浮かんでな。」

レイ「やつぱり… グフカスタムは…」

カズマ「ああ… 思っていたよりダメージが深刻でな。 だが、何時か必ず蘇らせるさ それより、あのフォーメーションが来るぞ！」

カズマの機体の向くほうからは3機のギャンがこちらへと迫ってきていた

リン「フォーメーショントライデント… 行くぞ！」

モブA、B「了解！」

両端の白いギャンの間を、真ん中のカスタムされているギャンが先頭へと立ち、三角形のようなフォーメーションで迫ってきていた

リン「キョウヤ様から託された… 白騎士ギャン…！ これを活かして聖騎学園に勝利を!!!」

頭と胴はギャン、腕はデナン・ゾン、脚はローゼンズールという編成で組まれた白騎士ギャンはGNランスを片手に創介学園の4機を狙う。

カズマ「俺は奴らの対象をやる… お前達は奴らを頼むぞ！」

レイ「危なくなったら知らせてくださいよ！ すぐに向かいます！」

カズマ「心強いな… さあ！創介学園ガンプラチーム、戦闘開始だ！」

ユウシ&タツキ&レイ「了解!!!」

……
リン「キョウヤ様の元へは向かせない……！」

魔王バルバトスの目的が自分達ではないことを察したリンはGNランスをライフルモードへと変形させ、魔王バルバトスへと狙い打つユウシ「ライフルにはライフルだ……！ 狙い打つぜ！」

カズマ「こいつは任せた！」

高く飛んだ魔王バルバトスの背後には、GNスナイパーライフルを構えたデュナメスGNHW/Rの姿があった

リン「なッ……!!」

GNスナイパーライフルの弾は綺麗な直線を描き、白騎士ギャンへと襲いかかる

リン「このオ……！」

咄嗟にビームシールドを展開して事なきを得た白騎士ギャン、狙いはデュナメスGNHW/Rへと移る

ユウシ「簡単には落ちてくれないか！」

モブA「キョウヤ様の元へは！」

待ち構えていた白い普通のギャンは、専用ビームサーベルで魔王バルバトスへと襲いかかる。

カズマ「隊列を崩していいのかい!!」

当然、魔王バルバトスはその一撃をメイスで受け止めて2機は罅迫り合いになる

タツキ「先輩！そいつは俺が！」

罅迫り合いになっている2機の上空へと佇むFAライトニングは、タクティカルアームズをガトリングへと変形させて弾丸の雨をギャンへ降り注がせる

カズマ「ナイスタイミング！」

タクティカルアームズによる弾丸の雨に怯んだギャンの隙を突いた魔王バルバトスは専用ビームサーベルを弾き飛ばしてメイスでギャンへと横殴り命中させる

想定外の一撃にギャンのファイターは混乱しているようだ。

モブB「まだ俺がいr… がああああ!!!」
喋っている途中のモブBへと、どこからか放たれたキャノンの一撃が命中した。

レイ「こっちはお任せを！ 先輩は敵の大将の方へ！」

ノーマルだったAGE2はダブルバレットへと変化しており、先ほどの攻撃はレイによるものだったとカズマは理解した

カズマ「助かるぜ！ さあ、敵の元へ…」

キョウヤ「私の元へ向かう必要は、無い」

カズマ「恐ろしいな、いつの間に俺の背後にいた…？」

カズマが下の方を見ると、魔王バルバトスの胴体を専用ビームサーベルが貫いていた

キョウヤ「天才ファイターと呼ばれていたから期待したが…とんだ期待はずれだ…」

???「俺は知ってたぜ…！」

魔王バルバトスから全く違うトーンの声が聞こえてくる

キョウヤ「…!?」

カズマ「出て… くるな…!!!」

???「おいおい… 折角手助けしてやろうと思ったのによお…」

カズマ「お前の方なんて借りなくても…！」

???「そうやって過信して、また仲間を失うのか？」

カズマ「ツツツ!!! お前…!!!」

自分の胴体から専用ビームサーベルを引き抜き、投げ捨てるカズマ。

冷静だったはずの先ほどとは違い、かなり取り乱している

キョウヤ「よく分からないが… ただ倒すのみ…！」

白騎士トールギスは投げ捨てられた専用ビームサーベルを拾い上げ、風雲再起の脚で魔王バルバトスへとビームサーベルを掲げて迫っていく

カズマ「負ける訳には… … ツツツ!!! 覚醒…！」

魔王バルバトスの両目が赤く光るその瞬間、紫色のオーラを纏い始める

キョウヤ「…ッ!? なんだこのオーラは… まさか、覚醒か…!? だがあ!!!」

白騎士トールギスはオーラを纏ったまま動かないバルバトスへと専用ビームサーベルで斬り掛かる

が、その場には魔王バルバトスの姿はない

「どこ見てんだ 俺（様）はこっちだ」

カズマの声と先ほどのもう1人の声が合わさり、白騎士トールギスを挑発する

レイ「先、輩…?」

遠くからその光景を見るレイは禍々しいオーラを放つバルバトスへと恐怖感が生まれる

タツキ「アレが…!」

ユウシ「覚醒なのか…?」

リン「キョウヤ様!」

白騎士トールギスの背後に回った魔王バルバトス、メイスを白騎士トールギスへ向ける

カズマ? 「「さあ…! 今度は俺（様）の番だ」

続く

ガンダムブレイカーズACE 第13話 囓う影

懐かしい夢を見た――

家族4人で何処かへ行く夢、親友と遊ぶ夢

双子の弟とはしゃいで親に怒られたり――

いつまでも、この輝かしい夢は続く

そう信じていた

あの日までは

.....

ユウシ「いい加減に...落ちろ!!」

デュナメスGNHW/RはGNスナイパーライフルで幾度となく攻撃を避け続ける白騎士ギャンにしびれを切らし、ライフルピットを展開した

リン「ッ...!」

ライフルピットによる全方位攻撃は白騎士ギャンを的確に狙い、確実にダメージを与えていく

その上、数も多い 1個ずつ撃ち落とすとかなりの時間がかかる

ユウシ「オマケだ!コイツも喰らえ!」

ライフルピットに苦戦しているリンの機体の元へと、今度はGNミサイルの雨が降りかかる

リン「きゃああああ!!」

ユウシ「よっしゃ!これで落ちただろ!」

シユミレーター内部でユウシはガッツポーズを決める

リン「この程度でやられては...! 親衛隊の名が廃る...!」

ユウシ「おいおい!まだ来るのか!」

ポロボロになった白騎士ギャンはGNランスを片手に、デュナメスGNHW/Rへと向かっていく

リン「EXアクション...!」

EXアクションの掛け声と共にギャンは高く飛び上がると、デユナメスGNHW/Rの方へ向けてGNランスを構えた

リン「ソニックブラスト!!!」

猛烈なスピードで急降下するギャン

ユウシ「今度こそ落としてやるぜ……！EXアクション！」

負ける訳には行かないユウシ、デユナメスGNHW/RはGNスナイパーライフルを構えEXアクションの体制に入る

ユウシ「パーツ事……！ はじけ飛べ！ ステインガーシュー……!!!」

GNスナイパーライフルから放たれたEXアクションの一撃は白騎士ギャンを貫く

リン「たあああああああ!!!」

急降下するギャンは崩れ落ちながらもGNランスを変わず構え、デユナメスGNHW/Rを狙う

衝撃波が巻き起こり、辺りを砂煙等が舞う

ユウシ「あーあ……」

リン「チツ……」

2人のコックピットの画面にはGAMEOVERの文字
同時に倒れた様だ

ユウシ「後は…… 3人に任せるか……」

……

カズマ「勝手に…… 出てくるな！」

カズマ？「いいから…… 俺様に任せとけて……！」

魔王バルバトスはメイスを握り、白騎士トールギスへと向かってい

く
キョウヤ「大した事無いと思っていたが…… 面白い……」

！ 貴様の力をこの私に見せてみる!!!」

白騎士トールギスも専用ビームサーベルを握り、魔王バルバトスへ

と進んでいく

カズマ? 「はああああああ!!!」

キョウヤ 「とりやああああああ!!!」

2人の叫び声と共にメイスとビームサーベルはぶつかり合う

カズマ? 「覚醒した俺の力を… 舐めるなあああ!!!」

バルバトスは再び紫色の光を放つと、瞬間移動の様な速さで白騎士
トールギスの背後へと回る

キョウヤ 「ぬう…!?!」

間髪 ミサイルシールドで防いだ白騎士トールギスだったが、バル
バトスの猛攻にとてもシールドが耐えきれぬ様子はない

このまま行けば押し切られるであろう

キョウヤ 「この… 悪魔め…!!!」

カズマ? 「悪魔…? 褒め言葉だあ…!!!」

バルバトスは両目を赤く光らせると再び、凄まじい程のスピードで
猛攻を仕掛ける

カズマ? 「まずは… テメエのその脚をへし折ってやるぜ!!!」

魔王バルバトスはメイスを白騎士トールギスの脚パーツ 風雲再

起へ向けて叩きつける

キョウヤ 「ぐああああ!!!」

左前脚をへし折られた風雲再起のパーツはバランスを崩す

カズマ? 「まだまだあ!!!」

続いて風雲再起の右後ろ脚を折る

キョウヤ 「これ以上は… させるかああ!!!」

白騎士トールギスの苦し紛れに放ったビームサーベルの一撃は、バ
ルバトスの右腕を切り落した

カズマ? 「… テメエ!!!」

右腕がやられた事に怒るカズマ?

同時に紫色の光が消え始める

カズマ? 「チツ… 本体様のスペックが俺に追いついてねえ…

テメエはいつか殺す」

魔王バルバトスが纏っていた紫色の光は完全に消え、いつも通りの魔王バルバトスとカズマに戻る

カズマ「…っ！ やつと戻った…」

光を失っていたカズマの目は自我を戻すと同時に、目に光が戻った
キョウヤ「はああああ!!!」

しかしキョウヤは止まったその隙を突いて襲いかかる

カズマ「なっ…!?」

反応に遅れたカズマは防ぐことも出来ず、白騎士ツールギスによる攻撃を許してしまう

キョウヤ「貰ったああああ!!!!!!」

レイ「危ない!!!」

強襲された魔王バルバトスを守ったのはレイのAGE2ダブルバレットだった

白騎士ツールギスのビームサーベルを、2本のビームサーベルで受け止めた2機は鏝迫り合いになっている

レイ「遅れました先輩!」

カズマ「レイ!」

キョウヤ「他の2人は…!」

レイ「アンタの仲間なら…」

……………

タツキ「お前らの攻撃なんて当たらないって!」

モブA「舐めやがって…!」

モブAのギャンは挑発しながら2機の攻撃を避け続けるF Aライトニングを追いかけていた

タツキ「鬼ごっこもそろそろ終わらせとくか……！」

急停止し、振り向いたF Aライトニングはハイパーメガランチャーを構える

モブB「まさか……！」

タツキ「俺の誘いに乗ってくれてサンキュー!!! 落ちろ!!!」

ハイパーメガランチャーから放たれた一撃は2機のギャンを呑み込み、同時に2機は落とされる

………

キョウヤ「私の仲間が……！」

上空で爆散する2機のギャンを見つめ、キョウヤは目の前のA G E 2を睨む

レイ「後はお前だけだ！」

レイは2本のビームサーベルでツールギスの攻撃を跳ね返し、肩部のツインドツズキャノンを構える

レイ「行つけええええ!!!」

超高出力のビームを白騎士ツールギスへ向けて解き放つA G E 2。勝ちを確信するレイの期待を裏切るよう、白騎士ツールギスは爆煙の中から飛び出し、A G E 2へビームサーベルを突きつける

レイ「あれでも……やられないってのか……！」

キョウヤ「創介学園……。決着は大会で付けるとしよう」

カズマ「望む所だ。」

制限時間が一杯になったことを示すようにステージに終了の合図が鳴り響く

………

カズマ「アイツを倒すことは無理だったが……よく頑張ってくれた！お前達」

最後の1機、白騎士ツールギスを倒すことは叶わなかったが何とか親衛隊を落とすことが出来、中々の結果にカズマ達は喜んでいて。一人を除き

ユウシ「あゝあゝあゝあゝあゝ!!!俺だつてほーんの少し反応が速けりや倒せたのにいいいい!!!」

レイ「まあまあ… 一応相打ちつて言う判定なんだし…」

ユウシ「くそー!!!」

タツキ「先輩も凄かったです！まさか覚醒が使えるなんて！」

カズマ「まあ… まだ上手く使いこなせて無いけどね」

レイ「まるで人が変わったみたいになってました！本物の魔王みたいな！」

カズマ「アハハ…」

”人が変わったみたい” か… あながち間違いじゃないかもな…

傷ついた魔王バルバトスを握りカズマはそう思った
……………

「失礼します。」

左目が髪で隠れた白髪の少年は奥の部屋で椅子に腰掛ける老人へとそう言った

???「報告をしろ。」

「はい。爆弾を内蔵したトイボットは予定通り彩渡商店街で爆発しました。怪我人等はまだ分かかっていませんが、あの距離で爆発すれば絶望的かと。」

???「奴らを甘く見るな。恐らく呑気にまだ生きているだろう…

まあいい。彩渡商店街はこれで再び寂れた商店街に逆戻りだ…！」

「後は…」

???「ああ、私の本来の狙い… タイムズユニバースへも送りつけろ」

「了解しました。」

???「ウイルス…！ それに… 彩渡商店街…！ まずは貴様の大切な物から奪ってやる…！ ふ… ふはははははははは!!!」

高笑いする男の近くにはプロヴィデンスガンダムのカスタム機体

が置かれていた

：??? 「逆襲の始まりだ……！」

続く

ガンダムブレイカーズACE　　学校対抗ガンプラ
大会　　

ガンダムブレイカーズACE　第14話　開幕

カズマ「遂に来たか…　この日が。」

カズマはカレンダーを見つめて呟く

カレンダーの今日の日付には赤い字で、学校別対抗戦と書かれてい
た

全国の高校のガンプラ部が最強を目指して戦うこの大会。

優勝すれば全高校の頂点の称号と共に、ジャパンカップへのシード
権が与えられるため、熾烈な争いが行われる

カズマも1年生からずっと参加をしているが、ずっと1人で参加し
ていたために初戦落ちが2年続いていた。

カズマも遂に3年生となり、今年で卒業してしまう

何としても今年は勝たなくては行けない…　そう思い今年はメ
ンバーの勧誘に特に力を入れていた。

カズマ「俺は…　必ず果たすんだ。　日本1を目指して」

視線の先には半壊したグフカスタム、魔王バルバトスとその隣に新
しいガンプラが並んでいた

カズマ「さあ！長い戦いが始まる！気合を入れて行くか！」

カズマは自分の顔を叩き、洗面台へと向かった
……………

レイ「ここが…　会場…！」

レイ　ユウシ　タツキ　カズマの4人は対抗戦の会場へ到着して
いた

会場となるのは創介学園から二駅隣の旗統市の体育館だ。

会場へ入った4人の目の前には数十台を超えるシュミレーターと
大きなディスプレイだった。

タツキ「なんだこのシュミレーターの数…！」

カズマ「全国の高校のガンプラバトル部が集まるんだ、デカイ会場

を用意したって恐らく入れない。だからまずは会場を分けて予選を行ってから上位入賞チームのみが本戦へと進めるんだ」

ユウシ「つまりここを突破しない限りは… 聖騎学園とも戦えない訳か…」

カズマ「そういう事だ。 さあ、そろそろ開会式が始まる、あの大きなディスプレイの前へ行くぞ！」

……………

「全国のガンプリアンの高校生の皆さん〜！こんにちは〜!!!」

巨大なディスプレイにはピンク色の髪の女性が映し出された

「今年もやってきました！ 第5回、ガンプリアバトル学校別対抗戦！

実況はこの私〜…」

MCハル「ハルが務めさせていただきます!!!」

ディスプレイに映し出された女性はハル。

現在も様々な大会でレポーター等を務めているらしい

ハル「さあ！全国の高校生が日本1を争うこの大会！今年はどうな熱い戦いが見られるのか!!!今から私、とてもドキドキしています!!!」

レイ「凄い熱いな… あの人…」

ハル「まずはこの大会についてです！ まず皆さんには各会場で予選を行って頂きます。そしてその中から上位三チームは二日後に別会場にて行われる本戦へ進むことが出来るのです!!!」

ハル「そして本戦で優勝したチームには日本1の最強のガンプリアチームの称号とともにジャパンカップのシード権が与えられます!!!」

「「いええええええい!!!」」

「「勝つのは俺たちだー!!!」」

「タツキ「凄い熱狂だな…」」

カズマ「それ程凄い大会なんだよ、これは」

カズマ「（これに優勝すれば… ジャパンカップに…!）」

ハル「続いてルール説明です！ 今大会ではガンプリアバトルレギュレーションに従い勧めていきます！ チームとして出場出来るガン

プラは4機まで、但しPG MA機を使用する場合は1機のみとなります！」

ユウシ「MA機も出れるのか……」

レイ「ますます燃えてきた！」

ハル「さあ！最強のガンプラチーム目指して！皆さーん、頑張ってくださいねー！それでは本戦で待ってますー！」
……………

カズマ「さあ！俺達も負けていられない！創介学園ガンプラチーム、行くぞー！」

3人「ハイ！」

「お前達も来たか」

カズマ「……！ カズヤ……」

カズヤ「今度こそ勝つのは俺達だ。」

カズマ「E z―8の修理は終わったのか？」

カズヤ「いや、俺は新しい機体でお前を倒すぜ このFAガンダムでな！」

カズヤが見せたのはあの時のE z―8コマンダーと同じカラーリングのFAガンダムだった

カズマ「奇遇だな、俺も新しい機体だ。」

対抗するかのように、カズマもカズヤへとガンプラを見せてつける

カズマ「勝つのは俺だ、このサイコザクの恐ろしさを教えてやる！」
黒色に所々金色が散りばめられたサイコザクを見せてつけてカズマはどこか得意気だ。

カズヤ「ふん……！ 楽しみにしてるぜ……」

カズマ「ああ……！」

スタッフ「出場チームは受付にお願いしまーす！」

レイ「先輩」

カズマ「ああ、行こうか皆」

4人は参加受付をしに行くために受付へと向かって行った
……………

第一ブロックでは既にバトルが始まっていた

ツバサ「優勝は俺達、空翼高校が頂く！行くぜお前ら！」

シヨウ「了解！」

リヨウ「こっちもOKだ！」

カスタムされた3機のジェスタは空を飛び、次々にCPU機を落と
していく

ツバサ「ジェスタF40……これで優勝してやる……………！」

ジェスタF40 空翼高校ガンプラ部

頭 ジェスタ

胴 ジェスタ

腕 ジムIII

脚 ジェスタ・キャノン

バックパック フォースインパルス

武器 ビームマシンガン

黒を基調にしたカラーリングの機体

両腕にはダブルガトリンガンが装着しており、武装も多い
……………

ツバサ「よし、これで6機目！いいスタートだな！」

シヨウ「ふいー、お疲れ様。 だけど一番手っ取り早くポイントを

稼ぐのは他のファイターを倒すことだけど……」

リヨウ「出来れば他のファイターに会いたくないよな……」

ツバサ「バカ、勝つためにはしょうがないだろ？ この大会のため
に1年間頑張ってきたんだ、優勝してジャパンカップに出ようぜ！」

リヨウ「はあ…… お前には昔から振り回されてばっかだけど……」

シヨウ「今回も乗ってやるとするか！」

3人「アハハ!!」

和気あいあいと談笑をする3機。

いつ襲われるか分からない上、集中力がかなり必要となるガンプラ

バトルではこういった談笑も気分転換になる

シヨウ「待った！ 何かが近くに来る……！」

リヨウ「リーダーに反応あり…… 来るぞ！」

……

く Bブロックく

タロウ「ここまで俺達と互角に来たのは褒めてやる…… だけど

な、俺達4人の夢野高校ガンプラ部に…… 1人で勝てるかよ！」

夢野高校ガンプラチームリーダーのタロウのガンダムMK-IIIとその仲間のリックディアスは、敵チームと思われるガンプラを四方で囲みビームライフルを構えた

ゲンタロウ「来い…… 全員落としてやる。」

タロウ「……ッ！ 行くぞお!!お前ら！」

タロウの呼びかけに4機はビームライフルの引き金を引き、一つの標的を狙って撃ち続けた

タロウ「これだけ撃てば……！ 今度こそ！」

かつて敵のガンプラが居た場所には4機によるガンプラの攻撃を影響で爆風が起る

勝ちを確信したタロウ。これで落ちたと思っていた

ゲンタロウ「ここだ。」

タロウ「なっ……！」

落としたと思っていたゲンタロウによる不意うちに反応が遅れるも、タロウは間髪 シールドで一撃を防ぐ

タロウ「バケモンかよ…… てめえは……！」

ビームサーベルを引き抜いたガンダムMK-IIIは敵のガンプラへと突っ込んでいく

ゲンタロウ「そうやすやすと落ちると思うな。この将軍 亜枢兜零がな」

亜枢兜零と名乗ったガンプラは片手のガベラストレートでMK-IIIの攻撃を防ぐと、腰に携えている二本目のガベラストレートでMK-IIIの懐を切りつける

モブA「なんて数の… 刀…！」
……………

將軍 亜枢兜零

頭 アストレイレットドラゴン

胴 真武者頑駄無

腕 真武者頑駄無

脚 アストレイレットフレーム改

バックパック アストレイレットフレーム改

武蔵学園ガンプラ部のゲンタロウがBFの戦国アストレイ頑駄無からヒントを得て組み上げた機体

フェイスガードを兜に見立て頭部に取り付けた後に金色に塗っている

戦国アストレイをモチーフにしている事もあり、肩には二本の刀が装着している為、基本的に使うガーベラストレット、そして腰に携えているガーベラストレット／タイガーピラス、肩の二本で計5本もの刀が使用出来る。
……………

ゲンタロウ「お前が落ちろ。」

MK—IIの胴体に食い込んだガーベラストレットは、ガンダムMK—IIの上半身と下半身を切り離していく

モブA「こ、このお！」

モブB「リーダーから離れろ！」

2機のリックディアスは自チームのリーダーを襲う亜枢兜零へと向かっていくが、

ゲンタロウ「ドライブヘッド、起動」

モブA・B「なあっ…！」

2機のリックディアスの中心を凄まじいスピードで通り抜けた亜枢兜零は…

ゲンタロウ「終わりだ。」

腰から抜いたタイガーピラス／ガーベラストレットで2機を切りつけ…

モブA「クソ……！」

モブB「速くて…… 動きに追いつけねえ……！ しません、リーダー……！」

2機のリックディアスを同時に落として見せた

モブC「このお！」

唯一残された1機のリックディアスも亜枢兜零へと向かっていくが……

ゲンタロウ「俺に近づくな。」

タクティカルアームズを弓へと変形させ、

ゲンタロウ「貫け、タクティカルアームズ！」

タクティカルアームズから放たれた一撃はリックディアスをいとも簡単に貫いた

………

タロウ「クソ……！ 動け、動けよ！」

離れた場所で1人残されているタロウのガンダムMK―IIは上半身と下半身が分かれており思うように身動きが取れない

タロウ「あいつが戻ってきちゃう……！ 何とかしねえと……！

アイツだけでも俺は倒さ」

突如、何処からか放たれた一撃は無情にも動けないガンダムMK―IIを襲い、撃ち落とした

カズヤ「よし！ ポイントゲット〜！」

二連ビームライフルを構えたフルアーマーガンダムを操るカズヤはガッツポーズを決める。

タロウを撃ち落とした機体、それはカズヤのフルアーマーガンダムだった様だ。

カズヤ「さあーて、俺の目標はただ1人……！ 待ってる、カズマ！」

双子の兄弟によるガンプラバトルの決着の行方は

続く

ガンダムブレイカーズACE 第15話 稲妻

ユウキ「限界なんてない♪」

ユウキは御機嫌に歌を歌いながら皿洗いをしていた

あの爆発事故から数日が経ち、怒りと悲しみで頭がおかしくなりそうな日もあったが今はこうして平常心で居られる程には立ち直れた。

ユウキ「そういや、今日は予選だっけな」

思い出したかのように皿洗いを止め、テレビを付ける

ユウキ「おく やってるやってる」

テレビに映し出された光景には死闘を繰り広げるジェスタF40とケンプファアの姿があった

.....

ツバサ「ああああ!!もう!」

少し怒り気味のツバサは上空のジェスタF40を旋回させ、自分を狙うケンプファアへと近づいていく

その両手にはビームサーベルが握られ、逆転の瞬間を今か今かと待ち構えていた

モブA「落ちろ落ちろ落ちろお!!」

専用ショットガンを構えるケンプファアは上空を旋回し続けるジェスタF40へと絶え間ない銃撃を続ける

ツバサ「こっちは面倒くさい奴に当たってる!そっちは!」

ショウ「こっちもだ! 1機は落とした。残り2機だ!」

モブA「勝つのは俺達、克宗高校だ!」

ツバサ「いいや、俺たち空翼高校に決まってるだろ!」

しびれを切らしたツバサは両手に装着したダブルガトリンガンを構えた

太陽の反射で銃口はキラリと光る

ツバサ「ショットガンで..... ガトリンガンに勝てるかあああ

ああ!!!」

両腕のダブルガトリンガンからは、これまでの反撃と言わんばかり

に絶え間ない弾丸の雨がケンプファーへと降り注ぐ。

モブA「そんな… 俺はああああああああ!!!」

断末魔と共に爆発四散するケンプファー、ツバサは何とか勝利を掴んだ

ツバサ「ふうー！危なかったぜ。」

リヨウ「こつちも終わった、ただ… ショウのジエスタが限界かもな…」

ショウ「すまねえ、無理に突っ込み過ぎた…」

ツバサ「ポイントは大体稼いだ、何処かで身を隠しながら来たら迎撃するようにしよう。」

ショウ「了解、幸いにもバックパックには何の異常もない。今からリヨウとそつちに向かうぜ！」

ツバサ「今 俺の現在地を送った、落とされんなよ！」
リヨウ「おう！」

ツバサは1度通信を切り、仲間達が向かうのを待つことにした…

………

ユウキ「今年も… 色んな高校が出てんなー」

スマホで今年の出場校を調べている中、聞き覚えのある高校名を見つけた

ユウキ「創介学園… 俺の地元の高校か、ケントはここだったな確か…」

スマホで創介学園について調べるユウキ

ユウキ「えーとなになにに、1980年6月開校… 随分と昔の高校なんだな、ここ。地元だし… 今年はここ応援するか」

テレビは丁度創介学園ガンプラチームの参加しているBブロックの映像を映し出す

………

………

………

………

レイ「あーもう敵見当たんねえー！」

タツキ「ほんとな、全くいないぞこれ…。」

AGE2とFAライトニングの2機は敵ガンプラの気配すらない森林を隈無く歩いている

レイ「先輩とユウシも応答しないし… 恐ろしい程に静かだし…。」

レイの言う通り、この森林に敵機の反応どころか2機の歩く音しか聴こえてこない

まるで このステージから全てが消された様に。

タツキ「お、おい！レイ！こっち！」

タツキは崖の下に何かを見つけた様だ。

レイ「なんか居たか!？」

AGE2はFAライトニングへと近寄り、タツキの示す物へと視線移す

レイ「な、なんだこれ…。」

目の前に映し出されたもの、それはかなり大きな足跡の様なものだった

タツキ「でっけえ！ 何の足跡だよ…。」

レイ「あの森に、足跡が繋がってる！行こう！」

そう言い、AGE2が進み出したその瞬間…

森の木からレーザーが放たれ、AGE2へと襲い掛かる

タツキ「レイ！」

それに気づいたタツキはAGE2を蹴り飛ばして何とかレーザー攻撃から回避させる

レイ「サンキュー！タツキ！」

タツキ「来るぞ…。」

???「あともう少しだったと言うのに…。」

森の木は大きく揺れ、姿を現した大きな脚は次々に薙ぎ倒しながら、レイを襲った者の正体が明かされていく

???「優勝するのはこの俺様… リョウタと奏緑高校ガンプラチーム

だ!!!」

遂に姿を現した機体、M A ビグザム

レイ「M A機……！ まさか！森に擬態して！」

リヨウタ「その通り!!! 今さっきのお前みたいに足跡に釣られてノコノコやって来たアホ共は俺様のビグザムに粉々にされたんだよ!!!」

タツキ「通りで、ガンプラのパーツ一つ落ちてない訳か……」

リヨウタ「今からお前らも…… この俺様に粉々にされるんだ……

！ 覚悟しなあ!!!」

タツキ「行くぞ！レイ！」

レイ「ああ、俺達の力見せてやろうぜ！」

A G E 2ダブルバレットとF Aライトニングはビグザムへと向かっていく

……

レイ達と離れ、ユウシとカズマは別の敵機を探しながらポイントを稼いでいる

レイ達のいた場所は森林とは違い、カズマ達の場所は崖の多い場所の様だ

身は隠しやすいが、同時に相手も隠れている危険性もある……

中々に気を抜けない。

ユウシ「うーん…… こっちはさっきのジム3機位しか居ないです

ね……」

カズマ「上位三チームに入るにはもう少し稼いでおきたい所だな……」

突如、カズマのサイコザクの足元へと銃撃が放たれる

ユウシ「先輩！」

カズマ「大丈夫だ！カスリもしてない。 だが、誰が……？」

「待ちくたびれたぜ！」

2機の前方へと、聞き慣れた声が響く。間違いないこの声は……

カズマ「カズヤ……！」

サイコザク デュナメスG N H W / Rの目の前には、ライフルを構

えた陸戦型ガンダムとフルアーマーガンダムが立っている。自分達を狙ったのは恐らくあの陸戦型ガンダムだろう…。そんなことを考えるカズマへとフルアーマーガンダムが早速仕掛けてきた。

カズマ「今度こそ、ケリを…。付けてやる…。！」

カズマ「…ッ！」

ビームサーベルで襲い掛かるフルアーマーガンダムに対して、負けじと素早い動きで対処するサイコザク

ビームサーベルとビームアックスがぶつかり合い火花が起こった

ユウシ「なら、俺の相手はアンタか。」

デュナメスGNHW/RはGNスナイパーライフルを構えると崖を駆け下り、何処かへと身を隠し始めた

カズマ「ケン！追え！」

ケン「分かっているって！」

カズマの指示の元、ケンの操る陸戦型ガンダムは崖を駆け下りたデュナメスGNHW/Rを追う

カズマ「見たところ、前に見た時よりメンバーが1人少ないじゃないか」

カズマ「こっちにも…。色々事情があるんだよ!!!」

フルアーマーガンダムは何度も何度も、サイコザクへとビームサーベルで攻撃を叩き込んでいくが、カズマはそれを何とか交わしながら応戦をしている状態だ

カズマ「懐かしいな、お前とこうしてガンプラバトルをまともにやり合うのは！」

ビームサーベルの攻撃を諦めたフルアーマーガンダムは二連ビームライフルでサイコザクへと銃撃を始めた

カズマ「ガンプラバトルだけは、どちらも勝ちを譲らなかつたな！」

カズマも対抗するように、サイコザクはバズーカを構えてフルアーマーガンダムへと放ち続ける

カズマ「何の!!!」

フルアーマーガンダムのバックパックからアームが展開し、二枚のシールドが姿を現すと、サイコザクから放たれたバズーカの一撃を防

いでいく

カズマ「チツ…！」

カズヤ「今度はこつちのも喰らえ!!!」

カズヤはフルアーマーガンダムバックパックの六連ミサイルを構え、サイコザクへと反撃とばかりに撃ち尽くす

カズマ「危ない！」

自分へ向けて飛んでくるミサイル。カズマはバックパックからザクマシンガンを取り、乱射行つて当たる前に全て爆発させた

しかし、フルアーマーガンダムは諦めない

再び加速し、サイコザクを仕留めるべく前進する

カズマ「来れるもんなら来てみる、カズヤー！」

フルアーマーガンダムへ背を向けてどこかへと飛び去っていくサイコザク。

当然カズヤはそれを逃がさない。後を追いかけてバックパックの大型ビーム砲からサイコザクへお最大出力で放つ

サイコザクは大型ビーム砲の一撃を躲すと、背後のフルアーマーガンダムへ向けてバックパックのロケットブースターから先程のザクマシンガンとザクバズーカを

展開し、背後へと攻撃を始める

想定外の攻撃に怯むフルアーマーガンダム。

放たれた攻撃は、再び展開した4枚のシールドで防ぎ事なきを得たカズマ「落ちろ、ガンダム!!!」

突如振り返つたサイコザクは、ザクマシンガンとザクバズーカを受けきつてシールドを収納した隙だらけのフルアーマーガンダムへとジャアントバズを叩きこんだ。

反応が遅れたカズヤ、叩き込まれたジャアントバズの攻撃をまともに喰らい地面へと落ちて行く…

カズマ「バーストアクション!!!」

バックパックのロケットブースターを前へと持ち替えたサイコザク

カズマ「この勝負、勝つのは俺達だ！ ビッグ・ガン！」

固定式のビーム砲座から前線直線上のフルアーマーガンダムへ向けて凄まじい威力のキャノンを叩き込んだ

耐えきれぬ筈もないフルアーマーガンダムは空中で爆発しながら落下していく

カズマ「はあー… 認めたく無いけど、お前の勝ちだ。 絶対優勝しろよ、創介学園のエースさんよ」

カズマ「ああ、絶対に勝ってやる!」

カズマからの一言にカズマは決意の籠った笑顔で返す

カズヤ「お前、前みたいに楽しそうにガン普拉バトルやるようになったな。」

カズマ「あの子達のお陰だ。彼らとなら、きつと…」

カズヤ「まあ、俺の分まで 託したぜ」

その一言共にカズマのコックピットの映像は暗転し目の前の画面にGAME OVERの文字が現れた。

カズマ「負けるわけには行かないな、黒連のアイツにも…」

俺 自身にも」

サイコザクは地面へと着地し、仲間の元へと向かっていく

残り時間はあと僅か 創介学園は予選を越えられるか

続く

ガンダムブレイカーズACE 第16話 幼なじみの2人

陸宗高校のエースであり双子の弟、カズヤを激闘の末に破ったカズマは未だ戦闘を続けるユウシへの救援へと向かう

一方、巨大MA機 ビグザムと戦闘中のレイ、タツキ。果たして創介学園は予選を乗り越えることが出来るか残り時間は30分。

.....

.....

.....

リョウタ「小賢しいハエがあああ!!」

ビグザムは周囲を飛び回るAGE2へと怒りを募らせる。

レイはビグザムの辺りを飛び回り、標的を攪乱させる手段で隙を見つけようと逃げ惑い続けていた

レイ「タツキ！」

タツキ「分かってるって！」

森の木々に隠れながらハイパーメガランチャーを構えるFAライトニング、1度倒れば簡単には起き上がれないはず……！ そんなことを考えながら標準をビグザムの脚へと合わせる

タツキ「まずは……右足から！」

リョウタ「さつきから1機見えないが、何処で隠れて俺を倒そうつ

てか？甘いんだよ!!!」

ビグザムは動きを止めると、胴体部に円のように張り巡らされたメガ粒子砲でビグザムの周りを呑み込むように木々を一斉掃射で薙ぎ倒していく

レイ「タツキ!!!」

リヨウタ「おーつと！行かせはしないぜえ!!」

メガ粒子砲の一斉掃射に巻き込まれたFAライティングの安否を確認するためにタツキの元へと向かっていくAGE2。しかしそれをリヨウタは許しはしない

ビグザムはAGE2へと機体中央部の大型メガ粒子砲から凄まじい程の破壊力を持つ粒子砲を放つ。

レイ「…ッ！ おりやあああああ!!!」

ビグザムから放たれた一撃に対抗する様、AGE2も両腕のツインドズキヤノンから高出力のビームを放った。

ぶつかり合う2つのビーム、勿論結果は見えている

レイ「うわあああああ!!!」

ビグザムの大型メガ粒子砲はAGE2のツインドズキヤノンのビームを容易く蹴散らし軽々と機体を呑み込んでいく

レイのコックピットからは消えかける映像と共に、自分へと攻撃を与えたビグザムを映しながら地面へと叩きつけられる

タツキ「レイiiiiiiii!!!」

ビグザムの背後へと先程安否が危ぶまれたタツキのFAライティング

ングがハイパーメガランチャーを携え飛び出した
標準は確実にビグザムを狙い、引き金を引くのに迷いなど既にな
い。

タツキ「落ちろおおおお!!!」

リヨウタ「な、なあああああ!」

FAライトニングから放たれるハイパーメガランチャーの一撃は
真つ直ぐ、ビグザムへと飛んで行く

リヨウタ「なーんてな♪」

ハイパーメガランチャーの攻撃は確かにビグザムへと当たった、だ
がまるで効いていない様子だ

まさか……! タツキには一つ心当たりがある

タツキ「iフィールド……!?!」

リヨウタ「だいせいかい!!! 全て原作通りに作ってあるのだ! i
フィールドもそのままつかえるぜ!!」

ここに来て厄介な物を……

タツキは操縦桿を握りしめ、そう呟く

Iフィールドがある限りビームライフル等はほぼ無意味に等しい、
かと言ってこのFAライトニングに実弾武器などない……

タツキ「だけど、まだ終わりじゃない! チャンスはどこかにある……
!」

残り時間は後25分…… それまでに倒せるかどうかもう危うい……
それに今度はレイの安否が分からない

タツキ「…！待てよ、アイツは 原作通り って言ったな…
ビッグザムが実際に動けた時間は約20分… あいつと交戦して15
分経った…！ 後五分、耐えてみせる！」

リョウタ「何をブツブツ言ってるやがる！ さあ！俺様に倒されるお
おおお!!!」

タツキ「とりあえず今は！出来ることを!!」

再び大型メガ粒子砲からの一撃へ入ろうとするビッグザム、同じ目には合わないタツキのF Aライトニングはその場から飛び回り時間を稼ぐことにした

次々と放たれるメガ粒子砲を避け続けるタツキ、こうしている間にもビッグザムへはかなりの負担がかかるはず…！

リョウタ「くそ！くそ！逃げ回るんじゃないやねえええ!!!」

しびれを切らしたリョウタはビッグザムの爪部分からライトニングを打ち落とすためにミサイルを飛ばした

本来なら避けていたであろう攻撃は逃げ続けるというプレッシャーに潰されそうの中で判断力が少し鈍ったタツキへと直撃し、遂に叩き落とされてしまった

リョウタ「ようやく追い詰めたぜ…！これで終わりだああああ
!!!」

リョウタのビッグザムは地面に倒れ込むF Aライトニングへ向けてメガ粒子砲の発動体制に入る

恐らくこれを喰らえば即GAME OVER、創介学園にとってかなりの痛手になる

タツキ「…ッ！ ごめん、皆！」

タツキは既に諦めムード、目を閉じビッグザムによる止めを待つ
終わった… 脳裏には仲間の姿が浮かび、ただただ申し訳無さで
一杯だ

「諦めるな!!!」

リヨウタ「何!?!どこだ!?!どこにいやがる!!!」

この声、間違いない…

タツキ「レイ!」

レイ「ごめん、AGE2が何とか動いた! … よーし行くぜ! ビ
グザム!」

リヨウタ「iフィールドがある限り! お前のそのツインドツズキヤ
ノンの攻撃は通んねえよ!!!」

レイ「俺が使うのは… こっちだあああ!!!」

ツインドツズキヤノンを取り外し、そこからは巨大なビーム刃が現
れる

そして、そのビーム刃を出したままAGE2ダブルバレットはビッグ
ザムへと突っ込んでいく

レイ「iフィールドは無敵のシステムじゃない!」

リヨウタ「このお!ぶつ殺してやる!!! って!なぜだ!動かねえ
!」

タツキ「時間を稼いだ意味が… あったぜ!」

リヨウタ「クソおおおお!!!」

レイ「行っけえええ!!!」

2本の巨大ビーム刃を出したまま突っ込み、ビッグザムの脚元を切り
つけるAGE2

脚の関節をやられたビッグザムは遂に崩れ落ちた

タツキ「レイ！」

レイ「タツキ！」

レイ&タツキ「EXアクション!!! クロス、スラッシュ!!!」

レイとタツキは止めとばかりにもはや身動きの取れないビッグザムへとEXアクションを叩き込む

リヨウタ「MAを使ったこの俺が… 負けるなんてええええええ

ええええ!!!」

リヨウタの断末魔と共にビッグザムは大破、危ない所が何個もあったが2人は無事に突破出来た

ピピーっ!!!

笛のような音がステージに響き渡り、予選が終わったことを知らせる

「只今より集計を行います。ファイターの皆様はお待ち下さい」

カズマ「皆！」

レイ「お疲れ様でした！先輩！」

カズマ「大丈夫だったか？」

レイとタツキと離れてからカズマはずっと2人が倒されていないか心配だった。

タツキ「バッチリです！なんてたってビッグザム倒しましたからね！」

ユウシ「俺たちも、陸宗高校を撃破したよ！」

「集計終了、結果発表を行います」

会場の大型ディスプレイに予選の結果が現れた

創介学園ガンプラチームはただひたすら、自分達の名前が出るのを祈り続ける

「第3位：： 空翼高校！」

ツバサ「やったああああ!!!」

リョウ「よし！」

シヨウ「何とか、3位だね：：」

「第2位：： 武蔵学園ガンプラ部！」

ゲンタロウ「2位、か：： やったな亜枢兜零：：！」

「第1位：： 創介学園ガンプラチーム！」

カズマ「俺たちが、1位：：!?!」

レイ「やったあ！」

タツキ「頑張ったかいがあつたぜ！」

ユウシ「やりましたね!先輩！」

MC ハル「はいはい!どの会場でも、上位三チームが出揃いましたね! 私も二日後の大会で皆さんに会えるのを楽しみにしていますよ! それでは!」

.....

カズヤ「やったな、カズマ」

帰り際、カズヤはカズマを見つけ声をかける

カズマ「ああ、俺もお前と久しぶりに全力でぶつかり合えて楽しかったよ。親父に宜しく言つといてくれ」

カズヤ「母さんは… 元気か？」

カズマ「ああ、母さんもお前に会いたがってたよ。たまには顔を見せてやれよ」

カズヤ「おう、本戦も負けんなよ…！ お前は俺達に分まで戦ってこい！」

カズマ「当たり前だ！」

レイ「ああやって見ると、仲良さそうだなー先輩。」

タツキ「だな！」

ユウシ「うん！」

カズマ「さあ！創介学園ガンプラチーム、本戦も頑張るぞ！」

3人「おおう！！！！」

4人の声が夕方の空へと響き渡る

ガンダムブレイカーズACE 第17話 燃え上がる正義の赤

く創介学園く

創介学園ガンプラチームの予選の激闘から一日が経った中、創介学園ではあるトラブルが起こっていた

下級生生徒「返して下さい・・・俺のガンプラ！」

カズキ「ああん!? 1年生の分際で先輩の俺に、楯突こうつての
かあ!?!」

下級生生徒「ヒツ・・・! で、でも!それは僕が頑張つて作ったガン
プラ・・・なんです!」

カズキ「やなこつた、これは俺が貰ったんだ 諦めて新しいガンプラ
でも作つてろ! まあ、また俺が頂くけどなあ! はっはっはっは
!!」

創介学園三年生 カズキは下級生からガンプラなどを集るとい
悪行で教師等を困らせていた

当然この事はカズマも知っており生徒会として幾度となく注意を
行ってきたが全く行動を改めていない。

奪われた事に怒り、何度か取り返そうとする生徒もいたが返り討ち
に合ったりする事が多く、奪われたら諦める生徒が大半だ。

そんな横暴を繰り返すカズキに、再び反抗する者が現れた

「その子にガンプラを返せ!」

カズキ「ああん!? なんだお前は!」

「俺は・・・ 創介学園1年 アイダ・マサヨシだ!」

カズキ「1年の分際で・・・ 三年の俺に歯向かうつてのか」

マサヨシ「アンタみたいな力を振りかざして悪行を繰り返す奴は
大ッ嫌いだ! 俺が倒す!この、ジャステイスレッドガンダムで!」

カズキ「正義の味方ズラしやがって・・・! 上等だ、お前を倒して
そのガンプラも貰ってやるよ! 放課後にヒグチホビーパークに来
い!逃げんなよ・・・!」

マサヨシ「その代わり！」

カズキ「おうおう、お前が俺に勝てたら……そんな時は今まで奪ってきたガン普拉全部返してやるよ！まあ、俺が負けるわけ無いけどな！ハハハハハハ！！」

……………

く放課後く

ハヤト「おーい！マサヨシく！」

レイの同級生　ハヤトは校舎の玄関に居たマサヨシへと声をかける

マサヨシ「ハヤト、どうした？」

ハヤト「いやーレイ達が先に帰っちゃったから、一緒に帰ろうと思つてき。……もしかしてお前も何か用事あるか……？」

マサヨシ「ちよつと、ヒグチホビーパーク行ってくる……」

ハヤト「お、ガン普拉バトルか。俺も行くよ！」

何やらマサヨシの目は何か覚悟を決めている

事情の知らないハヤトは取り敢えずマサヨシについて行く事した。
……………

カズキ「よう、逃げずに来たみたいだな！」

ガン普拉バトルシユミレーターの前に立つカズキは、マサヨシの姿を見て声をかけた。

ハヤト「ちよ！　お前カズキ先輩に呼ばれるとか何したんだよ……」

(小声)

マサヨシ「何って、あの人を倒してガン普拉を返してもらおうんだよ。」

ハヤト「カズキ先輩はタウンカップの準決勝常連ファイターだぞ……　辞めとけつて……(小声)」

マサヨシ「いいや！俺は倒す！　そしてあの人に奪われたガン普拉をすべて返してもらおうんだ！」

カズキ「なあーに小声で話してんだ！さっさと準備しろ」

マサヨシ「行ってくる、ハヤト」

マサヨシはハヤトにカバンを渡しシユミレーターへと入って行く。
カバンを持ったハヤトはただただその後ろ姿を見守る事しか出来
なかった。

.....

マサヨシ「ジャステイスレッドガンダム、マサヨシ出る！」

カズキ「格の違いを教えてやるよ！ 行くぜパーフェクトシナン
ジュ!!!」

遂に始まった三年生VS一年生の戦い

ジャステイスレッドガンダムと名乗ったマサヨシのガンプラは
真っ赤な塗装のジャステイスガンダムでカズキへと立ち向かう。

一方、パーフェクトシナンジュと言う名のガンプラを操るカズキ

カズキ「俺様のガンプラに勝てるわけないだろ！ 奪い取ったガン
プラで組んだ最強の機体だ！」

頭はシナンジュ、胴はササビー 腕はキュベレイに脚はジ・O

バックパックはプロヴィデンスガンダムに腕にはビームソード：：

本編で歴代主人公をを追い詰めた機体の寄せ集めと言った所だろ
うか

.....

最初に仕掛けたのはマサヨシだ

マサヨシ「俺は・・・アンタを倒す！」

ジャステイスレッドガンダムはビームサーベルを片手にパーフェ
クトシナンジュへと襲いかかる

ビームサーベルの剣先はぶれること無く真っ直ぐに向かっていく
が、カズキはその一撃をビームソードで受け止めた。

マサヨシ「チツ・・・！」

渾身の一撃を受け止められ、苛立ちを隠せないマサヨシ

今度はカズキに動きが見られた

カズキ「なんだよ、大口叩いてた割にはなんてことねえな 次は俺
様の番だ・・・！」

ニヤリと笑ったカズキは遂に動き出す。

パーフェクトシナンジュのバックパックからはマサヨシのジャス

テイスレッドへ向けて何かが放たれた

ハヤト「ドラグーンシステム……！」

戦いの光景を見ていたハヤトはそう呟いた

ジャステイスレッドを捕捉したドラグーンシステムは全方位攻撃を始める。

マサヨシは自分を狙いながら攻撃をしてくるドラグーンの対処と目の前のカズキを相手にしながら戦うことを強いられてしまった……

カズキ「さあーて…… 沢山苦しんでくれよお!!!」

2本のビームサーベルを持ち、ジャステイスレッドへと真っ直ぐに向かっていくカズキのガンプラにビームライフルの一撃が飛ぶ

カズキ「誰だ！」

ハヤト「マサヨシ！」

ハヤトの試作品1号機Fbはジャステイスレッドを捕捉しながら襲いかかるドラグーンシステムを数機落としながら空を駆ける

マサヨシ「ハヤト！」

カズキ「 temeエ……！」

ジャステイスレッドの前へと降り立つ試作品1号機、ジャステイスレッドと試作品1号機はカズキのパーフェクトシナンジュへと睨みつけるかのようだ

ハヤト「俺も…… 人のガンプラを奪うのはいい事とは思えませんが……！ 俺もあなたからではないですがガンプラを奪われて壊された時…… とても悲しくなりました」

カズキ「ああん!? だからどうした！」

ハヤト「だから同じことをする貴方を僕もマサヨシも、これ以上黙って見過ごす訳には行きません……！ 貴方を倒して皆のガンプラを取り返します！」

カズキ「この野郎……！ 1年の分際で生意気なこと言いやがって！ 上等だ…… ついでに temeエも倒してガンプラ奪ってやるよお おおお!!!」

ハヤト「マサヨシ、まだ行けるか！」

マサヨシ「あつたり前だ！ 行こうぜ！ハヤト！」

カズキ「ぶっ殺してやるよおおお!!!」

カズキとパーフェクトシナンジユは2機へと殺意を見せながら突進していく

マサヨシ「ファトウム!!」

ジャステイスレッドと試作品1号機はバックパツクのファトウムへと搭乗し、向かってくるカズキへと自分から突っ込んで行く

マサヨシ「燃える赤は正義の証！燃え上がれ俺の正義！これがジャステイスレッドガンダムと！」

ハヤト「俺たちの力だああ!!!」

2人の覚悟と共に突っ込んで行く2機はパーフェクトシナンジユをビームサーベルで真つ二つにし……

カズキ「このおれのガンプラが……！　うわあああああ!!!」

カズキの断末魔と共に撃破された

マサヨシ「正義は必ず勝つ！」

………

マサヨシ「約束通り、奪ったガンプラを返して下さい」

カズキ「下らねえ……　ほらよ、覚えとけよ……！　テメエら……

！」

カズキはそんな捨て台詞と共に奪ったガンプラを投げ捨て店から出ていった

マサヨシ「ありがとうハヤト、お陰で助かったよ！」

ハヤト「いいっていいって！それより明日はレイ達の応援もあるし帰るぜ」

マサヨシ「あ、そっか。明日は創介学園ガンプラチームが本戦に行くとか行ってたな……」

ハヤト「お前も、暇だったら応援に行つてやれよ。それじゃあな！」
マサヨシ「おう！じゃあな！」

店から出たハヤトを見送り、マサヨシも帰り道を歩くのだった。

続く

ガンダムブレイカーズACE 第18話 蹂躪する
悪魔

部屋の外からは蝉の鳴き声が響き渡り、同時に襲いかかる熱気でレイは目覚めた。

暑さと虫の喧騒で頭がおかしくなりそうだ…

眠い目を擦りながらスマホを手に取って時間を確認すると朝の9時…

「あ!!約束の時間じゃん!!!」

レイは飛び上がり支度を始めた

.....

「行つてきまーす!!!」

アイザワ家の玄関にレイの声が響き渡る

まず目指す場所は… ホビーパークだ… !

.....

タツキ「おっそい」

レイ「ハアハア… ごめん!寝坊した!」

ユウシ「昨日夜遅くまでガンプラ弄ってたとか?」

レイ「ちよつと… ね」

レイは先に来ていた3人にお詫びと理由を伝えた

今日は特に寝坊する訳には行かなかったが… まさか…

カズマ「まあまあ、受付は11時からだし時間にはまだ余裕があるよ」

レイ「ええ!? 大会の受付は10時からって聞いてたのに!」

タツキ「そうでもないかと、レイ寝坊するんだもん。小学生の時だって修学旅行寝坊しかけたじゃん」

ユウシ「だからわざと俺とタツキで嘘の早めの時間教えた訳!」

レイに向けてユウシとタツキはピースをした

カズマ「まあまあ… 今日の大会はジャパンカップに繋がる大切な大会だ… 気を抜かずに頑張ろう」

タツキ&レイ&ユウシ「はい!!!」

……………

大会の会場は運がいいことにヒグチホビーパークの近隣駅から電車で10分の所にある

創世ドーム、今回の学校対抗ガンプラバトルの会場のドームだ。

会場に到着した4人を待っていたのは大量の観戦者達の軍団。4人は人と人の間を縫いながら受付へ向かう

スタッフ「はい!これで登録完了です!頑張ってくださいね。」

カズマ「よし、大会は12時からだし… それぞれ見たいところに行ってきたもいいよ。ここは物販や出店もあるし」

カズマの言葉のとおり、このドーム内ではガンプラバトルのブースの他に、祭りでよく見る食べ物のお店や物販用のブース、プロのビルダーが作り上げたガンプラの展示ブースなどがある

タツキ「じゃあ俺は展示ブース行ってくる！」

ユウシ「俺は物販！」

レイ「俺もどこか見てきます！」

カズマ「分かった、迷子にならないようにね！」

.....

「おーーい！レイー!!!」

レイの背後から聞きなれた声が呼びかけてくる

レイは後ろを向き、声の主を確認した

ハヤト「応援に来たぜ！」

レイ「ハヤト！」

声の主はレイと同じクラスのハヤト、わざわざ応援に来てくれたようだ。

ハヤト「来たのは俺だけじゃないぜ、なあ！マサヨシ！」

マサヨシ「おう、来たぜ！」

レイ「マサヨシも！」

もう1人の少年　マサヨシ、ハヤトと同じくレイと同じクラスの生徒だ。

レイも何度か話した事があり面識がないという訳では無い

ハヤト「俺達も応援してるからな！負けんなよ！」

レイ「当たり前だ！絶対勝ってくるぜ！」

.....

時を同じくして、カズマは物販ブースで買い物をしていた

カズマ「お、バルバトスルプスレクスだ… これ買うか…」
「あ、いたいた！」

カズヤ「おーい！カズマー！」

カズマ「カズヤ…！ どうしてここに？」

カズヤ「お前らの応援だよ、って何持ってたんだ？」

カズマ「話より先に会計させてくれ…」

………

カズヤ「で、どうだ？この大会勝てそうか？」

カズマ「まだ不安だ… だけど…」

カズヤ「だけど…？」

カズマ「あの子達となら何とかなりそうな気がする… そう思わせ
てくれるんだ…」

そう語るカズマの目には何処か優しげがあった

カズマ「(きつと何とかなる筈… 例えもう1人の俺が暴走した

としても… 俺の力が影なら… 彼らは光に…！)」

「陸宗と創介のエースの2人が… 珍しいじゃないか」

カズマとカズヤの2人へと金髪の男が話しかける

こいつは…

カズマ「アンタは…」

カズヤ「てめえは…」

「聖騎学園のキョウヤ…！」

キョウヤ「久しぶりじゃないか」

聖騎学園のエース、キョウヤ。

去年の優勝校であり今回の優勝候補だ

カズマは少し前に練習試合を、カズヤは去年のこの大会の決勝でたかっている相手であり、カズマが1番警戒している相手だ

キョウヤ「楽しいバトルを期待しているよ、君たちが決勝まで上がって来るかどうかだね」

「いいや、決勝まで上がらせて貰うぜ。」

カズマ「ユウシ…」

物販ブースから片手にHGバンシイの箱を持ったユウシが現れる

ユウシ「まあ、俺の狙いはアンタのお仲間だけだな」

キョウヤ「君の狙いはリンか、面白い 彼女にも伝えておこう。それでは」

キョウヤはそう言い残しどこかへ去っていった

スタッフ「間もなく大会が始まります。出場するファイターはお集まり下さい」

カズマ「さて、行こうかユウシ。」

ユウシ「はい！」

カズヤ「カズマ！」

カズマ「？」

カズヤ「負けるんじゃないぞ！ 去年俺が倒せなかったアイツをお前が倒せ！」

カズマ「… ツ！ ああ！絶対に勝ってくるぜ！」

カズマの決意の言葉を聞き、カズヤはニヤツと笑い頷いた

.....

レイ「うーん… 緊張してきた…」

タツキ「頑張ろうぜレイ！」

ユウシ「どんなガンプラが出るかなあ…」

カズマ「絶対に… 勝つ…！」

4人のそれぞれの想いを胸に、遂に大会が幕を開ける

.....

MCハル「皆さーん!!! こんにちはー!!!」

会場の観客「こんにちはー!!!」

ハル「いい挨拶ですねー！今年も遂にやって来ました！最強の高校生ファイターを決めるこの大会！私も今からどんな戦いが見れるか楽しみです！ という訳でこの大会の司会進行は私、ハルがお送りしまーす!!!」

会場の観客「イエーイ!!!」

会場を観客の歓声が包み込む

4人も思わずテンションが上がる

ハル「さあ！それではこの大会について説明します！この大会は予選と同じく、最大4人1組のチームでのファイトとなります！1チーム最大ガンプラを4機、PG MA機はそれぞれ1チームに1機のみです！この大会に優勝すれば日本1のガンプラチームの称号：そして!!ジャパンカップへの特別参加券が与えられます!!!」

会場のファイター「!!「うおおおおお!!!」!!」

恐らくこの大会に参加しているファイターの狙いはこのジャパンカップの特別参加券だろう。

本来ならタウンカップ↓リージョンカップ↓ジャパンカップとなる行程をすっ飛ばしこの大会から↓ジャパンカップへとなるのだ、ファイターなら誰だって狙うはずだ。

ハル「さあ！それではファイターの皆さん！優勝目指して頑張ってくださいねー!!!」

観客「!!「うおおおおお!!!」!!」

.....

レイ「遂に始まるんだ...！ 大会が！」

タツキ「よっしやあ！燃えてきた！」

ユウシ「頑張ろうね、デユナメスGNHW/R！」

カズマ「すまない、ちよっとトイレに行ってくるよ」

カズマは足早にトイレへと向かっていく

レイ「どうしたんだろ？」

タツキ「さあ？」

ユウシ「ああ… カッコイイよ… デュナメス…」

カズマ「遂に… あの舞台に立てるチャンスが来たんだ…！ 周りに無理だと言われた夢… 今、その夢に、誓った夢に手を…！ こんなにウキウキしている姿、彼らには見せられないな…」

カズマはトイレの鏡に映る、ウキウキしている自分を見てクスリと笑った

「本当に楽しそうだよなあ…！」

カズマ「やめろ… 出てくるな！」

カズマを襲う頭痛と共に誰か声が… カズマはそれを拒む

「何故だ？言っただろ俺はお前の…」

カズマ「影だ。 って言いたいんだろ？どんな事であれ俺はお前を拒み続ける。そして勝ってみせるお前に、俺自身に…！」

「言うねえ… さつき居た連星高校のヤツらの前でもその威勢でいられるかな…？」

カズマ「なツ…！あいつらが!？」

カズマの驚きと共に謎の声は聞こえなくなった

連星高校、カズマはその言葉を思い出し歯を食いしばった

.....

（某所）

「予定通り05を向かわせました。協力者とも合流。後は予定通りに物事が進めばいつでも実施可能です。」

??? 「分かった。失敗は許さないと伝えろ」

「マスターも、まさか高校生ファイターの大会を狙うとは。」

??? 「私はファイターという存在、そしてガン普拉バトルがこの世で大嫌いなのだよ、たとえ未来ある学生だろうが関係ない。私はその未来ある学生のせいですべてを失ったのだ、徹底的にやる」

「了解しました。余計な邪魔が入らなければいいのですが。」

??? 「なあーに、邪魔も出来んはずだ。あの商店街は潰した……せいぜい……」 死神”を気取った男が社長気取りのガキだ。今度こそ潰してやろう、ガン普拉バトルを！フッフ……フハハハハハハ！！！！」

男の高笑いが部屋へと響き渡った

.....

その頃、会場では第1試合が始まっていた

ツバサ「ジエスタF40！散開！」

ツバサの掛け声でツバサの周りにいたショウ、リョウのジエスタは散開し、標的を囲む

??? 「フフフ… ハハハ！ やっぱり、面白いなあ！」

ツバサ 「お、おい！何かアイツ笑ってるぞ！」

シヨウ 「乗せられるなツバサ！ 俺が最初に仕掛ける！」

シヨウのジェスタF40は標的のガンプラへとビームサーベルを片手に仕掛ける

??? 「俺に勝てると思わない方がいいよ、君たちとは”出来”が違うからねガンプラも技も！… バエルダークマターアアア!!!」

青年の言葉に応える様に、最初に仕掛けてきたシヨウのガンプラの攻撃を軽々と避けてビームサーベルを奪い取ってジェスタへと突き刺し、引き抜く。

内部にかなりの損傷が発生し、シヨウのジェスタは立てない。

そしてあまりの速さにツバサは言葉が出ない。

目の前で仲間が簡単にやられたというのに。

??? 「だから言ったじゃん、俺には勝てると思わない方がいいってささあーて、次の犠牲者はお前？」

青年が操る黒いバエル、バエルダークマターはリヨウのジェスタへとビームサーベルを向ける

??? 「あっそうだ、これ返すね」

青年はシヨウから奪い取ったビームサーベルを損傷が大きく立ち上がれないジェスタの頭部へと突き刺した

これによりジェスタのメインカメラは破壊され、シヨウのコックピットからは何も見えない

シヨウ「ごめん… ツバサ、リヨウ…」

もう何も出来ないと悟ったのか、シヨウは棄権した

??? 「君たちもこうなりたくないなら棄権しなよ、俺は優しいからさ… 棄権するか考える時間を1分だけあげるよ」

青年はそう言いながらバエルダークマターで足元に転がるシヨウのジエスタF40を踏みつける

リヨウ「シヨウ…！ そんな… どうする!? ツバサ！」

ツバサ「そんなん決まってるだろ…！ 俺はアイツをぶっ飛ばす!!!」

ツバサのジエスタF40は青年のバエルダークマターへと凄まじいスピードでむかつていく

??? 「あーあ、折角チャンスをやったのに…」

上等だ、殺してやるよ」

さつきまでとは雰囲気が変わり、バエルから凄まじい殺気が感じ取れる

が、ツバサにそんなにことは関係ない。

ただひたすら突っ込み仲間の敵を取るだけだ。

ツバサ「よくも… シヨウおおおおお!!!」

怒りを込めたジエスタのビームサーベルの一撃はバエルへと当

たった

筈だった。

??? 「いやー危なかったー！ だけど君、まだまだだね！」

ジェスタの一撃を右腕で止めたバエルは空いている左腕で渾身の1発をジェスタの胴へと叩き込み、ジェスタはリヨウの方へと吹き飛ばされた

??? 「まとめて殺してやるよ…！ EXアクション！」

バエルダークマターは2機のジェスタの元へと飛んでいくと、バツクパツクから光の翼が現れた

??? 「死ねええええええ!!!」

両手に握られたビームサーベルでバエルダークマターは2機のジェスタを切り裂き、同時に撃ち落とした

空中で爆発する2機のジェスタ、これにより空翼高校の敗退が決まった

ツバサ「くそお！」

ツバサは頭をシユミレーターへとぶつけた
全く歯が立たなかった…あのバエルに…
ただひたすら悔しさに耐える他ない

ハル「決まったー！ 第一試合 空翼高校 VS 覇海学園のバトル

はバエルダークマターを操るゼロ君の勝利です!!!」

レイ「あのバエル…なんて動きをするんだ…！」

ユウシ「彼のガンプラからは…バトルを楽しむってよりガンプラを破壊して絶望させるって感じが溢れ出た…！」

???「潰してやるよ…こんな大会…！マスターの命令なんかじゃなく俺の意思でな!!」

波乱の戦いから始まった大会は遂に幕を開ける

続く

ガンダムブレイカーズACE 第19話 狙い

創界学園の四人は黒いバエルと空翼高校との戦いに唾然していた。まるでガンプラが自分の意思を持ったような動きで軽々と三機を倒したバエルに対して、そしてそれを操るファイターへと驚きが隠せない。

あの無駄のない動き…

レイ「あの人の戦い方… まるで相手を絶望させながら戦ってるみたいだ…」

タツキ「ああ… あんな力を持った奴が居るなんて…！ 流星は全

国のファイターが集まる大会だ！」

カズマ「…」

ハル「それでは只今から第2試合、関内学園 VS 花井高校の試合を始めます！」

この大会のMCであるハルの掛け声で第2試合が幕を開けた

その大会の様子を一人の青年は見守っていた

片手にガンダムFXを持ちながら。

「なあ？ 本当にお前の言う奴が紛れこんでんのか？」

青年は隣にいる男へと話し掛ける

「アイツがこの大会を狙わない理由がない、本当に奴がガンプラシユミレーターのバグの原因なら尚更だ。」

「ほーん…」

そう言う青年はどこかへ歩き出す

「おい、何処に行く」

「俺…ミサに何も言わずに家出てきたから何も食べてねえんだよ…ちよつと出店で飯でも買ってくるわ リクエストは？」

「… たこ焼き」

「あいよ、じゃあすぐ戻ってくるわ！」

青年は男に背を向け、食べ物ブースへ歩き出した

「それにしても…アイツたこ焼き好きなのか…」

青年… ユウキはそう呟くとクスリと笑い、早足でブースへ向かつ

た。

「それにしても…やけに時間かかるな…」

男は腕時計をチラチラみながらなかなか帰ってこないユウキを待つ

ぐううう… と男の腹が鳴った

「つたく、速くしろ…」

ユウキ「ふいーお待たせ、ほらよ」

戻ってきたユウキは男 リユウジへとたこ焼きを渡す

ユウキ「なあ、前から思ってたんだけど」

リユウジ「なんだよ」

ユウキ「お前はなんであのおっさんに近づいたんだ？」

リユウジ「あれは… 確か」

リユウジは今でこそある種の強い味方ではあるが、元々はそうではない。

リージョンカップ準決勝でユウキとパーフェクトストライク負けたりユウジは、準決勝の後にユウキのパーフェクトストライクを破壊。これによりリユウジは公式の大会へ参加する事が叶わず自暴自棄になっていた。

そのリユウジに目をつけていたのは五年前、世界大会決勝の舞台となった宇宙エレベーターにウイルスを感染させてユウキ、ミサ、ウイルの命を狙った、サイバーコーポレーション社長 カワグチ・ジュンイチだった。

カワグチはリユウジを自社専属のファイターにすると自らの計画にリユウジを巻き込んで目的のために邪魔になるファイターを消すように指示、しかし準決勝で自らの命令に背いたリユウジに激怒し対立関係へとなった。

リユウジ自身、何故自分が彼の目に止まったのかは分かっていない。

君は私と同じ目をしている… そうカワグチに言われた事もあつ

だが、今となつては殺意しか湧かない。

ユウキ「つまりお前から近づいた訳じゃないのか」

リュウジ「俺は巻き込まれた側だ。」

突如、ユウキの携帯が鳴り響く

ユウキは連絡を送つてきた電話番号を見ると青ざめた表情で電話に出る

ユウキ「あ…もしもし…」

???'「ユウキ君…いまどこにいるの!!!何も言わずに朝早くから出て!!!」

ユウキ「い、今!忙しいから後で掛け直す!!!」

ユウキは焦りながら電話を切ると電源を落とし、ため息をつく。

リュウジ「お前も大変だな。」

ユウキ「心配してくれんだよ、お前だって家族いんだろ」

リュウジ「家族…か、生憎俺は母親と二人で生きてきたからな」

ユウキ「親父さんは?」

リュウジ「親父は俺が五歳の時に出ていったよ、家族を捨ててまでもやらかなきやいけねえことでもあったんだらうよ」

ユウキ「一回もあつてねえのか…」

リュウジ「もしあつたとしたら、そのときはおもいつきり殴つてやる… それより第2試合が終わつたぞ。」

リュウジの言葉の通り、第2試合はいつの間にか関内学園の勝利で終了していた

ユウキ「俺が高校生の時にもこんな大会があつたら楽しかつただろうなあ」

ユウキは勝利を喜びあう関内学園ガンプラチームを見て、ふとマモルとミライ、そして今まで戦つてきた好敵手達を思い出す。

ユウキ「本当にアイツがガンプラシミュレーターを狙つてるなら…俺達がもう一度止めないと。」

リュウジ「ああ…」

ユウシ「…! どこかに居る…!」

レイ「ん？どうかした？ユウシ？」

ユウシ「いや、なんでもない……」

レイ「？」

ユウシ「(間違いない……絶対にいるはず……！クソ兄貴！)」

カズマ「おい、ユウシ、レイ！次は俺達の番だぞ！」

レイ「はい！ほら、ユウシ行くよ！」

ユウシ「う、うん！絶対勝とうな！」

ついに第3試合、創界学園の戦いが始まる

………

「ガンダムAGE2ダブルバレット、レイ行きます！」

「FALライトニング、タツキ出るよ！」

「ガンダムデユナメスGNHW/R、ユウシでます！」

「大魔王バルバトス改、出る！」

創界学園ガンプラチームの4機は出撃し、第3試合が幕を開ける。

「さっき言った通りだ。ユウシとタツキは後方支援を、俺とレイは前線に出る、いくぞ！」

創界学園ガンプラチームの部長 カズマの掛け声で3人は動き出す

「絶対勝てよ！この大会に出ることが出来なかった俺達の分まで戦ってこい……！」

カズマは動き出した創界学園の4機を見つめ、そう呟く

「見せて貰うぞ、創界学園がどこまでやれるかを！」

聖騎学園のキョウヤも同じく創界学園の戦いを観戦していた

………

「敵機確認、4機こちらにきます！」

レーダーで敵機を捉えたユウシはカズマへと報告、報告を受けた3人も戦闘体勢へ移る

「見えた！いくぞ、レイ！」

「はい！先輩！」

敵機の姿を確認したカズマは、レイを引き連れて前線へ向かう

「時間が足りずこの大型メイスしか作れなかったが、敵を倒すには充

分だ！」

そう語るカズマの大魔王バルバトスにはルプスレクスの物であろう大型メイスが握られていた

かなりの大ききさだ。一撃が致命傷になりかねないだろう

シヨウタ「創界学園？聴いたことねえ名前だな！ まあどこであろうが勝つのは俺達、刃葛学園がなあ！」

レイ、カズマの目の前には4機のジンクスが向かってくるのが確認できる

ユウシ「さあーて 俺の標的は、と」

デュナメスGNHW/RはGNスナイパーライフルを構え、最初の標的を選ぶ

「うーん、こいつだ。」

標的を定めると同時に引き金を引き、放たれた弾丸はただ真つ直ぐに左から二番目のジンクスの右肩へと被弾した。

「あーあ、狙いが少しずれちゃったかー。」

ユウシは残念そうに言うと、再びスナイパーライフルを構えた。

シヨウタ「何だよ!?!いきなり先制攻撃かよ!?!」

カズマ「ユウシの攻撃で相手が混乱してる、一気に叩くぞー！」

レイ「はい！」

AGE2ダブルバレット、大魔王バルバトスは突然の攻撃に混乱する刃葛学園へと突っ込んでいく

シヨウタ「なあ!?! お、おいお前ら！迎え撃つぞー！」

刃葛学園も負けじと反撃へ移るが、カズマはあつという間に距離を詰め、シヨウタのジンクスへと大型メイスで襲い掛かった。

シヨウタ「てめえ!!!」

ジンクスはGNビームサーベルで受け止めるが如何せん相手の一撃が重すぎる。

このままではこちらのビームサーベルが折られるのがオチだ。

「お前が創界学園のエースとやからか！ いいガンプラだ、俺の魔王ジンクスに負けない位のなあ！」

カズマ「同じく魔王モチーフか、負けはしない！」

2機は一度離れ、互いのガンプラをみつめあう

シヨウタ「(なんだよこのガンプラ!?俺のジンクスなんかよりよっぽど魔王っぽくてかつこいいじゃねえか!?)」

カズマ「(成る程、ジンクスの頭に武者ガンダムMK-IIIの2本角、ヴァサーゴの胴にジンクスの腕：足はエピオンでバックパックはデスサイズヘルか：それに俺と同じく耐ビームコーティングマント。こいつ、俺と同じセンスをしている……!)」

カズマ&シヨウタ「……!」

レイ「(何であの二人見つめあつたまま動かないんだろ……?)」

レイは首を傾げながら他のジンクスと戦闘を続ける

.....

「おー、第3試合始まつてるねー!」

一人の女性がガンプラバトルに大歓声を送る会場へと足を運ぶ

「全く!何も言わずに出ていくのは止めてって何回も言ってるのに!」

「だからって俺を無理矢理連れて来るのはおかしいだろ!?!」

どこか見慣れたパーカーを着た女性と白衣を着た男性は試合会場で話ながら歩いている

「えー?でも今は暇なんですよ?」

「暇じゃねえよ!俺にも色々やることがあんの!ロボ太のこれからとかな。」

「え!?!ロボ太どうなっちゃうの!?!」

「トイボットの生産は知ってる通り止まった。おそらく安全性が証明されるまで永久にだ。ロボ太も、悲しいがデータを消すしかない」

「でも!」

「お前の言いたい事は分かる。ロボ太はお前達二人と共に戦つて来た、お前らがどれだけロボ太のことを大切してるかどうかも、この俺が一番わかってる。だけどな、もしロボ太を特別扱いしてそのまま放置して、お前らをつけ狙う奴らが悪用すれば今度はインフォだけじゃなくロボ太も失うことになる。トイボットは人を傷付けるために作つたんじゃない、もしそのトイボットが人を傷付ける様に使われる

なら、俺は心を鬼にしても止めないと行けないんだ」

「カドマツさん…」

カドマツ「悲しいが、奴らこうなることを望んであんなことをした。次はガン普拉バトルを消すつもりだろう、そうなる前に止めないとな。ミサ」

ミサ「うん…」

カドマツ「よし、湿気た話は終わり！ ほら、さっさとユウキ見つけるぞ あいつにもこの事言つとかないといけないしな。」

カドマツはそう言うと、ユウキを探し始めた。

……………

リュウジ「悪い、ちよつとトイレいつてくる。」

ユウキ「あ、俺も」

二人は会場のトイレへ向かう途中、怪しい人影を確認して追いかける

リュウジ「間違いない、さっきのバエルのファイターだ。」

ユウキ「なんかあいつ怪しいぜ、なんと言うかあいつからは 人間じゃない感じがしてた」

リュウジ「お前もか、俺もだ。 止まれ…」

二人は耳を澄ませ、話を盗み聞きする

「予定通りです、マスター。 協力者とも合流しました」

リュウジ「マスター…？ こいつらまさか…！」

「ええ、物事は貴方の狙い通りに。 託されたバエル ダークマスターもいい性能です。この大会、めちゃくちゃに見せますよ それより…先程から我々の会話を盗み聞きしている輩がいるようです。」

ねえ、06。」

06「ええ、盗み聞きとは感心できませんね。 仮にも世界一のファイターが。」

リュウジとユウキの背後から06と呼ばれた黒くて長い髪の女性が二人へと声をかけた。

06「はじめまして、いえ…その貴方ははじめましてではないです。 改めて挨拶を、私の名前は06。 如何でしたか？ トイボット

を利用した 爆弾」

ユウキ「…ッ！ お前が… お前が彩渡商店街を…！」

06「ええ、ですが私も貴方の仲間にデュエルガンダムを破壊されてしまいました… ですので、ここであのときのリベンジをさせていただきます。」

06は赤色のデュエルガンダムを取り出し、ユウシへと見せつける

06「デュエルガンダムアサルトバスター…」

05「そしてこのバエルダークマター、揃って相手をしてあげるよ」

ユウキ「上等だ…！」

リュウジ「お前らは俺達が倒す…！」

彩渡商店街を狙った敵との戦いが始まる…

ユウキは雪辱を果たせるか

続く